

# 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15

鶴沼C遺跡  
西坂才遺跡（1次）

## 序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり、我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。そのため、当時の姿がよく理解できるように、可能な限りそのままの形で文化財を保存し、後世に伝えていく努力が現代に生きる私たちに求められています。

会津縦貫北道路は、喜多方市と会津若松市を結ぶ全長13.1kmの高規格道路であり、平成8年度に都市計画道路として建設が決定され、平成9年度からは建設省(現国土交通省)直轄事業として建設工事が進められています。この路線内には、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、先人が残した貴重な文化遺産が包蔵されています。福島県教育委員会では、数多くの遺跡等の所在を確認するとともに、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ねてきました。その中で現状での保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成26年度に発掘調査を実施した会津若松市鶴沼C遺跡の1次調査、西坂才遺跡の1次調査の成果をまとめたもので、古代の会津郡衙の周辺に展開した掘立柱建物群の様子が判明しました。また、「倉人」「戸主」「田主」「館」などの墨書土器や、線刻画の施された円面硯、多種多様な木製品など貴重な資料が出土しました。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた会津若松市教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年12月

福島県教育委員会  
教育長 杉 昭 重

## あいさつ

当公益財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については、平成9年度の表面調査を経て、平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成25年度に発掘調査を実施した会津若松市鶴沼C遺跡、西坂才遺跡の1次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、古代の規格的に配置された掘立柱建物群が検出された他、河川流路跡などからは、この時代の土器類や、大量の木製品がみつかり、会津地方で営まれていた当時の生活の一端をうかがい知ることができる貴重な資料となりました。

本報告書がふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

終わりに、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元住民の皆様には厚く御礼申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年12月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 遠藤 俊博

## 緒 言

- 1 本書は、平成25年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査にかかる鶴沼C遺跡と西坂才遺跡の調査成果を収録した。  
鶴沼C遺跡：会津若松市高野町中沼字鶴沼 埋蔵文化財番号：2028 - 00498  
西坂才遺跡：会津若松市高野町中沼字西坂才 埋蔵文化財番号：2028 - 00499
- 2 当遺跡の発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。
- 3 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興財団(現：公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して実施した。
- 4 財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。  
調査課長 安田 稔 副 主 幹 藤谷 誠  
副 主 幹 後藤 信佑 文化財主査 佐藤 悦夫  
文化財主査 菊田 順幸 文化財主査 日下部 正和  
文化財主査 作田 一耕 文化財主査 阿部 知己
- 5 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 6 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
- 7 本書に掲載したC14年代測定については、株式会社加速器分析研究所に委託し、その分析結果及び考察は、編ごとに付章として掲載した。
- 8 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から、協力・助言を頂いた。  
会津若松市教育委員会 福島県立博物館  
三上喜孝 梶原文子 高橋 満 森 幸彦

## 用 例

- 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

|            |              |            |
|------------|--------------|------------|
| 会津若松市……AW  | 鶴沼C遺跡……TRN・C | 西坂才遺跡……NZS |
| 柱列跡……SA    | 掘立柱建物跡……SB   | 溝跡……SD     |
| 土坑……SK     | 井戸跡……SE      | 柱穴・小穴……P   |
| グリッド……G    | 遺構外堆積土……L    | 遺構内堆積土……ℓ  |
| サブトレンチ……ST |              |            |
- 遺構挿図における遺構番号は、当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載している。
- 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。
  - 方位記号の表記がないものは、全て本書の上を真北とする。
  - 縮尺は、各挿図版に示した。
  - 遺構内の傾斜面は「 $\nabla$ 」、後世の削平や人為的な削平部分は「 $\nabla$ 」の記号で表記した。
  - 断面図および地形図における標高は、海拔標高を示す。
  - 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は、算用数字で表記した。  
[例] 遺構外自然堆積土：L I・L II…、遺構内堆積土：ℓ 1・ℓ 2…
  - 平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による歪みを補正した平面直角座標系の区系の数値を示している。
  - 柱穴の深さは、平面図の( )に数値を明記した。単位はcmである。
  - 掘立柱建物跡の柱痕は、網点で示した。
- 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。
  - 縮尺は各挿図版に示した。
  - 土器断面は、土師器・陶器を白ヌキ、須恵器はベタ黒とした。
  - 挿図中の網点は、内面黒色処理範囲を示し、それ以外は図版ごとに凡例を示した。
  - 遺物の計測値は、図中に示した。( )は推定値、[ ]は残存値である。
  - 遺物番号は挿図版ごととし、文中では下記のように省略して表記した。また、掲載遺物の出土位置・層位は、右下に示している。[例] 図28の10番の遺物…図28-10
- 本書における遺物写真で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。
- 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、付章を除き各編末に一括した。

# 目 次

## 序 章

|             |    |
|-------------|----|
| 第1節 調査に至る経緯 | 1  |
| 第2節 地理的環境   | 3  |
| 第3節 歴史的環境   | 5  |
| 第4節 調査方法    | 10 |

## 第1編 鶴沼C遺跡

|   |    |
|---|----|
| 第1章 遺跡の位置と調査経過                          |    |
| 第1節 遺跡の位置                               | 13 |
| 第2節 調査経過                                | 13 |
| 第2章 遺構と遺物                               |    |
| 第1節 遺構の分布と基本土層                          | 15 |
| 第2節 掘立柱建物跡                              | 17 |
| 1号掘立柱建物跡(17) 2号掘立柱建物跡(19) 3号掘立柱建物跡(20)  |    |
| 4号掘立柱建物跡(22) 5号掘立柱建物跡(22) 6号掘立柱建物跡(24)  |    |
| 7号掘立柱建物跡(25) 8号掘立柱建物跡(27) 9号掘立柱建物跡(27)  |    |
| 第3節 土 坑                                 | 30 |
| 1号土坑(30) 2号土坑(30) 3号土坑(30) 4号土坑(32)     |    |
| 5号土坑(32) 6号土坑(33) 7号土坑(33) 8号土坑(33)     |    |
| 9号土坑(35) 10号土坑(35) 11号土坑(35) 12号土坑(35)  |    |
| 13号土坑(37) 14号土坑(37) 15号土坑(37) 16号土坑(38) |    |
| 17号土坑(38) 18号土坑(40) 19号土坑(40) 20号土坑(40) |    |
| 21号土坑(40) 22号土坑(41) 23号土坑(41) 24号土坑(41) |    |
| 26号土坑(43) 27号土坑(43) 28号土坑(43) 29号土坑(45) |    |
| 30号土坑(45) 31号土坑(45) 32号土坑(46) 33号土坑(46) |    |
| 34号土坑(46) 35号土坑(46) 36号土坑(48)           |    |
| 第4節 井戸跡                                 | 51 |
| 1号井戸跡(52)                               |    |
| 第5節 周溝状遺構                               | 62 |
| 1号周溝状遺構(62)                             |    |
| 第6節 溝 跡                                 | 63 |
| 1号溝跡(63) 2号溝跡(63) 3～5号溝跡(65) 6号溝跡(68)   |    |
| 10号溝跡(70) 11号溝跡(70) 12号溝跡(72) 13号溝跡(75) |    |

|                          |            |            |           |
|--------------------------|------------|------------|-----------|
| 14号溝跡(75)                | 15号溝跡(75)  | 16号溝跡(75)  | 19号溝跡(78) |
| 21号溝跡(78)                | 23号溝跡(79)  | 24号溝跡(79)  | 25号溝跡(80) |
| 近代以降の溝跡と出土遺物(81)         |            |            |           |
| 第7節 流 路 跡                | 83         |            |           |
| 1号流路跡(83)                | 2号流路跡(106) | 3号流路跡(125) |           |
| 第8節 性格不明遺構               | 131        |            |           |
| 1号性格不明遺構(131)            |            |            |           |
| 第9節 ビット群と遺構外出土遺物         | 134        |            |           |
| 第3章 総 括                  |            |            |           |
| 第1節 遺物について               | 135        |            |           |
| 第2節 井戸跡について              | 137        |            |           |
| 第3節 建物群と遺跡の性格について        | 139        |            |           |
| 付 章 自然科学分析               |            |            |           |
| 第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について | 141        |            |           |

## 第2編 西坂才遺跡(1次)

|                          |                   |                   |           |
|--------------------------|-------------------|-------------------|-----------|
| 第1章 遺跡の位置と調査経過           |                   |                   |           |
| 第1節 遺跡の位置                | 205               |                   |           |
| 第2節 調査経過                 | 205               |                   |           |
| 第2章 遺構と遺物                |                   |                   |           |
| 第1節 遺構の分布と基本土層           | 207               |                   |           |
| 第2節 掘立柱建物跡               | 213               |                   |           |
| 1号掘立柱建物跡(213)            | 2号掘立柱建物跡(217)     | 3 a・b号掘立柱建物跡(219) |           |
| 4号掘立柱建物跡(219)            | 5号掘立柱建物跡(222)     | 6号掘立柱建物跡(222)     |           |
| 7号掘立柱建物跡(223)            | 8 a・b号掘立柱建物跡(223) |                   |           |
| 第3節 溝 跡                  | 229               |                   |           |
| 古代の溝跡(229)               | 近世以降の溝跡(236)      |                   |           |
| 第4節 土 坑                  | 238               |                   |           |
| 1号土坑(239)                | 2号土坑(239)         | 3号土坑(239)         | 4号土坑(240) |
| 5号土坑(240)                | 6号土坑(242)         | 7号土坑(242)         | 8号土坑(245) |
| 9号土坑(246)                | 11号土坑(249)        |                   |           |
| 第3章 総 括                  | 250               |                   |           |
| 付 章 自然科学分析               |                   |                   |           |
| 第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について | 255               |                   |           |

# 挿図・表・写真目次

## 序 章

### [挿 図]

|                  |   |
|------------------|---|
| 図1 会津縦貫北道路位置図    | 1 |
| 図2 調査遺跡と会津盆地北部地形 | 3 |

### [ 表 ]

|                     |   |
|---------------------|---|
| 表1 会津縦貫北道路関係遺跡の調査履歴 | 2 |
|---------------------|---|

|             |   |
|-------------|---|
| 図3 周辺の遺跡位置図 | 8 |
|-------------|---|

|            |   |
|------------|---|
| 表2 周辺の遺跡一覧 | 9 |
|------------|---|

## 第1編 鶴沼C遺跡

### [挿 図]

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| 図1 調査区位置図                      | 14 |
| 図2 基本土層柱状図                     | 15 |
| 図3 遺構配置図                       | 16 |
| 図4 1号掘立柱建物跡                    | 18 |
| 図5 2号掘立柱建物跡                    | 19 |
| 図6 1・2・5号掘立柱建物跡出土遺物            | 20 |
| 図7 3号掘立柱建物跡                    | 21 |
| 図8 4号掘立柱建物跡                    | 22 |
| 図9 5号掘立柱建物跡                    | 23 |
| 図10 6号掘立柱建物跡                   | 25 |
| 図11 7号掘立柱建物跡                   | 26 |
| 図12 8号掘立柱建物跡                   | 28 |
| 図13 9号掘立柱建物跡                   | 29 |
| 図14 1～4号土坑                     | 31 |
| 図15 5・6・10・12・13号土坑            | 34 |
| 図16 7～9・11号土坑                  | 36 |
| 図17 14～17号土坑                   | 39 |
| 図18 18～22号土坑                   | 42 |
| 図19 23・24・26～29号土坑             | 44 |
| 図20 30～34号土坑                   | 47 |
| 図21 35・36号土坑                   | 48 |
| 図22 1・3・4・7・8・10・15号土坑<br>出土遺物 | 49 |
| 図23 17・19・20～23・26・32号土坑出土遺物   | 50 |
| 図24 1号井戸跡                      | 51 |
| 図25 1号井戸跡出土遺物(1)土器             | 52 |
| 図26 1号井戸跡出土遺物(2)井戸部材           | 54 |
| 図27 1号井戸跡出土遺物(3)井戸部材           | 55 |
| 図28 1号井戸跡出土遺物(4)井戸部材           | 56 |
| 図29 1号井戸跡出土遺物(5)井戸部材           | 57 |
| 図30 1号井戸跡出土遺物(6)井戸部材           | 58 |
| 図31 1号井戸跡出土遺物(7)井戸部材           | 59 |
| 図32 1号井戸跡出土遺物(8)井戸部材           | 60 |
| 図33 1号井戸跡出土遺物(9)井戸部材           | 61 |
| 図34 1号溝状遺構、出土遺物                | 62 |

|                                      |     |
|--------------------------------------|-----|
| 図35 溝跡位置図(1)1～6・10～12号溝跡             | 64  |
| 図36 1～5号溝跡                           | 66  |
| 図37 1～5号溝跡出土遺物                       | 67  |
| 図38 6・10号溝跡出土遺物                      | 68  |
| 図39 6・10・16号溝跡                       | 69  |
| 図40 11号溝跡出土遺物                        | 70  |
| 図41 11・12号溝跡                         | 71  |
| 図42 12号溝跡出土遺物(1)                     | 73  |
| 図43 12号溝跡出土遺物(2)                     | 74  |
| 図44 溝跡位置図(2)<br>13～16・19・21・23～25号溝跡 | 76  |
| 図45 13～15号溝跡                         | 77  |
| 図46 19・21号溝跡                         | 78  |
| 図47 19・25号溝跡出土遺物                     | 79  |
| 図48 23～25号溝跡                         | 80  |
| 図49 溝跡位置図(3)<br>7～9・17・18・20・22号溝跡   | 81  |
| 図50 7～9・17号溝跡出土遺物                    | 82  |
| 図51 1号流路跡(1)Ⅰ区平面図                    | 84  |
| 図52 1号流路跡(2)Ⅰ区断面図                    | 85  |
| 図53 1・2号流路跡Ⅰ区断面図                     | 86  |
| 図54 1号流路跡(3)Ⅱ・Ⅲ区平面図                  | 87  |
| 図55 1号流路跡(4)Ⅱ・Ⅲ区断面図                  | 88  |
| 図56 1号流路跡出土遺物(1)土師器                  | 89  |
| 図57 1号流路跡出土遺物(2)土師器                  | 90  |
| 図58 1号流路跡出土遺物(3)土師器                  | 91  |
| 図59 1号流路跡出土遺物(4)土師器                  | 92  |
| 図60 1号流路跡出土遺物(5)須恵器                  | 93  |
| 図61 1号流路跡出土遺物(6)須恵器                  | 94  |
| 図62 1号流路跡出土遺物(7)須恵器                  | 95  |
| 図63 1号流路跡出土遺物(8)須恵器                  | 96  |
| 図64 1号流路跡出土遺物(9)須恵器                  | 97  |
| 図65 1号流路跡出土遺物(10)須恵器                 | 98  |
| 図66 1号流路跡出土遺物(11)須恵器                 | 99  |
| 図67 1号流路跡出土遺物(12)須恵器                 | 100 |

|     |                               |     |
|-----|-------------------------------|-----|
| 図68 | 1号流路跡出土遺物(13)須恵器              | 101 |
| 図69 | 1号流路跡出土遺物(14)木製品              | 102 |
| 図70 | 1号流路跡出土遺物(15)木製品              | 103 |
| 図71 | 1号流路跡出土遺物(16)<br>木製品・石器・鉄製品   | 104 |
| 図72 | 1号流路跡付属施設                     | 105 |
| 図73 | 2号流路跡平面図                      | 107 |
| 図74 | 2号流路跡断面図                      | 108 |
| 図75 | 2号流路跡出土遺物(1)<br>縄文土器・弥生土器・土師器 | 109 |
| 図76 | 2号流路跡出土遺物(2)土師器               | 110 |
| 図77 | 2号流路跡出土遺物(3)<br>土師器・須恵器       | 111 |
| 図78 | 2号流路跡出土遺物(4)須恵器               | 112 |
| 図79 | 2号流路跡出土遺物(5)須恵器               | 113 |
| 図80 | 2号流路跡出土遺物(6)須恵器               | 114 |
| 図81 | 2号流路跡出土遺物(7)須恵器               | 115 |
| 図82 | 2号流路跡出土遺物(8)須恵器               | 116 |
| 図83 | 2号流路跡出土遺物(9)木製品               | 117 |
| 図84 | 2号流路跡出土遺物(10)木製品              | 118 |
| 図85 | 2号流路跡出土遺物(11)木製品              | 119 |
| 図86 | 2号流路跡出土遺物(12)木製品              | 120 |

[ 表 ]

|    |             |     |
|----|-------------|-----|
| 表1 | 墨書土器一覧表     | 136 |
| 表2 | 放射性炭素年代測定結果 | 143 |

[ 写 真 ]

|    |                |     |
|----|----------------|-----|
| 1  | 調査区遠景          | 147 |
| 2  | 調査区全景          | 147 |
| 3  | I区2・3号流路跡掘込前全景 | 148 |
| 4  | II・III区掘立柱建物跡群 | 148 |
| 5  | 1号掘立柱建物跡       | 149 |
| 6  | 2号掘立柱建物跡       | 150 |
| 7  | 3号掘立柱建物跡       | 151 |
| 8  | 4号掘立柱建物跡       | 152 |
| 9  | 5号掘立柱建物跡       | 153 |
| 10 | 6号掘立柱建物跡       | 154 |
| 11 | 7号掘立柱建物跡       | 155 |
| 12 | 8号掘立柱建物跡       | 156 |
| 13 | 9号掘立柱建物跡       | 157 |
| 14 | 1・3～5号土坑       | 158 |
| 15 | 7～10・12・13号土坑  | 159 |
| 16 | 13～18号土坑       | 160 |
| 17 | 18～22号土坑       | 161 |
| 18 | 22～24・26～28号土坑 | 162 |
| 19 | 28・29・31～36号土坑 | 163 |
| 20 | 1号井戸跡          | 164 |
| 21 | 1～4号溝跡         | 165 |
| 22 | 5・6号溝跡         | 166 |

|      |                              |     |
|------|------------------------------|-----|
| 図87  | 2号流路跡出土遺物(13)木製品             | 121 |
| 図88  | 2号流路跡出土遺物(14)木製品             | 122 |
| 図89  | 2号流路跡出土遺物(15)木製品             | 123 |
| 図90  | 2号流路跡付属施設・<br>12号溝跡接続部       | 124 |
| 図91  | 3号流路跡                        | 126 |
| 図92  | 3号流路跡出土遺物(1)<br>縄文土器・土師器・須恵器 | 127 |
| 図93  | 3号流路跡出土遺物(2)須恵器              | 128 |
| 図94  | 3号流路跡出土遺物(3)木製品              | 129 |
| 図95  | 3号流路跡出土遺物(4)木製品              | 130 |
| 図96  | 3号流路跡出土遺物(5)木製品・古銭           | 131 |
| 図97  | 1号性格不明遺構                     | 132 |
| 図98  | 1号性格不明遺構出土遺物<br>土師器・高杯       | 133 |
| 図99  | 遺構外出土遺物<br>土師器・須恵器・鉄製品       | 134 |
| 図100 | 12号溝跡・1・2号流路跡出土土器            | 135 |
| 図101 | 井戸枠復元模式図                     | 137 |
| 図102 | 扉板復元想像図                      | 138 |
| 図103 | 曆年較正年代グラフ                    | 144 |

|    |             |     |
|----|-------------|-----|
| 表3 | 放射性炭素年代測定結果 | 143 |
|----|-------------|-----|

|    |                     |     |
|----|---------------------|-----|
| 23 | 6・10～12号溝跡          | 167 |
| 24 | 12～14・16号溝跡         | 168 |
| 25 | 19・23・24号溝跡・1号周溝状遺構 | 169 |
| 26 | 1号流路跡(1)            | 170 |
| 27 | 1号流路跡(2)            | 171 |
| 28 | 1号流路跡(3)・2号流路跡(1)   | 172 |
| 29 | 2号流路跡(2)            | 173 |
| 30 | 2号流路跡(3)・3号流路跡(1)   | 174 |
| 31 | 3号流路跡(2)            | 175 |
| 32 | 1号性格不明遺構            | 176 |
| 33 | 縄文土器・弥生土器・土師器       | 177 |
| 34 | 土師器(1)杯             | 178 |
| 35 | 土師器(2)杯・碗・赤焼土器      | 179 |
| 36 | 土師器(3)皿・高台杯・壺・甕     | 180 |
| 37 | 須恵器(1)杯             | 181 |
| 38 | 須恵器(2)杯             | 182 |
| 39 | 須恵器(3)杯・高台杯・長頸瓶     | 183 |
| 40 | 須恵器(4)長頸瓶・壺         | 184 |
| 41 | 須恵器(5)壺・甕           | 185 |
| 42 | 須恵器(6)甕・横瓶・甗        | 186 |
| 43 | 須恵器片                | 187 |
| 44 | 墨書土器(1)             | 188 |

|    |                      |     |                           |     |
|----|----------------------|-----|---------------------------|-----|
| 45 | 墨書土器(2).....         | 189 | 火付木・板状木製品.....            | 196 |
| 46 | 墨書土器(3).....         | 190 | 53 木製品(7) 板状木製品・          |     |
| 47 | 木製品(1) 椀.....        | 191 | 建築部材・下駄.....              | 197 |
| 48 | 木製品(2) 椀.....        | 192 | 54 木製品(8) 櫛、荷札、瓢箪容器       |     |
| 49 | 木製品(3) 椀・皿・盤.....    | 193 | 性格不明木製品.....              | 198 |
| 50 | 木製品(4) 曲物 柄杓・底板..... | 194 | 55 木製品(9) 1号井戸跡出土部材.....  | 199 |
| 51 | 木製品(5) 曲物 底板・側板..... | 195 | 56 木製品(10) 1号井戸跡出土部材..... | 200 |
| 52 | 木製品(6) 曲物 側板、串・      |     | 57 木製品(11) 1号井戸跡出土部材..... | 201 |
|    | 木筒・串状木製品、棒状木製品       |     | 58 石製品、金属製品、古銭.....       | 202 |

## 第2編 西坂才遺跡(1次)

### [挿 図]

|     |                          |     |     |                     |     |
|-----|--------------------------|-----|-----|---------------------|-----|
| 図1  | 遺跡調査範囲・グリッド配置図.....      | 206 | 図16 | 8a・b号掘立柱建物跡(1)..... | 227 |
| 図2  | A区遺構配置図(1).....          | 208 | 図17 | 8a・b号掘立柱建物跡(2)..... | 228 |
| 図3  | A区遺構配置図(2).....          | 209 | 図18 | A区溝跡.....           | 233 |
| 図4  | B区遺構配置図(1).....          | 210 | 図19 | 16号溝跡.....          | 234 |
| 図5  | B区遺構配置図(2).....          | 211 | 図20 | B区溝跡.....           | 235 |
| 図6  | A区基本土層.....              | 212 | 図21 | 5号溝跡.....           | 236 |
| 図7  | 1号掘立柱建物跡、13・15・23号溝跡、    |     | 図22 | 溝跡出土遺物(1).....      | 237 |
|     | 1号柱列跡(1).....            | 214 | 図23 | 溝跡出土遺物(2).....      | 238 |
| 図8  | 1号掘立柱建物跡、23号溝跡、          |     | 図24 | 14号溝跡出土遺物.....      | 239 |
|     | 1号柱列跡(2).....            | 215 | 図25 | 1~4号土坑.....         | 243 |
| 図9  | 1号掘立柱建物跡(15号溝跡)出土遺物..... | 216 | 図26 | 5号土坑.....           | 244 |
| 図10 | 2号掘立柱建物跡.....            | 218 | 図27 | 5号土坑出土遺物(1).....    | 245 |
| 図11 | 3a・b号掘立柱建物跡・出土遺物.....    | 220 | 図28 | 5号土坑出土遺物(2).....    | 246 |
| 図12 | 4号掘立柱建物跡.....            | 221 | 図29 | 6~9・11号土坑.....      | 247 |
| 図13 | 5号掘立柱建物跡.....            | 224 | 図30 | 土坑出土遺物.....         | 248 |
| 図14 | 6号掘立柱建物跡.....            | 225 | 図31 | 古代溝跡位置図.....        | 251 |
| 図15 | 7号掘立柱建物跡.....            | 226 | 図32 | 暦年較正年代グラフ.....      | 258 |

### [表]

|    |                |     |    |                  |     |
|----|----------------|-----|----|------------------|-----|
| 表1 | 会津若松市高野地区内     |     | 表3 | 放射性炭素年代測定結果..... | 257 |
|    | 円面視出土遺跡一覧..... | 253 | 表4 | 放射性炭素年代測定結果..... | 257 |
| 表2 | 会津若松市高野地区周辺    |     |    |                  |     |
|    | 脚付鍋出土遺跡一覧..... | 253 |    |                  |     |

### [写 真]

|    |                 |     |    |                   |     |
|----|-----------------|-----|----|-------------------|-----|
| 1  | 調査区全景.....      | 261 | 14 | 8a・b号掘立柱建物跡.....  | 268 |
| 2  | 調査区A区調査前全景..... | 262 | 15 | 1・3・6号掘立柱建物跡..... | 268 |
| 3  | 調査区全景.....      | 262 | 16 | 溝跡(1).....        | 269 |
| 4  | 調査区A区全景.....    | 263 | 17 | 溝跡(2).....        | 270 |
| 5  | 調査区B区全景.....    | 263 | 18 | 溝跡(3).....        | 271 |
| 6  | 1・3号掘立柱建物跡..... | 264 | 19 | 土坑(1).....        | 272 |
| 7  | 1号掘立柱建物跡.....   | 264 | 20 | 土坑(2).....        | 273 |
| 8  | 2号掘立柱建物跡.....   | 265 | 21 | 5号土坑.....         | 274 |
| 9  | 3号掘立柱建物跡.....   | 265 | 22 | 出土遺物(1).....      | 275 |
| 10 | 4号掘立柱建物跡.....   | 266 | 23 | 出土遺物(2).....      | 276 |
| 11 | 5号掘立柱建物跡.....   | 266 |    |                   |     |
| 12 | 6号掘立柱建物跡.....   | 267 |    |                   |     |
| 13 | 7号掘立柱建物跡.....   | 267 |    |                   |     |

# 序 章

## 第1節 調査に至る経緯

会津縦貫北道路は、会津盆地北部の会津若松-喜多方間を結ぶ自動車専用の基幹道路で、喜多方市関柴町大字西勝を起点とし、湯川村を経て会津若松市高野町大字中沼を終点とする全長13.1kmの道路として計画されている。平成8年に計画が策定され、同9年度からは、建設省(現国土交通省)直轄事業として、建設が進められている。平成25年9月には喜多方の起点から湯川南インターチェンジ(以下、IC)までが開通した。平成27年度には全線が開通する予定である。

福島県教育委員会では、会津縦貫北道路建設予定地内にある埋蔵文化財の保護を図るために、平成9年度より財団法人福島県文化センター(現公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して表面調査を実施した。表面調査では、平成9年度に周知の遺跡21か所、遺跡推定地3か所、平成19年度に周知の遺跡4か所、遺跡推定地2か所を確認した。

表面調査により確認された周知の遺跡、遺跡推定地については、工事計画において優先箇所となる地点を対象として、平成12年度から試掘調査が実施された。平成18年度までに喜多方市に所在する遺跡、平成23年度までに湯川村に所在する遺跡の試掘調査を完了した。会津若松市に所在する遺跡の試掘調査は、平成23・24年度に実施した。試掘調査未実施区域については、本年度予備調査の形で本調査に先立って試掘調査を実施した。

試掘調査によって、保存範囲が確定された遺跡については、福島県教育委員会と東北地方建設局郡山国道工事事務所(現東北地方整備局郡山国道事務所)が協議を行い、発掘調査を実施して記録保

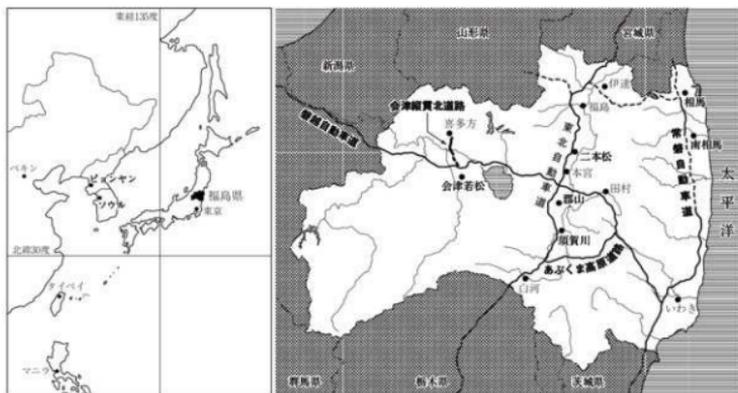


図1 会津縦貫北道路位置図

存を図ることとなった。

鶴沼C遺跡の発掘調査では、掘立柱建物跡9棟、井戸跡1基、土坑35基、溝跡25条、河川流路跡3か所などを確認している。河川流路跡からは、大量の平安時代の土器などと共に、木製品も見つかっている。出土土器には、墨書土器が多く含まれており、中には複数の文字が書かれたものや、「倉人」等の郡衙関連の性格を持つ遺跡であることを示すものなども出土している。また、井戸跡は、木枠を井桁に組んだ平安時代のもので、木枠材として建物の扉などを再利用していた。流路跡・井戸跡は、いずれも建物群に付随する施設と思われる。

西坂才遺跡の発掘調査では、掘立柱建物9棟、溝跡22条、井戸跡1基、土器焼成坑1基、土坑8基などを確認した。溝跡のうち、平安時代の建物群それよりも先行して掘り込まれていた14号溝跡については、そのまま西側の鶴沼C遺跡まで直線的に延伸している。平面形が釣鐘形をした土器焼成坑からは、主に土器器底の破片が出土し、中には三本脚付鉢なども細片となって出土している。

本年度まで実施された分布調査と発掘調査について表1に示す。試掘調査では、平成12年度より本年度まで、麻生館遺跡から西坂才遺跡までの10遺跡について実施され、発掘調査は平成13年度の喜多方市麻生館遺跡から本年度までに10遺跡について実施された。(藤谷)

表1 会津縦貫北道路関係遺跡の調査履歴

| 遺跡名<br>(調査回数)         | 調査内容 | 調査年度                    | 報告書名                             |
|-----------------------|------|-------------------------|----------------------------------|
| 麻生館遺跡                 | 分布   | 2000年                   | 県内遺跡分布調査報告7                      |
|                       | 発掘   | 2001年                   | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1                 |
| 荒屋敷遺跡(1～5次)           | 分布   | 2000～2002, 2004年        | 県内遺跡分布調査報告7～9, 11                |
|                       | 発掘   | 2001～2005年              | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2～6               |
| 高堂太遺跡(下高館跡)<br>(1～4次) | 分布   | 2004～2006年              | 県内遺跡分布調査報告12, 13                 |
|                       | 発掘   | 2005～2008年              | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告6～9               |
| 沼ノ上遺跡                 | 分布   | 2002, 2007年             | 県内遺跡分布調査報告9, 14                  |
|                       | 発掘   | 2007年                   | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告8                 |
| 桜町遺跡(1～5次)            | 分布   | 2003, 2004, 2008, 2010年 | 県内遺跡分布調査報告10, 11, 15, 18         |
|                       | 発掘   | 2004, 2009～2011, 2013年  | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5, 10, 11, 12, 14 |
| 西木流C遺跡(1・2次)          | 分布   | 2011年                   | 県内遺跡分布調査報告18, 20                 |
|                       | 発掘   | 2012, 2013年             | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13, 14            |
| 西木流D遺跡                | 分布   | 2011, 2012年             | 県内遺跡分布調査報告18～20                  |
|                       | 発掘   | 2013年                   | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14                |
| 鶴沼B遺跡                 | 分布   | 2011, 2012年             | 県内遺跡分布調査報告19, 20                 |
|                       | 発掘   | 2013年                   | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14                |
| 鶴沼C遺跡                 | 分布   | 2012, 2013年             | 県内遺跡分布調査報告20, 21                 |
|                       | 発掘   | 2013年                   | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15                |
| 西坂才遺跡                 | 分布   | 2012, 2013年             | 県内遺跡分布調査報告20, 21                 |
|                       | 発掘   | 2013年                   | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15                |

## 第2節 地理的環境

鶴沼C遺跡は会津若松市高野町大字中沼字鶴沼に、西坂才遺跡は会津若松市高野町大字中沼字西坂才に所在している。南東方向に直線距離で約3.6kmのところにはJR会津若松駅があり、最寄りの駅は北西約1.6kmにあるJR磐越西線堂島駅である。また、遺跡の東側約400mには会津若松と喜多方を結ぶ国道121号線が南北に走っており、南側では約1.2km先で東北自動車道会津若松ICと連結している。遺跡は会津盆地の中央よりやや南東側に位置している。

会津盆地は、面積約324km<sup>2</sup>、南北約32km、東西約13kmと南北方向に長い地溝状の形を示す構造盆地であり、北側は飯豊連峰、東は磐梯山塊・奥羽山脈、南から西縁は会津山地から越後山脈に連なる連山に囲まれた低地である。河川とその周辺にそって帯状にのびる氾濫原、河川間の平坦な段

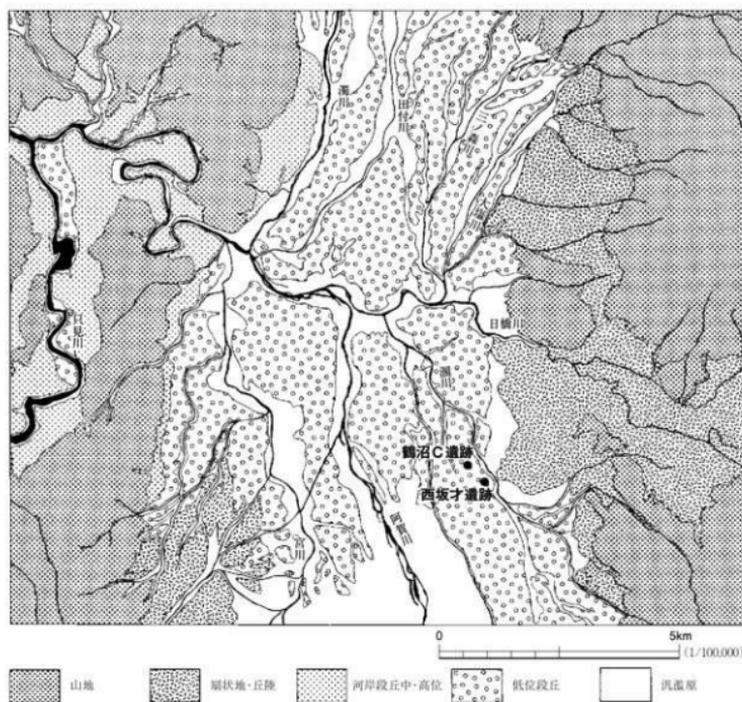


図2 調査遺跡と会津盆地北部地形

丘、扇状地に大きく分けることができる。特色としては、阿賀川が盆地から流出する先に、大規模な河岸段丘が発達していることである。この河岸段丘は、沼沢火山噴出物起源のハラル堆積物が基盤となっている。盆地南側の東縁部は、背負山地山麓から盆地床に続く扇状地が広がっている。盆地床は東縁部から中央を流れる阿賀川に向かって、南から北側に向かって緩やかに傾斜している。遺跡付近の標高は、鶴沼C遺跡で約190m、西坂才遺跡で約191.5mであり、鶴沼C遺跡中央では南から北に向かって約10～20cmの比高差が認められる。

会津盆地内では、南会津に水源を持ち、盆地内の最大の河川である阿賀川(大川)をはじめ、その支流の宮川(鶴沼川)・旧湯川などが北流している。盆地中央東側では唯一猪苗代湖に水源を持つ日橋川が西流しており、そこに遺跡の約50～80m東側を流れる瀬(せせなぎ)川が流れ込んでいる。瀬川には東側より大工川・金山川・不動川の各支流が合流している。これらの河川は、扇状地を侵食し、段丘状の地形等を形成させている。5万分の1の土地基本分類調査図「喜多方」では、地形区分は中央低地(大川低地)に属している。遺跡付近は、F t III下位扇状地に分類されており、遺跡周辺は、扇状地が侵食され平坦な低位段丘上に位置すると考えられる。会津盆地の土壌は、大きくは腐食を含む黒ボク土、灰色の低地土、褐色の低地土に分かれ、遺跡付近は、細粒灰色の低地土(高堂太統)が分布する地域に含まれている。両遺跡の基本土層のL Iは黒褐色(暗褐色)粘質土、L IIは灰黄褐色粘土になっており、このL II層が基本土層の灰色の低地土に含まれると考えられる。また、L III以下に堆積している砂礫層については互層が多く、近くを流れる瀬川等の諸河川によって形成された段丘堆積物であると思われる。段丘堆積物は周辺の地形に左右されるため、地域の中で分布にある程度偏りがあることが想定される。

この地域の気候は日本海側気候に属すると同時に、内陸盆地特有の気候も有している。夏は高温多湿であり、雷雲の発生が多く、12月は降雪により降水量が多くなる。東北地方太平洋沿岸で冷害をもたらすヤマセの影響が及ぶことは少ない。また、盆地気候の特徴として、気温の日較差が比較的大きいことのほかに、霧の発生日が多いことがあげられる。過去20年間でも年平均40日を数え、特に10月～12月にかけて平均25日と集中している。発生原因は気温の逆転に伴う放射霧の滞留が主なものであるが、大川沿いには水面から発生する蒸気霧も少なくない。会津地方においてこの盆地部は例外的にも積雪は比較的小さい。そのほかに、会津盆地の西縁には活発な活断層があり慶長16(1611)年の会津大地震にも関連している。地震による阿賀川の閉塞、堰止湖の形成が繰り返され大きな湖沼が発生した痕跡が示されている。また、阿賀川を含む河川は、たびたび氾濫を繰り返しており、会津平の地を豊かにするとともに大きな災害をもたらしている。

このような環境から、会津盆地は東北地方でも有数の米産地となっており、遺跡周辺でも各集落間の平地は水田として利用されている。両遺跡は、鶴沼集落からその東側の水田地帯まで広がっているが、調査前は大部分が水田として利用されていた。南北と東は周囲を除いた山岳地帯に阻まれている一方、西方は阿賀川を介して新潟方面と深く結びついていた。このため、東北地方南部にありながら、北陸地方と結びついた風土を形成してきたと言える。

(日下部)

### 第3節 歴史的環境

本節では西木流C遺跡が所在する会津若松市を中心に、主に発掘調査が行われた会津地方の遺跡から見た歴史的動向について概観していく。

会津若松市の遺跡数については、「会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書」〔会津若松市教育委員会1999〕によると、これまで354の遺跡が確認されていた。さらに、平成の市町村合併によって旧河東町分の遺跡数と、近年追加された遺跡数を合わせると、平成24年度までに合計499の遺跡が会津若松市埋蔵文化財台帳に登録されている。

#### 旧石器時代

会津盆地における旧石器時代遺跡の事例は少ないが、湊町にある笹山原遺跡群、喜多方市塩坪遺跡などが調査されている。笹山原遺跡群は、ナイフ形石器などを含む後期旧石器時代前半期の遺跡で、ナイフ形石器と台形礫石器を含む後期旧石器時代前半期の石器群と、細石刃を主体とする後期旧石器時代終り頃の石器群が見つかっており、福島県内でも有数の旧石器時代遺跡である。その他では、同じく湊地区の小石ヶ浜遺跡や廻戸B遺跡など、現在確認されている会津若松市内の旧石器時代遺跡の多くは現在の猪苗代湖西岸寄りの山麓部に集中する傾向にある。

#### 縄文時代

縄文時代の遺跡は、旧石器時代と同様山間部や山麓部に多い。縄文時代は草創期から遺跡が確認できる。笹山原No11遺跡からは隆起線土器が出土し、西会津町塩吹岩陰遺跡からも草創期の遺物が出土している。早期の遺跡としては、常世式の標識遺跡ともなっている喜多方市常世原遺跡が確認されている。前期から後期にかけての会津若松市内の調査事例では、湊地区の笹山原No11遺跡や河東地区の大野原A遺跡などからも早期の土器が出土している。大戸地区の本能原遺跡では、中期の環状集落が確認されており、福島県内では有数の規模である。後・晩期では、大戸地区の上雨屋遺跡では300基以上の土坑墓が検出され、縄文後期から弥生時代中期までの土坑が確認されている。一箕地区の墓料遺跡でも縄文晩期の土坑墓が確認されている。

#### 弥生時代

会津若松市周辺では、弥生時代の墓制について知ることができる著名な遺跡が多い。しかしながら、集落跡については現時点でも不明な部分が多い。弥生中期には、再葬墓が一箕地区の墓料遺跡の他に、門田地区の南御山遺跡、そして会津美里町油田遺跡などで確認されている。ほかに、門田地区の一ノ堰B遺跡や湯川地区の川原町口遺跡で、土坑墓群が調査された。再葬墓は、縄文時代以来の埋葬方法であり、東日本で多く見られる。弥生時代後期になると、再葬墓が見られなくなり、それに代わるように方形周溝墓が作られ始める。湯川村桜町遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の井戸跡より木製鋸や掘り棒などの木製農耕具が出土し、弥生時代後期頃には会津地方で農耕が始まっていたことが分かった貴重な遺跡である。河東地区の宮越貝塚や高野地区の上高野貝塚な

どは、全国的にも類例の少ない純淡水性の弥生時代後期の貝塚が確認されている。

### 古墳時代

古墳時代になると、会津盆地でも前方後円墳の築造が開始される。会津地方では前期古墳が多く知られる。前期古墳はいくつかの集中地点があり、盆地南東部では一箕地区の会津大塚山古墳・堂ヶ作山古墳・飯盛山古墳、盆地西部の会津坂下町杵ガ森古墳・亀ヶ森古墳・鎮守森古墳、盆地北東部にある雄国山麓の喜多方市田中舟森山古墳・観音森古墳・十九壇古墳群などで大型前方後円墳が築造されている。会津大塚山古墳からは東北地方で唯一の三角緑神獣鏡が出土し、会津地方のみならず東北地方の古墳時代史を考える上で重要な発見となった。また、湯川村桜町遺跡では、前方後円墳形の周溝墓が確認され、古墳受容期のものと考えられる。

古墳時代中期以降の会津盆地では、大型古墳の築造が低調になる。会津坂下町長井前ノ山古墳は前方後円墳であるものの墳長約36mと小型である。中小規模古墳で構成される古墳群も確認されているが、その大半が未調査で、遺物も採集されていないため不明な点が多い。

一箕地区の村北古墳群、大塚山西古墳などが調査されており、いずれも古墳時代後期の古墳と考えられている。7世紀代になると、横穴墓も構築され、河東地区の胸板新田横穴墓群や、喜多方市山崎横穴墓群では小札甲など、後期・終末期古墳と遜色のない副葬品が確認できる。

古墳時代の集落については、古墳同様に不明な点が多い。古墳時代前期の集落遺跡は弥生時代後期から継続して営まれている遺跡で確認できる。町北地区の屋敷遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居が確認されており、弥生時代に引き続いた集落形成が確認できる。しかし、古墳時代前期以降の集落は、河東地区の村西遺跡、門田地区の門田ほ場遺跡などで竪穴住居跡が確認されている以外は不明な点が多く、様相は明らかになっていない。ほかに、国指定史跡の喜多方市古屋敷遺跡では、古墳時代中から後期にかけての豪族居館跡が確認されている。さらに、会津坂下町中平遺跡・桶渡台畑遺跡などで古墳時代後期の遺跡が調査されている。7世紀代の遺跡も、あまり確認されておらず、喜多方市内屋敷遺跡、会津坂下町竹原遺跡など数えるほどである。

### 奈良・平安時代

奈良時代の遺跡は、古墳時代に続いて遺跡の確認・調査数ともに少ないため不明な点が多い。河東地区の郡山遺跡は継続して調査が行われている数少ない遺跡で、奈良時代から平安時代の遺物が確認されている。掘立柱建物跡や、「會」と書かれた墨書土器や瓦、一般の集落には流通しない灰釉陶器などが出土していることから、会津郡衙の推定地として有力視されている。近隣では、平成25年(2013年)に発掘調査を実施した湯川村殿田遺跡では、奈良時代と7世紀代の竪穴住居跡が複数重複する形で確認され、会津郡衙設立前の様相を示す性格痕跡と考えられている。

奈良時代の生産遺跡としては、一箕地区の村北瓦窯跡が7世紀後半～8世紀初頭に操業していた。ここは会津盆地で唯一確認されている瓦窯跡であるが、操業期間は短期で、その供給地は明確ではない。奈良時代後半になると、東北地方でも有数の規模である大戸古窯跡群で須恵器の生産が開始される。大戸古窯跡で生産された須恵器は、会津地方だけではなく周辺各地へ供給されており、特

に長頸瓶は大戸古窯跡を特徴付けるものである。

平安時代に入って、市内の集落遺跡が急激に増加する。会津若松市に限ってみても町北地区の屋敷遺跡のほか、高野地区の矢玉遺跡・上吉田遺跡、神指地区の東高久遺跡など整然と並んだ掘立柱建物跡群が多く確認され、埋没した自然流路に沿って官衙に関連した遺跡が点在していたものと想定できる。ほ場整備に伴って会津若松市が実施した西木流C遺跡の調査でも、寺院や有力者の住居と考えられることが多い四面庇を持つ掘立柱建物跡が確認されているほか、灰陶器や緑釉陶器などが含まれていたことから、官衙に関連する遺跡として考えられている。喜多方市内屋敷遺跡・鏡ノ町遺跡A・B、会津坂下町大江古屋敷遺跡・吉原遺跡などでも整然と並んだ掘立柱建物跡群が検出されており、郡衙とその周辺における土地の開発の状況から、平安時代における会津の社会の発展の状況がうかがえる。

大同2年(807年)、徳一上人によって建立された湯川村勝常寺(会津中央薬師堂)には、国宝である木造薬師如来及び両脇侍像を含む12体の仏像が安置されており、9世紀代造立された貞観仏として知られている。また、同じく徳一によって建立されたと伝わる磐梯町恵日寺など、平安時代の会津盆地には仏教の発展の状況をうかがえる寺院が散在している。湯川村では平成21年(2009年)から、堂後遺跡として勝常寺の範囲確認調査を継続している。調査の結果、応永5年(1398年)再建時の方形区画溝跡や関連施設などが確認されている。11世紀以降は集落の様相が再び不明瞭になるが、平安時代末の会津坂下町陣が峯城跡の調査から、当該期の多くの知見が得られた。

### 中世・近世

中世に入ると、会津地方では三浦蘆名氏が台頭するほか、新たな支配者層が成立する。会津盆地の各所に中世城館跡の存在が伝えられ、史料中にその城主名などが記されている。近年、会津縦貫北道路関連の発掘調査によって、喜多方市荒屋敷遺跡・麻生館遺跡・高堂太遺跡・下高領館跡などの中世の平城・平館が調査されたほか、喜多方市新宮城跡、湯川村北田城跡なども一部発掘調査されている。これらの調査により中世の城館の構造などの状況が次第に明らかにされてきており、文献に残された記録との対比が可能となり、中世の会津地方の歴史を考える上での資料が充実してきている。

戦国時代には、蘆名氏が全盛を迎えるも次第に衰退へ向かう。天正17年(1589年)には蘆名義広と伊達政宗による摺上原の戦いが起こり、伊達政宗が勝利し、蘆名氏は事実上滅亡する。伊達政宗が一時的に会津に入るも、その後は蒲生秀行、上杉景勝、加藤嘉明らが会津地方を治めている。この歴史の動向に関わる城跡が会津地方では確認できる。湯川村浜崎城は豊臣秀吉の奥州仕置後に廃城になるはずのところを蒲生氏が御茶屋として残している。神指地区にある神指城跡は慶長3年(1598年)に会津に入った上杉景勝が鶴ヶ城として知られる若松城が狭いという理由で築城を開始した。しかし、徳川家康の会津征伐の計画によってその途中で築城は中断された。その後、関ヶ原の戦い後の慶長6年(1601年)、上杉景勝は米沢に移封となり、神指城は完成を待たずに破却となった。神指城跡の一部は、近年試掘・発掘調査されており、二の丸の南辺と東辺の土塁跡と堀跡が確

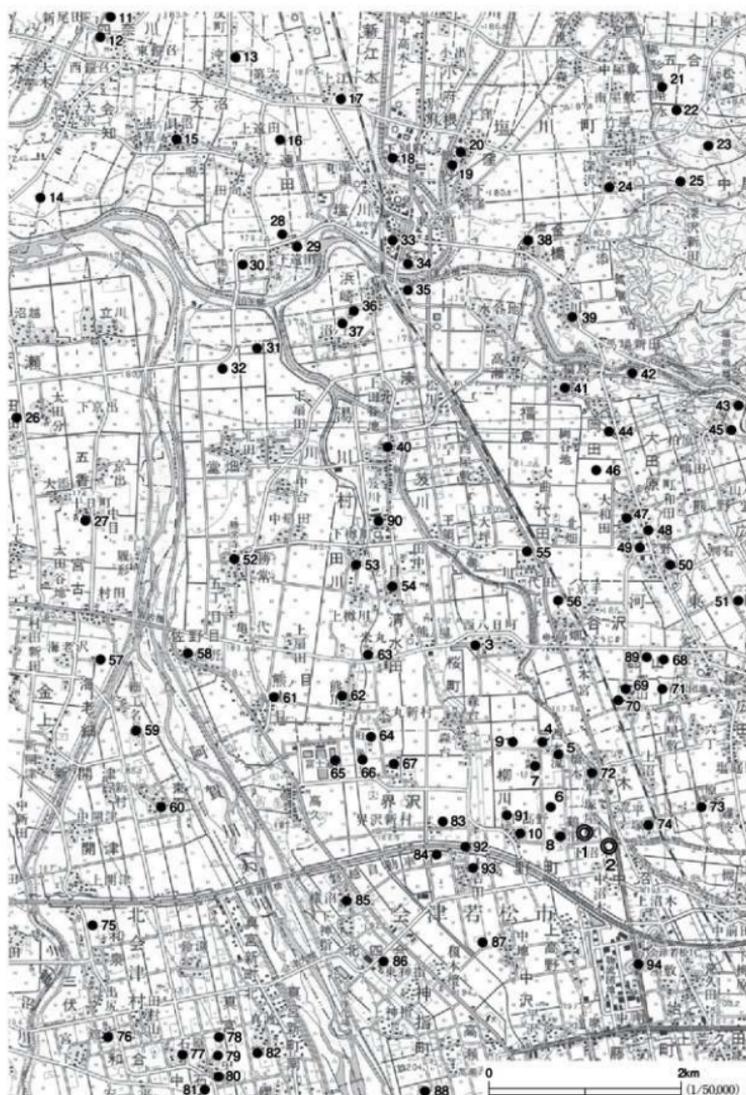


図3 周辺の遺跡位置図

表2 周辺の遺跡一覧

| №  | 遺跡名         | 種別                    | 備考(文献)                                   | №  | 遺跡名         | 種別                | 備考(文献)                               |
|----|-------------|-----------------------|--|----|-------------|-------------------|--------------------------------------|
| 1  | 龍沼口遺跡       | 奈良・平安時代の散布地           | 本書                                       | 48 | 大正寺跡        | 中世の社寺跡            |                                      |
| 2  | 西坂寺遺跡       | 奈良・平安時代の散布地           | 本書                                       | 49 | 熊野堂跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』、『河東町史』                          |
| 3  | 板町遺跡        | 奈良・平安時代の散布地<br>中世の城跡跡 | 『合津5・10・11・12・13』                        | 50 | 高野遺跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』、『古事記』                     |
| 4  | 西木流丁遺跡      | 奈良・平安時代の散布地           | 『合津若松66』、『合津13・14』                       | 51 | 高野野跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 5  | 西木流丁遺跡      | 奈良・平安時代の散布地           | 『合津若松66』、『合津14』                          | 52 | 熊野寺堂跡       | 中世の社寺跡            | 『高田村史』                               |
| 6  | 龍沼A遺跡       | 奈良・平安時代の散布地           | 『合津66若松』                                 | 53 | 舞定寺跡        | 中世の社寺跡            | 『新編』                                 |
| 7  | 西木流A遺跡      | 奈良・平安時代の散布地           | 『合津若松66』                                 | 54 | 誓ノ日館跡       | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』、『古事記』                     |
| 8  | 龍沼B遺跡       | 奈良・平安時代の散布地           |  | 55 | 粟木の館跡(代田村館) | 中世の城跡跡            | 『合津版』、『古事記』、『新井家出来記』                 |
| 9  | 西木流B遺跡      | 中世の散布地                | 『合津若松66』                                 | 56 | 高野野跡(高野寺跡)  | 中世の城跡跡            | 『合津版』、『古事記』、『坂下2』                    |
| 10 | 下高野館跡       | 中世の城跡跡                |  | 57 | 海老野館跡       | 中世の城跡跡            | 『新編』                                 |
| 11 | 鏡ノ町A遺跡      | 奈良・平安時代の集落跡           | 『龍川町3』                                   | 58 | 佐野館跡        | 中世の城跡跡            | 『古事記』、『高田村史』                         |
| 12 | 鏡ノ町B遺跡      | 奈良・平安時代の集落跡           | 『龍川町3』                                   | 59 | 新工北館跡       | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』                           |
| 13 | 沖原館(鏡ノ中遺跡)  | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『龍川3』、『龍名家源御見聞録』              | 60 | 福原館跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』、『福原村寺縁起』、『合津坂下町史』         |
| 14 | 内原館跡        | 古墳～近世集落跡              | 『龍川町7・12』                                | 61 | 中ノ日館跡       | 中世の城跡跡            | 『合津版』、『古事記』                          |
| 15 | 日宮館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』、『龍名家源御見聞録』                          | 62 | 龍川館跡        | 中世の城跡跡            | 『高田村史』、『二風氏表図』                       |
| 16 | 坂中館遺跡(坂生館跡) | 平安時代の集落跡・中世の館         | 『合津1』                                    | 63 | 末丸館跡        | 中世の城跡跡            | 『合津版』、『古事記』                          |
| 17 | 上江館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』                                     | 64 | 誓次館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 18 | 初野館跡        | 中世の城跡跡                | 『古事記』                                    | 65 | 兼高久遺跡       | 平安時代の集落跡          | 『合津若松104』                            |
| 19 | 上原館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』                                     | 66 | 西館跡         | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』、『古事記』                     |
| 20 | 丹波館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『古事記』                         | 67 | 誓次館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 21 | 高野館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『古事記』                         | 68 | 明石館跡        | 中世の城跡跡            | 『明石集賢』(河東町、1977)、『龍誌巻第10』            |
| 22 | 小高館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』、『古事記』、『龍名家源御見聞録』                    | 69 | 郡山遺跡        | 奈良・平安時代の官舎跡       | 『高田町史』、『合津若松107・114・115・118・123・128』 |
| 23 | 龍田館跡        | 中世の城跡跡                |  | 70 | 原田館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 24 | 津沢・平塚館跡     | 中世の城跡跡                | 『新編』                                     | 71 | 中野館跡        | 中世の城跡跡            | 『明石集賢』(河東町、1977)、『龍誌巻第10』            |
| 25 | 竹の内館跡       | 中世の城跡跡                |  | 72 | 平塚館跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』                                 |
| 26 | 御道田山ノ坪遺跡    | 平安時代・中世の散布地           | 『坂下44』                                   | 73 | 反野館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 27 | 中月館跡        | 中世の館                  |  | 74 | 平塚館跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』                                 |
| 28 | 下高野館跡       | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『古事記』                         | 75 | 新高館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 29 | 虎尾館遺跡       | 縄文～古墳・平安・中世の散布地       | 『合津2～6』、『龍川町10・13』                       | 76 | 田村山館跡       | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』、『古事記』                     |
| 30 | 新野館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』                                     | 77 | 石原館跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』                           |
| 31 | 北田城跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『古事記』、『高田村史』、『北田城跡』(高田村、1984) | 78 | 平南門館跡       | 中世の城跡跡            |                                      |
| 32 | 兼高館跡        | 中世の城跡跡                | 『古事記』、『高田村史』                             | 79 | 北館跡         | 中世の城跡跡            |                                      |
| 33 | 小十郎館跡       | 中世の城跡跡                | 『新編』                                     | 80 | 兼高館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 34 | 松木城跡        | 中世の城跡跡                | 『坂寺六蔵官報』、『新編』、『合津町史(参事考)』                | 81 | 中館跡         | 中世の城跡跡            | 『新編』                                 |
| 35 | 浜崎館跡        | 中世・近世の城跡跡             | 『新編』、『合津版』、『古事記』、『浜崎城跡』                  | 82 | 高野館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 36 | 浜崎館跡        | 中世の城跡跡                |  | 83 | 五玉遺跡        | 奈良・平安時代の散布地       | 『合津若松61』                             |
| 37 | 沼ノ上遺跡       | 縄文・中世の集落跡             | 『合津8』                                    | 84 | 上吉田遺跡       | 中世の散布地            | 『合津若松66』                             |
| 38 | 三輪館跡        | 中世の城跡跡                | 『坂寺六蔵官報』、『新編』、『合津版』、『古事記』                | 85 | 藤沼館跡        | 中世の城跡跡            |                                      |
| 39 | 金川館跡        | 中世の城跡跡                |  | 86 | イナヒ七堂跡      | 中世の社寺跡            |                                      |
| 40 | 葉川館跡        | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『古事記』                         | 87 | 中館跡         | 中世の城跡跡            | 『新編』                                 |
| 41 | 高野館跡(高村館)   | 中世の城跡跡                | 『新編』、『合津版』、『古事記』                         | 88 | 神野館跡        | 中世の城跡跡            | 『新編』、『合津版』、『古事記』、『合津町史』              |
| 42 | 福村館跡        | 中世の城跡跡                | 『合津版』、『古事記』、『伴野家系図』、『合津若松111』            | 89 | 余野館跡        | 奈良・平安時代の集落跡       | 『合津若松107』                            |
| 43 | 権度堂跡        | 平安・中世の社寺跡             |  | 90 | 龍田遺跡        | 奈良・平安時代の集落跡       | 高田村2006                              |
| 44 | 兼高館跡        | 中世の館跡                 |  | 91 | 下高野A遺跡      | 奈良・平安時代の散布地       | 『合津若松66』                             |
| 45 | 赤島館跡(赤島館)   | 中世の城跡跡                | 『合津版』、『古事記』、『河東町史』                       | 92 | 上吉田遺跡       | 平安時代の集落跡          | 『龍田道9』                               |
| 46 | 大和田館跡       | 中世の城跡跡                | 『河東町史』、『龍名家源御見聞録』、『新編』、『合津版』、『古事記』       | 93 | 上吉田C遺跡      | 平安時代の集落跡          | 『合津若松66』                             |
| 47 | 大和田館跡       | 中世の城跡跡                | 『合津版』、『河東町史』                             | 94 | 新野館跡        | 奈良・古墳・平安時代・中世の集落跡 | 『合津若松30・94』、『龍田道12』                  |

『合津』合津版頁北田館遺跡発掘調査報告書『合津町史』因谷合津農業水利事業関連遺跡発掘調査『龍田道』朝枝の跡中遺跡発掘調査報告書『新編』新編合津版上史『古事記』合津古事記『合津若松』合津若松発掘報告書『河東町史』河東町発掘報告書『龍川町』龍川町発掘報告書『坂下』合津坂下町発掘報告書

認されている。

江戸時代の会津地方は、徳川秀忠の庶子である保科正之が寛永20年(1643年)に会津藩主となり、その後の会津藩の藩政の基礎を固めた。若松城やその城下に広がった武家屋敷跡も発掘調査によって確認されており、当時の武家の生活を示す遺物が出土している。高野地区の西木流C遺跡近隣にある馬頭観音堂には競馬場跡があり、会津藩主が毎年観覧に来ていたことが伝わっている。(阿 部)

## 第4節 調査方法

平成25年度に調査を実施した鶴沼C遺跡および西坂才遺跡では、以下に基づいて行った。

グリッド設定については、世界測地系公共座標に一致させ、両遺跡ともに一辺10m方眼を単位とした。両遺跡とも個別のグリッドは、東西方向に西から東へアルファベットA・B…、南北方向に北から南へ算用数字で1・2…とし、両者を組み合わせて、D6グリッドなどと呼称している。

遺構の掘り込み作業については、各遺構の形状・大きさ・重複関係を留意し、土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については、長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては、上記の区画ごとに層位を確認した上で取り上げた。第1編鶴沼C遺跡の1号井戸跡の調査のように、安全面に特段の配慮をした調査方法については別途報告した。

遺構の記録は、掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡を原則1/20の縮尺で、流路跡を1/40の縮尺で実施した。また、鶴沼C遺跡の1号井戸跡については、東西南北4面の枡材の出土状況について1/10の縮尺で立面図を作成した。層位名を付す際、基本層位についてはローマ数字を用いて「L I・L II…」と表した。遺構内堆積土層は、算用数字を用いて「ℓ 1・ℓ 2…」と表した。土層の色調は、『新版標準土色帳』を参考に記載した。遺物については、小さなものを1/10の縮尺、大型のものを1/20の縮尺で記録を行った。地形測量は、1/200の縮尺で行った。遺構平面図を作成するに際しては、各グリッドのX・Y座標を基に1mの方眼に分割し、これを基準線とし、遺構平面図中で用いた。遺構平面図中の遺物については、流路跡を中心として、No1から順番に番号を振り、出土地点と標高をそれぞれ記録した。鶴沼C遺跡から出土した木製品については、小型のものはタッパーに水を入れ、水漬けし前記の遺物カードを入れ持ち帰った。大型の木製品については、水を入れた大型の平箱に遺物カードをつけて保管し、一部をサンプルとして持ち帰った。

写真撮影は、35mm一眼レフカメラ2台を利用して、モノクロフィルムとカラーリバーサルの両方のフィルムを使って実施した。更に一部については、デジタルカメラによる写真撮影も行った。調査区と流路跡の全景写真については、ラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影を行い、フィルムには35mmカメラと6×7判カメラによるカラーリバーサルフィルムを用いた。また、空撮写真撮影には35mmデジタルカメラも利用した。発掘調査で得られた出土遺物と記録類一式については、報告書作成完了後、遺跡ごとに台帳を作成し、福島県文化財センター白河館(まほろん)に収蔵する予定である。

(藤 谷)

# 第1編 鶴沼 C 遺跡

# 第1章 遺跡の位置と調査経過

## 第1節 遺跡の位置

鶴沼C遺跡は、会津若松市高野町大字中沼字鶴沼地内に所在する。周辺には、第2沼川を挟んで西側に鶴沼集落があり、東側には、涵川とその周辺の低地を挟んで国道121号線が走っている。本年度の調査区は、その間の水田部分であり、南北に走る農道と水路によって3か所に分断されている。区画された3か所を西からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区として調査を実施した。(藤谷)

## 第2節 調査経過

平成25年度は、本調査に先行して、4月11～25日まで遺跡東側水田部分11,000㎡を対象とした予備調査を実施した。合計55本のトレンチを設定し、そのうち西側のトレンチから遺構・遺物が検出され、合計3,000㎡について新たに要保存範囲とした。今回は、それらを足した11,000㎡について発掘調査を実施した。

発掘調査は、4月18日から西側のⅠ区の表土削除作業を開始し、5月1日にⅡ区までの作業を終了した。4月23日から、作業員約50名を導入し、調査員4人体制で作業を開始した。

5月中は、Ⅰ・Ⅱ区の遺構検出作業と精査を実施し、Ⅰ区からは流路跡と土坑と溝跡が、Ⅱ区からは、掘立柱建物跡と溝跡が検出された。また、国土座標に沿ったグリッド基準杭と標高杭の打設を委託し、5月後半に完了した。

6月中は、Ⅰ・Ⅱ区で検出された遺構の調査を進め、Ⅰ区では流路跡と溝跡と土坑、ピット群の、Ⅱ区では掘立柱建物跡の調査を実施した。6月18日からは、Ⅰ・Ⅱ区の調査と並行してⅢ区の表土削除作業を小型重機で開始し、最終的には9月4日に終了した。6月末からは、先行引き渡しが必要な鶴沼B遺跡の北側の調査を優先する必要があるため、半分の調査体制で調査を継続した。

7月は、特にⅠ区の流路跡の調査を中心に実施し、8月2日に第1回目の空撮写真撮影を実施した。8月初旬にⅠ区上面の遺構調査が終了した。8月5日からは、Ⅲ区の遺構検出作業を開始し、8月22日より精査を実施した。

9月からは、Ⅲ区の調査と並行して、Ⅰ区の北側にサブトレンチを設定したところ、土坑・ピットが検出された下面に、更に流路跡があることが判明し、9月24日にⅠ区北側にある2号流路跡上面の堆積土の除去作業を開始した。また、9月8日(日)には会津若松市高野地区のウォーキング大会で本事業の現場を目的地の1つとすることになったが、当日雨天のため、持参した出土遺物を説明するにとどまった。Ⅲ区の東側を検出していく過程で、井戸跡と思われる掘り込みが見つかり、9月10日より調査を開始した。

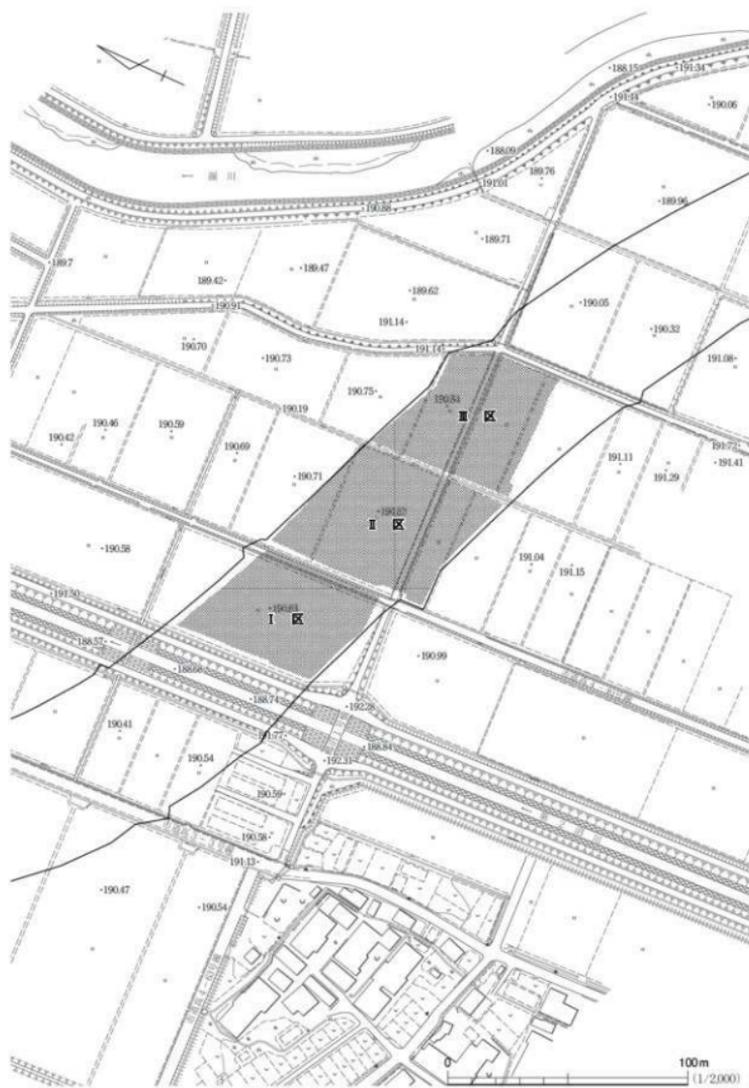


図1 調査区位置図

10月から、鶴沼B遺跡北側の調査に入っていた半分の人員がⅡ・Ⅲ区に入り、残りの掘立柱建物跡と1号流路跡の続きの部分の調査に入った。Ⅰ区では、2号流路跡の下面の調査を進める過程で、土器類とともに大量の木製品が出土した。10月19日(土)には、本遺跡と西坂才遺跡を主な会場とした現地説明会が開催された。10月中旬にⅠ区の下面の流路跡の調査が終わり、10月30日に第2回目の空撮写真撮影を実施した。10月31日には、その部分とⅡ・Ⅲ区の北側工事用仮設道路幅10mの部分、工事側に引き渡した。

11月は、Ⅰ・Ⅱ区境界の農道下の調査とⅡ区の流路跡の調査を中心に実施した。11月29日にすべての調査を終了し、残りの調査区を引き渡した。(藤谷)

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

本年度の発掘調査では、掘立柱建物跡9棟、土坑35基、溝跡25条、周溝状遺構1基、河川流路跡3か所とピット群が検出されている。掘立柱建物跡は、調査区中央から東側にかけての東西40m、南北25mの範囲に集中している。土坑はⅠ区北部に集中する傾向にあり、Ⅱ・Ⅲ区にかけて点在して検出された。溝跡は、各調査区で東西方向のものと南北方向のものが、一部で重複関係をもって分布している。流路跡はⅠ区の北東部と南西部を除く部分とⅡ区の南側に位置している。

基本土層は4層からなる。LⅠは耕作土を含む表土である。LⅡは灰黄褐色粘土で、ほとんどの地点でその上面が遺構検出面となっている。火山性堆積物が二次的な水成堆積によって形成された層と考えられる。LⅢはLⅡ下に堆積する黒色粘土で、止水状態の湿地状部分に堆積したと思われる層である。LⅣは褐灰色砂礫層で間に砂層を含み、河川の氾濫等によって堆積した層と思われる。

(藤谷)

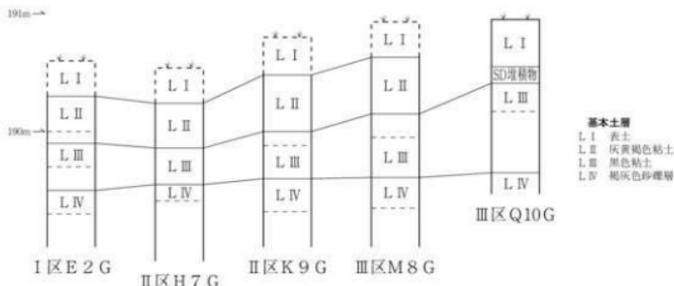


図2 基本土層柱状図

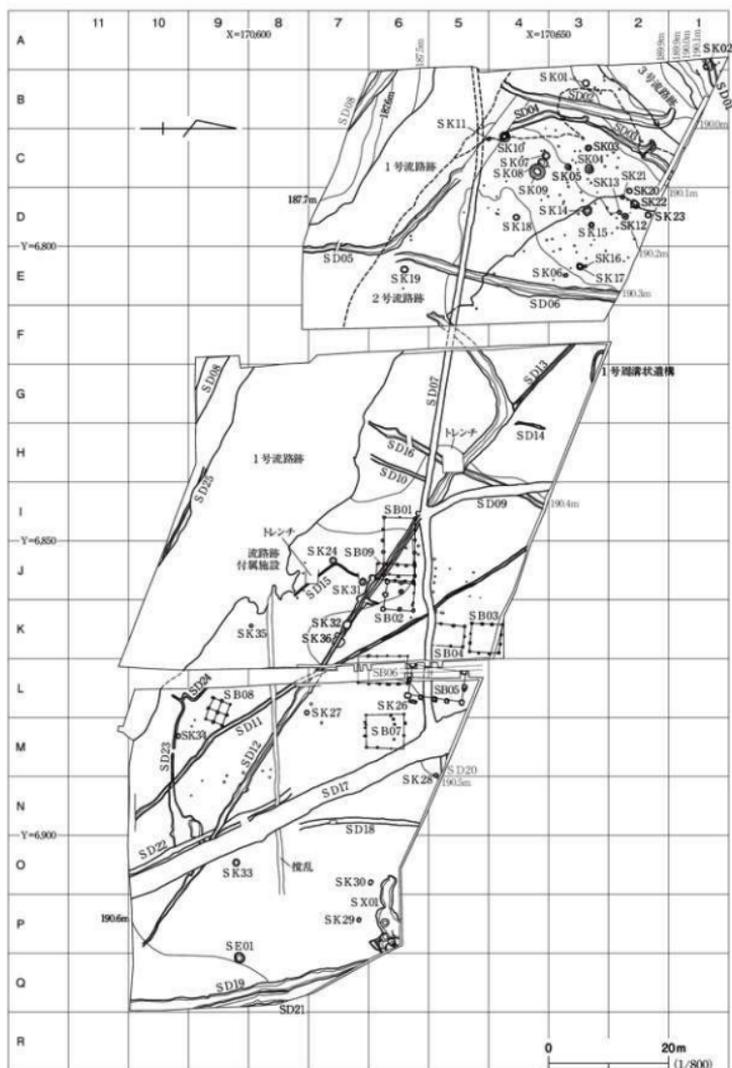


図3 遺構配置図

## 第2節 掘立柱建物跡

今回の調査では、合計9棟の掘立柱建物跡が検出された。Ⅰ・Ⅱ区境界の東西40m×南北25mの範囲に集中しており、うち1・2号掘立柱建物跡と9号掘立柱建物跡が重複関係にあり、1・2号掘立柱建物跡が9号掘立柱建物跡を切る形となっている。建物跡の主軸は、真北に近いもの(1・6・7号掘立柱建物跡)と真北よりやや東となるもの(2～5号掘立柱建物跡)の大きく2つのグループに分かれる。8号掘立柱建物跡については、建物跡群からやや離れた位置にある。

### 1号掘立柱建物跡 SB01

#### 遺 構 (図4, 写真5)

1号掘立柱建物跡は、Ⅱ区中央よりやや北側のⅠ・Ⅱグリッドに位置しており、12号溝跡と9号掘立柱建物跡と重複関係にあり、12号溝跡を切っている。また、位置関係より、9号掘立柱建物跡より新しいと考えている。周辺には、東側に2号掘立柱建物跡が、北側に9号溝跡が位置している。遺構検出面はLⅡ上面で、検出時にP1～15の15個の柱穴が建物軸に沿って確認できた。この内、P6については、当初明確に検出できなかった重複する9号掘立柱建物跡のものである。

本建物跡は、桁行き5間、梁行き2間の東西方向を主軸とする掘立柱建物跡である。建物の東西主軸はN89°Wのほぼ真西となっている。柱穴掘形は、形態が円形から楕円形を呈し、長軸25～60cm、検出面からの深さ10～30cmであり、P11を除く柱穴から柱痕が検出された。このうちP13では木質の柱痕が残っている。また、P15については、掘り込みが浅く、柱痕部分のみが確認できた。柱痕跡上面の幅は、12～17cmとなっている。

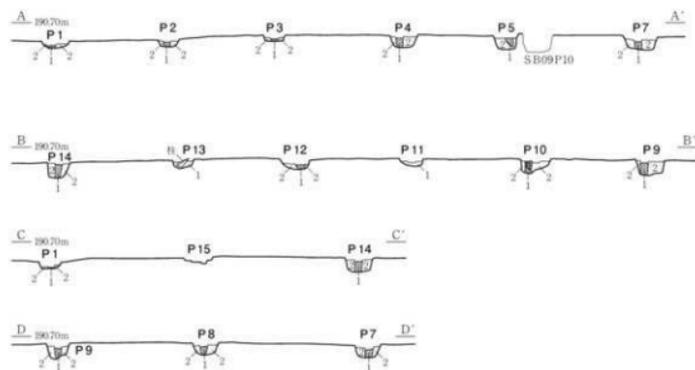
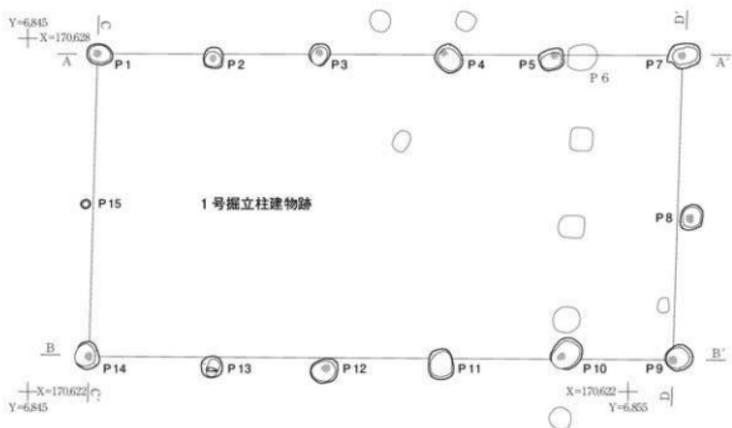
柱間寸法は、柱痕の芯々間で北側柱列が西から1.92m+1.77m+2.06m+1.85m+2.12m、南側柱列が西から2.05m+1.91m+1.88m+2.04m+1.87m、西妻側が北から2.56m+2.60m、東妻側が北から2.76m+2.44mとなっている。間尺は、桁行きが6尺～6尺5寸を基本としていると推定されるが、各柱痕間にはばらつきがあり、断定することはできなかった。梁行きは、8尺5寸～9尺を基本としていると推定されるが、桁行き同様断定することはできなかった。

#### 遺 物 (図6)

遺物は、P1～5・7～10・14の各柱穴堆積土より、ロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。このうち図6に2点を図示した。1は土師器高台杯の底部から体部下端の破片で、内面に明瞭なロクロナデの痕跡が認められる。2はP7から出土した須恵器長頸瓶の口縁部である。いずれも平安時代9世紀頃のもものと推定される。

#### ま と め

本建物跡は、柱穴の出土遺物から9世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では、主軸方向が共通するところから、6・7号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。(藤谷)



**1号掘立柱建物跡堆積土**

- 1 黒褐色粘質土 10YR2/3 (灰褐色土ブロック少量, 炭化物微量混入)
- 2 黒褐色粘質土 10YR2/3 (灰褐色土ブロック多量, 白色砕粒少量混入)



図4 1号掘立柱建物跡

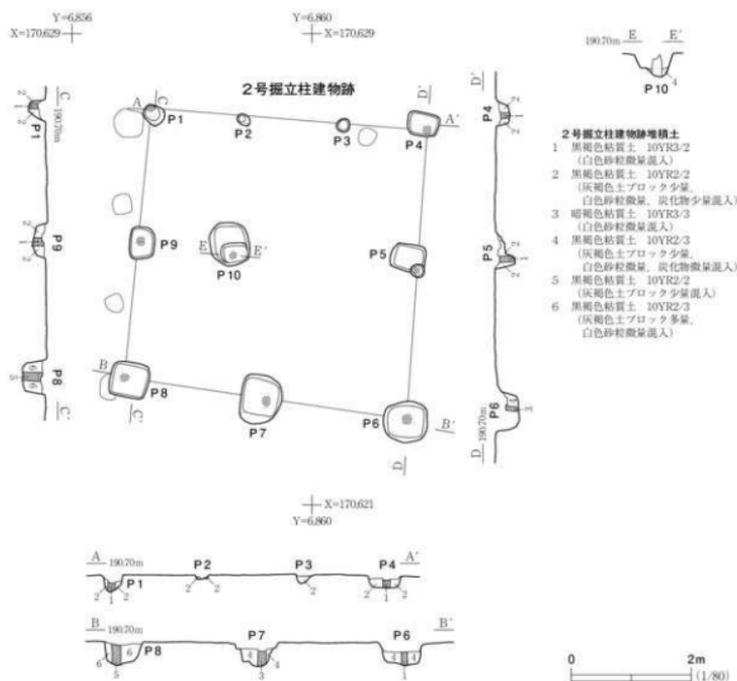


図5 2号掘立柱建物跡

## 2号掘立柱建物跡 S B 02

## 遺 構 (図5, 写真6)

2号掘立柱建物跡は、Ⅱ区東側のJ・K6グリッドに位置している。9号掘立柱建物跡と重複関係にあり、それを切っている。周辺には、西側に1号掘立柱建物跡が、南側に12号溝跡が、北側に9号溝跡が位置している。遺構検出面はLⅡ上面で、P1～10の10個の柱穴が確認できた。

本建物跡は、東西方向が2間と3間、南北方向が2間で、東西方向を主軸とし、中に柱穴を持つ総柱の掘立柱建物跡である。建物の東西主軸は $N-84^{\circ}-W$ と真西よりわずかに北向きとなっている。柱穴掘形は、長軸が53～80cmで形態が隅丸長方形のもの(P4～10)長軸が22～35cmで形態が楕円形のもの(P1～3)がある。検出面からの深さは8～42cmとバラつきがある。小型のP2・P3を除いた柱穴からすべて柱痕が検出された。柱痕跡上面の幅は、10～15cmとなっている。また、P10からは、柱下部が検出された。下部での径は16cmとなっている。

第1編 鶴沼C遺跡

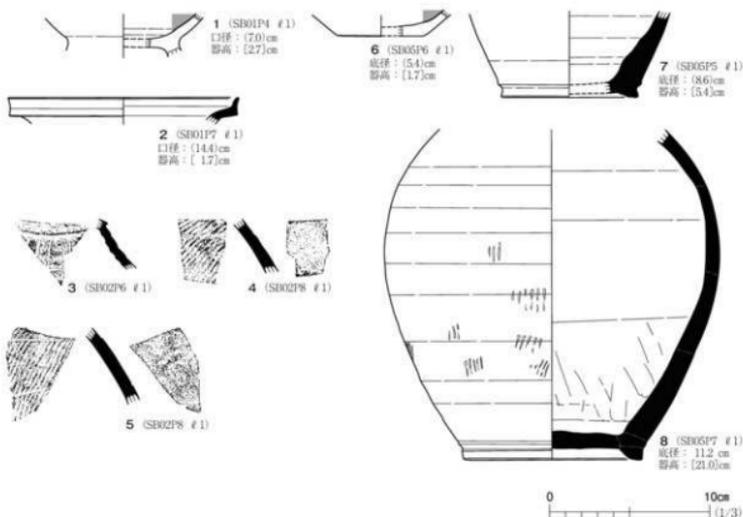


図6 1・2・5号掘立柱建物跡出土遺物

柱間寸法は、柱痕の芯々間で南側柱列が西から2.43 m + 2.41 m、北側柱列が西から1.52 m + 1.70 m + 1.38 m、西側柱列が北から2.25 m + 2.33 m、東側柱列が北から2.39 m + 2.39 mとなっている。中央柱穴は、建物の中央より西側に寄っており、P 9とP 5間では1.55 m + 3.05 mとなっている。間尺は、南東柱列をみると8尺を基本とすると考えられる。

遺物 (図6)

遺物は、P 1～9の各柱穴堆積土より、平安時代9世紀と思われるロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。このうち図6に3点を図示した。3は須恵器円面硯の破片で脚部に縦方向の沈線が施されている。4・5は須恵器甕の体部破片で、外面にタタキ痕が残されている。

まとめ

本建物跡は、柱穴の出土遺物から平安時代9世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では主軸方向が共通するところから、3～5号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。(藤谷)

3号掘立柱建物跡 SB03

遺構 (図7, 写真7)

3号掘立柱建物跡は、Ⅱ区北東隅のK 4・5グリッドに位置しており、南側で4号掘立柱建物跡に隣接している。一部北西隅の柱穴P 1が調査区端の排水溝で壊されている。遺構検出面はLⅡ上面で、P 1～12の12個の柱穴が確認できた。

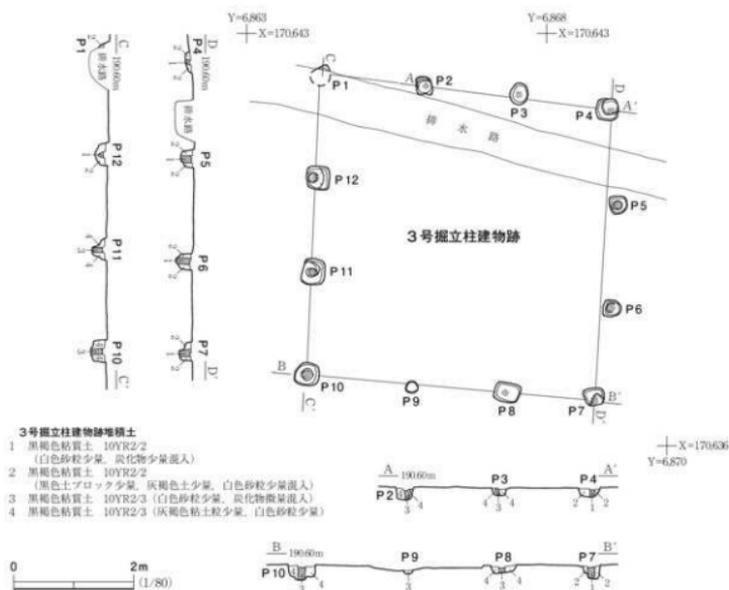


図7 3号掘立柱建物跡

本建物跡は、桁行き3間、梁行き3間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡である。建物の南北主軸はN35°Eと真北よりやや東寄りとなっている。東側柱列のP5・6が主軸よりやや外側に張り出す形態となっている。柱穴掘形は、形態が円形から隅丸長方形を呈し、長軸20～45cm、検出面からの深さ10～28cmであり、P1・P9を除く柱穴から柱痕が検出された。柱痕跡上面の幅は、8～12cmとなっている。また、P4～7・10～12は、底面がほぼ柱の大きさに一段深く掘り込まれている。

柱間寸法は、柱痕の芯々間で西側柱列が北のP12から1.64m+1.72m、東側柱列が北から1.62m+1.75m+1.59m、北側柱列が西のP2から1.55m+1.54m、南側柱列が西から1.76m+1.55m+1.49mとなっている。間尺は、桁行きが5尺5寸前後を基本とし、梁行きが6尺+5尺+5尺前後を基本としていると推定される。

遺物は、P7とP11よりロクロ土師器の細片が出土している。

#### まとめ

本建物跡は、柱穴の出土遺物から平安時代9世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では、主軸方向が共通するところから、2・4・5号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。

(藤谷)



図8 4号掘立柱建物跡

形を呈するP1と、それ以外の長軸が30～42cmで楕円形を呈するものがある。検出面からの深さは8～12cmであり、全ての柱穴から柱痕が検出された。柱痕跡上面の幅は、10～12cmとなっている。

柱間寸法は、柱痕の芯々間で西側柱列が北から1.89m+2.15m、東側柱列が2.05m、北側柱列が西から1.80m+1.70mとなっている。間尺は、桁行きが6尺～6尺5寸を基本としていると推定され、梁行きが6尺を基本としていると推定される。

柱穴から遺物は出土しなかった。

#### まとめ

本建物跡は、柱穴の堆積土が他の建物跡と共通するところから、平安時代9世紀代の建物跡と推定される。また、遺跡の中では、主軸方向が共通するところから、2・3・5号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。(藤谷)

### 5号掘立柱建物跡 SB05

#### 遺構 (図9, 写真9)

5号掘立柱建物跡は、Ⅱ区とⅢ区の北側にまたがって検出された遺構で、L5・6グリッドに位置している。西側に4号掘立柱建物跡が位置し、南側で6号掘立柱建物跡と隣接している。また、東側柱列の南西側には26号土坑が隣接している。遺構検出面はLⅡ上面で、Ⅱ区とⅢ区の間用水路によって、西側柱列の一部が破壊されている。P1～9の9個の柱穴が確認できた。

### 4号掘立柱建物跡 SB04

#### 遺構 (図8, 写真8)

4号掘立柱建物跡は、Ⅱ区北東隅のK5グリッドに位置している。9号溝跡と重複関係にあり、それに切られており、南側柱列は7号溝跡構築時に破壊されたものと推定される。周辺には、北側に3号掘立柱建物跡が隣接している。遺構検出面はLⅡ上面で、P1～6の6個の柱穴が確認できた。

一部が破壊されているものの、建物跡は、桁行き3間、梁行き2間の南北方向を主軸とする掘立柱建物跡であると推定される。建物の南北主軸はN7°Eで、真北よりやや東に傾いている。柱穴掘形は、長軸が40cmで隅丸長方形



本建物跡は、桁行き4間、梁行き2間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡である。建物の南北主軸はN8°Eと真北よりやや東側に偏る形となっている。柱穴掘形は、全てのもので形態が隅丸長方形を呈しており、長軸65～100cm、検出面からの深さ20～30cmである。このうち、P9を除く柱穴から柱痕が検出された。このうちP3・5・6では木質の柱痕が残っている。一番遺存状況の良いP5の柱痕は、径20cmであった。

柱間寸法は、柱痕の芯々間で東側柱列が北から230m+236m+211m+218m、北妻側が西から298m+214m、南妻側のP7、P8間が255mとなっている。間尺は、桁行きが7尺～8尺、梁行きは8尺5寸～10尺+7寸を基本としていると推定される。

#### 遺物 (図6)

遺物は、P3・8以外の各柱穴堆積土より、ロクロ土師器と須恵器の細片及び長頸瓶の体部破片が出土している。このうち図6に3点を図示した。6は土師器杯の底部で、内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。7と8は長頸瓶の体部から底部の破片で、7は低い高台が付く形態、8は外面にタタキ痕が、内面にナデの痕跡が確認される。何れも平安時代9世紀頃のものとして推定される。

#### まとめ

本建物跡は、今回検出された建物跡の中でも、柱穴の規格、柱痕の大きさが最大の建物跡である。その時期は、柱穴の出土遺物から平安時代9世紀代と推定される。遺跡の中では、主軸方向が共通するところから、2～4号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。(藤谷)

### 6号掘立柱建物跡 SB06

#### 遺構 (図10, 写真10)

6号掘立柱建物跡は、Ⅱ区とⅢ区の中央よりやや北側にまたがって検出された遺構で、K6・7、L6・7グリッドに位置している。周辺には、北側に5号掘立柱建物跡が隣接しており、更に建物跡の西側から南側にかけて11号溝跡が位置している。遺構検出面はLⅡ上面で、Ⅱ区とⅢ区間の用水路によって、妻側柱穴が一部破壊されている。P1～12の12個の柱穴が確認できた。P2・3については、重複しているものも1つの柱穴として番号を付けた。

本建物跡は、一部柱穴が破壊されたり、欠落したりしているものもあるが、桁行き5間、梁行き1間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡であると推定される。建物の南北主軸は、ほぼ真北となっている。柱穴掘形は、形態が小型の隅丸長方形を呈するものがほとんどで、長軸23～38cm、検出面からの深さ10～28cmである。他に楕円形のものP9・12や、円形のものP7がある。これら柱穴のうち、P2とP3は柱の据替と思われる柱穴が重複する形態となっており、P2については、断面の状況から北側が新しいことが観察できた。柱痕は、P1・2・6・8～12の7つの柱穴から検出された。このうちP2・7・9・12では木質の柱痕が残っている。柱痕跡上面の幅は、8～12cmとなっている。

柱間寸法は、柱痕の芯々間及び小型のものでは中心のみをみると、西側柱列では北から1.38m+2.00m

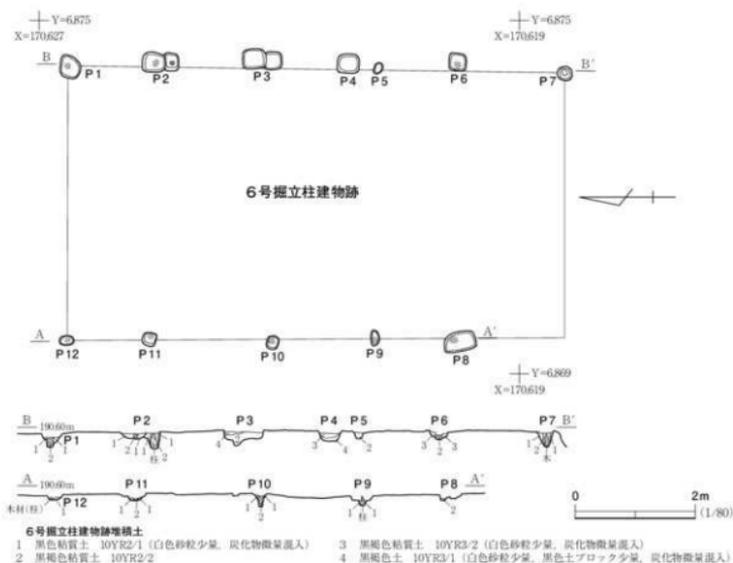


図10 6号掘立柱建物跡

+1.72 m + 1.27 mである。東側柱列では、P2で北側、P3で南側を基準に計測すると、北から1.45 m + 1.66 m + 1.56 m + 0.50 m + 1.32 m + 1.83 mとなっている。北西側の隅柱間は4.65 mである。間尺は、桁行きに、各柱痕間に4尺～6尺の間ばらつきがあり、断定することはできなかった。梁行きは、15尺前後と推定される。

遺物は出土していない。

#### まとめ

本建物跡は、柱穴の堆積土が周辺の建物跡群に近似することと位置関係に規則性がみられるところから、同じく平安時代9世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では、主軸方向が共通する1・7号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。(藤谷)

#### 7号掘立柱建物跡 SB07

##### 遺構 (図11, 写真11)

7号掘立柱建物跡は、Ⅲ区北西側で検出された遺構で、L6・7、M6・7グリッドに位置している。

北東隅柱の位置で17号溝跡と重複関係にあり、それに切られている。周辺には、西側に6号掘

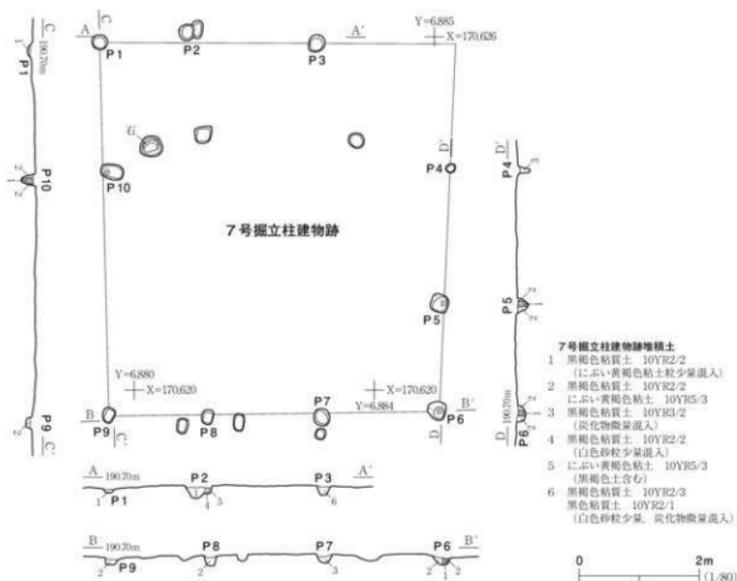


図11 7号掘立柱建物跡

立柱建物跡が、北西側で5号掘立柱建物跡が位置している。建物跡からは、P1～10の10個の柱穴が確認できた。遺構検出面はLⅡ上面である。また、柱穴周囲には、北半部と南側柱列付近に小ピットが6個ある。一部本建物跡に関連する可能性が考えられるが、詳細は不明である。

建物跡は、一部柱穴が破壊されたり、欠落したりしているものもあるが、桁行き3間、梁行き3間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡であると推定される。建物の南北主軸は、ほぼ真北となっている。柱穴掘形は、形態が小型の楕円形を呈するものがほとんどで、長軸22～35cm、検出面からの深さ14～22cmである。他に隅丸長方形のものP5・9、円形のものP3・4がある。これら柱穴のうち、P2は重複する形態となっている。柱痕は、P5・6・10の3つの柱穴から検出され、他の柱穴からは検出されなかった。

柱間寸法は、柱痕の遺存しているものは芯々間で、柱痕の遺存していないものでは中心で計測すると、西側柱列では北から2.20m+4.15mである。東側柱列では、北側柱穴が欠落しているが、北から2.12m+2.30m+1.85mである。南側柱列では、西から1.64m+1.89m+1.98mとなっている。北側柱列では、東側柱穴が欠落しているが、西から1.81m+2.15m+2.35mとなっている。間尺は、桁行きが7尺前後を基本とし、梁行きが6尺～7尺を基本としていると推定されるが、各柱痕間にはばらつきがあり、明確に断定することはできなかった。

遺物は出土していない。

#### まとめ

本建物跡は、柱穴の堆積土が周辺の建物跡群に近似することと位置関係に規則性がみられるところから、同じく平安時代9世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では、主軸方向が共通する1・6号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。(藤谷)

### 8号掘立柱建物跡 SB08

#### 遺構 (図12, 写真12)

8号掘立柱建物跡は、Ⅲ区西側の中央よりやや南寄りのL・M9グリッドに位置している。周辺には、北側から東側にかけて11号溝跡が、南側に23・24号溝跡が位置している。遺構検出面はLⅡ上面で、P1～9の9個の柱穴が確認できた。

本建物跡は、2間×2間の東西方向を主軸とする総柱の掘立柱建物跡である。建物の東西主軸はN69°Wのはほぼ東西からやや北に傾く形となっている。柱穴掘形は、形態が隅丸長方形から楕円形を呈し、長軸28～55cm、検出面からの深さ12～17cmであり、P2～4・9の4個の柱穴から柱痕が検出された。P2とP6については、平面形が重複する形であり、建物の建て替えではなく、構築時に柱の掘え替えて作られたものと思われる。P7については、北側底面で柱の痕跡が確認できた。柱痕の上部の大きさは11～18cmとなっている。

柱間寸法は、北側柱列がP1の中心から各柱穴の芯々で、西から1.82m+1.84mである。南側柱列がP7の柱痕、P8中央、P9柱痕間で西から1.87m+1.86mである。西側柱列がP1の中心から各柱痕間で北から1.50m+1.42m、東側柱列が北から1.54m+1.44mである。間尺は、東西が6尺+6尺、南北が5尺+5尺と推定される。

遺物は、P2・3・8よりロクロ土師器甕の細片が出土している。

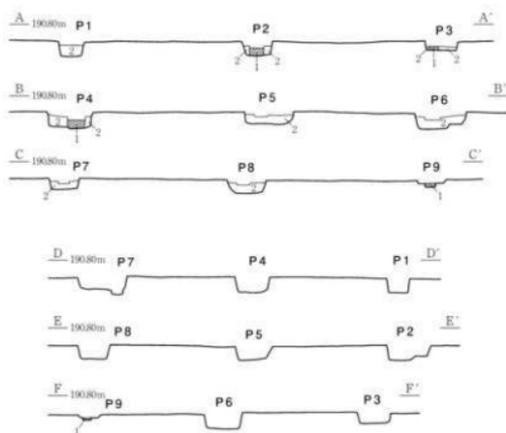
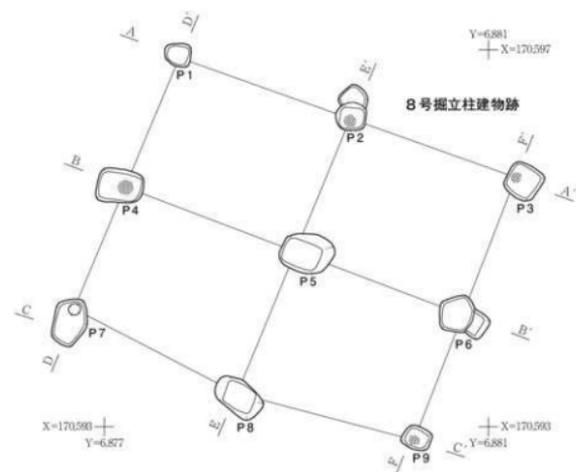
#### まとめ

本建物跡は、柱穴の出土遺物や堆積土から平安時代9世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中でも他の建物群と離れ主軸方向も異なるところから、それらとは若干性格を異にするとと思われる。建物の構造は総柱であるが、上部重量を支えるような大型の柱穴を持っておらず、倉庫的なものとは考えにくい。堂等の宗教的な施設の可能性を想定したい。(藤谷)

### 9号掘立柱建物跡 SB09

#### 遺構 (図13, 写真13)

9号掘立柱建物跡は、Ⅱ区中央よりやや東寄りのJ6グリッドに位置している。1・2号掘立柱建物跡、12号溝跡と重複関係にあり、12号溝跡を切っており、2号掘立柱建物跡に切られている。1号掘立柱建物跡とは柱穴での直接の切り合いはなかった。周辺には、重複している遺構の他に北側に9号溝跡が、南側に31号土坑が位置している。遺構検出面は、LⅡ上面及び12号溝跡堆積土



8号掘立柱建物跡増精土

- 1 黒褐色土 10YR2/2
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (にぶい・黄褐色粘質土(地山)ブロック多量混入)



図12 8号掘立柱建物跡

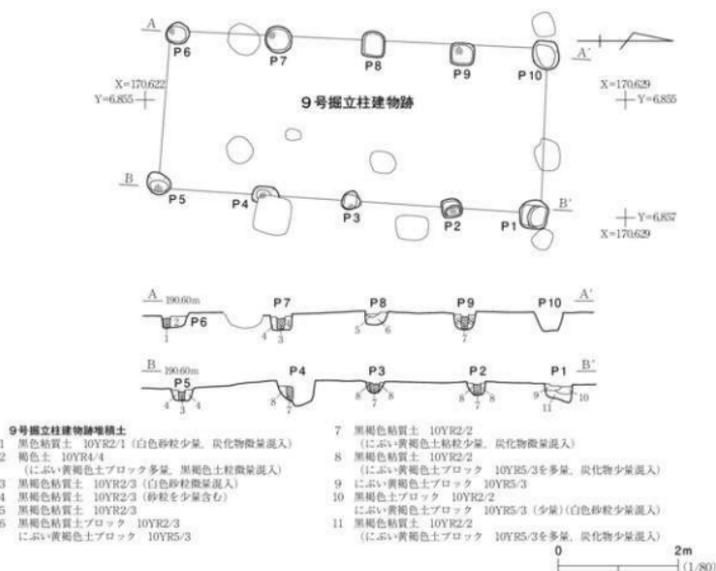


図13 9号掘立柱建物跡

である。

本建物跡は、1間×4間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡である。建物の南北主軸はN4°Eと真北からやや東に傾く形となっている。柱穴掘形は、形態が隅丸方形P1・8・9、隅丸長方形P2、楕円形P3～6・10、円形P7を呈しているものがある。長軸32～49cm、検出面からの深さ20～30cmであり、P1・8・10を除く各柱穴から柱痕が検出された。柱痕の上部の大きさは10～15cmとなっている。

柱間寸法は、各柱痕の芯心、または柱穴の中央部で、西側柱列が北から1.48m+1.45m+1.67m+1.69mで、西側柱列が北から1.48m+1.69m+1.50m+1.73mである。また、北妻側では2.80m、南妻側では2.71mとなっている。間尺は、南北の主軸方向が5尺と5尺5寸を基準とした寸法で、東西の妻側が9尺と推定される。

遺物は、P5・9よりロクロ土師器甕の細片が出土している。

#### まとめ

本建物跡は、柱穴の出土遺物や堆積土から平安時代9世紀代の建物跡と推定される。重複関係より2号掘立柱建物跡より古い時期の建物跡である。(藤谷)

### 第3節 土 坑

本年度の調査で、土坑は合計35基検出されている。各調査区の内訳はⅠ区23基、Ⅱ区5基、Ⅲ区7基で、全体の2/3がⅠ区から検出されている。

Ⅰ区の土坑は北半に多く分布しており、このうち14基が平安時代の2号流路跡とその氾濫原の堆積土最上層で検出されている。また、近世以降の溝跡と重複関係にあり、それに切られているものもあることから、中世のものが主体であると思われる。Ⅱ・Ⅲ区の土坑は、建物跡群と同時期のもの、近世以降のもの双方がある。

#### 1号土坑 SK01 (図14・22, 写真14)

Ⅰ区の中央西端、B3グリッドに位置する。検出面は2号流路跡氾濫部ℓ1上面で、東側2.5mに2号流路跡が南北にはしる。土坑は最も近い3号土坑でも10mの距離がある。

検出面での平面形は直径110cmの円形で、底面までの深さは73cmである。底面は砂礫層上面まで達しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はほぼ水平の人為堆積で4層に分層した。ℓ1～3は砂粒が主体で全体的に締まっており、最下層のℓ4は黒色土で木質片や炭化物を含んでいる。

遺物は図22-1の火付木1点を図示した。長さ11.1cmで先端が削げて細くなっている。ほかに取り上げの際に細くなり図示できなかったが、土坑中央ℓ2から曲物1点、摩滅の著しい土師器杯の細片2点が出土している。

時期は、検出面が平安時代の2号流路跡堆積土ℓ1上面であることと堆積土の特徴から、中世と考えられる。性格については、廃棄穴や貯蔵穴などの可能性があるものの、判断材料に欠ける。

(後 藤)

#### 2号土坑 SK02 (図14)

Ⅰ区の北西隅、A1グリッドの東端に位置する。北側は1号溝跡に切られている。南側に3号流路跡があるが、他の土坑とは離れて位置する。検出面はLⅡ上面である。

検出面での平面形は直径88cmの円形で、底面までの深さは20cmである。壁はなだらかに立ち上がる鍋底状の土坑である。堆積土は均質で締まりの良い黄灰色土1層で、自然堆積と考えられる。

本土坑は1号溝跡よりは古いことは明らかであるが、遺物の出土もなく、時期や性格については、明らかにしえない。

(後 藤)

#### 3号土坑 SK03 (図14・22, 写真14)

Ⅰ区中央のやや北、C3グリッドに位置する。検出面は2号流路跡氾濫部ℓ1上面で、西側3mには3号溝跡、東側2mには4号土坑、南東3.5mには5号土坑が位置する。

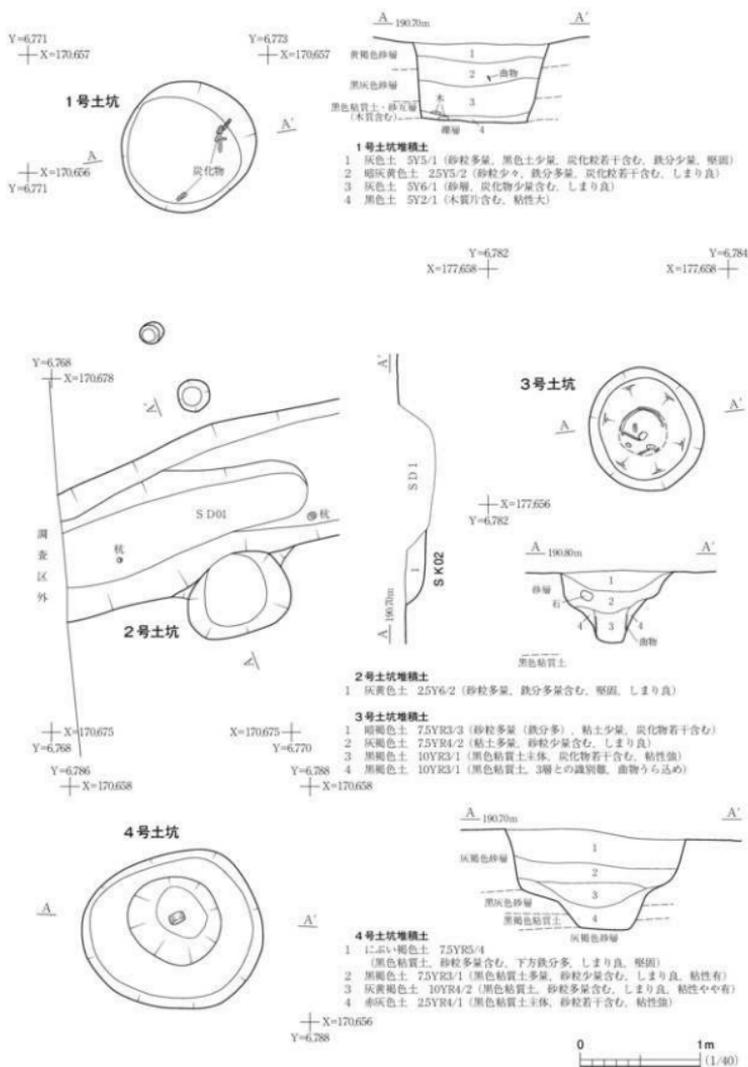


図14 1～4号土坑

検出面での平面形はほぼ円形で、規模は長径1.08m、短径96cmである。検出面から30cmほど掘り下げた後、さらに中央を円形に掘り下げて、直径25cm、高さ30cmほどの曲物を正位に設置し、背面を黒色粘質土で固定している。検出面から底面までの深さは62cmである。堆積土は4層に分層したが、下層のℓ3・4は黒色粘質土、上層のℓ1・2は砂粒・粘土が主体で自然堆積と考えられる。曲物は南側半分が壊れており、破片が底面やℓ3から出土している。

遺物は須恵器片・砥石・曲物各1点を図示した。図22-2は須恵器壺の底部破片、3は凝灰岩製の砥石で、曲物枠内の底面から出土している。表裏面とも剥落し、砥面は両側面にのみ残る。4は曲物の側板で、長さ44.8cm、幅8.5cmである。木取りは柃目で、樹皮で綴じた接ぎ目の部分が残る。出土時の計測では、高さ21cmで直径35cm前後であることから、全周すると長さ1.1mほどになる。

性格については、底面中央を掘り下げ、曲物を設置していることから、深さはないものの簡易な井戸跡と考える。底面から出土した須恵器壺の破片は平安時代のものであるが、検出面が平安時代の2号流路跡ℓ1上面であることと堆積土の特徴から、中世の可能性が高い。(後藤)

#### 4号土坑 SK04 (図14・22, 写真14)

I区中央やや北、C3グリッドに位置する。検出面は2号流路跡ℓ1上面で、西側2mには3号土坑、南側2.5mには5号土坑が位置する。

検出面での平面形はほぼ円形で、規模は長径1.48m、短径1.38mである。土層の判断が難しく一部掘りすぎてしまったが、深さ50cmほど円筒形に掘り下げた後、中央をさらに深さ30cm掘り下げている。検出面から底面までの深さは86cmである。堆積土は黒色粘質土が主体で砂粒の多少により4層に分層したが、人為堆積と考えられる。

遺物は、図22-5の曲物の柄杓が、土坑中央のℓ4から1点出土しているのみである。やや歪んでいるが、側板を二重に廻し、接ぎ目を樹皮で綴じている。柄を取り付けた対向する大小の2孔があり、直径12.5cmの底板も残る。3号土坑同様、底面中央を掘り下げており、曲物は設置していないが最下層から柄杓が出土していることから、簡易な井戸跡の可能性が考えられる。時期についても、3号土坑同様、中世の可能性が高い。(後藤)

#### 5号土坑 SK05 (図15, 写真14)

I区中央やや北、C3グリッドに位置する。北側2～3mには3・4号土坑、南側3～4mには7～9号土坑が位置する。検出面は2号流路跡ℓ1上面である。

南側は攪乱により壊されているが、検出面での平面形は直径90cmの円形で、底面までの深さは77cmである。直径55cmほどの平坦な底面から20～30cmほど垂直に立ち上がった後、やや傾斜を持って開く。堆積土は5層に分層した。上層のℓ1・2は砂粒、下層のℓ3・4は黒色粘質土が主体で、短期間の自然堆積と考えられる。

遺物は曲物の細片が3点と底面直上から骨が出土している。骨は極一部で、墓塚と断定するのは

難しく、堆積土や形態は周辺の土坑と近似しており、同様の時期や性格と考えたい。(後 藤)

#### 6号土坑 SK06 (図15)

I区北東、E3グリッドに位置する。検出面はLII上面で、北西2mには17号土坑が位置する。検出面での平面形は、長軸70cm、短軸52cm楕円形で、主軸方向はN5°Wである。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは18cmと浅く、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘質土を主体とする単一層で、自然堆積と考えられる。

時期や性格については、遺物の出土がなく、判断材料も乏しいことから、不明とする。(後 藤)

#### 7号土坑 SK07 (図16・22, 写真15)

I区のはほぼ中央、C3・4グリッドの境界上に位置する。南東には重複する8・9号土坑が近接し、ほぼ直線状に並ぶ。検出面は2号流路跡ℓ1上面である。

検出面での平面形はほぼ円形で、規模は長径1.26m、短径1.1mである。底面までの深さは84cmである。底面は東側がやや深くなっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は7層に分層した。ℓ1・4～6は砂粒が主体、ℓ2・3と最下層のℓ7は黒色粘質土が主体となる層で、自然堆積と考えられる。北西寄りの底面からは拳大の礫3点と木片が出土している。

図示した遺物は、図22-6の漆器の椀1点である。口縁部を欠くが、内面には黒漆の下地に赤漆で文様が描かれている。他に摩滅の著しい土師器の細片4点と須恵器の細片1点が出土している。

時期は検出面と堆積土の特徴から中世と考えられる。性格については判断材料に欠けるが、廃棄穴や貯蔵穴など可能性を指摘するのみにとどめる。(後 藤)

#### 8号土坑 SK08 (図16・22, 写真15)

I区のはほぼ中央、C4グリッドに位置する。検出面は2号流路跡ℓ1上面で、北西に7号土坑が近接し、南東で9号土坑と重複する。検出時の平面的判断では本土坑が古いと判断したが、重複する部分は両土坑とも最上層のℓ1のみで、堆積土に大きな相違は認められない。

確認面での平面形は、長径1.7m、短径1.25mの楕円形で、底面までの深さは92cmである。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり、上方でやや開く。堆積土は砂粒と黒色粘質土の多少により6層に分層した。砂粒と黒色粘質土が主体となる層が互層状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺物は、ℓ2より出土した図22-7の荷札と考えられる木製品1点のみである。長さ11.2cm、幅3.5cmで両端をやや丸く削っており、円孔と擦れて判読不能であるが表面に墨書が認められる。

時期や性格については7号土坑などと同じと考える。(後 藤)

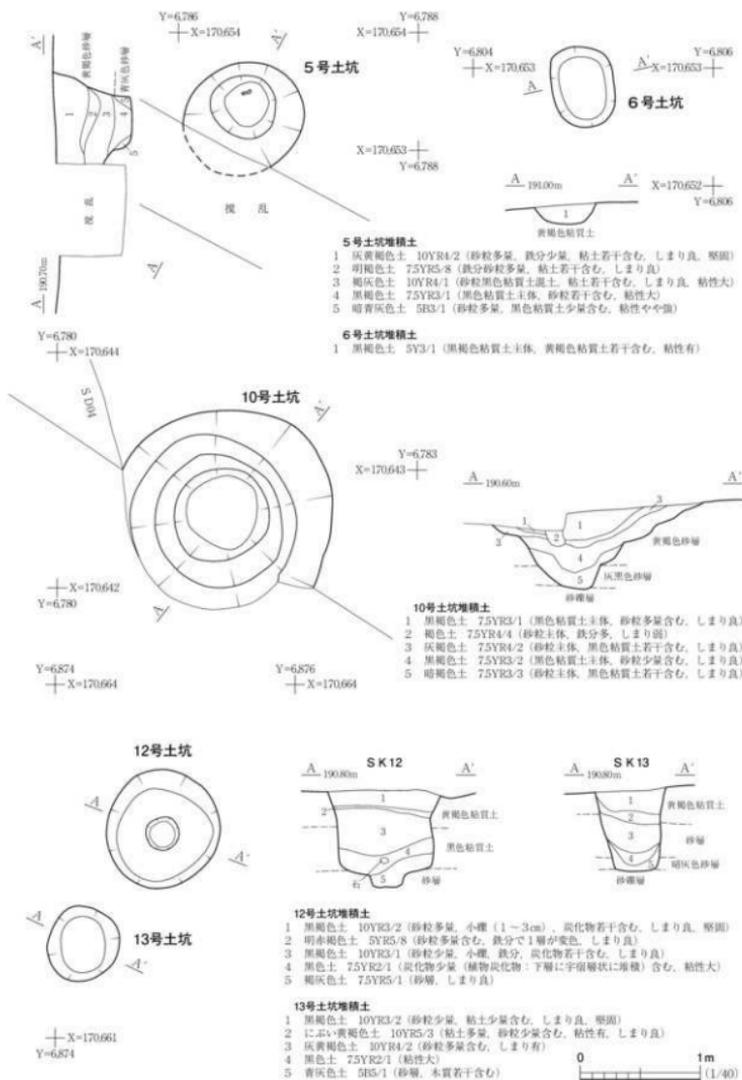


図15 5・6・10・12・13号土坑

## 9号土坑 SK09 (図16, 写真15)

I区のはほ中央、C4グリッドに位置する。検出面は2号流路跡 $\ell 1$ 上面で、北西で上方が8号土坑と重複する。前述したとおり本土坑が新しいと判断した。

検出面での平面形は直径258mのはほ円形で、本調査区最大規模の土坑である。底面は平坦で、中央が直径12m、深さ10cmほど円形に深くなっている。確認面からの深さは1mで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上方は大きく開く。堆積土は6層に分層した。 $\ell 1 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 6$ は砂粒が主体、 $\ell 2 \cdot 5$ は黒色粘質土が主体となる層で、自然堆積と考えられる。

遺物は $\ell 2$ から木製品の細片が1点出土している。上層の $\ell 1 \cdot 2$ は7・8号土坑と同質の堆積土であり、ほぼ同じ時期に埋没したものと考えられる。性格についてもほぼ同じと考える。(後藤)

## 10号土坑 SK10 (図15・22, 写真15)

I区中央西寄り、C4グリッドに位置する。検出面は2号流路跡泥濘部 $\ell 1$ 上面である。南側1/2は試掘調査のトレンチにより、検出面から20cmほど深く削られているが、4号溝跡と重複していたと思われる。南側1.5mには11号土坑がある。

検出面での平面形は直径1.9mほどの円形で、底面までの深さは72cmである。底面の平坦部は直径60cmほどの小さな円形で、壁はなだらかで段状に立ち上がる。堆積土は5層に分層した。砂粒と黒色粘質土を主体とする層が交互にレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

出土遺物は図22-8の長さ16.8cmで先端が尖る串状の木製品が1点のみである。時期は検出面と堆積土の特徴から中世と考えられるが、性格については判断材料に乏しく不明とする。(後藤)

## 11号土坑 SK11 (図16)

I区中央西寄り、C4・5グリッドの境界に位置する。検出面は2号流路跡泥濘部 $\ell 1$ であるが、試掘調査のトレンチにより周囲に比べ20cmほど深い。最も南西に位置する土坑で、4号溝跡とはトレンチで削られてしまったが重複し、試掘調査の所見から本土坑が古いと判断される。

検出面での平面形は楕円形で、規模は長径66cm、短径54cmである。底面は平坦部が小さく、検出面からの深さは31cm、円筒状で上方がやや広がる。堆積土は5層に分層した。砂粒と黒色粘質土の多少により分けた層が交互にレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。時期は検出面と堆積土の特徴から中世と考えられるが、性格については判断材料に乏しく不明とする。(後藤)

## 12号土坑 SK12 (図15, 写真15)

I区中央北、D2グリッドに位置する。検出面はLII上面である。南西に13号土坑が近接し、西から北側4mの範囲には20～23号の4基の土坑が確認されている。

検出面での平面形は直径98cmの円形で、底面までの深さは60cmである。壁はほぼ垂直に立ち上

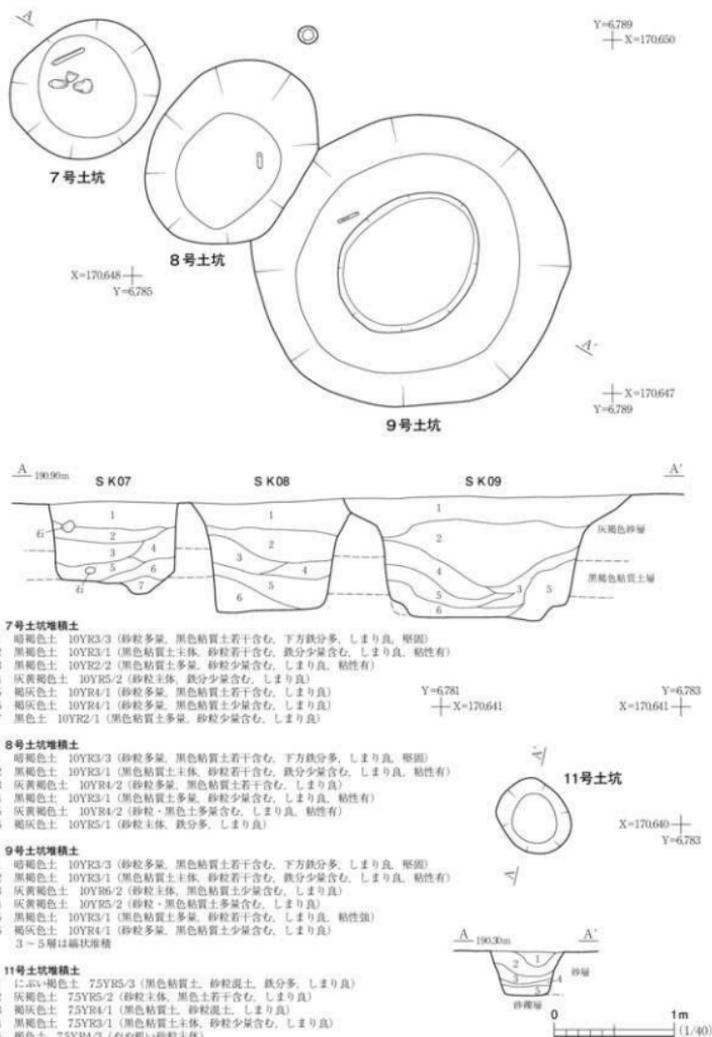


図16 7～9・11号土坑

がるが、検出面下20cm付近から若干開く。底面は平坦で、底面中央に直径30cm、深さ17cmほど円形に掘り下げている。堆積土は5層に分層した。砂層のℓ5が堆積したのち、黒色粘質土を主体とし、砂粒や炭化物の多少で分層したℓ1～4が堆積する。砂粒の混入は上層ほど多く、反対に炭化物・炭粒は下層ほど多い。ℓ4では炭化物が薄く層状に観察される。

遺物の出土はないが、時期は検出面や堆積土の特徴から中世の可能性が高い。底面中央に浅い土坑をもつ円筒状の形態は4・8号土坑などと近似し、同じ性格の土坑と考えられる。(後藤)

#### 13号土坑 SK13 (図15, 写真15・16)

I区中央北、D2グリッドに位置する。北東に12号土坑が近接し、検出面はLII上面である。北西には20～23号の4基の土坑、南側には14・15号の2基の土坑が確認されている。

検出面での平面形は、長さ64cm、短径57cmの楕円形で、底面までの深さは72cmである。堆積土は全体的によく締まっており、5層に分層した。木質を若干含む青灰色砂層のℓ5が堆積したのち、黒色粘質土が主体で黄褐色粘土と砂粒の混入の多少により分層されたℓ1～4が自然堆積している。

出土遺物がなく、時期を限定することは難しいが、堆積土の特徴から中世の可能性が高い。西側2mに位置する21号土坑は、形状や規模がほぼ同じであり、関連する土坑とも考えられる。(後藤)

#### 14号土坑 SK14 (図17, 写真16)

I区中央北寄り、D3グリッドに位置する。検出面はLII上面である。西側には2号路跡が近接しており、東側1.4mには15号土坑がある。

検出面での平面形は直径1.46mの円形である。検出面から50cmほど斜めに掘り下げた後、さらに直径73cm、深さ60cmほど円筒状に掘り下げている。壁は崩落により若干オーバーハングしている。底面はLIVの砂礫層を20cmほど掘り下げている。底面までの深さは1.14mである。堆積土は6層に分層したが、ℓ1が砂粒主体である以外は黒色粘質土が主体でよく締まっている。底面付近には大小の礫が詰まっており、ℓ1～4の上層は周囲から流れ込んだように壁際から礫が出土していることから、人為的な埋戻しの可能性が高い。

遺物は摩滅の著しい土師器の細片4点と木製品の細片3点が出土したのみである。漏斗状の形態や、底面が礫層まで達し礫が投棄された状態で出土していることなどから、素掘りの井戸跡と考えられる。時期は堆積土の特徴から、中世の可能性が高い。(後藤)

#### 15号土坑 SK15 (図17・22, 写真16)

I区中央北寄り、D3グリッドに位置する。検出面はLIIであるが、試掘調査のトレンチにより周囲に比べ10cmほど深い。西側1.4mには14号土坑が確認されている。

検出面での平面形は直径80cmの円形で、底面までの深さは1.12mである。検出面から65cmほど

掘り下げ、さらに一回り小さく直径60cm、深さ50cmの円筒状に掘り下げており、底面はLⅣの砂礫層まで達している。西側下方の壁は、LⅢに含まれる交差する流木を土坑の形状に合わせて削っており、興味深い。堆積土は4層に分層した。ほぼ水平の人為堆積と考えられ、よく締まっている。

遺物は図22-9~12の木製の串3点と12の曲物の底板破片1点を図示した。9は長さ21.5cmで両端を尖らしており、10は扁平な形状をしている。ほかに、摩滅した土師器と須恵器の細片各1点と木製品の破片が14点出土している。性格については、形態や深さなどから素掘りの井戸跡の可能性もあるが、根拠に乏しい。時期は堆積土の特徴から、中世と考えられる。(後藤)

#### 16号土坑 SK16 (図17, 写真16)

I区北東、E3グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面であるが、試掘調査のトレンチにより周囲に比べ20cmほど低い。南側には17号土坑が近接する。

検出面での平面形は、直径44cmの円形である。底面はほぼ平坦で、深さは11cmと浅い。堆積土は黒褐色粘質土を主体とし、砂粒・橙色粘土の混入の多少により3層に分層した。各層の砂粒や粘土の混入は漸移的で、東側から順次堆積しており自然堆積と考えられる。

本土坑の時期や性格については、遺物の出土がなく判断材料に乏しく明らかにしえないが、規模・形状が近似する6号土坑と同じ性格と考えられる。(後藤)

#### 17号土坑 SK17 (図17・23, 写真16)

I区北東、E3グリッドに位置する。北側に16号土坑が近接し、南東2mには6号土坑が位置する。検出面はLⅡであるが、試掘調査のトレンチにより周囲に比べ20cmほど低い。

検出面での平面形はほぼ円形で、規模は長径1.18m、短径1.03mである。検出面から70cmほど砂礫層のLⅣ上面まで掘り下げたのち、中央の砂礫層をさらに直径67cmの円筒形に50cmほど掘り下げている。検出面から底面までの深さは1.24mである。堆積土は7層に分層した。底面に20cmほど青灰色粘土 $\ell$ 7が堆積しており、その上の $\ell$ 6は炭化植物を多量含み、木製品なども混入していた。また、 $\ell$ 3も黒色粘質土が主体となる層で、下駄や砥石が出土している。人為堆積と考えられる。

出土遺物は木製品2点と砥石1点を図示した。図23-1は直径9.8cm、器高8.8cmの柄杓である。側板を二重に廻し、接ぎ目を樹皮で綴じている。柄を取り付けた対向する大小の2孔があげられている。2は長さ21.2cm、幅9.0cmの差し歯下駄の台で歯の部分で3つに割れて出土した。歯は欠損しており、後ろの眼は歯の前に穿たれており、前の眼の中には鼻緒の一部が残る。3は凝灰岩製の砥石で、被熱により赤変しひび割れが認められる。ほかに、摩滅の著しい土師器の細片4点と須恵器の細片1点が出土している。また、北西寄りの底面から拳大の礫3点と木片が出土している。

最下層の堆積土の状況から井戸跡と考えられるが、その上層は破損した下駄や炭化物などが出土しており、廃棄穴として使用された可能性が高い。時期は図23-1の放射性炭素年代測定の結果、 $600 \pm 20\text{yrBP}$ の年代値が得られており、中世(14世紀頃)と考えられる。(後藤)

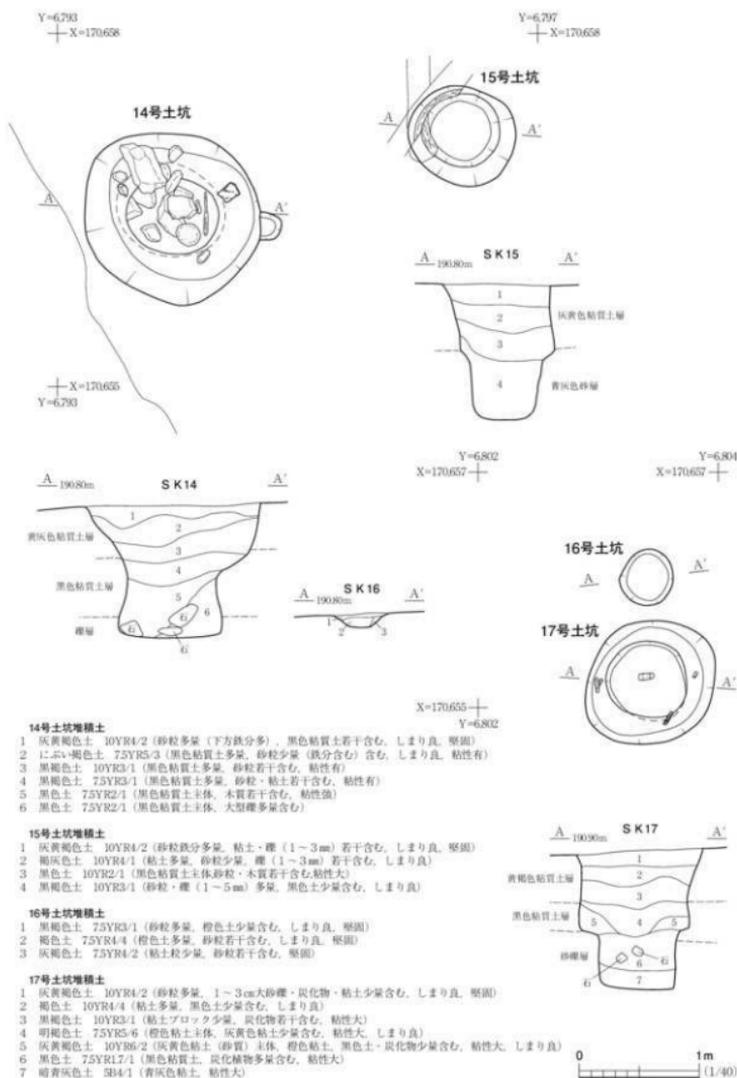


図17 14～17号土坑

18号土坑 SK18 (図18, 写真16・17)

I区のはほぼ中央、D4グリッドに位置する。検出面は2号流路跡ℓ1上面である。周囲に遺構は少なく、北西6mに9号土坑がある程度である。

検出面での平面形はほぼ円形で、規模は長径102m、短径94cmである。底面は平坦で砂礫層まで達する。検出面からの深さは84cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4層に分層したが、上層ほど砂粒が多く、下層ほど黒色粘質土が多くなる。ℓ1はℓ2とは明らかに異なる層で、土坑埋没後に掘られたものであろう。ℓ2～4はほぼ水平に堆積しており人為堆積と考えられる。

出土遺物はないが、時期は検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については判断材料に乏しく明らかにしえないが、廃棄穴や貯蔵穴などと考えられる。(後藤)

19号土坑 SK19 (図18・23, 写真17)

I区、E6グリッドに位置する。検出面は2号流路跡ℓ1上面で、I区の最も東に位置する。西側には6号溝跡が南北にはしるが、周辺には土坑はなく、最も近い18号土坑でも20m離れている。

検出面での平面形は直径1.17mの円形で、底面までの深さは77cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に分層したが、ほぼ水平に堆積しており、人為堆積と考えられる。18号土坑同様、上層ほど砂粒が多く、下層ほど黒色粘質土が多くなる。

出土遺物は、図23-4の凝灰岩の砥石と摩滅の著しい土師器の細片が3点のみである。形状や堆積土の状況から、18号土坑と近似した時期や性格の土坑と考えられる。(後藤)

20号土坑 SK20 (図18・23, 写真17)

I区D2グリッドに位置する。2号流路跡ℓ1上面で確認された土坑であるが、明瞭でないため南半を深さ50cmほど断ち割って断面を観察した後、掘り下げを行った。南東1mに21号土坑、北東1.2mに22号土坑など、東側5mの範囲には5基の土坑が確認されている。

検出面での平面形はほぼ円形で、規模は長径96cm、短径86cmである。検出面から深さ40～50cmまで窄まってから、直径60cmで、深さ70cmほど円筒状に掘り下げている。検出面から底面までの深さは1.48mである。底面は平坦で砂礫層を30cmほど抜いている。堆積土は3層に分層し、人為堆積と考えられる。ℓ2・3は黒色粘質土が主体で、ℓ3下方には礫や炭化物・木片などが含まれる。

図示した遺物は、図23-5の木製の串1点のみである。長さ22.3cmで、両端は削られ尖っている。他にℓ3から須恵器杯の小破片1点が出土している。時期は、検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については、井戸跡の可能性もあるが、根拠に乏しい。(後藤)

21号土坑 SK21 (図18・23, 写真17)

I区中央北、D2グリッドに位置する。確認面は東側がLII上面、西側が2号流路跡ℓ1である。

東側2mには12・13号土坑、北側には20・22・23号土坑が確認されている。

検出面での平面形は直径65cmの円形で、底面までの深さは59cmである。底面は長径40cm、短径30cmの楕円形で、中央には曲物の底板が置かれていた。堆積土はよく締まっており、3層に分層した。人為堆積と考えられ、 $\ell 2 \cdot 3$ は黒色粘質土が主体で、 $\ell 3$ には青灰色砂粒が含まれる。

出土遺物は、図23-6の直径12.4cm、厚さ0.8cmの曲物の底板のみである。東側2mに位置する13号土坑とは、規模や形状・堆積土が近似することから、1対の関連する土坑と考えられる。時期を限定することは難しいが、検出面と堆積土から中世の可能性が高い。(後藤)

#### 22号土坑 SK 22 (図18・23, 写真17・18)

I区中央北、D2グリッドに位置する。検出面は東側がLII上面、西側は2号流路跡 $\ell 1$ である。半径3m以内には12・13・20・21・23号の5基の土坑が確認されている。

検出時、長径1.53m、短径1.2mの楕円形の土坑として調査を進めたが、上方が広がる直径90cmほどの円筒形の土坑で、北側が半円状に掘られているものと考えられる。底面は平坦で砂礫層を40cmほど掘り込んでおり、南壁は湧水により崩落し、オーバーハングしている。確認面からの深さは1.14mである。堆積土は3層に分層したが、人為堆積と考えられる。いずれも黒色粘質土が主体で、上層から下層に向かって砂粒の含有量は少なくなる。

図示した遺物は、図23-7の曲物の側板1点のみである。木取りは柵目で、内側には縦方向に約1cm間隔で細い切り込みが入れている。ほかに、 $\ell 2 \cdot 3$ から板材などが出土している。時期は検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については、形状や規模が近似する18~20号土坑と同じものとする。(後藤)

#### 23号土坑 SK 23 (図19・23, 写真18)

I区中央北端、D2グリッドに位置する。確認面はLII上面で、D2グリッドの土坑集中地域では最も北に位置する。

検出面での平面形はやや歪んだ隅丸方形で、規模は96×92cm、確認面からの深さは80cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に分層したが、いずれも黒色粘質土が主体で、上層から下層に向かって砂粒の含有量が少なくなる。底面はLIVの砂礫層に達しているため、 $\ell 3$ の下方には砂礫が若干含まれる。ほぼ水平堆積で、人為堆積と考えられる。

出土遺物は、図23-8の曲物の底板の破片1点のみである。時期は検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については形状や規模などから周辺の土坑と同じものとする。(後藤)

#### 24号土坑 SK 24 (図19, 写真18)

24号土坑は、II区中央よりやや東側のJ7グリッドに位置している。周辺には、東側に15号溝跡が、南側に1号流路跡が、北側に12号溝跡が位置し、遺構検出面はLII上面となっている。

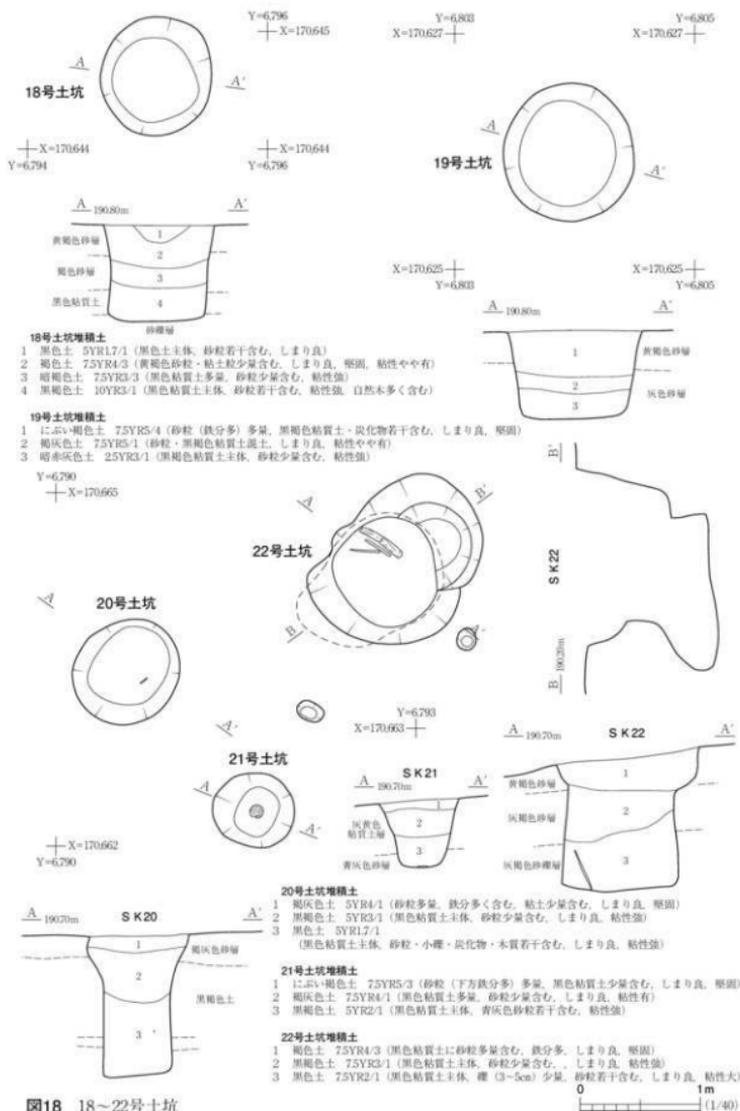


図18 18～22号土坑

土坑の平面形は、上部が径56～52cmの円形を呈しており、最深部で検出面からの深さは25cmとなっている。壁面の立ち上がりは緩やかで、暗褐色粘質土1層が堆積していた。堆積状況は、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していないが、位置関係と堆積土が平安時代の遺構と近似するところから、平安時代の土坑である可能性がある。また、性格は不明である。(藤 谷)

#### 26号土坑 SK26 (図19・23, 写真18)

Ⅲ区の北西、L6グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。9号溝跡と17号溝跡が合流する南西、5号掘立柱建物跡の南東P5・P6の東側に近接している。

検出面での平面形は、長さ1.34m、幅37～48cmの隅丸長方形で、北側の幅が若干広い。底面は平坦部の幅が狭く、検出面からの深さは23cmで断面形はV字状に近い。底面直上の $\phi 2$ からは拳大の礫5個と須恵器甕の胴部破片が出土している。堆積土は黒色粘質土が主体で、灰褐色粘土の混入量により2層に分層したが、レンズ状の自然堆積である。

遺物は土師器杯底部と須恵器甕の胴部破片各1点を図示した。図23-9は摩滅により成形等は不明であるが、内面は黒色処理と思われる。10は胴部外面に2.5cmほどの間隔で凹線がめぐる。他に $\phi 2$ から摩滅の著しい土師器12点、須恵器2点の細片が出土している。

本土坑は、5号掘立柱建物跡の南東のP5・P6の柱間とほぼ同じ長さで、東桁行の柱筋とは40cmの間隔で平行することから、5号掘立柱建物跡に関連する遺構で、雨落ち溝跡などの可能性が考えられる。10の須恵器甕の破片は9世紀代の大戸窯のものであり、時期も矛盾しない。(後 藤)

#### 27号土坑 SK27 (図19, 写真18)

Ⅲ区の中央西側、L7・8グリッドの境界に位置する。検出面はLⅡ上面である。南西1.5mに12号溝跡が北西から南東に延びる。

確認面での平面形は直径73cmの円形である。検出面からの深さは1.03mで、壁はほぼ垂直の円筒形の土坑で、底面は礫層まで達している。堆積土は4層に分層した。人為堆積と考えられ、 $\phi 2$ が灰褐色粘土のブロックを多量含むものの、黒色粘質土が主体で、最下層の $\phi 4$ には礫や有機物が含まれる。

遺物は摩滅の著しい土師器の杯(内面黒色処理)2点と甕14点の細片が出土している。時期は堆積土の特徴から古代の可能性が高く、性格については特定する根拠に乏しく明らかにしえないが、北側に位置する掘立柱建物跡と関連する土坑と考えられる。(後 藤)

#### 28号土坑 SK28 (図19, 写真18・19)

Ⅲ区の北西、M・N5グリッドの境界に位置する。検出面はLⅡ上面である。北側60cmには20号溝跡が東西に、西側2.7mには17号溝跡が南北に延びる。



図19 23・24・26~29号土坑

検出面での平面形は南北に長い楕円形で、規模は長径80cm、短径64cmである。底面の平坦部は長径50cm、短径40cmとやや小さく、検出面からの深さは40cmである。堆積土は黒色粘質土が主体で、灰褐色粘土ブロックの混入の多少により3層に分層したが、人為堆積と考えられる。

遺物は、摩滅の著しい土師器の細片が5点出土しているのみである。時期や性格については、判断する材料が乏しく、詳細は不明である。(後藤)

#### 29号土坑 SK29 (図19, 写真19)

Ⅲ区の北東、P7グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。北側には1号性格不明遺構が確認されているが、南側は20mほど遺構の分布が認められない。

検出面での平面形は楕円形で、規模は長径74cm、短径60cmである。主軸方向はN80°Wである。底面は中央から西側が若干深く、検出面からの深さは27cmである。堆積土は3層に分層した。砂粒と灰褐色粘土のブロックを多量含むℓ3が堆積したのち、黒色粘質土が主体のℓ1・2がレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺物は摩滅の著しい平安時代の土師器細片3点と須恵器杯細片1点が出土しているのみである。時期や性格については判断する材料が乏しく、詳細は不明である。(後藤)

#### 30号土坑 SK30 (図20)

Ⅲ区の北東、O6グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。北側15mに1号性格不明遺構、南東6mに29号土坑がある。

検出面での平面形は楕円形で、規模は長径88cm、短径62cmである。主軸方向はN55°Wである。底面は平坦で、検出面からの深さは9cmと浅い。堆積土は黒色粘質土が主体の単層で、砂粒の混入が均質であり、自然堆積と考えられる。

遺物の出土がなく、時期や性格を判断する材料も乏しいことから、詳細は不明である。(後藤)

#### 31号土坑 SK31 (図20, 写真19)

31号土坑は、Ⅱ区中央よりやや東側のJ7グリッドに位置している。周辺には、北側に9号掘立柱建物跡と12号溝跡が、南側に15号溝跡が隣接して位置しており、遺構検出面はLⅡ上面となっている。

土坑の平面形は、上部の径が約1.13mの円形を呈しており、最深部で検出面からの深さは30cmとなっている。壁面の立ち上がりは緩やかで、白色砂粒が微量混入する黒褐色粘質土1層が堆積していた。堆積状況は、自然堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中から須恵器細片1点と土師器細片2点が出土している。その時期は、出土遺物と堆積土から平安時代の土坑である可能性がある。また、性格については、北側の建物跡群に関連する性格であったと思われる。(藤谷)

32号土坑 SK32 (図20・23, 写真19)

32号土坑は、Ⅱ区東側のK7グリッドに位置している。遺構は、12号溝跡と重複関係にあり、それを切っている。遺構検出面は、12号溝跡の堆積土上面及び、LⅡ上面となっている。

土坑の平面形は、上部の径が長軸1.5mの楕円形を呈している。土坑内には、径約95cm、高さ約30cmの桶が埋置されていた。検出面から桶下部の掘りまでの深さは39cmとなっている。断面は鍋状を呈し、桶内部も掘形も暗褐色粘質土が堆積していた。堆積状況は、人為堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中から須恵器細片1点と土師器細片5点が出土している。その時期は、検出面での遺構境界が明瞭であること、堆積土が平安時代の遺構と明らかに異なることから、近世以降の遺構と思われる。また、性格については、桶の状況から墓穴の可能性が考えられる。(藤谷)

33号土坑 SK33 (図20, 写真19)

33号土坑は、Ⅲ区東側のO9グリッドに位置している。周辺には西側に17号溝跡が位置している。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

土坑の平面形は、上部の径が1.16mの円形を呈している。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは28cmとなっている。堆積土は3層からなり、 $\ell 1 \cdot 3$ に明瞭なブロック土が混入するところから人為堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中からロクロ土師器の細片3点と須恵器細片1点が出土している。その時期は、出土遺物から平安時代9世紀の遺構であると考えられるが、建物跡群とも離れた位置にありその性格は不明である。(藤谷)

34号土坑 SK34 (図20, 写真19)

34号土坑は、Ⅲ区南東側のM10グリッドに位置し、南側には23号溝跡が隣接している。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

土坑の平面形は、長軸76cmの隅丸長方形を呈している。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは12cmとなっている。堆積土は1層からなり、建物跡柱穴の堆積土に近似するブロック土が混入する黒褐色粘質土となっている。堆積状況は人為堆積と考えられる。

遺物は出土していないが、堆積土が建物跡柱穴の堆積土に近似するところから、その時期は平安時代9世紀と考えられる。その性格は不明である。(藤谷)

35号土坑 SK35 (図21, 写真19)

35号土坑は、Ⅱ区東側のK8グリッドに位置し、南側には1号流路跡がある。遺構検出面はLⅡ上面となっている。検出時の状況では、建物群と近似した堆積土であり、周辺に同様のピットがあれば建物跡となる可能性もあったが、周辺にピットはなく単独の土坑となった。

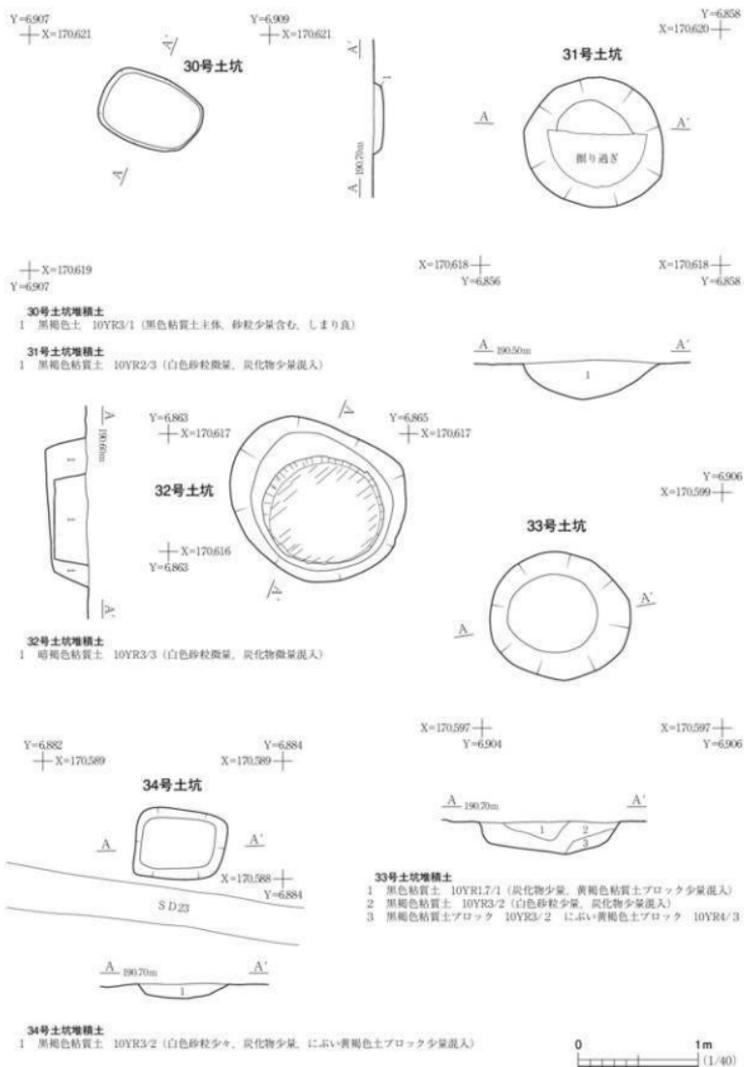


図20 30～34号土坑

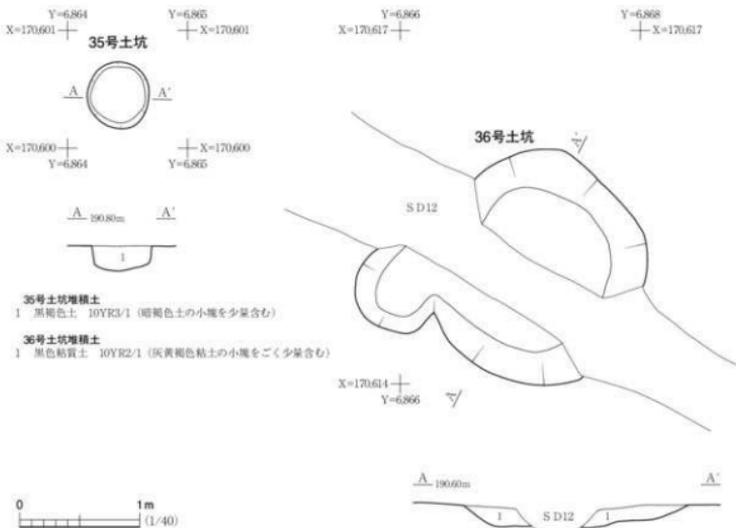


図21 35・36号土坑

土坑の平面形は長軸56cmの楕円形を呈している。壁面の立ち上がりは急で、断面は鍋底状を呈している。検出面からの深さは22cmとなっている。堆積土は黒褐色土1層からなり、堆積状況は人為堆積と考えられる。

遺物は、土師器甕の細片が1点出土しているのみである。その時期は、遺物より平安時代9世紀と考えられるが、その性格は不明である。(藤谷)

### 36号土坑 S K 36 (図21, 写真19)

36号土坑は、Ⅱ区東側のK7グリッドに位置し、12号溝跡と重複関係にあり、中央部分がそれに切られている。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

土坑の平面形は径長軸1.68mの楕円形を呈している。東側には同時に作られたとみられる小穴状の掘り込みがある。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは16cmとなっている。底面はほぼ平坦で12号溝跡の底面よりも5cm程浅い。堆積土は黒色粘質土1層からなり、堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は、土師器杯の細片が1点出土しているのみである。その時期は、12号溝跡の構築年代が8世紀後半～末まで遡る可能性があり、それに切られる本土坑はそれより古い年代のものと思われる。形態等から、その性格を推定することはできなかった。(藤谷)

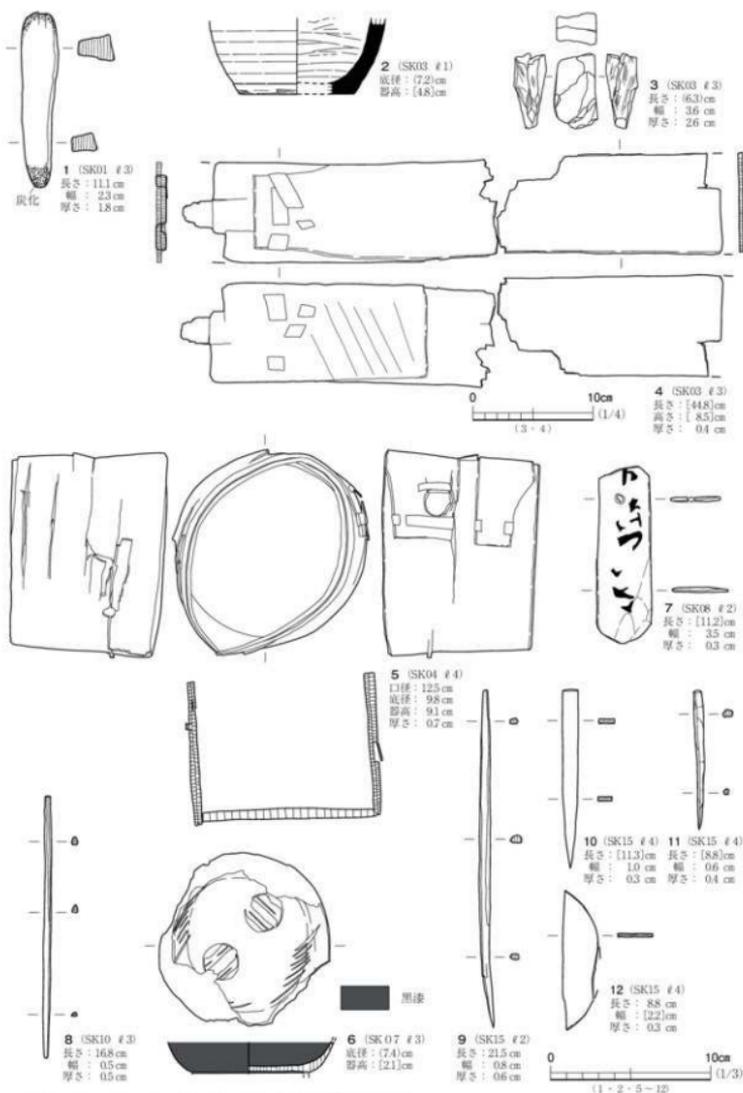


図22 1・3・4・7・8・10・15号土坑出土遺物

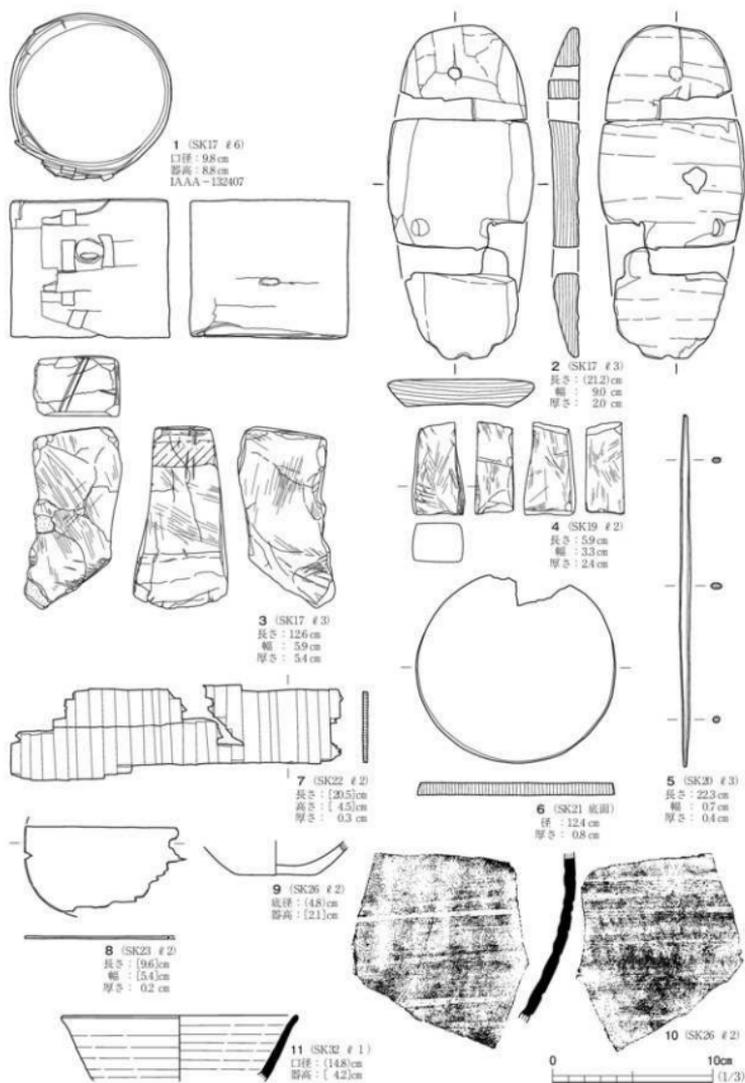
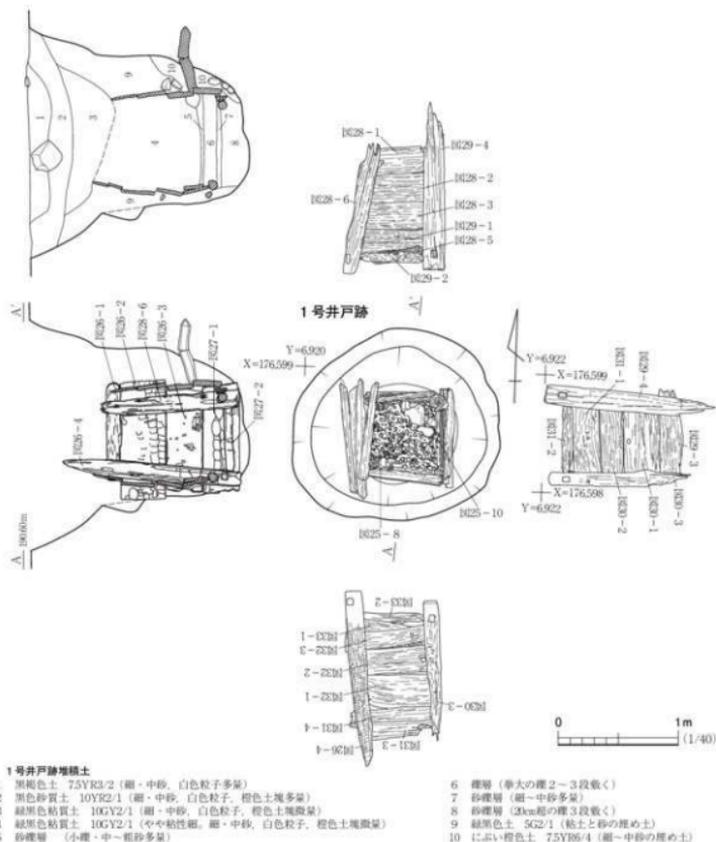


図23 17・19・20～23・26・32号土坑出土遺物

## 第4節 井戸跡

今回調査での本遺跡の井戸跡は1基のみで、Ⅲ区東端近くに位置する。時代・時期は平安時代(9世紀)である。現代の水田耕作土及びその床土である表土を除去し、直下の灰白色土LⅡ上面で検出した。井戸の上部構造に関わる小穴・排水溝等の遺構は検出できず、本遺構北西部で検出した掘立柱建物跡群の柱穴の深さが浅いことや後述する井戸側の残存状況も合わせて判断すると、当時の



## 1号井戸跡埋積土

- 1 黒褐色土 75YR3/2 (細・中砂, 白色粒子多量)
- 2 黒色砂質土 10YR2/1 (細・中砂, 白色粒子, 棕色土塊多量)
- 3 緑褐色粘質土 10GY2/1 (細・中砂, 白色粒子, 棕色土塊少量)
- 4 緑褐色粘質土 10GY2/1 (やや粘性細, 細・中砂, 白色粒子, 棕色土塊少量)
- 5 砂埋層 (小粒・中・粗砂多量)
- 6 埋層 (単大の埋2-3段致く)
- 7 砂埋層 (細・中砂多量)
- 8 砂埋層 (20cm超の埋3段致く)
- 9 緑褐色土 5G2/1 (粘土と砂の埋め土)
- 10 濃い灰色土 7.5YR5/4 (細・中砂の埋め土)

図24 1号井戸跡

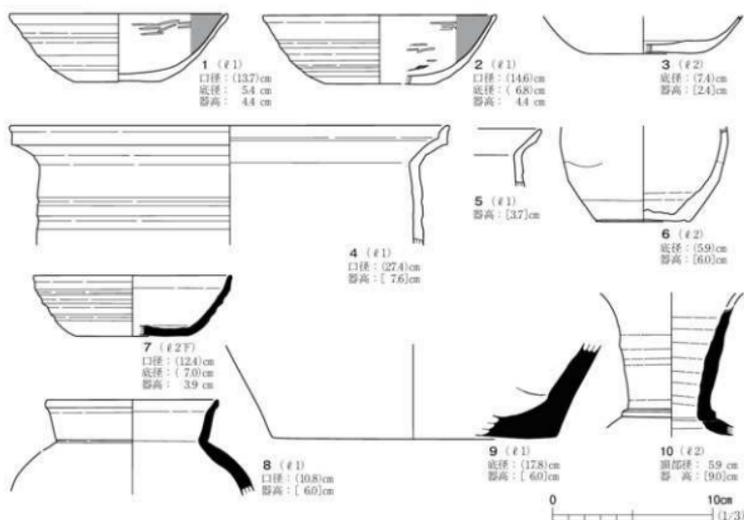


図25 1号井戸跡出土遺物(1)土器

生活面からは、かなり削平されていることがわかる。

本遺構と掘立柱建物跡群については、それらの全部または一部との関連が推定できるが、詳細は後述する。

#### 1号井戸跡 SE 01 (図24～33, 写真20・55～57)

Q9グリッドに位置し、開口部の径は1.63～1.7mで、平面形はほぼ円形である。検出の深さは1.85mで、掘形断面は概ね「U」字形で、上半は大きく広がる2段掘り構造になっているが、後述のとおり、上半部は自然堆積土である。

井戸側(註1 第3章参照以下同)は方形で、大きく分けて3種類の部材からなる。下端近くにはぞ穴を各2か所穿った九太材図26-4・図28-6・図30-3や割り材図29-4を四隅に柱状に立て(以下、「隅柱」(註2)という)、それを連結する割り材で作った横棧部材(以下、「棧木」(註3)という)をほぞ穴に差し込んでいる。それで組んだ枠の外側に幅約70～100cm、高さ約20～40cmの板材(以下、「側板」(註4)という)を横にして積み上げ、井戸側を構築している。

井戸側の法量は、西面が幅0.82m、高さ0.79m、北面が幅0.49m、高さ0.77m、東面が幅0.55m、高さ0.87m、南面が幅0.49m、高さ0.93mである。(幅は井戸底レベルでの隅柱内法の計測値、高さは側板上端から井戸底5層上面までの残存値である。)

調査方法は、当初検出面から半截して掘り下げていったが、井戸側が狭く、作業が困難なことで、

雨や湧水で壁面崩落の危険性も想定できることから、作業の安全と調査を円滑に進めるため、井戸側西面の西側を東西・南北とも約3.5mの広さで掘り下げ、断ち割った。

調査の進行に伴い、掘削深度が深くなるようであれば、さらに掘り下げ範囲を広げる予定であった。しかし、結果的に深さ約1.85mの掘削で井戸底面が検出でき、深さに対してほぼ2倍の広さの掘り下げとなり、壁面が崩落しても作業者が埋没する危険性がほとんどない状態で調査を進めることができた。

さらに、当初想定した湧水もほとんどなく、雨水の浸透によって部分的な崩落のみであった。その部分も土のうの積み上げを行って補強したことで、以後の崩落も起こらなかった。

井戸側西面の側板を外側から検出するとともに、北・南面の中心を結ぶ線で掘形断面も検出した。西面側板を写真撮影・実測後、各板を取り上げ、井戸側内の堆積土を掘削・精査し、北・東・南の各面は、立面展開図作成の必要上、内面側からの写真撮影・実測を順次行った。西面の立面図は、図上での反転実測とした。

堆積土は上端と井戸側内に崩落堆積したものは図24のℓ1～4のみで、黒色系の粘質土や砂質土で占められている。

井壁(註5)と井戸側間の土、ℓ9・10は、構築時の埋め土であり、ℓ9は緑がかった黒色粘土に砂を混ぜたもので、硬く締まっている。

ℓ10は砂層である。地山の砂層と性質はあまり変わらないが、わずかに酸化していることと、地山との境界にℓ9の粒子が散見できることから、埋め土とした。ℓ10は北側枠板と井壁の間の一部で認めることができるのみで、他の部分からは検出できなかった。さらに本土層中とℓ9との境界付近に礫が多く入っている。

この部分の埋め土だけを砂にしたのは、地山に打ち込んだ杭を埋めるために、撒きやすい砂を利用したものと推定している。これは現在でも行っている、上下水管等の埋管時の巻き土として砂または砂質土を使用することと共通している。

井戸底は水溜めのような深掘り部はなく、井戸側の内側に構築層がある。

全体で約40cmの厚さがあり、4層に分かれている。まず最下層(ℓ8・層厚約23cm)に拳～径20cm大の、比較的大きな円礫を概ね3段に積み重ね、その間隙が黒色粘土で埋まっている。この粘土が、構築時に意図的に埋めたものか、ℓ9の埋め土が湧水などで少しずつ溶出・流入して円礫の間に浸透したものであるかは、調査時に判別することはできなかった。

ℓ8の上段(ℓ7・層厚3cm)には薄く砂を敷き、さらにその上に拳大の円礫を2～3段重ねている(ℓ6・層厚約11cm)が、間隙には中から粗砂が入っている。これはℓ5の砂が入ったものである。

最上層(ℓ5・層厚3cm)は、小礫と砂の層である。この上面が使用当時の井戸底であるが、直上から後述の長頸瓶などが出土したものの、構築時や廃棄時の祭祀を示すものはなかった。

以上の構築4層が水のろ過装置として機能していたことが想定できる。

なお、ℓ8の礫間を埋める粘土であるが、濁りの原因になりやすい粘土を間詰めとして利用する

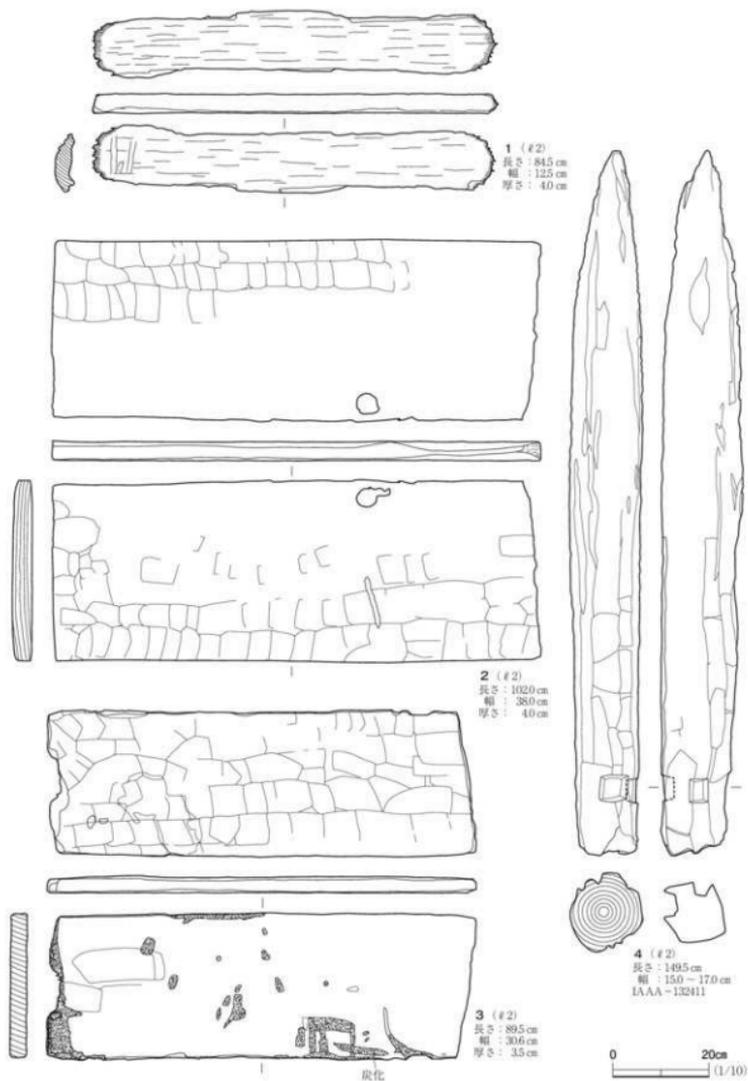


図26 1号井戸跡出土遺物(2)井戸部材

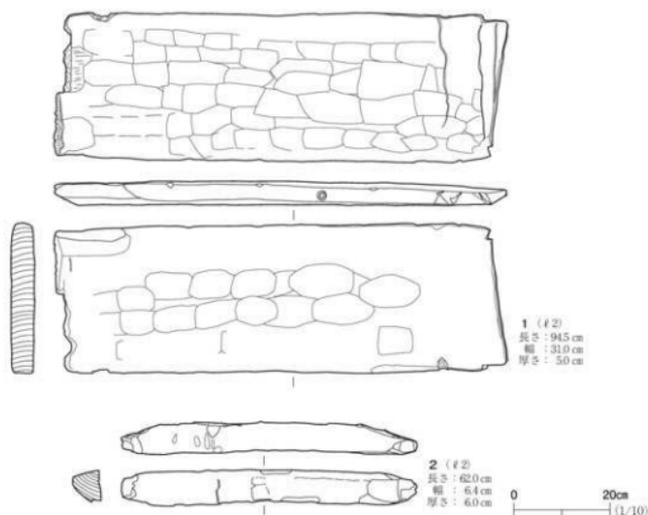


図27 1号井戸跡出土遺物(3) 井戸部材

ことは考えにくく、使用するならば砂のほうが適している。ℓ7が砂層であることをから、ℓ8も本来間詰めとして砂を使っていたが、現時点では、溶出・流入したℓ9埋め土が砂と置き換わった可能性が強いと推定している。

さらに、調査中の観察において、ℓ4はℓ5の上に直接堆積しており、廃井までこまめに井戸浚いが行なわれていたことがわかる。

次に井戸側を構成する木製部材について記す。今回の調査では、桟木は隅柱の下端で確認できたのみであるが、腐食によって消滅した上端でも連結して、立方体の枠を形作っていたことが想定できる。

これらの立方体枠の外側に長方形の側板を横にして、残存数で4～6枚積み重ね、井壁との間を既述の粘土と砂を混ぜた土で埋めている。加えて、北面下半には、側板の崩落を防ぐためか、井壁に杭を水平に打ち込み、一方で側板を支えている状況が確認できたが、他の面では検出できなかった。この杭については、既述のとおり、巻き土として砂を利用し、礫も多く入れて補強していることが分かった。さらに、この部分については、井戸側の内面ではあるが、桟木と側板の間に薄い板材を間詰めとして使用しており、他では見られないことから、杭を打ち込んで側板を支える何らかの必要性があったことは間違いなく、その理由として以下のことが想定できる。

- 構築過程での合理的理由がある。
- 湧水等で緊急的に補強の必要があった。

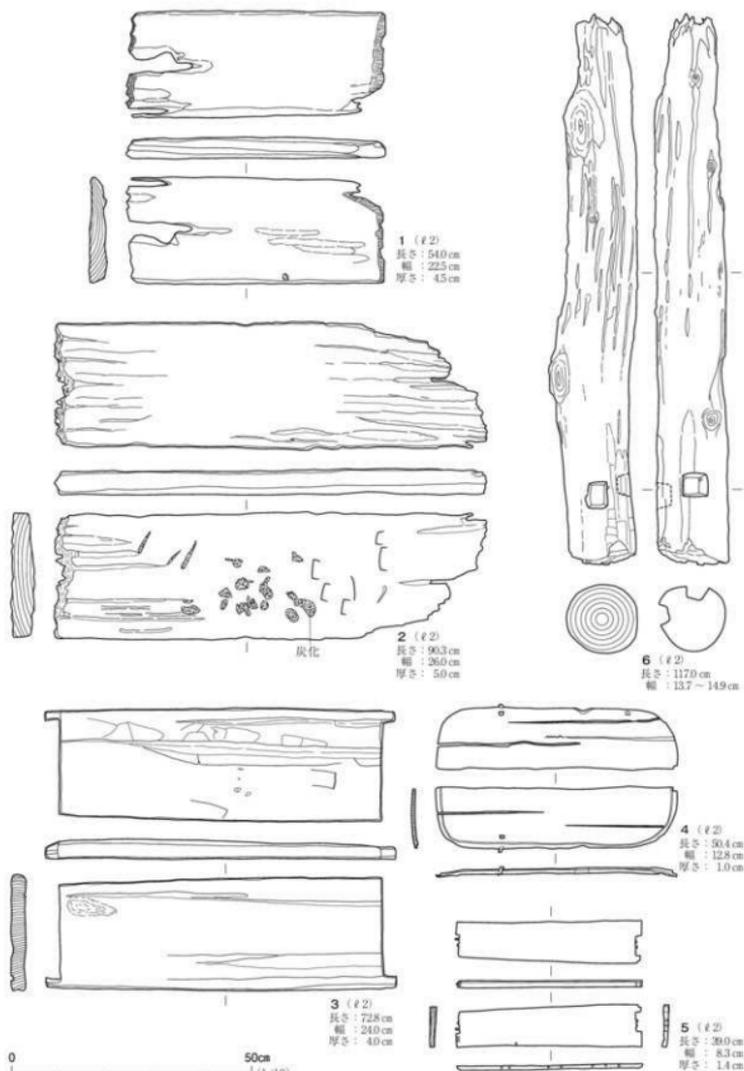


図28 1号井戸跡出土遺物(4)井戸部材

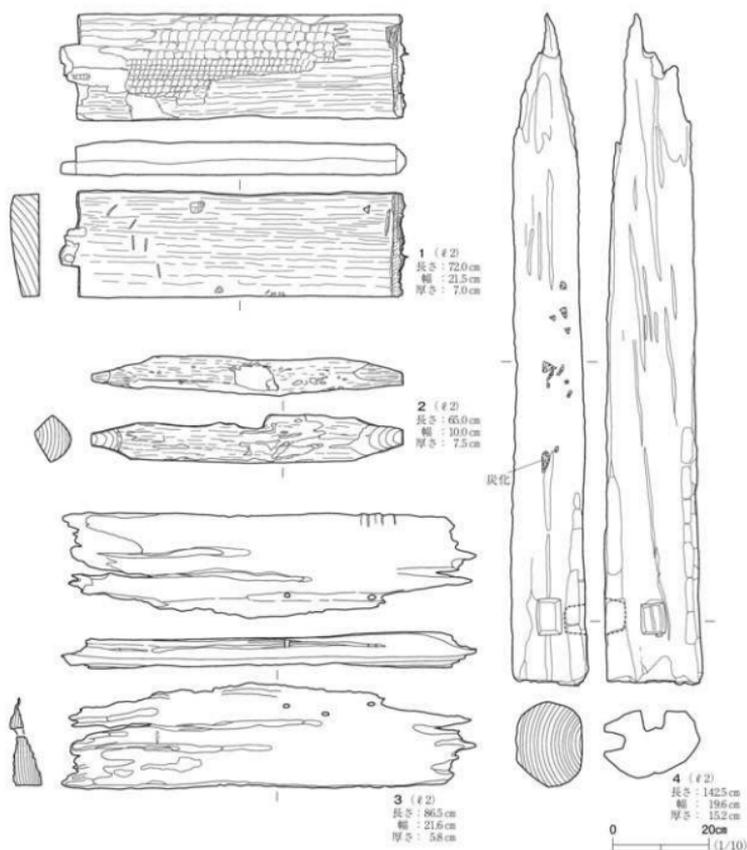


図29 1号井戸跡出土遺物(5)井戸部材

などで、これらについては、さらなる検討の必要がある。

遺物では土師器6点図25-1~6、須恵器4点図25-7~10、井戸側部材28点図26~33を掲載する。図25-6と10は井戸底からの出土で、それ以外は堆積土層1~3中からの出土である。

1・2は杯で、整形・調整は2点とも同様である。底部は回転糸切り離し、外面体部下端はヘラ削り、上半は回転ナアである。内面はヘラミガキで黒色処理をしている。3も杯であるが、磨減が著しいため、整形・調整とも観察できない。

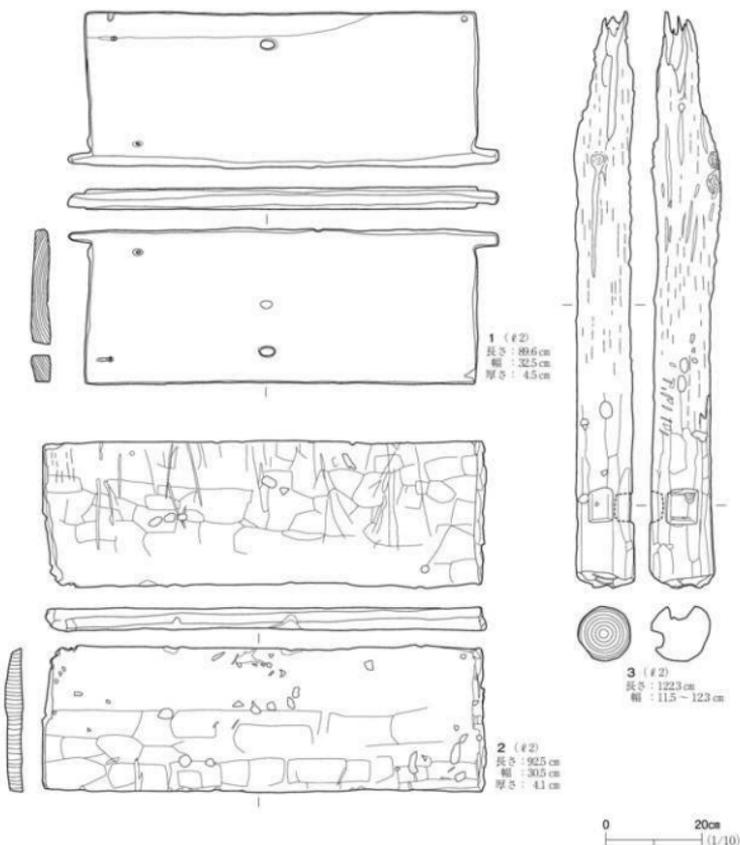


図30 1号井戸跡出土遺物(6)井戸部材

4・5は甕の口縁から体部上端にかけての破片である。4は頸部から口縁部下半にかけて大きく外反し、上半は直立する複合口縁状の甕である。成形は頸部直上で口縁部を貼り付けており、整形は内外面とも回転ナデを施す。5は4のように口縁部上半が直立せず、外上方に短く延びる。整形は4と同じである。

6は小壺または甕の体部下半から底部にかけての破片である。外面体部下端はヘラ削り、それ以外は内外面とも回転ナデである。

7は杯で、底部外面はヘラ削り後、部分的なユビナデを施しているが、他は回転ナデである。

8は広口壺の口縁部から体部上端にかけての破片である。口縁部端はツمامミ上げているが、整形は内外面とも回転ナデである。

9は甕底部片である。体部外面は回転ヘラ削り、内面はユビナデを施す。

10は長頸瓶の頸部から体部上端にかけての破片である。頸部内外面と体部外面には灰軸を施しており、頸屈部には、大戸窓跡に特徴的な突帯を廻らせる。

本遺構で使用している井戸側部材は、ほとんどが建物や容器などに使われていたものの転用部材である。以下、個々の特徴について概説する。

まず隅柱は、樹種の特定ができていないものもあるが、クリが多い。残存長は117～149.5cm、基底部分のほぞ穴付近の太さは、大きいもので16.5～19.7cm、小さいもので11.3～12.4cmを計り、周辺は手斧等で面取り加工を施している。ほぞ穴は鑿で穿っており、開口部の長さは4～7.7cm、幅は4.3～6.4cm、奥行きは2.5～4.4cmである。上端は腐食によって芯だけが残って尖ったり、逆に芯がなくなって空洞になったりしているが、何れも元々は柱や梁材といっ

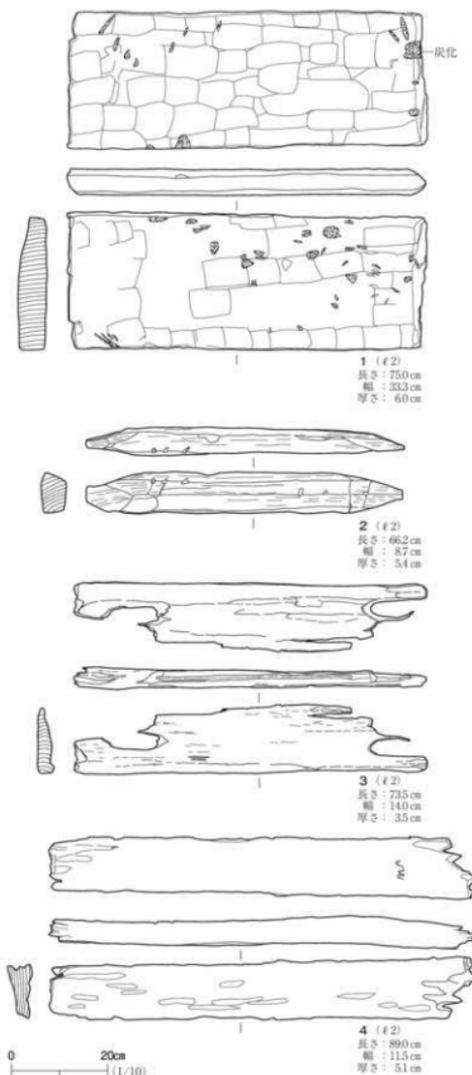


図31 1号井戸跡出土遺物(7)井戸部材

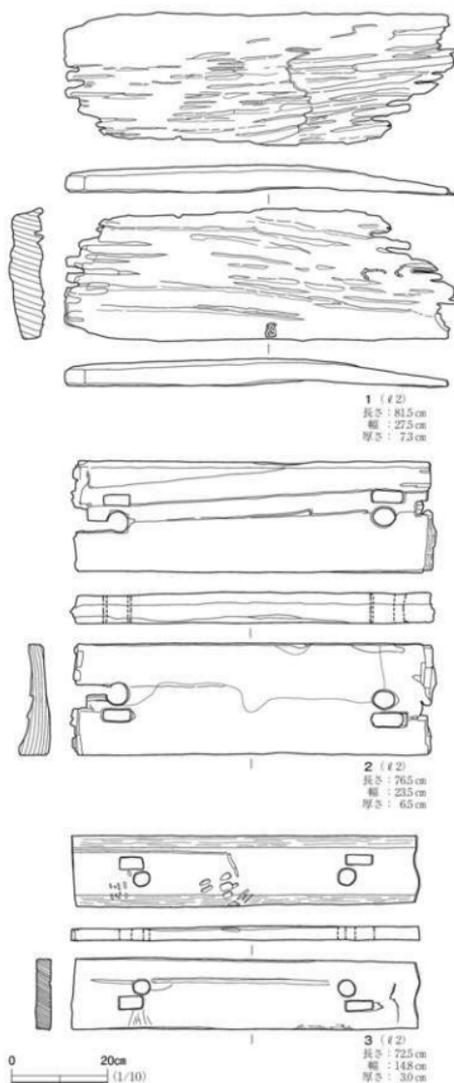


図32 1号井戸跡出土遺物(8)井戸部材

た建物の建築部材からの転用と推定できる。

栈木は4点図27-2・図29-2・図31-2・図33-2とも丸太を4分割したような割り材を利用しており、樹種はクリが多い。両端は隅柱のホゾ穴に挿入しやすいよう、杭先状に尖らせている。長さは62～662cm、幅6.4～10cm、厚さ5.4～8cmである。

側板は、長さが39～102cm、幅8.3～38cm、厚さ1～7.3cmを計る。樹種は未同定のものもあるが、クリを中心にスギ・ヒノキ・コナラ等がある。

このうち、図28-4・5は長方形曲物の底板および箱の側板の転用で、北面側板と栈木図29-1・2の間詰めとして使用しており、他の側板よりも小さく、薄い。

その他、図33-1の側板は、南面側板と栈木図32-3・図33-2の隙間を外側から覆うように配置しており、大きさは他の側板とあまり変わらない。しかし、非常に薄くこれも上記2点と同じように、隙間を埋める補強材と捉えたい。表面の仕上げも丁寧で、建築部材以外のものを想定する必要がある。

他の側板は、厚さが3cm以上あり、大半は4～6cmの範囲におさまる。他の特徴として、各面とも最上段のものは、幅が狭く、非常に腐食が進んでいることがわかる。これより下

は板幅も広く、残存状態がきわめてよい。加えて、本報告で図示はしなかったが、井戸側内に落ち込んでいた、側板の可能性がある板材はいずれも幅が狭く、厚みのないものである。これらのことから、井戸側下半は大きく厚みのある板材で上からの重圧を支え、上半は重量の軽い板材で下方への圧力を軽減していたと推定できる。

側板の中には、両端に突起状軸を持つ厚板図28-3・図30-1やその軸受枠板図31-3、図32-2・3、小口に柄組みの突起を持つものといった、明瞭に転用材とわかるもののほか、加工痕として手斧痕を残す板図26-2・3、図27-1、図31-1も多く含まれ、厚みのある大きな板は、壁板などの建築部材であった可能性が高い。

このように、側板はほとんどが転用材であるが、転用にあって長さを調整するために、突付とよばれる、繊維直交方向に鑿で切断したのではないかと推定できる小口を持つものがある図26-2・図27-1・図29-1・図30-2・図31-1。

それ以外に、表面が大きく焼け焦げているもの図29-1や部分的に火を受けているもの図26-3・図31-1のほか、転用前に受けた生活痕または製材中の手鉤による傷跡図28-2・図30-2等を持つものなどがある。

(作 田)

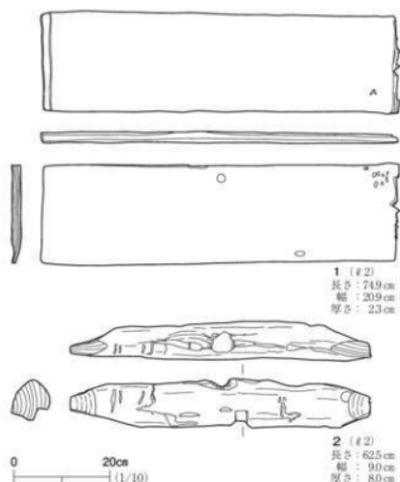


図33 1号井戸跡出土遺物(9)井戸部材

## 第5節 周溝状遺構

今回の調査では、調査区内で溝跡が25条検出されているが、他に周溝状遺構が1基検出されている。

### 1号周溝状遺構 (図34, 写真25)

1号周溝状遺構は、Ⅱ区北西のF・G3グリッドで検出された。北側が調査区北壁にかかっており調査区外に延びるが、検出時の形態が環状の一部を呈していた。そこで、今回は、溝ではなく周溝状遺構として報告した。周辺には南側に13号溝跡、その更に南側に12号溝跡が位置している。遺構周辺は、平坦でLⅡが明瞭に露呈している地区となっており、1号周溝状遺構はそのLⅡ上面で検出された。調査区外壁には、調査の作業工程上、排水溝をめぐらしており、本遺構はその断面にもかかっていた。

遺構の全長は、西側排水溝端部から東側排水溝端部までで5.8mとなっている。平面形は、北西側が急な形で、南東側が緩やかな形で曲がる形状を呈している。北西部と中央より東側で広がっており、その幅は40cmとなっている。また、東端が狭くなっており、その幅は25cmとなっている。溝跡の断面形は、U字形を呈しており、検出面からの深さは10~20cmとなっている。溝跡内の堆積土は黒色粘質土1層で、堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中から須恵器の細片が出土している。図示した資料は甕の体部で、外面にタタキ痕が残っている。

本土坑の時期は、出土遺物と堆積土より建物跡群と同じ平安時代9世紀であると推定されるが、その性格については不明である。(藤谷)

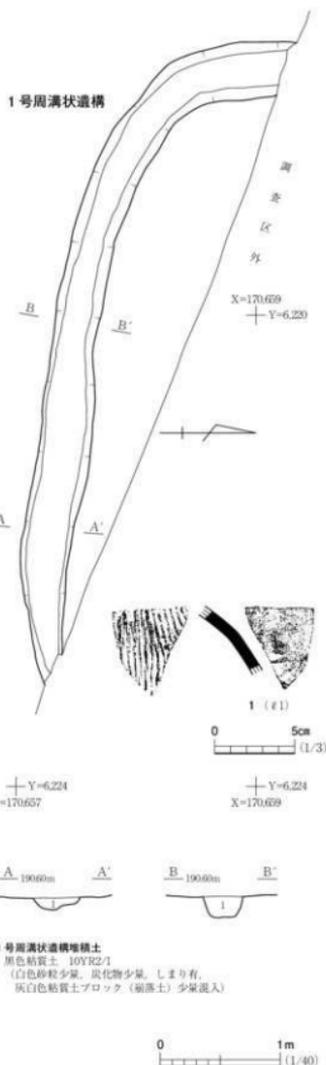


図34 1号周溝状遺構, 出土遺物

## 第6節 溝 跡

今回の調査では、合計25条の溝跡が検出されている。このうち、古代のものと思われるのが、10・12～14号溝跡で、古代から中世のものと思われるのが6号溝跡である。他については、近世以降のものであると思われる。

### 1号溝跡 S D 01 (図35～37, 写真21・54)

I区の北西隅、A1・B1グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。南側で2号土坑と重複しており、本溝跡のほうが新しい。主軸方向はN15°Eで、南側流路の3号流路跡とはほぼ同じ方向に流れている。

検出された溝跡の長さは4.6mで、東西とも調査区外に延びるが、東端で北へ曲がるものと思われる。幅は1.2m前後、検出面からの深さは33cmで、壁はなだらかに立ち上がる。底面は中央が平坦で標高差はほとんどない。底面南寄りには1.5mの間隔で2本の杭が打たれている。堆積土は2層に分層したが、レンズ状の自然堆積である。

遺物は、図37-1の櫛1点を図示した。他に須恵器細片なども出土しているが、堆積土の特徴や $\ell$ 2から染付の碗が出土していることから、近世以降の溝跡であると考えられる。(佐藤)

### 2号溝跡 S D 02 (図35～37, 写真21)

I区西側の中央北、B1～4グリッドに位置する。検出面は1・3号流路跡及び2号流路跡氾濫部の最終堆積土 $\ell$ 1上面である。東側には近接して3・4号溝跡が南北に延びる。

検出された溝跡の長さは32.1mである。北端は3号流路跡堆積土の中央付近で西に折れて消失する。南端については1号流路堆積土部分の表土除去の際に削ってしまったが、西側の調査区境に溝跡の断面が確認されており、わずかにカーブしながら調査区外へ延びていく。幅は北側では2mほどあるが、南側は1.1mと狭くなる。底面は中央が平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。検出面からの深さは33cmで、底面のレベルは南側がわずかに低い。堆積土は基本的に上層の砂層と下層の黒褐色土の2層で、自然堆積と考えられる。

遺物は図37-2～8の6点を図示した。2は土師器で古墳時代中期の高杯脚部、3～5は須恵器で、3は瓶の高台底部、4・5は甕の胴部破片で、4は外面タタキとカキメ、内面カキメ、5は外面タタキ、内面同心円文の当具痕が残る。6は赤褐色の陶器の櫛鉢破片である。7・8は木製品で、7は楕円形の頭部を作り出し、先端をやや尖らせた棒状のもの、8は両端の上部を削って丸みを作り出し、下部に四角の孔をあけた薄い板材である。このほか土師器や須恵器の細片も少量出土しているが、検出面から平安時代の流路が完全に埋没した後の溝であること、破片ではあるが6などの近世陶器が出土していることから、近世以降の溝跡と考えられる。(佐藤)

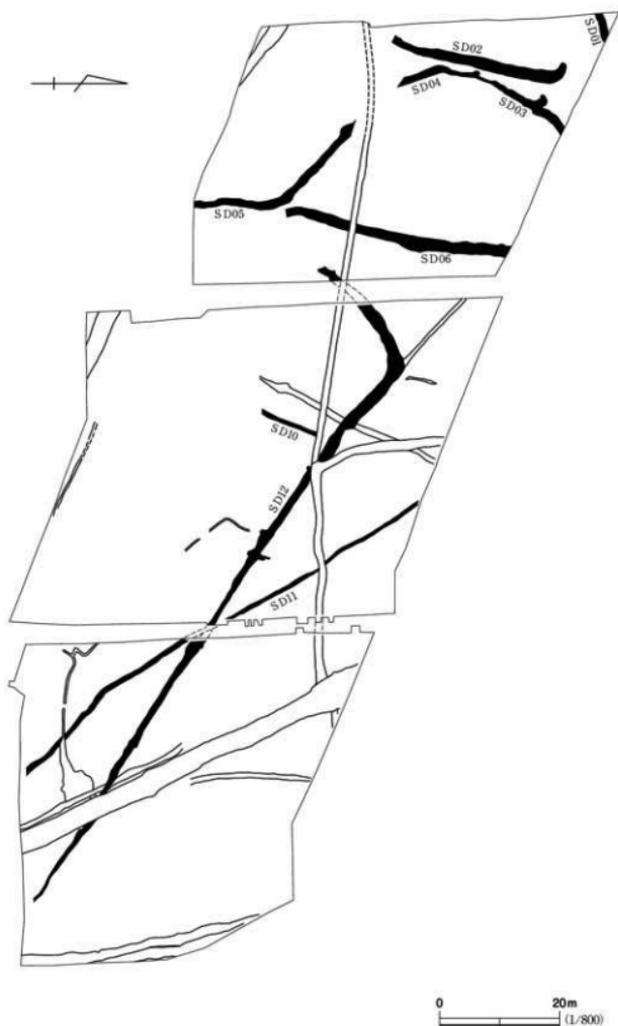


図35 溝跡位置図(1) 1~6・10~12号溝跡

## 3～5号溝跡 S D 03～05 (図36・37, 写真21・22・58)

3～5号溝跡については、調査当初、試掘調査のトレンチで切れていたことから、別々の溝跡として扱ったが、調査の結果、堆積土の特徴や出土した遺物などから、調査区内を南から北にS字状に流れる同一溝跡で、調査区内総延長70mであることが明らかとなった。

3号溝跡とした部分は、I区北西、C1～3・B3グリッドに位置する。検出面は2号流路跡 $\ell$ 1上面である。北側は調査区境から試掘調査で切れている南側B3グリッドの部分までで、長さは14.8mである。幅は70cmで、C2グリッドの中央付近で2mほど北西に延びる。検出面からの深さは北側の残りの良いところで33cmである。底面は中央が平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。

溝の底面の標高差は概ね10cmほど南側が高く、南から北へ流れていたと考えられる。

4号溝跡とした部分は、I区の中央西側、B3・4、C4グリッドに位置する。検出面は2号流路跡氾濫部の最終堆積土 $\ell$ 1上面である。北側は試掘調査のトレンチで上面が削られており、3号溝跡の南端まで2.5mほど溝跡は消えていること、B3グリッド中央で先端が若干北西に折れていることから、当初別の溝跡として扱った。南側は試掘調査のトレンチにより大きく削られているが、ほぼ中央で、南から南南東にやや方向を変えている。検出された長さは12.5m、幅は65cmで、検出面からの深さは23cmである。底面は中央が平坦で、壁はなだらかに立ち上がり、断面は扁平な逆台形である。溝底面の標高差はほとんど認められない。

5号溝跡とした部分は、I区の中央南側、C5、D5～7、E6・7グリッドに位置する。検出面は1号流路跡及び2号流路跡氾濫部の最終堆積土 $\ell$ 1上面である。北端は試掘調査のトレンチで切られており、4号溝跡とした南端からは11mほど欠失している。1号流路跡の右岸と平行して、2mほどの間隔で南東(N50°W)にはしり、D・E6グリッドの中央付近で、南に方向を変え、調査区外まで延びる。幅は100cm前後、検出面からの深さは33cmである。溝底面の標高は、南東方向には北側はほぼ同じ高さであるが、南北に方向を変える南側では、14cmほど南側が高く、南から北に向かって流れがあったものと考えられる。

3～5号溝跡の堆積土については、基本的には上層の砂層と下層の黒褐色粘質土の2層で、自然堆積と考えられる。4号溝跡とした部分では、最下層に薄い砂の堆積層がみられる。

出土遺物は、3号溝跡は銭貨2点、4号溝跡は陶器の破片と砥石の2点、5号溝跡は全面炭化物の付着した円鏢の半欠品と煙管の雁首の2点を図示した。図37-9は北宋銭の「政和通寶」、10は「寛永通寶」の文銭(新寛永)である。11は外面がにぶい橙色の堯の底部、12は凝灰岩製の砥石で表面の剥落が著しい。ほかに、3号溝跡からは土師器2点・須恵器6点、播鉢などの陶磁器11点の細片、4号溝跡からは漆器の椀の細片、5号溝跡からは土師器・須恵器の細片14点、播鉢などの陶磁器破片9点、木製品の細片6点が出土している。

本溝跡については、検出面が平安時代の1・2号流路跡が完全に埋没した後の堆積土を掘り込んでいること、出土遺物に近世陶器が一定量含まれることから近世以降の溝跡と考えられる。(佐藤)

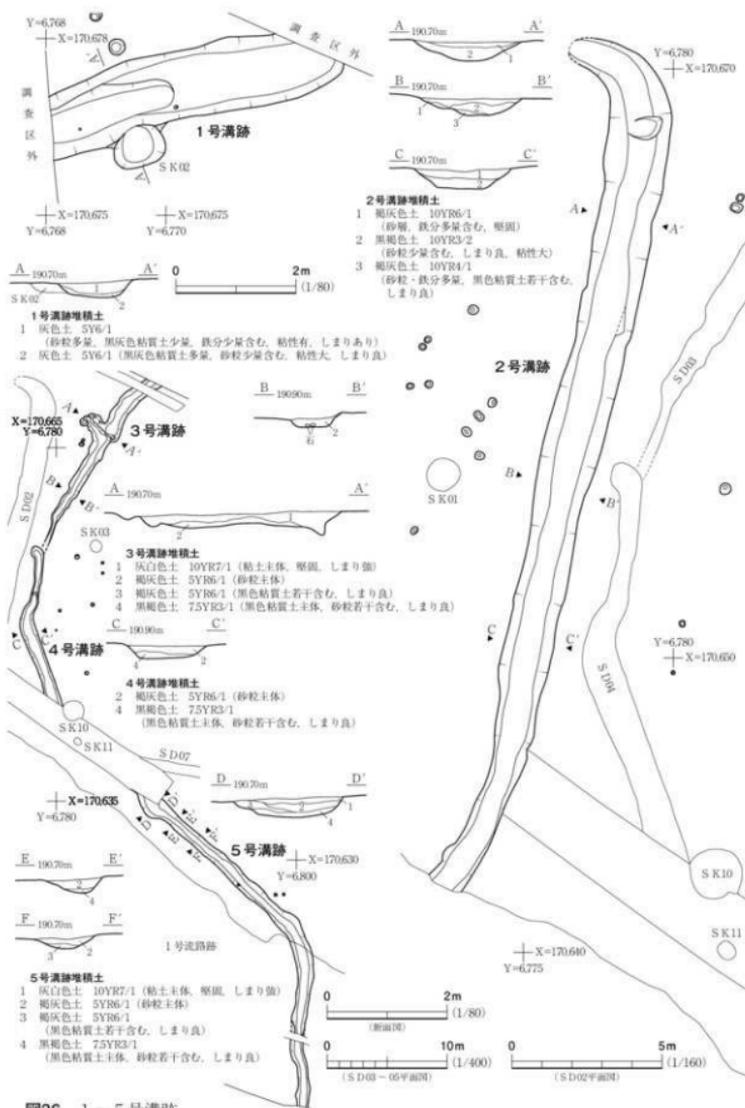


図36 1～5号溝跡

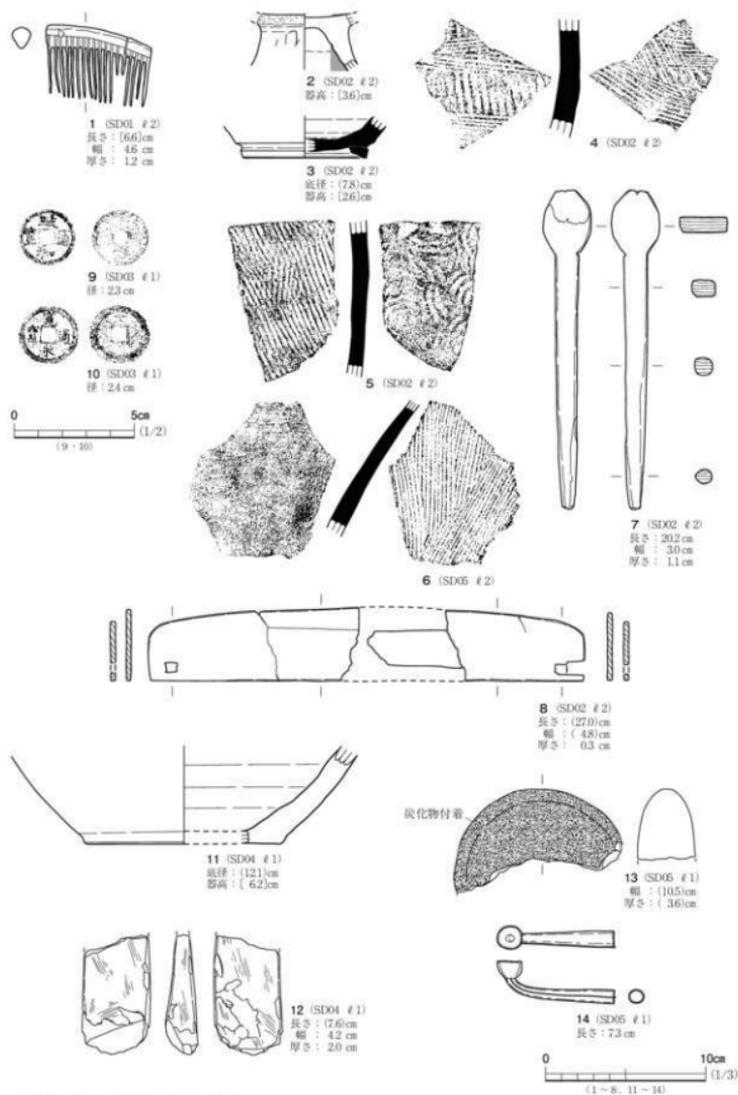


図37 1～5号溝跡出土遺物

## 6号溝跡 SD06 (図38・39, 写真22・23・47・52)

I区の東側, E2~6グリッドに位置する。検出面は, 北半はLⅡ上面, 南側は2号流路跡ℓ1上面である。南側のE5グリッド中央で7号溝跡と重複するが, 本溝跡のほうが古い。なお, 東側農道部分は稲の刈入後, 調査を行った。

検出された溝跡の長さは37mで, 主軸方向はN10°Eである。北側は調査区外へ延び, 南側は7号溝跡と重複する南側付近から不明瞭となり, 2号流路跡の氾濫部のE6グリッドで消える。幅は1.2m前後で, 北側は農道下であったためか上端が潰れている部分が多い。検出面からの深さは北側で54cmあるが, 南側は徐々に浅くなっていく。底面は中央が平坦で, 壁はなだらかに立ち上がり, 断面は逆台形である。溝底面の標高は北端に比べ南側のE5グリッド中央付近で20cmほど浅く, 南から北へ流れがあったものと考えられる。堆積土は基本的には3層で, 黒色粘質土を主体としており, 自然堆積である。

遺物は須恵器破片2点と木製品2点を図示した。他に土師器8点, 須恵器5点の細片が出土している。図38-1は須恵器甕の頸部, 2は胴部の破片で, 外面はタタキの痕跡が残っている。4は両端が焦げている火付木, 3は高台をわずかに削りだした漆器の椀の破損品で, 内外面黒漆で仕上げられ, 内面に赤漆で文様が描かれている。

時期は, 南側が2号流路跡の堆積土上面で確認されているが, 南へいくほど不明瞭になること, 堆積土の特徴が近世以降の1~5号溝跡とは異なり古代から中世の堆積土に近似すること, 破片も含め出土遺物に近世以降のものを含まないことなどから, 1号流路跡に合流する古代ないしは中世の溝跡と考えられる。

(佐藤)

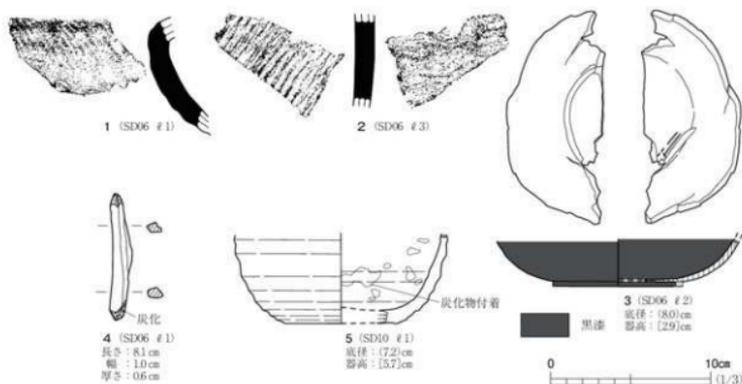


図38 6・10号溝跡出土遺物

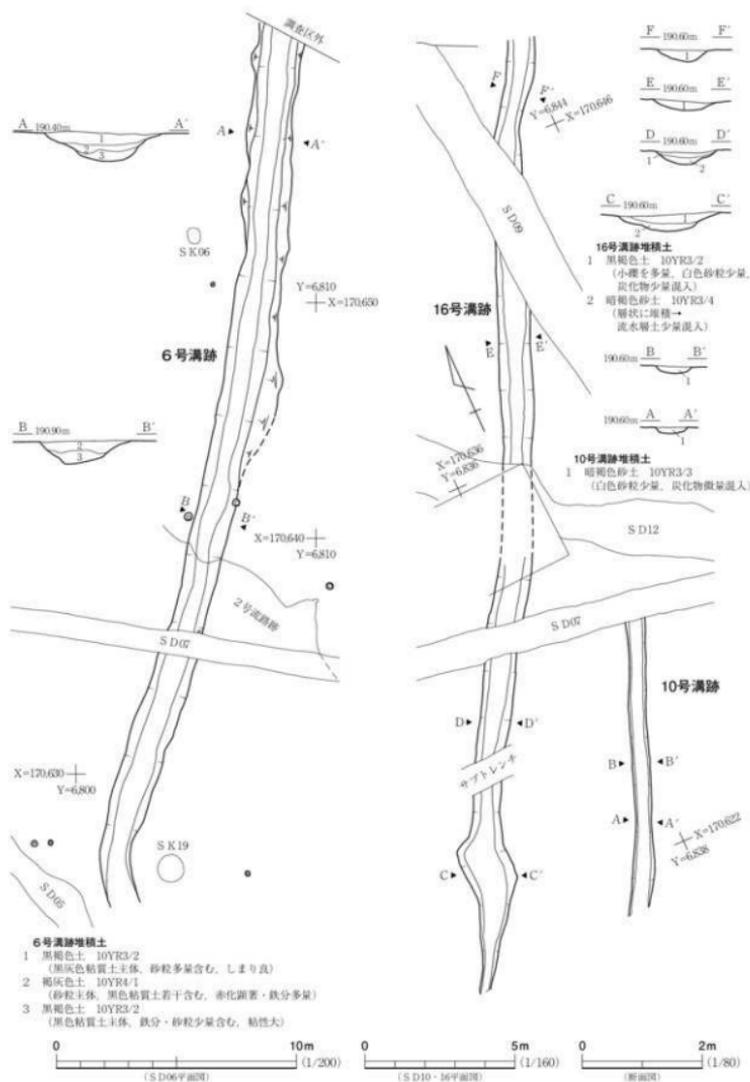


図39 6・10・16号溝跡

10号溝跡 SD 10 (図38・39, 写真23)

10号溝跡は、Ⅱ区中央よりやや西側で検出された溝跡で、7号溝跡と重複関係にあり、それに切られている。周辺には西側5m付近に本溝跡と並行するように16号溝跡が位置している。遺構検出面は沢部に堆積している黒褐色土上面となっている。

その規模は、長さ9.5mであり、上部の幅が52～72cmである。断面形は鍋底形を呈し、検出面からの深さは最深部で11cmである。溝底面の高さは南側が北側より高く、北流していたと思われる。溝跡内には白色砂粒を含む暗褐色砂土1層が堆積しており、堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は、堆積土からロクロ土師器が出土している。図38-5に図示した資料は、ロクロ土師器甕の底部で内面には炭化物が付着していた。

本溝跡は、検出面がⅢ土上面で、16号溝跡と並行するところから、それと同時期の所産と思われる。出土遺物に中・近世以降のものを含まないところから、古代の遺構と考えられるが、その性格については不明である。 (藤谷)

11号溝跡 SD 11 (図40・41, 写真23)

11号溝跡は、Ⅱ区の調査区北壁より、Ⅲ区南壁に向かって、北西から南東方向に真っ直ぐ伸びる全長82mの溝跡である。9・12・23号溝跡と重複関係にあり、12号溝跡を切り、9・23号溝跡に切られている。遺構検出面はⅢ土上面となっている。

溝跡上部の幅は36～64cmである。断面形は鍋底形から逆台形を呈し、検出面からの深さは最深部で29cmである。溝底面の高さは北西側が南東側よりわずかに高く、その比高差は5～10cmで、北流していたと考えられる。

遺物は、堆積土からロクロ土師器と須恵器が出土している。図40に図示した資料は、1・2が須恵器長頸瓶の口縁部と底部の破片、3が古墳時代の土師器甕の口縁部、4が土師器筒形土器の口

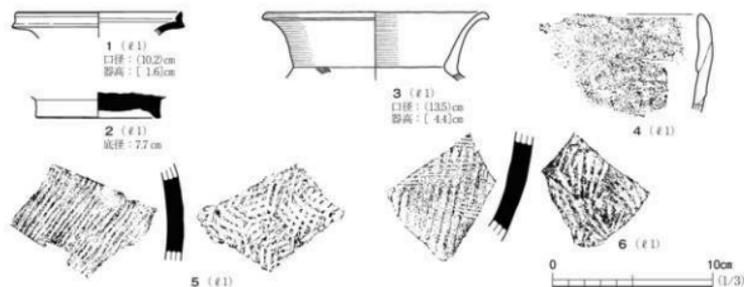


図40 11号溝跡出土遺物

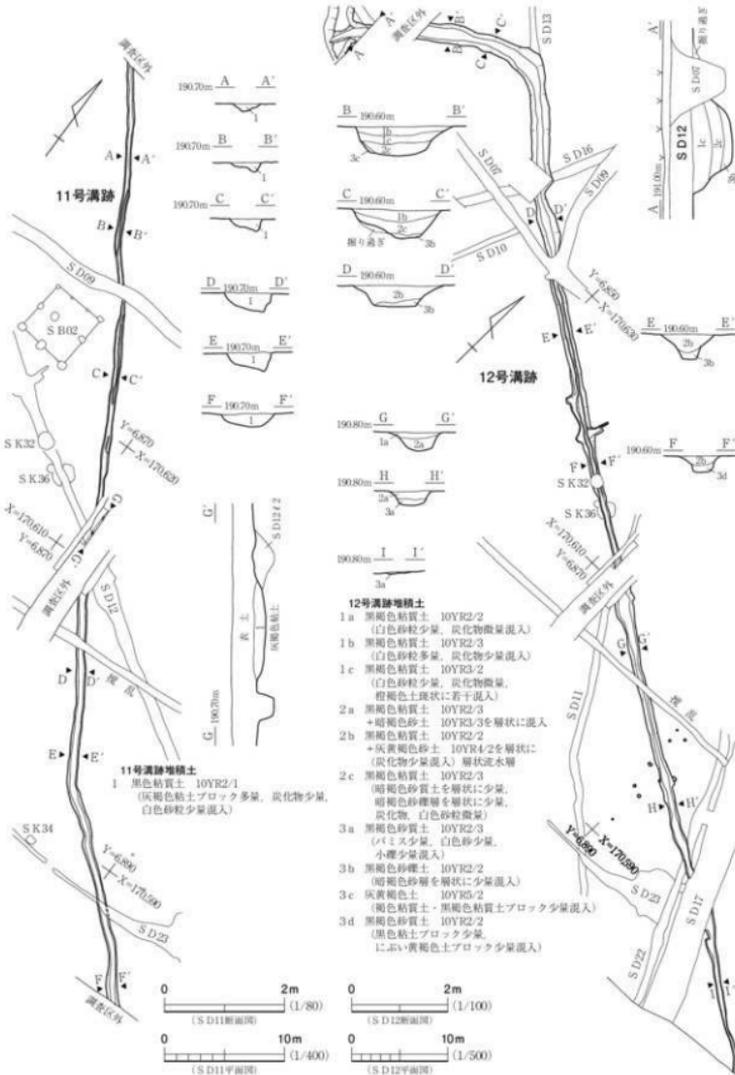


図41 11・12号溝跡

縁部である。5・6は外面にタタキ痕、内面に当具痕が残された須恵器の甕である。

本溝跡は、堆積土中から中・近世以降の遺物が全く出土せず、堆積土も古代の遺構と近似するところから、同様の平安時代9世紀頃のものとして推定される。性格については、直線的な溝であるところから、建物跡群構築前の道路等の側溝の可能性を考えたい。(藤谷)

#### 12号溝跡 S D 12 (図41～43, 写真23・24・34・36～40・43・46・58)

12号溝跡は、Ⅱ区の北西部からⅢ区南東部にかけて、Ⅱ・Ⅲ区を西西北～東南東方向に縦断する形で延びている。Ⅱ区北西部では13号溝跡と連結し、その部分で西西南方向に曲がり、2号流路跡に連結する形となっている。1・9号掘立柱建物跡、32・36号土坑、7・11・16・17・22号溝跡と重複関係にある。建物跡の柱穴の一部は本溝跡の堆積土を掘り込んで作られており、32号土坑と各溝跡は、本溝跡を切って構築されている。この中で36号土坑のみ、本溝跡に切られている。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

溝跡の全長は、屈曲部も含めて125mで、上場の幅は、Ⅲ区南東部が狭く20～40cm、Ⅱ区東半部で90～130cm、Ⅱ区北西部で1～1.7mとなっている。断面は逆台形から鍋底状を呈し、検出面からの深さは、Ⅲ区南東部付近の最深部で37cm、Ⅱ区東半部付近で約50cm、Ⅱ区北西部で約60cmとなっている。溝底面の高さは、Ⅰ区2号流路跡流れ込み付近で189.6m、Ⅱ区東側で190m、Ⅲ区南東側で190.1mである。南東から北西方向に北西側が南東側より高く、その比高差は50cmで、北流していたと考えられる。

遺物は、堆積土から土師器と須恵器、砥石が出土しており、一部を図42・43に示した。図42-1・2は非ロクロ成形の土師器杯で内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。3～8は土師器甕で、3が器高の低いロクロ成形のもの、4・5が「口縁部が「く」の字状に屈曲するもの、6が外面にタタキ痕を残すもの、7が内外面にヘラナデ、外面にヘラケズリの痕跡が残るもの、8が小型で体部下端にヘラケズリが施されたものもある。9が須恵器蓋、10～12、図43-1～4・6が須恵器杯で、4の底部には「田万」の墨書がある。器形のわかるものでは、口径に対して底径が大きめである特徴を持っている。図43-5については、底部に糸切り痕を残す須恵器の鉢あるいは甕と推定される。7・8は須恵器高台杯である。9・10は須恵器長頸瓶である。11～13は須恵器甕で、11が口縁部、12と13は同一個体の体部である。14は凝灰岩製の砥石である。

本溝跡は、出土遺物から8世紀後半から機能していた溝であり、建物跡群が作られたと推定される9世紀代には埋まっていたものと推定される。鶴沼C遺跡の古代の遺構の中でも、初源期を特定する遺構である。また、2号流路跡に連結しており、断面等の状況から同時期に機能していたものと思われる。また、第2編に収録した西坂才遺跡でも、同じ方向に延びる14号溝跡が検出されている。本溝跡は、そこにつながる可能性があり、道路の側溝的な機能をもっていた可能性が考えられる。また、2号流路跡と同時存在したところから、鶴沼C遺跡の調査区付近では、川の北側に沿って道路があったことも推定される。(藤谷)

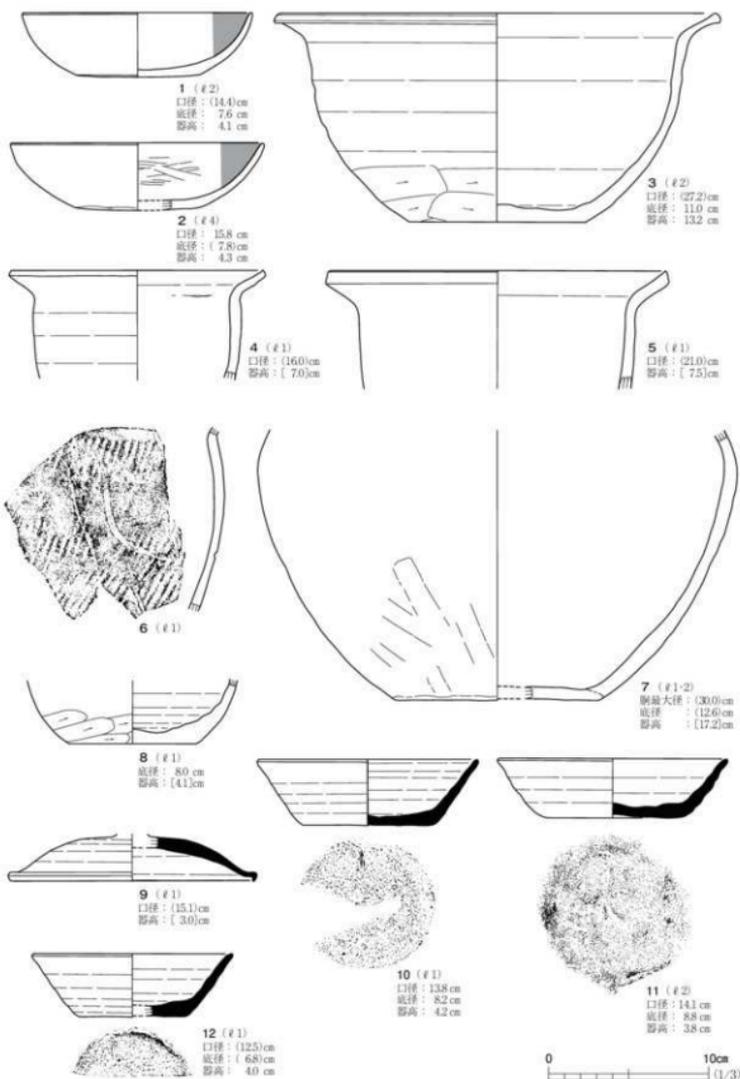


図42 12号溝跡出土遺物 (1)

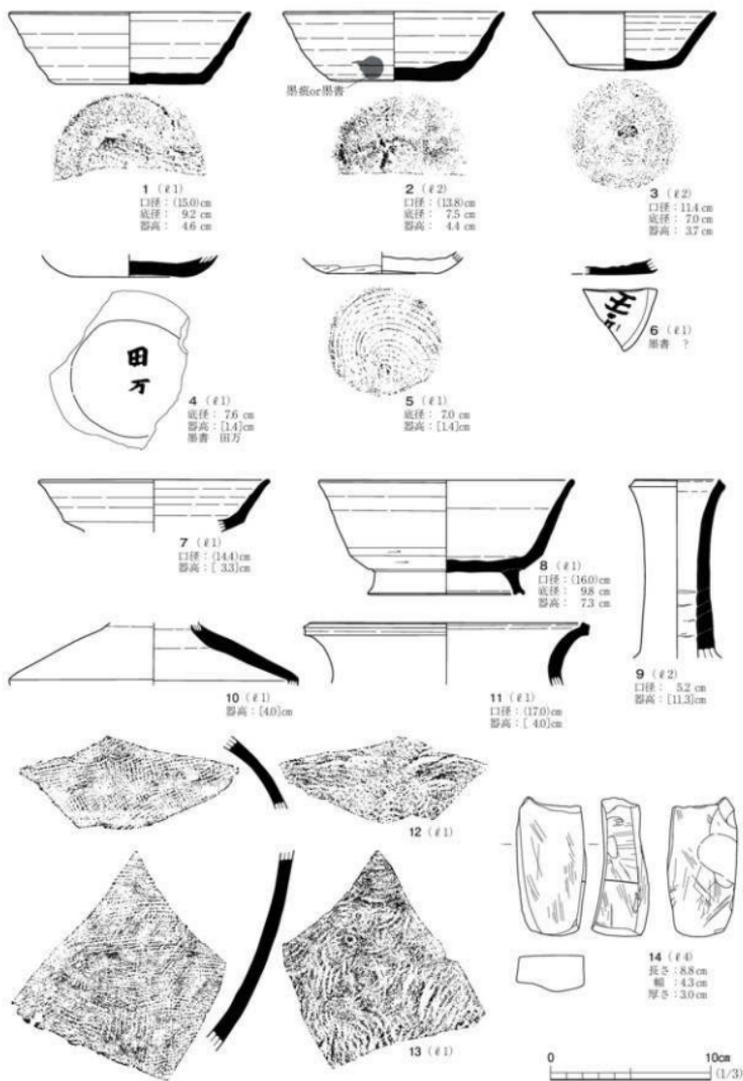


図43 12号溝跡出土遺物 (2)

## 13号溝跡 S D 13 (図45, 写真24)

13号溝跡は、Ⅱ区の北西部で12号溝跡と同じ方向に延び、東側でそれに連結する溝跡である。断面の状況から12号溝跡の方が新しいと推定される。周辺には北側に1号周溝状遺構が位置している。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

溝跡の全長は14.8mで、上場の幅は52～88cmである。断面は葉研状を呈し、検出面からの深さは最深部で30cmである。堆積土は黒褐色粘質土1層で、堆積状況は自然堆積と推定される。

遺物は、堆積土から土師器と須恵器の細片が出土している。

本溝跡は、12号溝跡と方向も一致するものの、重複関係が認められるところから、12号溝跡を2号流路跡方面に拡幅して連結する前に存在した溝跡である可能性がある。その時期は8世紀後半以前と考えられる。(藤谷)

## 14号溝跡 S D 14 (図45, 写真24)

14号溝跡は、Ⅱ区北西側のG・H4グリッドで検出された溝跡で、南側には12号溝跡が位置している。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

その規模は、南北方向の全長が5.1mであり、上部の幅が24～50cmである。断面形は鍋底形を呈し、検出面からの深さは最深部で17cmである。溝跡内の堆積土は黒褐色粘質土1層で、堆積状況は自然堆積と推定される。

本溝跡から遺物は出土していないが、堆積土が建物跡群と近似するところから平安時代の遺構である可能性が高い。また、その性格は不明である。(藤谷)

## 15号溝跡 S D 15 (図45)

15号溝跡は、Ⅱ区中央よりやや東側で検出された溝跡で、途中で屈曲する形態となっている。当初北側のみが検出されたが、調査区を東西に走っている農道撤去後に南側も検出された。北側で31号土坑と西側で24号土坑と隣接している。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

その規模は、屈曲部も含めた全長が13.2mであり、上部の幅が24～32cmである。断面形は鍋底形を呈し、検出面からの深さは最深部で6cmである。溝跡内の堆積土はブロック土を含む黒褐色粘質土1層で、堆積状況は人為堆積と推定される。

遺物は、出土していない。堆積土が他の平安時代の遺構と異質であるところから、近世以降の溝跡であると推定されるが、性格は不明である。(藤谷)

## 16号溝跡 S D 16 (図39, 写真24)

16号溝跡は、Ⅱ区中央よりやや西側で検出された溝跡で、7・9・12号溝跡と重複関係にあり、各溝跡に切られている。周辺には東側5m付近に本溝跡と並行するように10号溝跡が位置してい

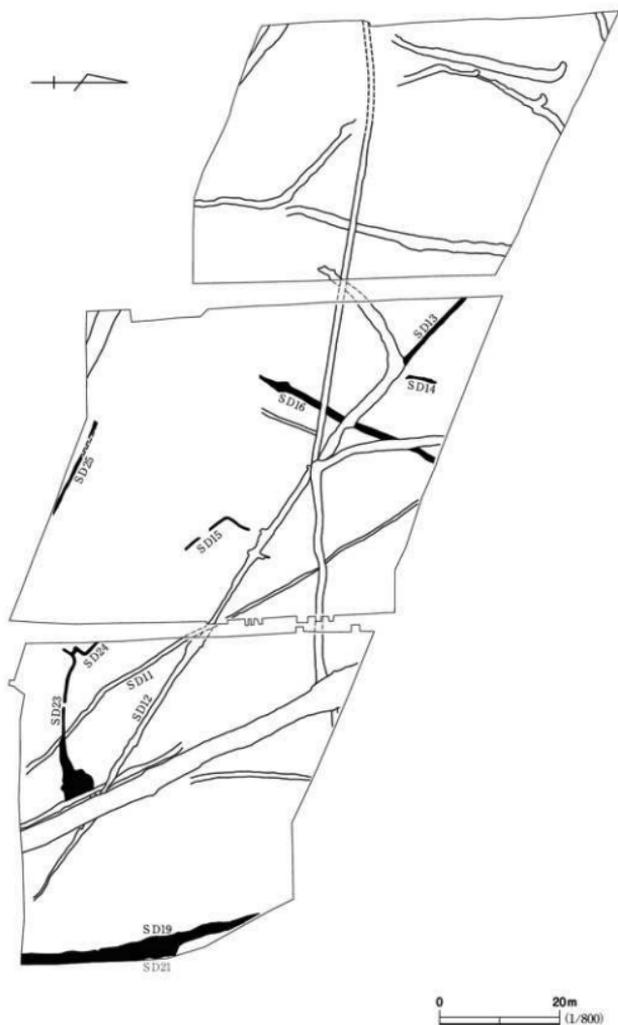


図44 溝跡位置図(2) 13・16・19・21・23・25号溝跡

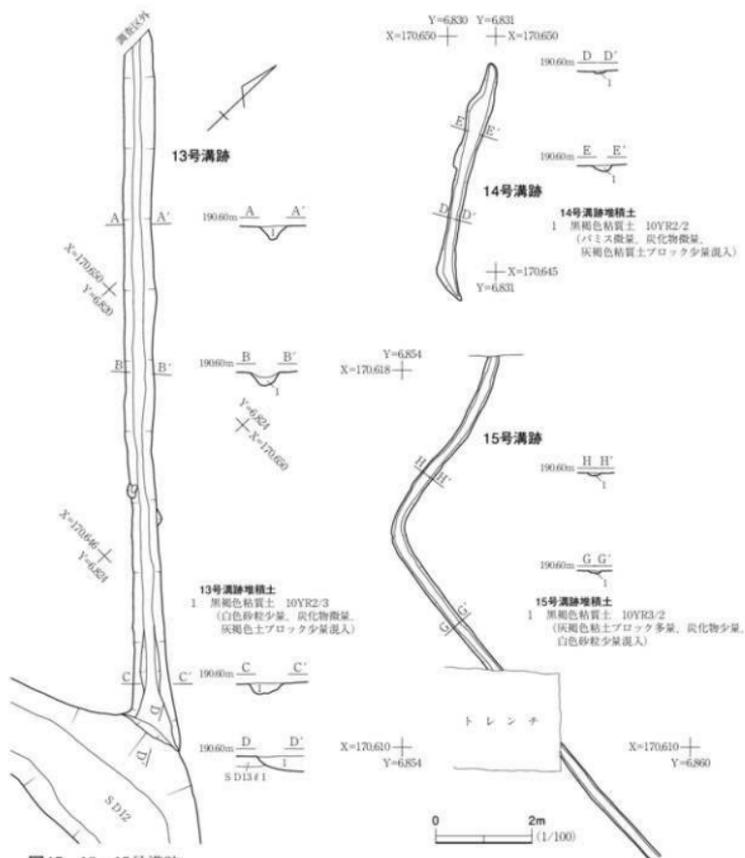


図45 13～15号溝跡

る。遺構検出面は沢部に堆積している黒褐色土上面となっている。

その規模は、南北方向の全長が328mであり、上部の幅が88～172cmである。断面形は鍋底形を呈し、検出面からの深さは最深部で29cmである。溝底面の高さは南側が北側より高く、北流していたと思われる。溝跡内の堆積土は2層で、下部に堆積する暗褐色砂土は流水層であり、その上部は堆積状況で形成された黒褐色土となっている。

遺物は、堆積土からロクロ土師器の細片が出土している。

本溝跡は、検出面がLⅢ上面で、10号溝跡と並行することから、それと同時期の所産と思われる。

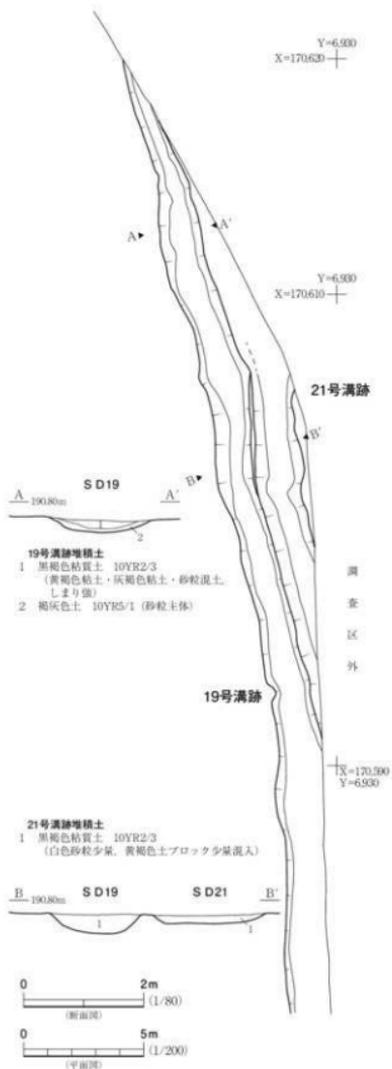


図46 19・21号溝跡

重複関係より、古代の遺構である可能性が高い。また、その性格については不明である。(藤谷)

### 19号溝跡 S D 19

(図46・47, 写真25・43)

Ⅲ区の東端、Q 6～10グリッドに位置する。検出面はL II上面である。東側で21号溝跡と重複しており、本溝跡の方が古い。

検出された溝跡の長さは40mである。主軸方向はN 10° Wで、ほぼ南北に走り、南北とも調査区外まで延びる。幅は2.1m前後であるが、北側は狭くなり1.4mほどになる。検出面からの深さは37cmである。底面は鍋底状で南北の標高差はほとんどない。堆積土はレンズ状の自然堆積で、上層の粘質土と下層の砂層の2層に分層した。

遺物は、図47-1の須恵器杯蓋と2・3の須恵器亮胴部破片の3点を図示した。他に土師器22点、須恵器35点の破片が出土しているが、近世以降の陶磁器片も13点出土しており、堆積土の特徴などからも近世以降の用水路などの水利施設と考えられる。(佐藤)

### 21号溝跡 S D 21 (図46)

Ⅲ区の東端、Q 7～9グリッドに位置する。検出面はL II上面である。西側で19号溝跡と重複しており、本溝跡の方が新しい。

検出された溝跡の長さは18mで、主軸方向はほぼ真北である。北側は調査区

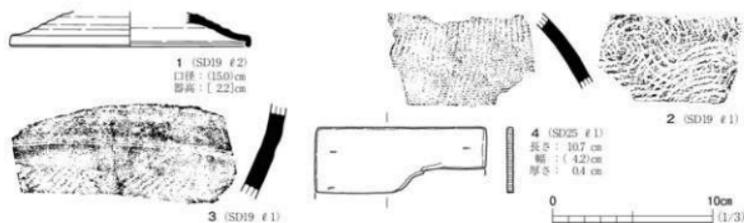


図47 19・25号溝跡出土遺物

外に延び、南側は19号溝跡の覆土中で消える。幅は1.6m前後で、北側は狭くなり1.4mほどになる。検出面からの深さは67cmである。底面は鍋底状で標高差はほとんどない。堆積土は1層で、自然堆積土と判断した。

遺物は出土しなかったが、19号溝跡より新しく、また堆積土の特徴などからも近世以降の用水路などの水利施設と考えられる。(佐藤)

#### 23号溝跡 S D 23 (図48, 写真25)

23号溝跡は、Ⅲ区南西側で検出された溝跡で、24号溝跡に西側で連結している。溝は中央よりやや西側付近で一部途切れているが、方向から同一の溝とした。また11・22号溝跡と重複関係にあり、11号溝跡を切り、22号溝跡に切られている。周辺には、北側には34号土坑が隣接して位置している。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

その規模は、東西の全長が302mであり、上部の幅が24～35cmである。東側の22号溝跡と接する部分は南北に広がる形となっており、その幅は4.8mである。断面形は鍋底形を呈し、検出面からの深さは最深部で13cmである。堆積土は暗褐色土1層で、堆積状況は自然堆積と推定される。

遺物は出土していないが、堆積土が他の近世以降の遺構と近似しているところから、近世以降のものとして推定されるが、その性格は不明である。(藤谷)

#### 24号溝跡 S D 24 (図48, 写真25)

24号溝跡はⅢ区南西側で検出された溝跡で、23号溝跡に東側で連結しており、西側でⅡ区とⅢ区間の用水路で切られており、Ⅱ区側では検出されなかった。遺構検出面はLⅡ上面となっている。

溝跡は、西側から2重に屈曲して23号溝跡に連結する形で、その規模は、屈曲部も含めた全長が5.5mであり、上部の幅が32～72cmである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは最深部で7cmである。溝跡内の堆積土は暗褐色土1層で、堆積状況は自然堆積と推定される。

遺物は出土していないが、堆積土が他の近世以降の遺構と近似しているところから、23号溝跡同様、近世以降の時期のものとして推定されるが、その性格は不明である。(藤谷)

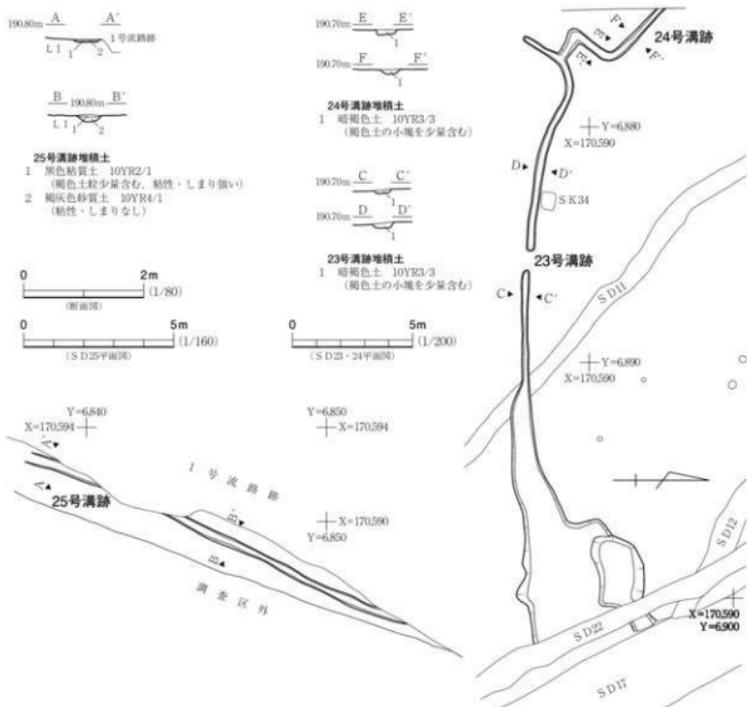


図48 23～25号溝跡

25号溝跡 S D 25 (図47・48)

Ⅱ区の中央南端、H・I 9、I・J 10グリッドに位置する。検出面はL II上面である。1号流路跡と重複し、本溝跡が新しい。

検出された溝跡の長さは166 m、幅は30 cm前後である。主軸方向はN 65° Wで、北西から南東に延びる。検出面からの深さは残りの良い部分で11 cmあるが、西側は徐々に浅くなり消失する。断面はU字状で、底面の標高差はほとんどない。堆積土はレンズ状の自然堆積で、上層の粘質土と下層の砂層の2層に分層した。

遺物は、図47-4の板状木製品と土師器・須恵器の細片が5点出土したのみである。検出状況や堆積土の特徴から近世以降の溝跡と考えられる。(佐藤)

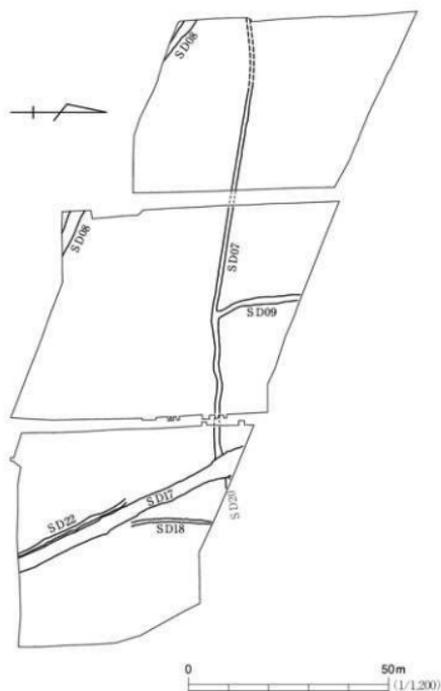


図49 溝跡位置図(3) 7～9・17・18・20・22号溝跡

1・2・8・9は、須恵器の甕である。8が頸部、2が底部、1・9が体部破片であり、外面にはタタキ痕が、1・9の内面には当て具痕が残されている。4・5は磁器碗の底部で、4は内外面に花卉状の文様の染付が施されている。5は外面に型紙による染付が施されている。6・7・10～13は木製の挽物椀で、ともに内外面に漆塗りが施されている。7を除き高台が付く形態で、うち11にはそれが明瞭に残っている。形態は底径に対して器高がやや高く深手のもの11・12や浅手のもの10・13がある。3は寛永通宝である。14と15は凝灰岩製の砥石で、外面には明瞭な擦痕が認められる。

(藤谷)

### 近代以降の溝跡と出土遺物 (図49・50、写真43)

今回の調査した溝跡で、明らかに明治期以降のものと思われる溝跡は、7～9・17・18・20・22号溝跡の7条である。堆積土中に近代以降の遺物が多く含まれていたり、旧は場整備で利用されたと思われるコンクリート製の堰状遺構が検出されたりしている。

調査区内における位置を図49に示した。Ⅲ区を東西に走り、コンクリート製の堰状遺構を持つ17号溝跡を中心に、それに流れ込むか、それに平行する位置関係のものがほとんどである。

これらの溝跡には、堆積土中から古代のものを含む遺物が出土しているものがあつた。古代や近世以降の遺構と重複しており、その時期のものが流れ込んだものと思われる。図50にその一部を示した。

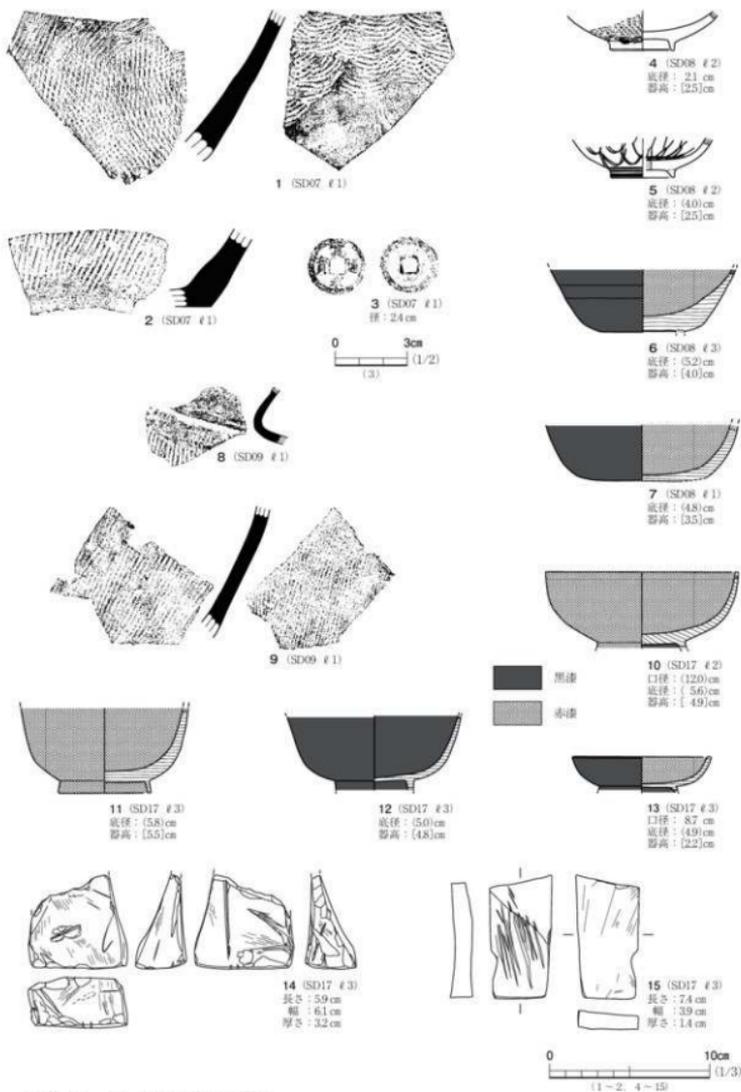


図50 7～9・17号溝跡出土遺物

## 第7節 流 路 跡

今回の調査で、流路跡は3か所で確認することができた。いずれも古代に機能したものと推定される。1号流路跡は、I区とII区にまたがっており、2号流路跡と重複関係にあり、それを切って作られている。3号流路跡がI区北西隅で一部が検出されている。1・2号流路跡については、西側の底面の高さが東側のそれより低いので、北西へ流れていたものと推定される。

### 1号流路跡

#### 遺 構 (図51～55・72, 写真26～28)

1号流路跡は、I区南側のB5グリッド付近から、II区K10グリッド付近に向けて、北西から南東方向で検出された流路跡で、一部III区南東隅に伸びている。調査区内での全長は123mとなっている。調査はまず農道を除くI区を優先し、II区側を後で行う形となった。I区の東側については農道を撤去後に調査を実施した。

I区での遺構を検出する段階で、一番南側で、地山検出面と思われるLIIとその北側の土層が明確に分離された。そこで、流路跡の存在を想定し、サブトレンチを入れたところ、不明瞭ながらも北側で立ち上がりが確認された。サブトレンチでは、底面付近から須恵器の完形品等の遺物が出土し、上面からの遺物の出土はごく少なかった。そこで、上面の土層については、下部40cm程度を残して、重機を用いて堆積土の削除作業を実施し、下部の層について、手掘りで調査を実施した。

I区での流路跡の規模は、調査区内での長さが約50m、東側での幅が約7.5m、西側での幅10.5mである。流路跡は、北西から東西方向に延びるが、D7グリッド付近では、南東方向へ分岐している箇所がある。その方向から流れてきた流路跡と合流したと思われる。壁面の立ち上がりは、北側壁がやや急であった。遺構検出面からの深さは、西側で1.2～1.3m、東側で1.5～1.6mとなっている。また、東西の高低差は25cmで西側が低く、西側に流れていたものと推定される。堆積土を10層に分層した。このうちℓ1～3・10が機能停止後の自然堆積層、ℓ4～8が流水作用によって堆積した層、ℓ9が底面上の礫層で、それぞれII区のℓ2・ℓ3・ℓ4層に対応する。断面のE-E'付近では、2号流路跡の流水堆積物の層を切る形で1号流路跡の堆積物が堆積しており、1号流路跡が2号流路跡よりも新しい状況を明瞭に観察された。

II・III区については、当初上面の遺物を含む土層ℓ1を谷部に堆積する遺物包含層である可能性が高いものとして調査を実施していた。しかし、I区の調査が進むにつれて、II区にも流路跡が広がるのが予想されたため、流路の方向に直行するサブトレンチを2本設定して、土層の状況を確認した。その結果、II区にも明らかに流路跡が広がることがわかり、更にI区同様に上部土層に遺物がほとんど含まれていないことが確認できた。そこで、上面の土層については、重機を用いて掘削作業を行った。上部の土層除去後に、遺物の含まれている流水作用による層の下部と底面上に堆

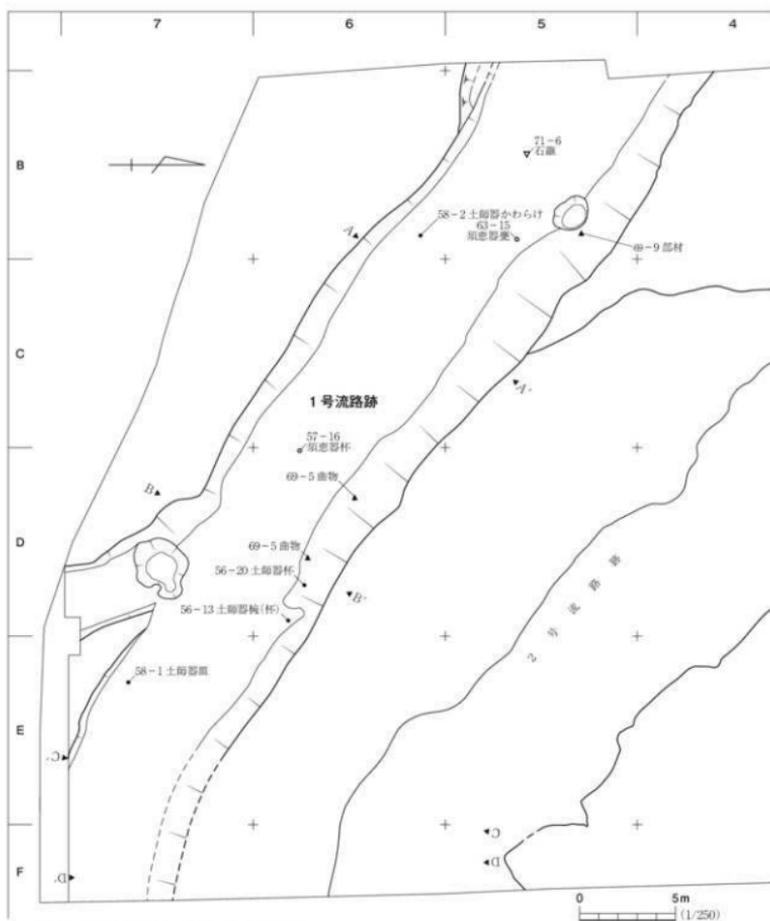


図51 1号流路跡(1) I区平面図

積する最下部の礫層を手掘りで調査した。

Ⅱ・Ⅲ区での流路跡の規模は、調査区内での長さが約50m、東側での幅が約7.5m、西側での幅10.5mである。J 10グリッド付近より東側は南壁が調査区外となっている。壁面の立ち上がりは、南壁と北壁の西端と東端付近がやや急であり、北壁の中央部分は緩やかとなっている。遺構検出面からの深さは、西側で1.6～2.0m、東側で1.2～1.4mとなっている。また、東西の高低差は約40cm

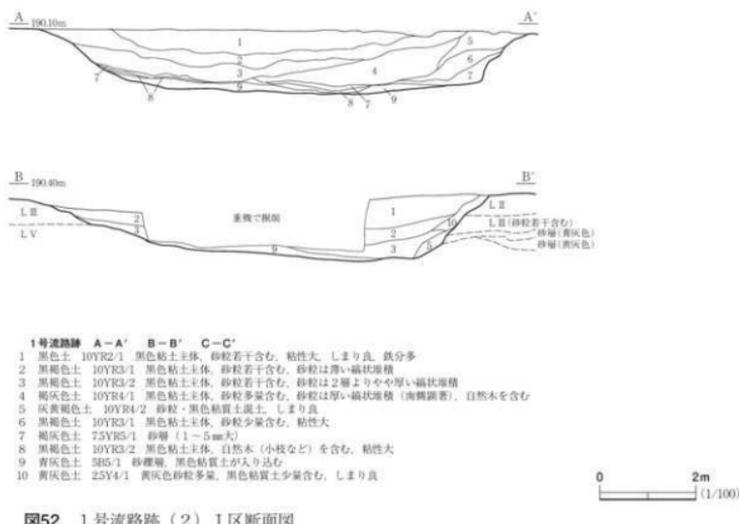


図52 1号流路跡（2）I区断面図

で西側が低い。流路内には、黒色粘質土をはじめ砂層や砂礫層など様々な堆積物が認められ、これらを大きく4層に分層した。ℓ1は最上面に堆積する白色砂粒を混入する土層、ℓ2はその下部に堆積する黒色の粘質土、ℓ3は流水あるいは崩落作用によって堆積した層、ℓ4が底面上の礫層で、ℓ1・2については、機能停止後に自然に堆積したものと推定される。遺物はℓ3の下部及びℓ4に認められた。また、断面ではA-A'面で2号流路跡との重複関係が明瞭に観察されたが、B-B'面では、それが不明瞭であった。その付近より東では、1号流路跡の氾濫によって2号流路跡は壊されたと推定される。

**遺物**（図56～71、写真33～47・50・52～54・58）

**縄文・弥生土器** 図56-1～3は縄文土器で、1・2が早期の土器、3が後期のものである。4・5が弥生時代中期の甕、6が同じ時期の高杯である。

**土師器** 図56-7は古墳時代中期の高杯である。図56-8～20、図57-1～4・6～13は杯である。杯は全て内面黒色処理されたロクロ成形のもので、底部から体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるもの図56-8～20、図57-4、体部下端に手持ちヘラケズリが施され底部に糸切り痕を残すもの図57-8や体部下端に調整痕を持たず糸切り痕のみを残すもの図57-9がある。体部下端に回転ヘラケズリ痕が残るものには、底径に対して器高が高い器形のもの図56-8・13がある。体部及び底面に墨書があるものも多く存在し、図57-13は底部付近に連続した文章が認められる。「仁香カ□食應下 □丸早□」と読める。図58-3～9は高台杯で、内外面にミガキの入

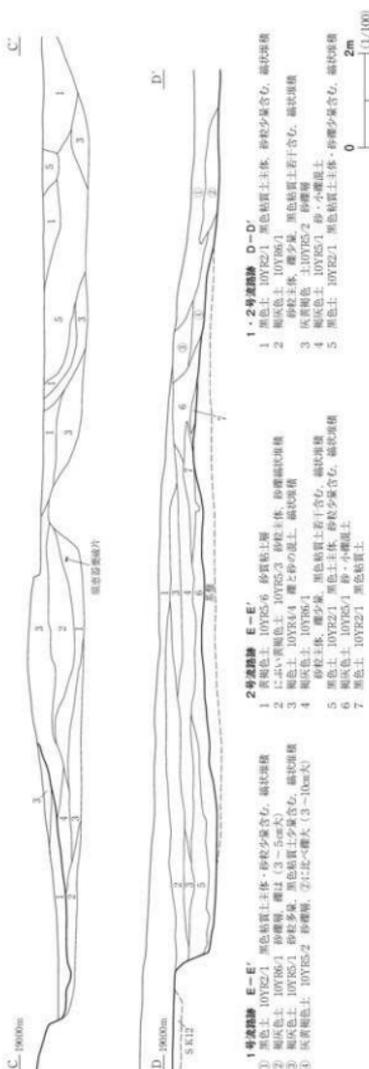


図53 1・2号流路跡I区断面図

るもの3もある。図58-10~15、図59-1は口縁部の堯である。口縁部では、それが「く」の字状に反するもの図58-10・11とそれ以外のものがある。図59-2~4は筒形土器である。

**赤焼土器・かわらけ** 図57-14~16は内外面に調整痕を持たない赤焼土器の杯で、図58-4は高台杯である。図58-1・2は皿状のかわらけと推定されるものである。

**須恵器** 図59-5~16、図60~62は、須恵器の杯である。器形は底径に対して器高が低く、口径に対して底径がおおぶりのもの図60-5~9、口径に対して底径が小さ目のもの図61-5・6で、器種にはかなりのバラエティーがある。墨書がある土器も多数あり、本遺跡に特徴的な文字には「今」図56-9・16、図59-15、図60-2・15、図61-6、図62-8・17がある。また、遺跡の性格に関連する文字には「戸主」図60-1や「吏」図62-3、「氏」図61-14、図62-6、「館」図62-12がある。図63-1・2は高台杯、3は蓋である。図63-4~12は長頸瓶、4~9が口縁部、10~12が底部である。口縁部では、頸部にリング状の凸帯が巡るもの5・9もある。図63-13は風字硯である。14は壺類の底部、15は大甕の口縁部である。図64-1は横瓶で外面にタタキ痕が残っている。図64-2~5は壺類の体部から底部、図65~68は甕類である。口縁部に波状文が巡るもの図65-1や丸底の底部図67-3がある。

**木製品** 図69-1~4が挽物の椀である。

1は高台部が作り出されており、体部下半が丸い形態となるものである。3は体部破片で、内外面に漆が塗られている。5・6は曲物の底部である。7は先端近くが削られ薄く作られて

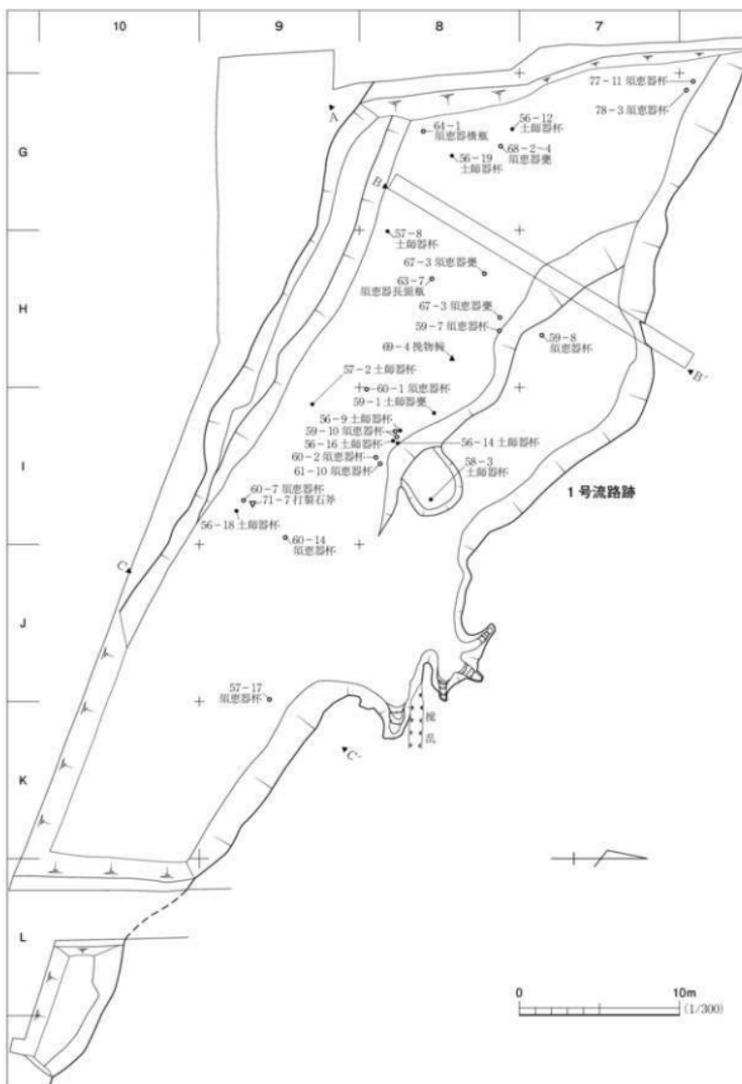


图54 1号流路跡(3)Ⅱ・Ⅲ区平面图

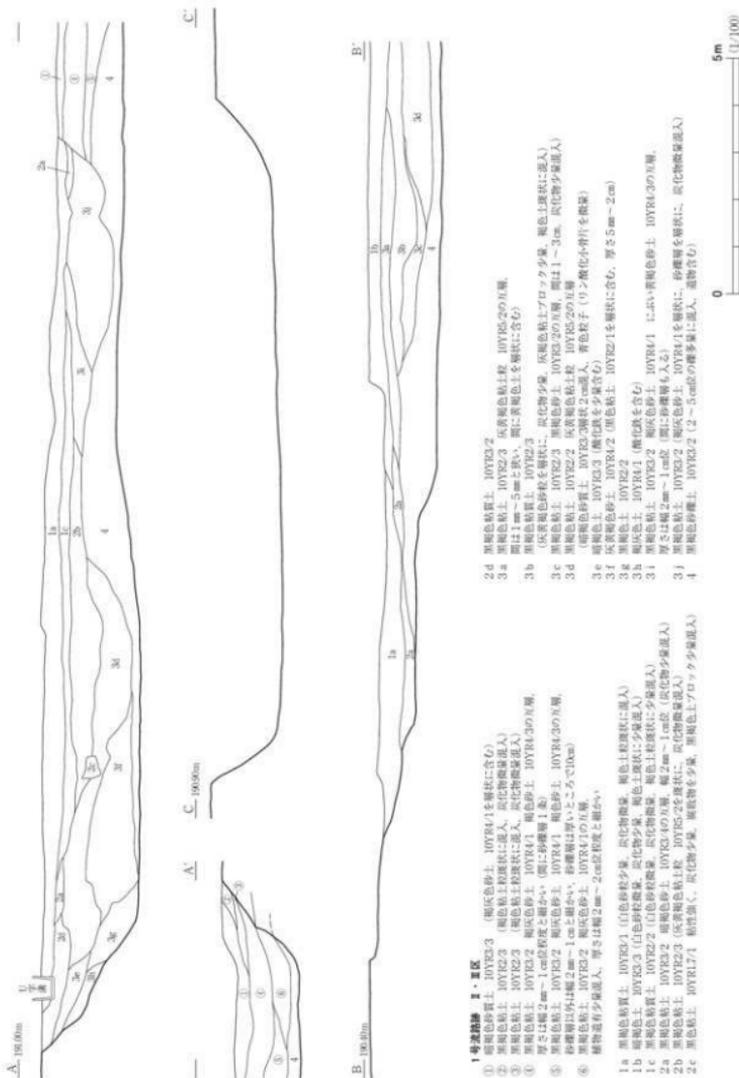


図55 1号路跡(4) II・III区断面図

1号路跡 II・III区

- ① 黒褐色粘質土、10YR3/3 (褐色粘土を層状に含む)
- ② 黒褐色粘質土、10YR3/3 (褐色粘土を層状に含む)
- ③ 黒褐色粘質土、10YR2/3 (褐色粘土を層状に含む)
- ④ 黒褐色粘土、10YR2/3 (褐色粘土を層状に含む)
- ⑤ 厚さは約2mm、1cm位の厚さをもち、腐植質がほとんどなく、腐植質がほとんどなく、腐植質がほとんどなく
- ⑥ 腐植質がほとんどなく、腐植質がほとんどなく
- 1a 黒褐色粘土、10YR3/1 (白色砂状少量、炭化物少量、褐色土層状に混入)
- 1b 黒褐色粘土、10YR3/3 (白色砂状少量、炭化物少量、褐色土層状に少量混入)
- 2c 黒褐色粘土、10YR2/2 (白色砂状少量、炭化物少量、褐色土層状に少量混入)
- 2d 黒褐色粘土、10YR2/2 (白色砂状少量、炭化物少量、褐色土層状に少量混入)
- 2b 黒褐色粘土、10YR2/3 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)
- 2e 黒褐色粘土、10YR1/7 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)

- 3d 黒褐色粘土、10YR2/2 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)
- 3a 黒褐色粘土、10YR2/2 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)
- 3b 黒褐色粘土、10YR2/3 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)
- 3c 黒褐色粘土、10YR2/3 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)
- 3d 黒褐色粘土、10YR2/2 (炭化物少量、炭化物少量、炭化物少量混入)
- 3e 黒褐色粘土、10YR2/3 (炭化物少量、炭化物少量混入)
- 3f 炭褐色粘土、10YR4/2 (黒色粘土を層状に含む、厚さ5mm-2cm)
- 3g 黒褐色粘土、10YR2/2 (炭化物少量)
- 3h 黒褐色粘土、10YR4/1 (褐色粘土を層状に含む)
- 3i 黒褐色粘土、10YR4/1 (褐色粘土を層状に含む)
- 3j 黒褐色粘土、10YR4/1 (褐色粘土を層状に含む)
- 3k 黒褐色粘土、10YR4/1 (褐色粘土を層状に含む)
- 4 黒褐色粘土、10YR3/2 (褐色粘土を層状に含む、炭化物少量混入)

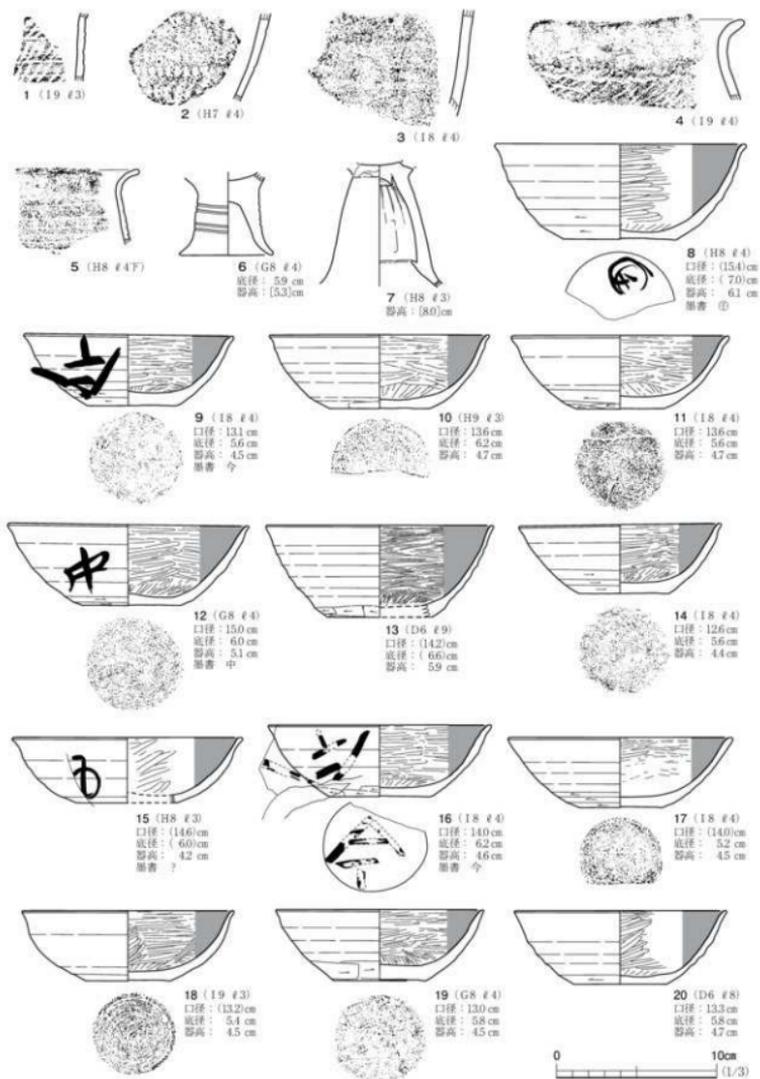


図56 1号流路跡出土遺物(1) 土師器

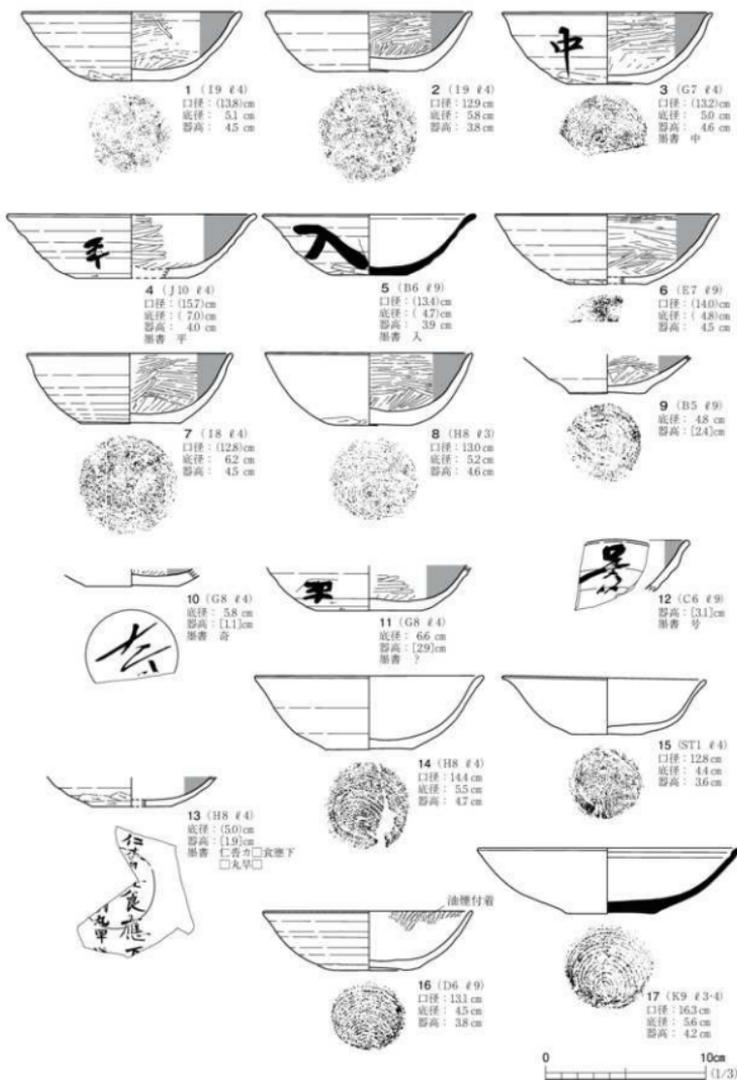


図57 1号流路跡出土遺物(2)土師器

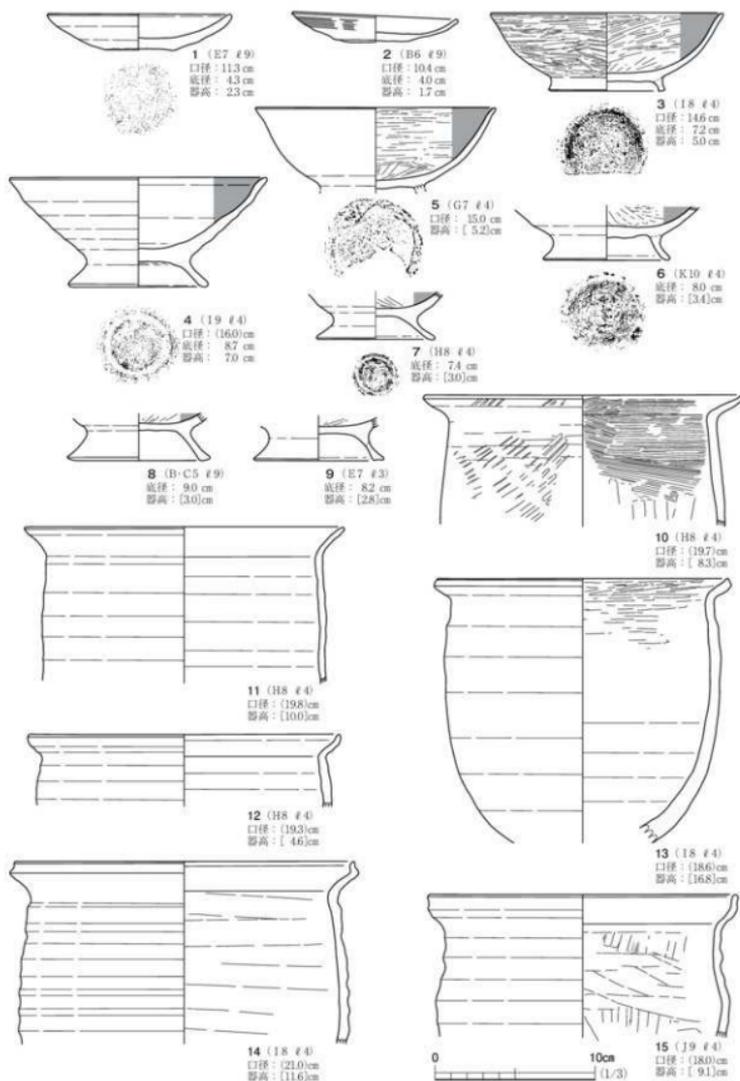


图58 1号流路跡出土遺物(3) 土師器

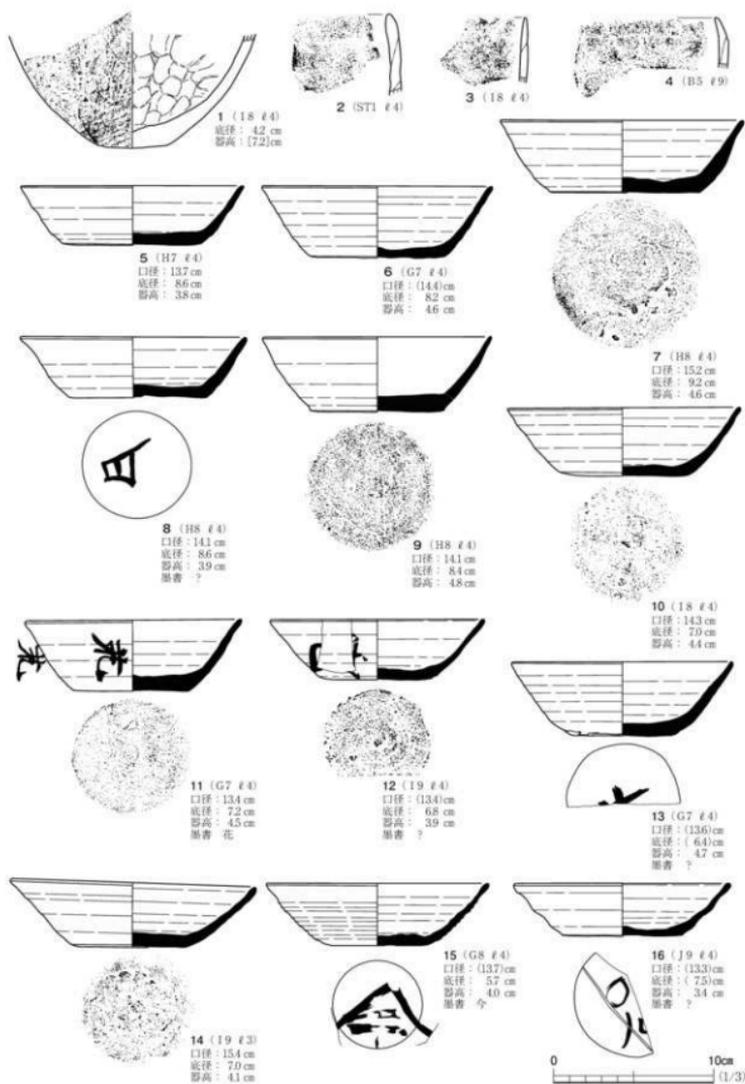


図59 1号流路跡出土遺物(4) 土師器・須恵器

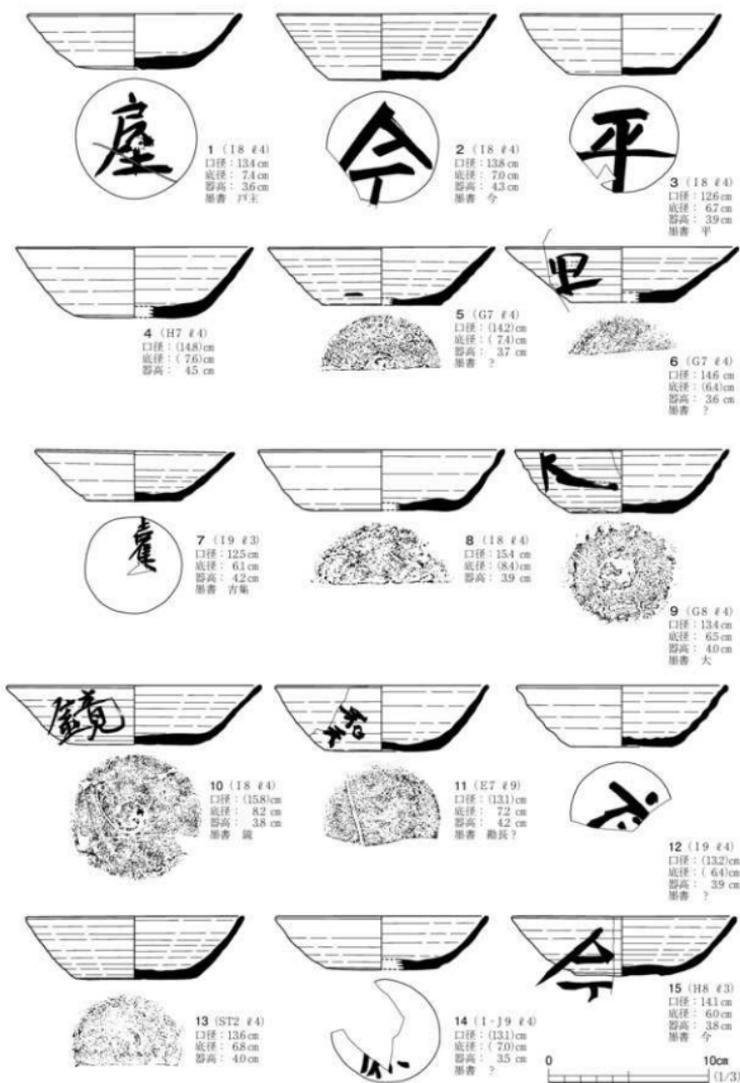


図60 1号流路跡出土遺物(5) 須恵器

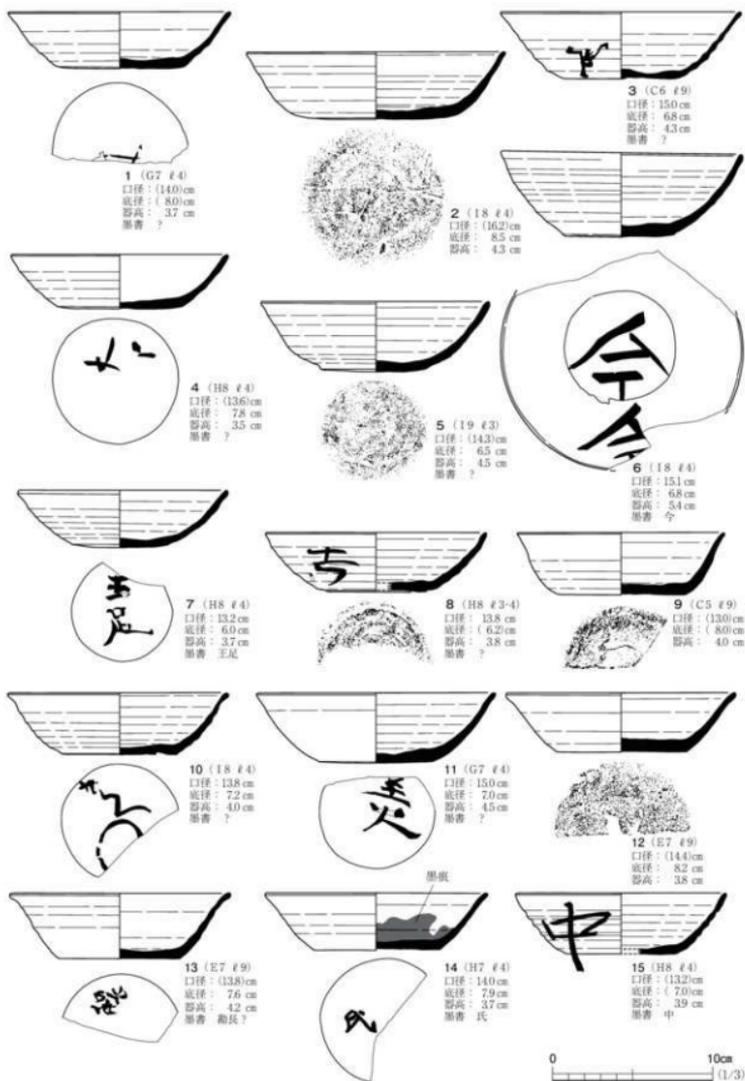


図61 1号流路跡出土遺物(6)須恵器

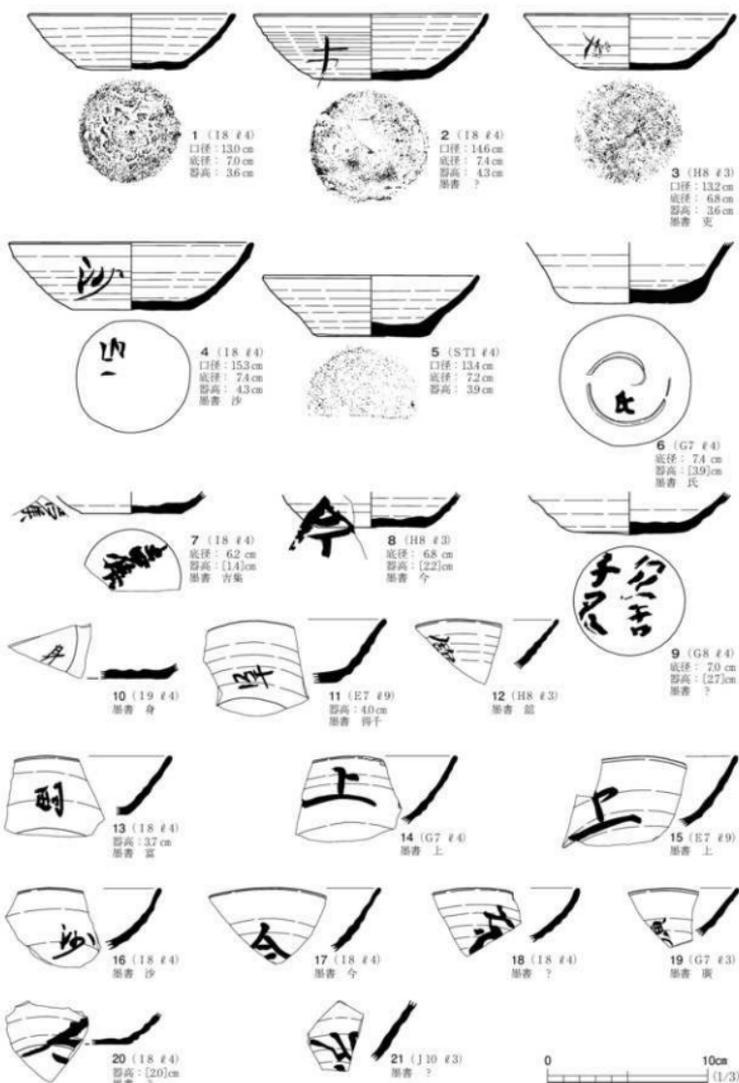


図62 1号流路跡出土遺物(7)須恵器

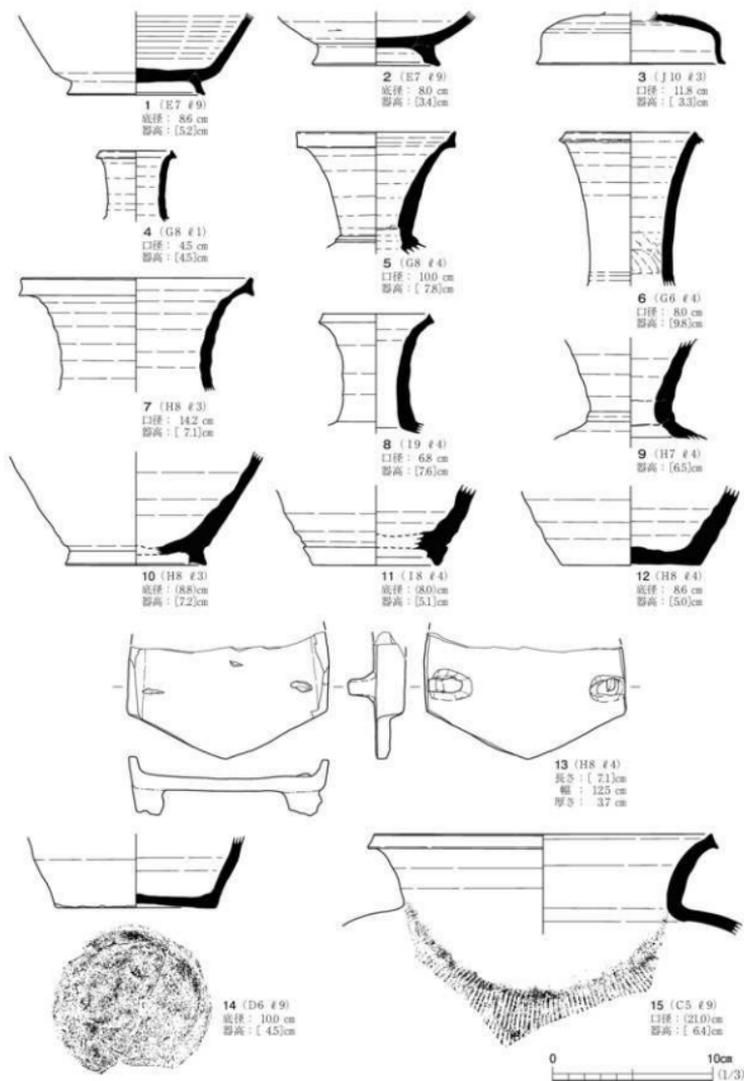


図63 1号流路跡出土遺物 (8) 須恵器

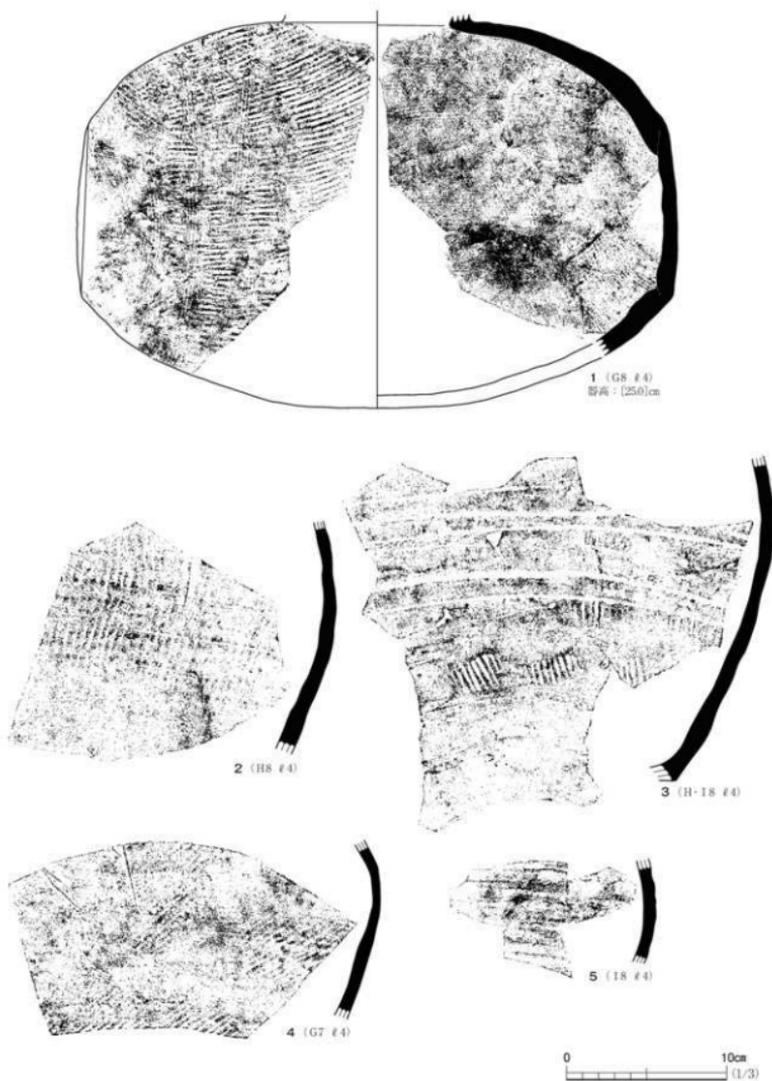


図64 1号流路跡出土遺物 (9)須恵器

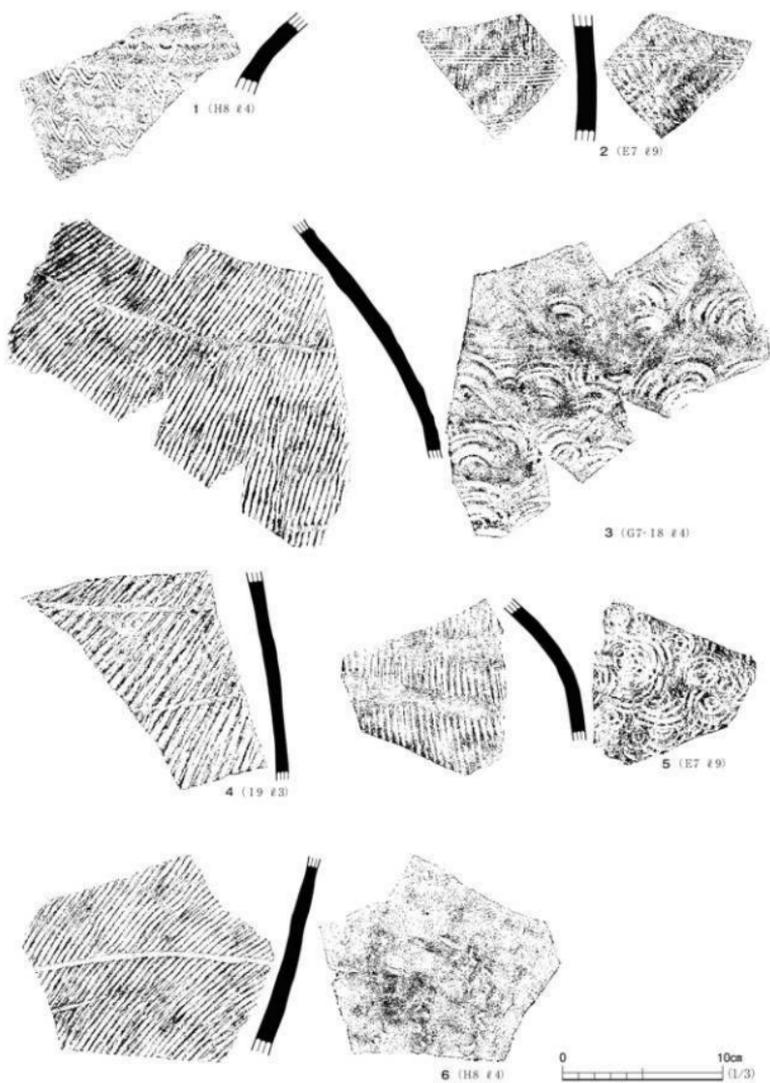


図65 1号流路跡出土遺物 (10) 須恵器

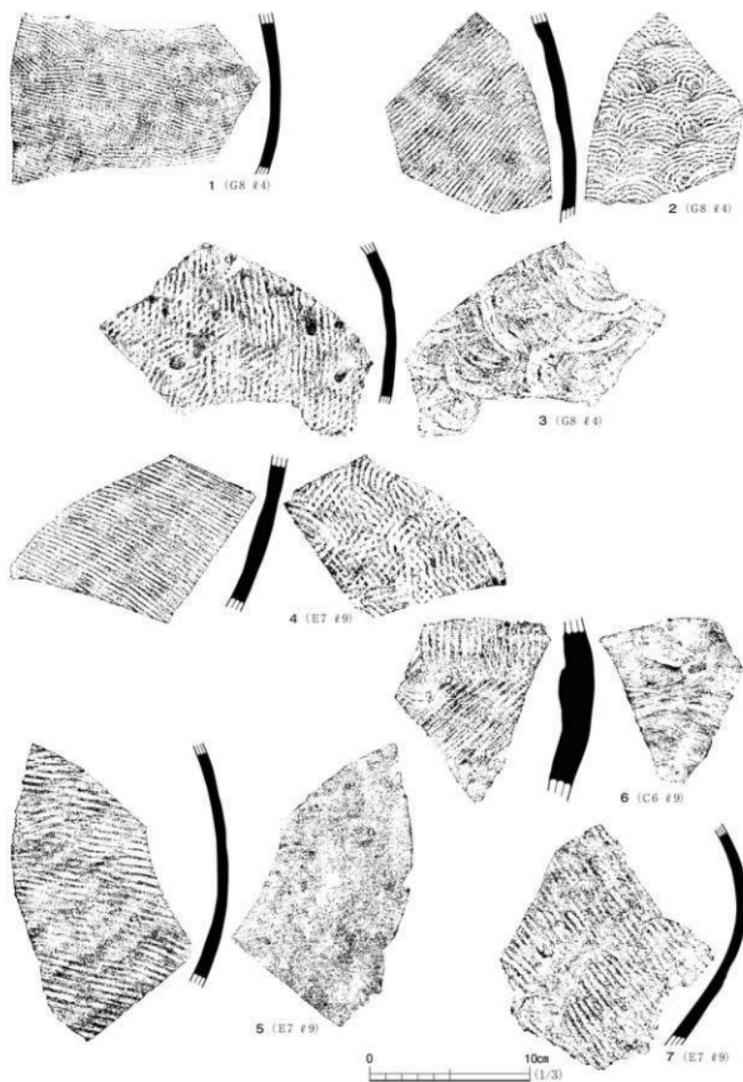


図66 1号流路跡出土遺物 (11) 須恵器

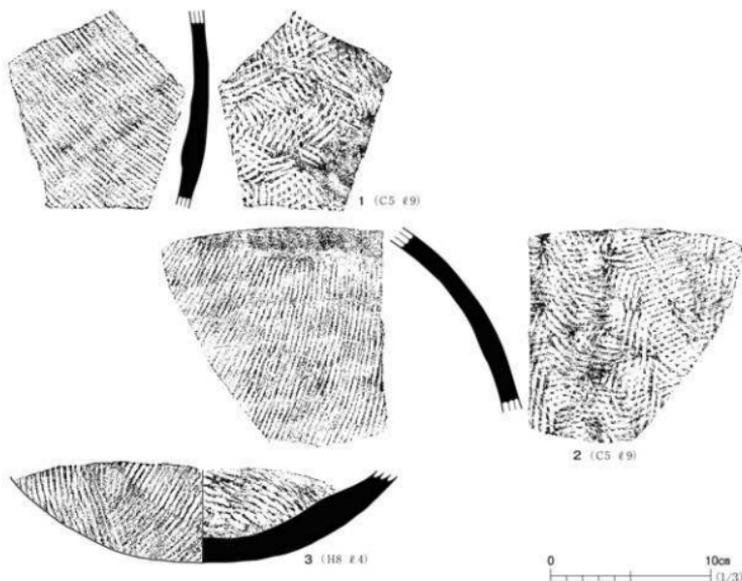


図67 1号流路跡出土遺物(12)須恵器

いるところから齎串となるかもしれない。8は串状の木製品、10は当初木筒と思われたが、文字がなかったところから付札状木製品としたい。9は精巧な作りで、舟底形の側面の一部にキザミ痕跡があるが、用途は不明である。11は薄い板状で、7と同様齎串となる可能性がある。12はへら状の木製品である。13は下駄の未成品と考えられる。14・15は火付木である。図70-1~6・8は板状の木製品で、1については両端部に加工痕のあるところから部材と思われる。7は杭で、芯持ち材の先端を削っている。図71-1・2は堆積土 $\ell 1 \sim \ell 2$ に打ち込まれた状態で出土した大型の木製品で、1には明瞭なほぞ穴が開けられている。2は板状を呈しており、ともに建築部材と推定される。3・4も板状の部材であると思われる。

**土製品** 図71-5は、円柱状を呈した土製の支脚と思われる。

**石器** 図71-6はチャート製のアメリカ式石鏝である。流路跡からは弥生時代の土器も出土しており、その時期のものと思われる。7は頁岩製の打製石斧で、底面付近の礫層から出土した。片面の中央が高い形態に作られており、断面が三角形を呈している。縄文時代草創期初めの神子柴・長者久保段階の石器と推定される。

**鉄製品** 図71-8は一番底面の礫層から出土した鋸または鋤先である。遺存部での全長が20.8cmで先端部が欠損している。10は刀子で、中央部で折れ曲がっている。9は、断面が四角形で短冊

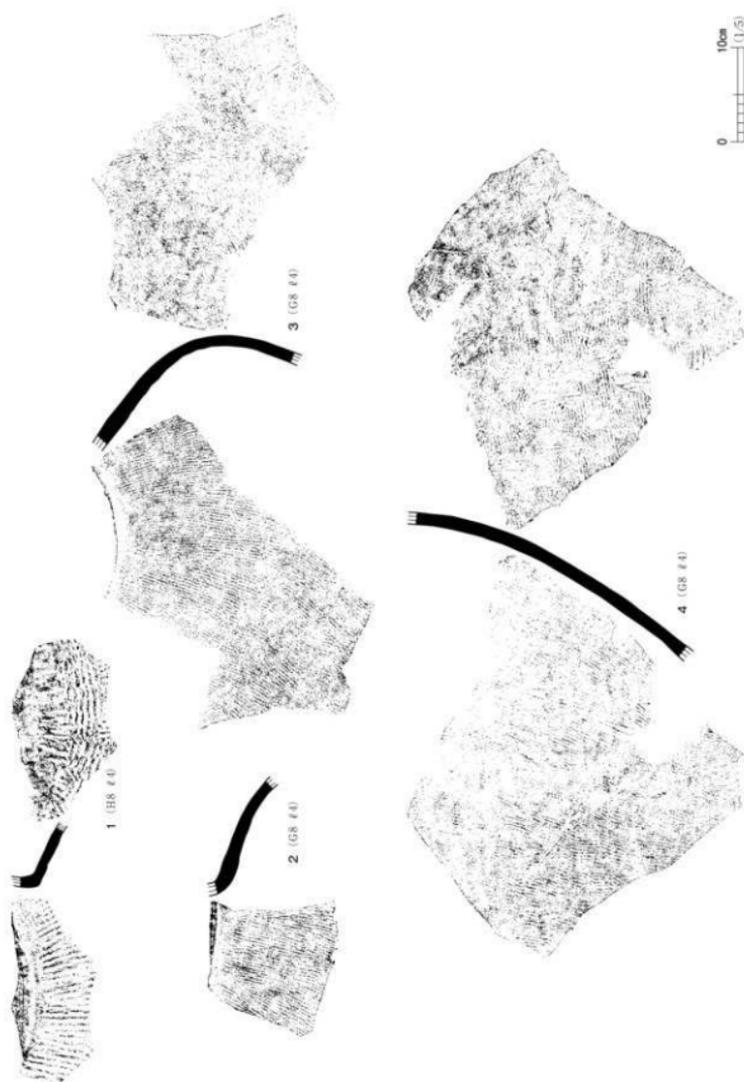


図68 1号流路跡出土遺物 (13) 須恵器

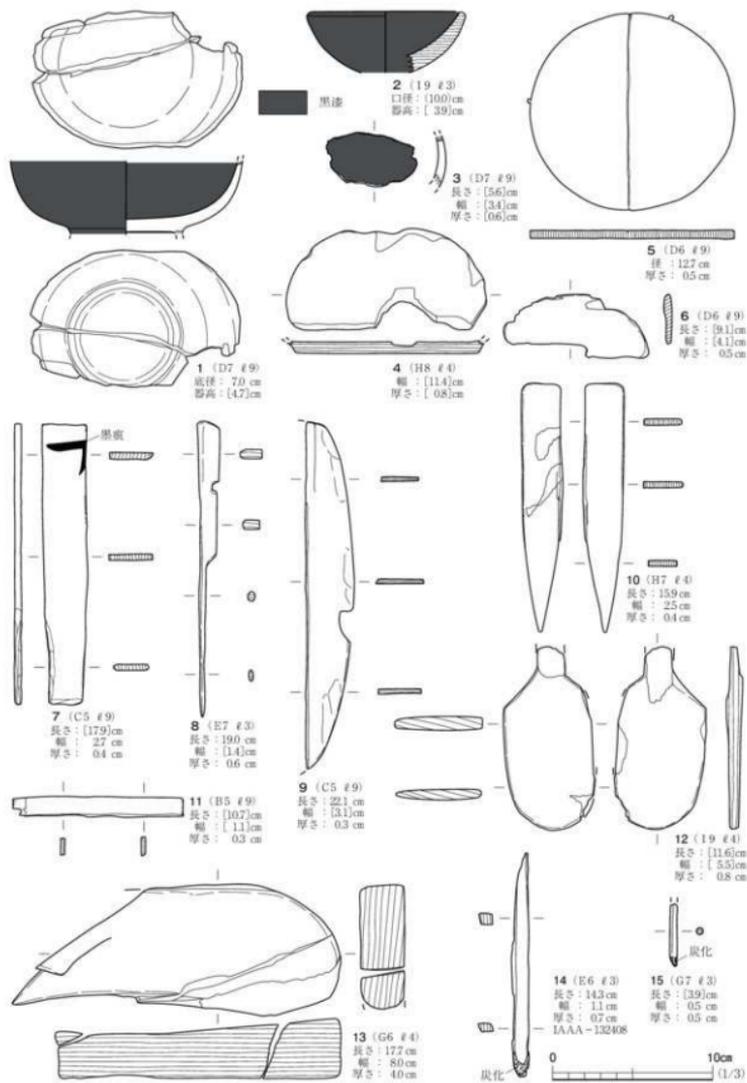


図91 1号流路跡出土遺物(14)木製品

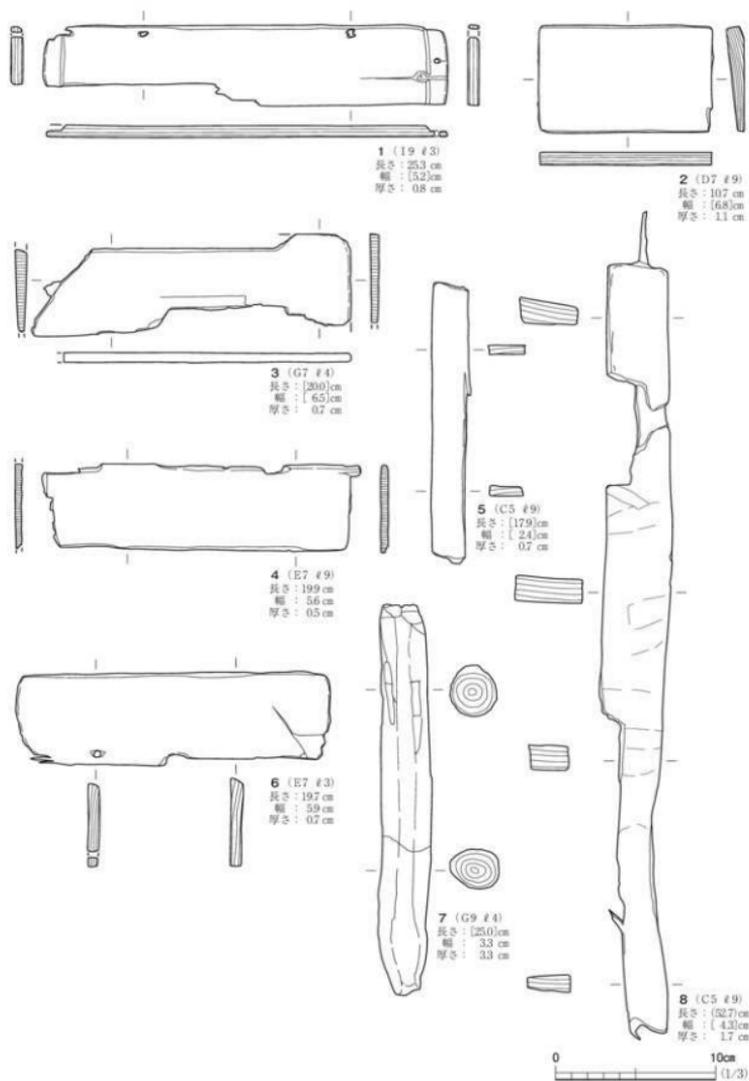


図70 1号流路跡出土遺物 (15) 木製品

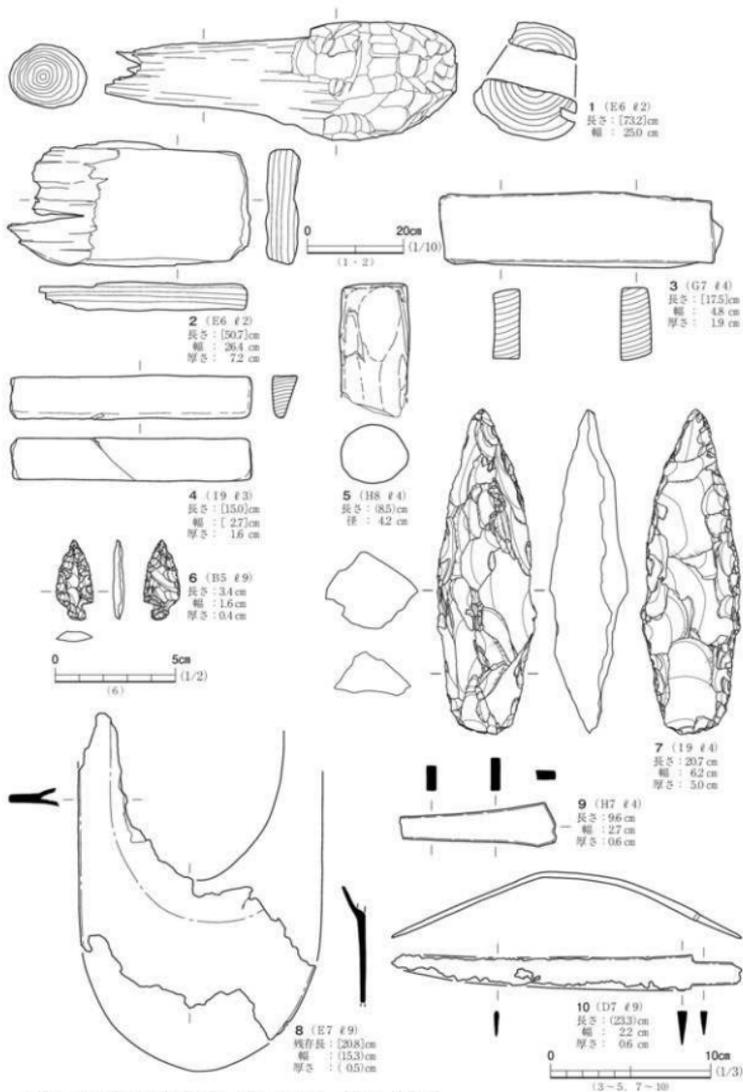


図71 1号流路跡出土遺物 (16) 木製品・石器・鉄製品

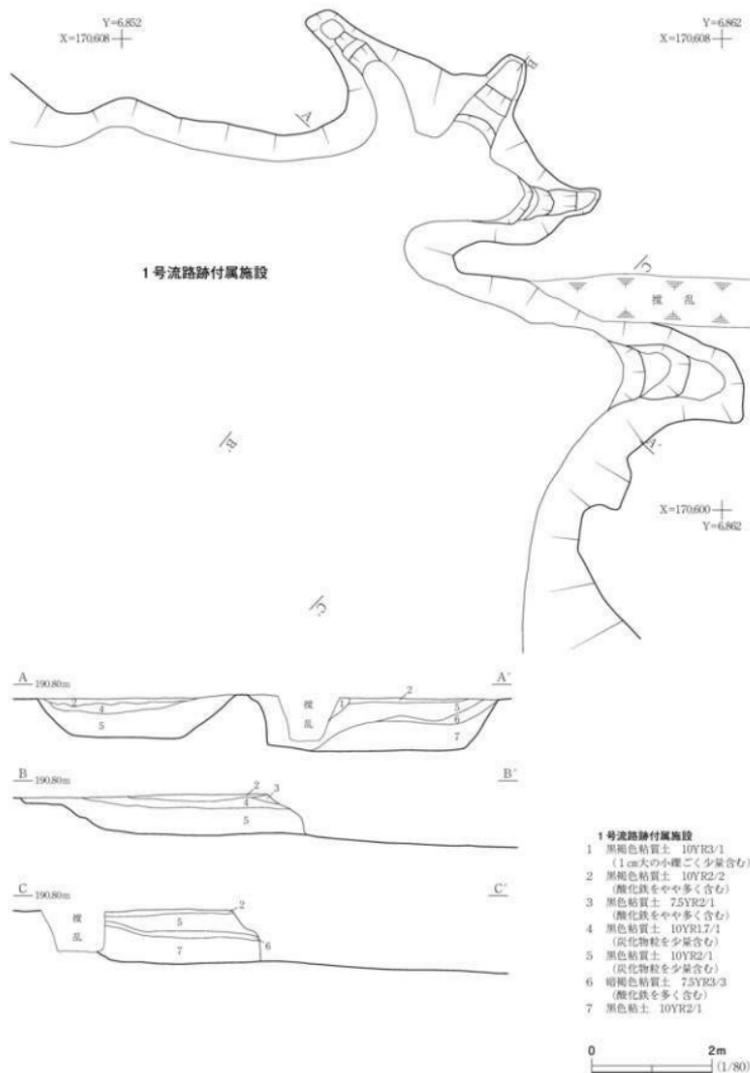


図72 1号流路跡付属施設

形を呈するが、その性格については不明である。

#### 附属施設 (図72, 写真27)

1号流路跡からは、Ⅱ区のJ・K8グリッド付近から附属施設と思われる掘り込みが確認された。付近の壁面は、底面付近から北側に向かって一番緩く立ち上がる箇所になっており、その付近の1号流路跡の検出時に、上面の堆積土が連続しているところから、同一時期の遺構と判断した。

遺構は流路跡の北壁に連続する2か所の突出部となっている。その規模は、開口部分の幅が約11m、そこから北側突出部先端までの長さが4.6m、南側突出部先端までの長さが4.2mとなっている。検出面から底面までの高さが、北側で65cm、南側で96cmとなっている。流路跡底面から附属施設底面は連続するごく緩い緩斜面となっており、北側突出部では3方向にそれが張り出す形となっている。各方向の張り出しには2段のステップ状の平坦部がある。南側突出部でも2段の張り出し状のステップがある。

遺物は、堆積土中からロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。

本遺構は、1号流路跡の河岸に降りる降り口と思われる遺構で、構築された部分が流路跡でも一番緩い立ち上がりを持つ部分であるところから、先に船溜まり等の施設があった可能性がある。その時期は1号流路跡同様、9世紀を中心とする年代と考えられる。また、位置関係から掘立柱建物跡群と同時に存在し利用されていた可能性も考えられる。

#### まとめ

本流路跡の底面礫層からその上面の砂層で出土した遺物は、平安時代9世紀を中心とするものと推定される。また、8世紀後半に機能開始したと思われる2号流路跡よりも新しいことから、本流路跡は9世紀を中心とする年代に機能したものと推定される。また、附属施設が建物跡群側の壁面に構築されている状況等から、北側建物跡群と同時に存在していた可能性も考えられる。(藤谷)

## 2号流路跡

#### 遺構 (図73・74, 写真28～30)

2号流路跡は、Ⅰ区で検出された流路跡で、一部Ⅱ区にも広がっている。Ⅰ区の上面の土坑・ピットを調査する段階で、検出面は北東側の灰黄褐色粘質土(LⅡ)とは異なる検出面となっていた。上面の調査を終了後、サブレンチを設定し、下部の土層を確認したところ、砂層や礫層から須恵器の完形品などの遺物が出土した。そこで、1号流路跡と同様に上部土層を重機で削除し、下部の土層について、手掘りで調査を実施した。

2号流路跡はメインの流路がC・D2グリッド付近のⅠ区北壁から20m程南側で南東方向へ曲がる形状をしている。その南側の1号流路跡との境界までと3号流路跡との間は、河川の氾濫によって形成された礫層の凹凸状地形がある。また、B4グリッド付近の若干の凹凸部分は、東から流れた流路跡の流れによって運ばれた礫を含む層が堆積した部分で更に西に広がることも予想される。

Ⅰ区での流路跡主流の規模は、長さ約48m、幅6.4～11.5mである。壁面の立ち上がりは、東壁

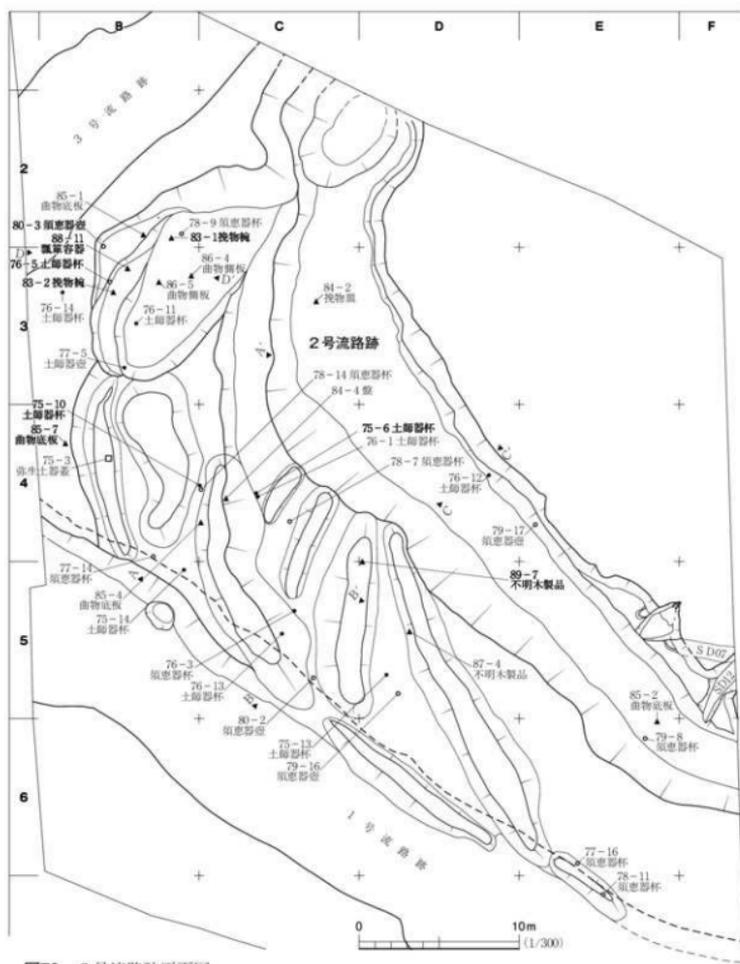


図73 2号流路跡平面図

がやや急で、遺構検出面からの深さは最深部で17m。また、南北の高低差は45cmで北側が低い。堆積土を4層に分層した。このうちℓ1・2が、機能停止後の自然堆積層、ℓ3が流水作用によって堆積した層、ℓ4が底面上の礫層となっている。1号流路跡との重複関係は、I・II区境界の壁断面で観察され、それを切っている。II区については、断面より14m程東側に設置したサブトレ

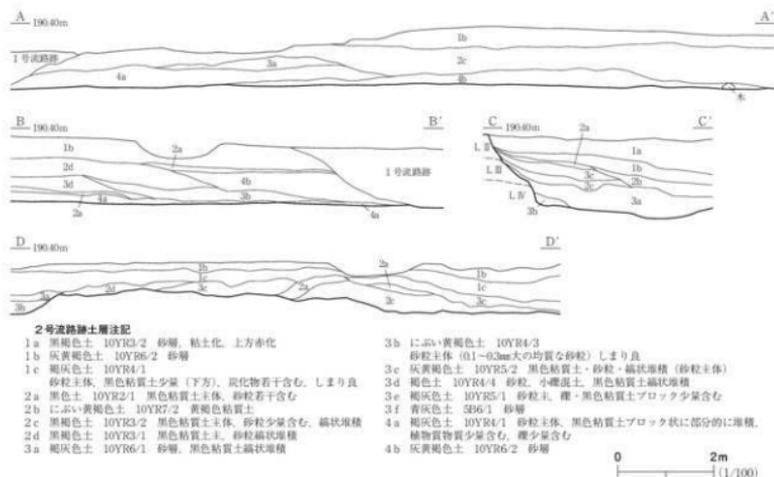


図74 2号流路跡断面図

ンチ断面で重複関係が明確でなかったため、その間で1号流路跡に切られたものと思われる。

**遺物** (図75~89, 写真33~41・43~54)

**縄文・弥生土器** 図75-1は縄文前期後半の鋸歯状の貼り付けを持つ深鉢, 2が弥生土器甕, 3が弥生土器蓋である。

**土師器** 図75-4が古墳時代の高杯の脚部である。図75-5~17, 図76, 図77-1~3が内面黒色処理されたロクロ成形の杯である。底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整されたものがほとんどで、その他、手持ちヘラケズリが施され、底部糸切り痕が残るもの図76-12も出土している。墨書されたものもあり、本遺跡特有の文字「今」が書かれたもの図77-1・2や遺跡の性格に関する文字「北家足」が書かれたもの図76-8もある。図77-4が小型の壺, 図77-5がロクロ成形の小型の甕, 7・9・10がややロクロ成形の長胴甕であり、10には外面にタタキ痕が残されている。図77-6は筒形土器の口縁部である。

**須恵器** 図77-11~16, 図78, 図79-1~6が杯である。口径に対して底径が大ぶりなもの図77-11~13から底径が小ぶりのものまでバラエティーがある。墨書や線刻が認められるものも出土しており、遺跡の性格に関するものに「倉人」図78-3や「田家」図78-9がある。また、図78-14・15は内面に墨痕が残されている。図79-7~9が高台杯, 10が盤である。11は内面に平滑な研磨痕があり墨痕もあるところから、蓋の転用甕であると考えられる。図79-12・13が小型の壺である。図79-14~16, 図80-1~3が長頸瓶で、頸部が明瞭に残るものにはリング状の凸帯が付いている。図80-4は大甕の口縁部, 5・6が底部である。図80-7, 図81・82は大甕ある

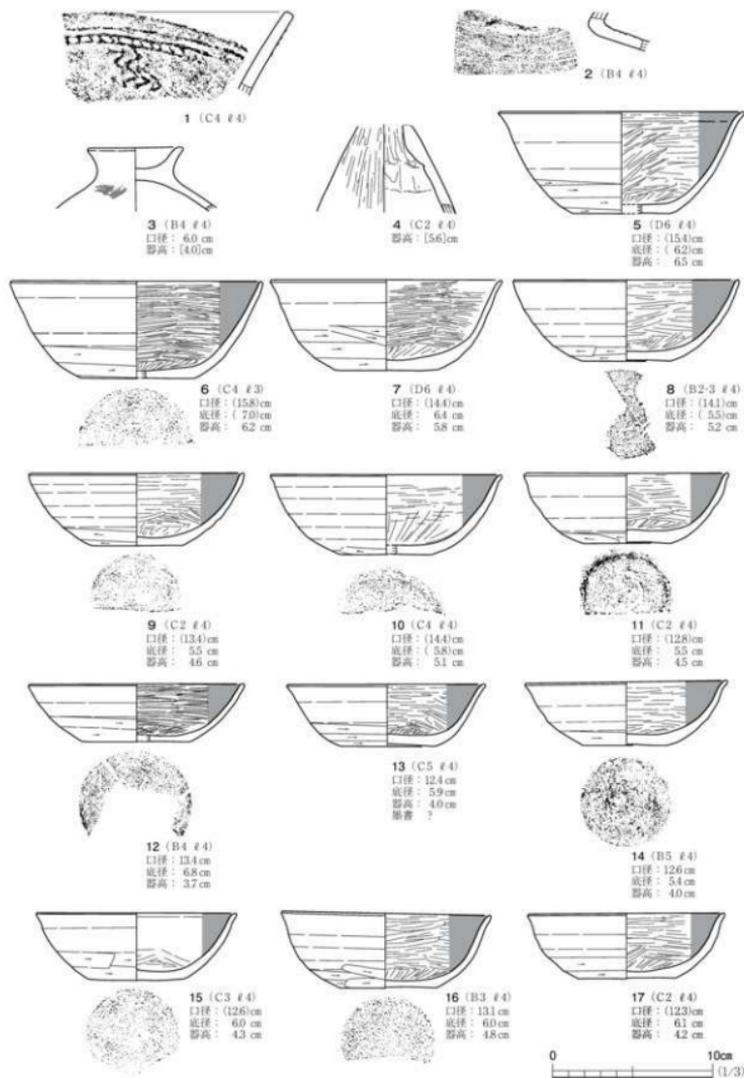


図75 2号流路跡出土遺物 (1) 縄文土器・弥生土器・土師器

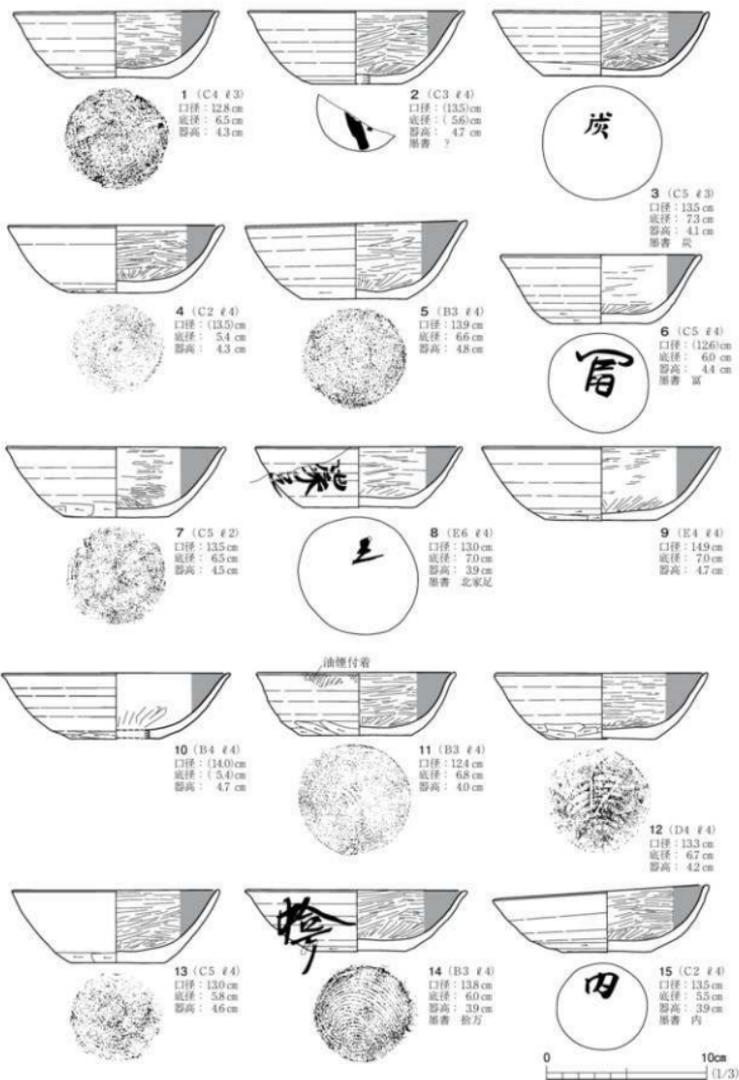


図76 2号流路跡出土遺物(2)土師器

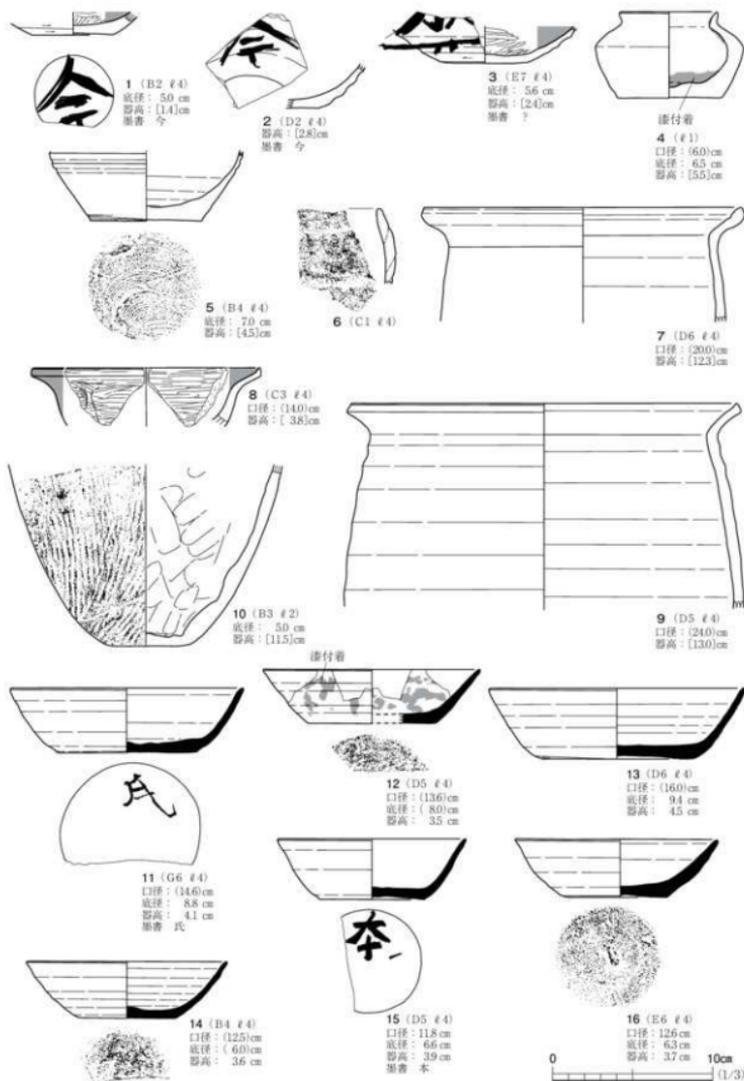


図77 2号流路跡出土遺物(3) 土師器・須恵器

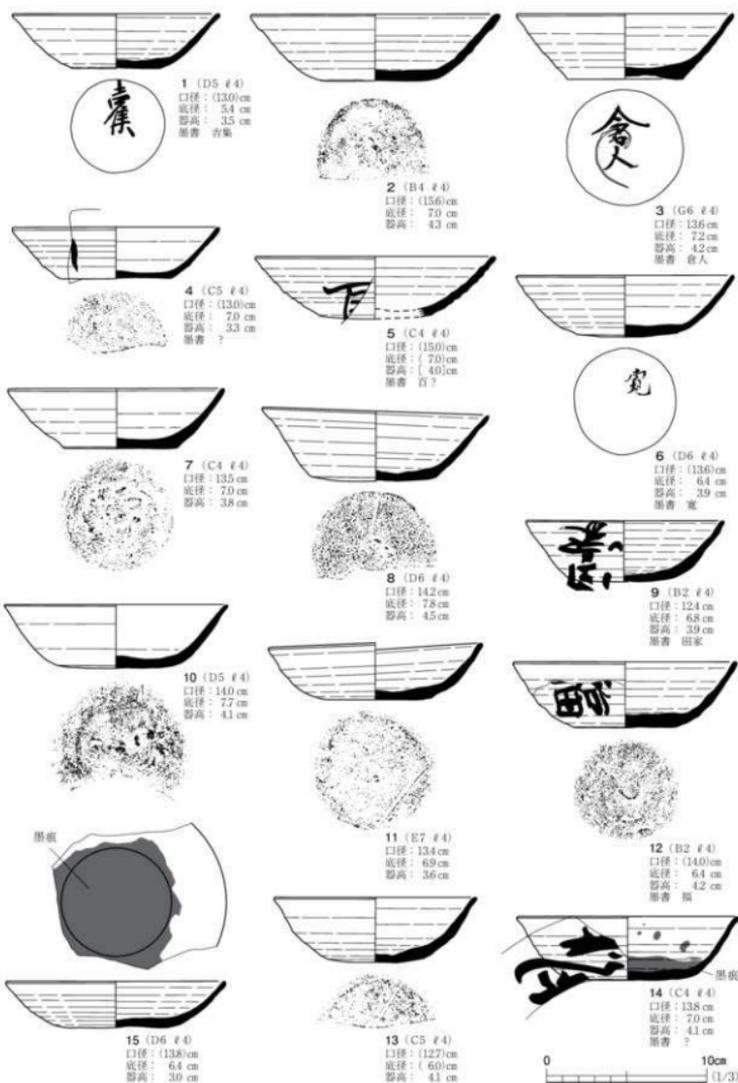


図78 2号流路跡出土遺物(4)須恵器

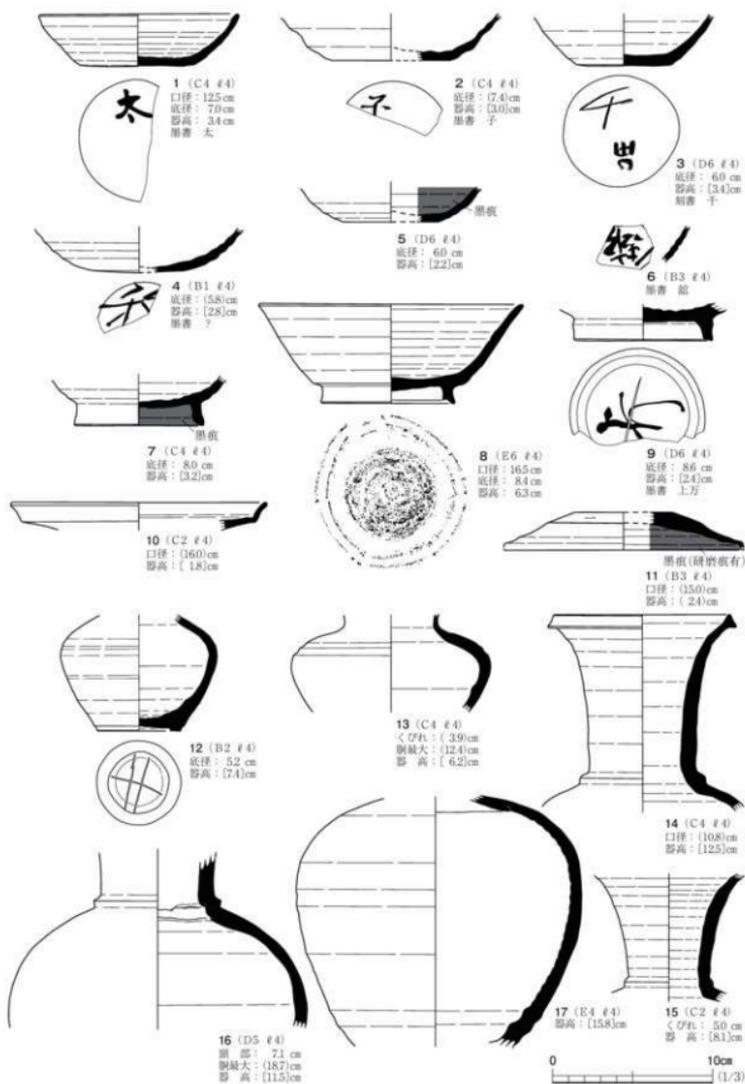


図79 2号流路跡出土遺物 (5) 須恵器

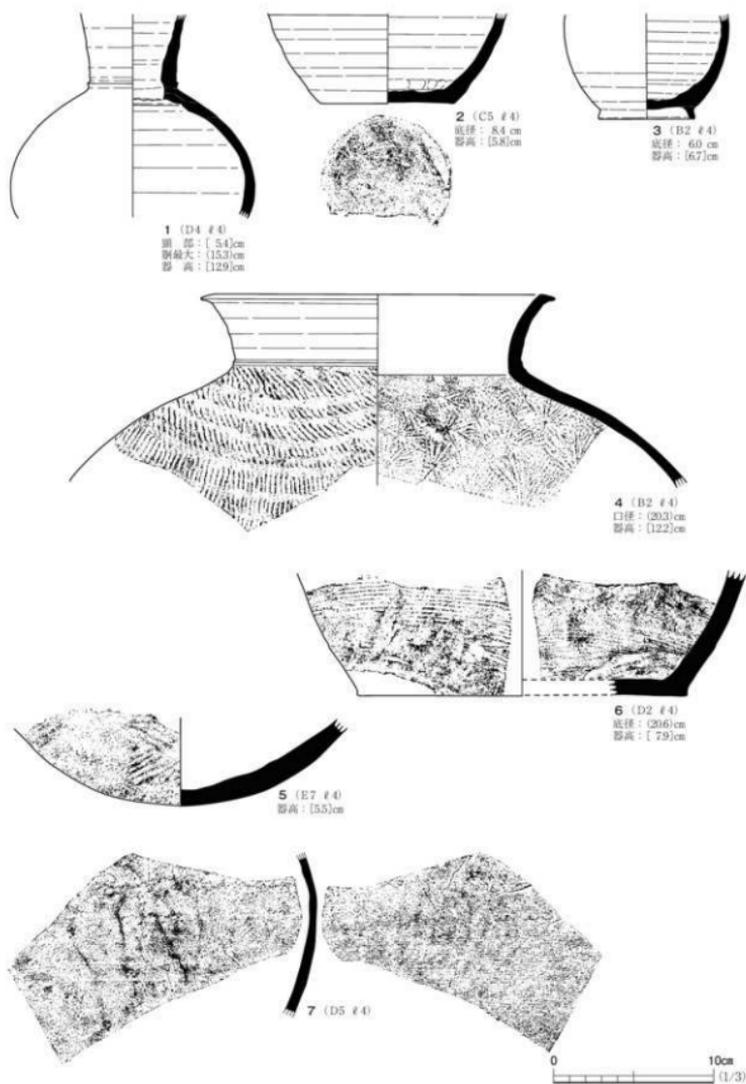


図80 2号流路跡出土遺物 (6) 須恵器

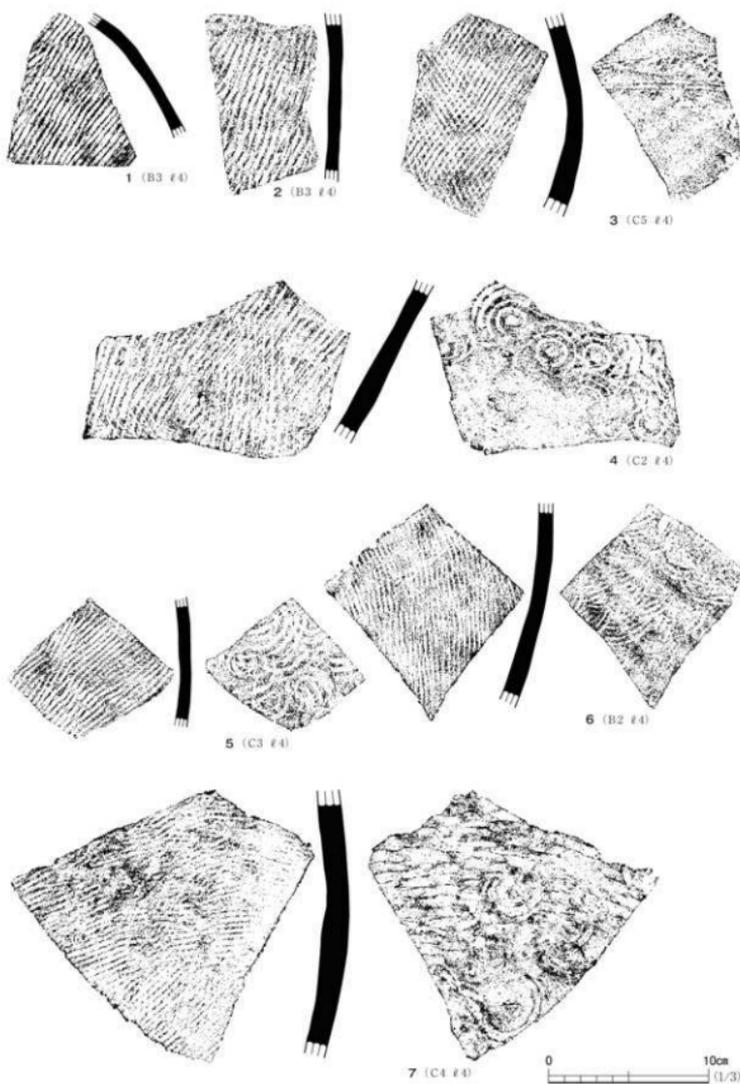


図81 2号流路跡出土遺物 (7) 須恵器

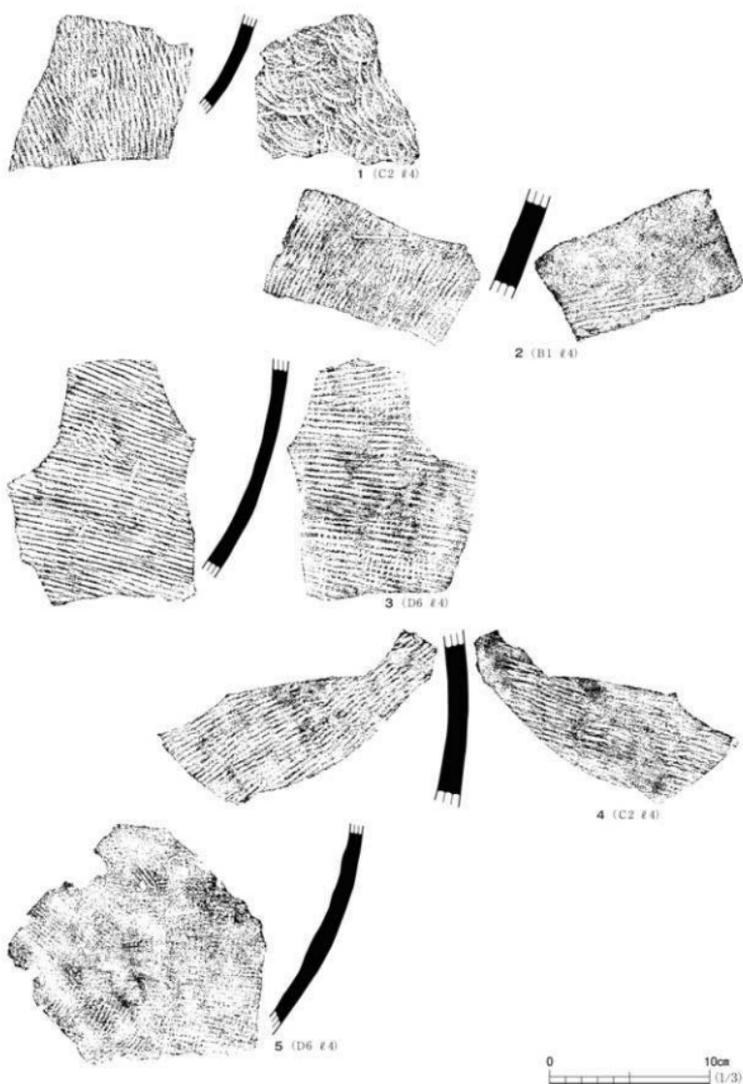


図82 2号流路跡出土遺物(8) 須恵器

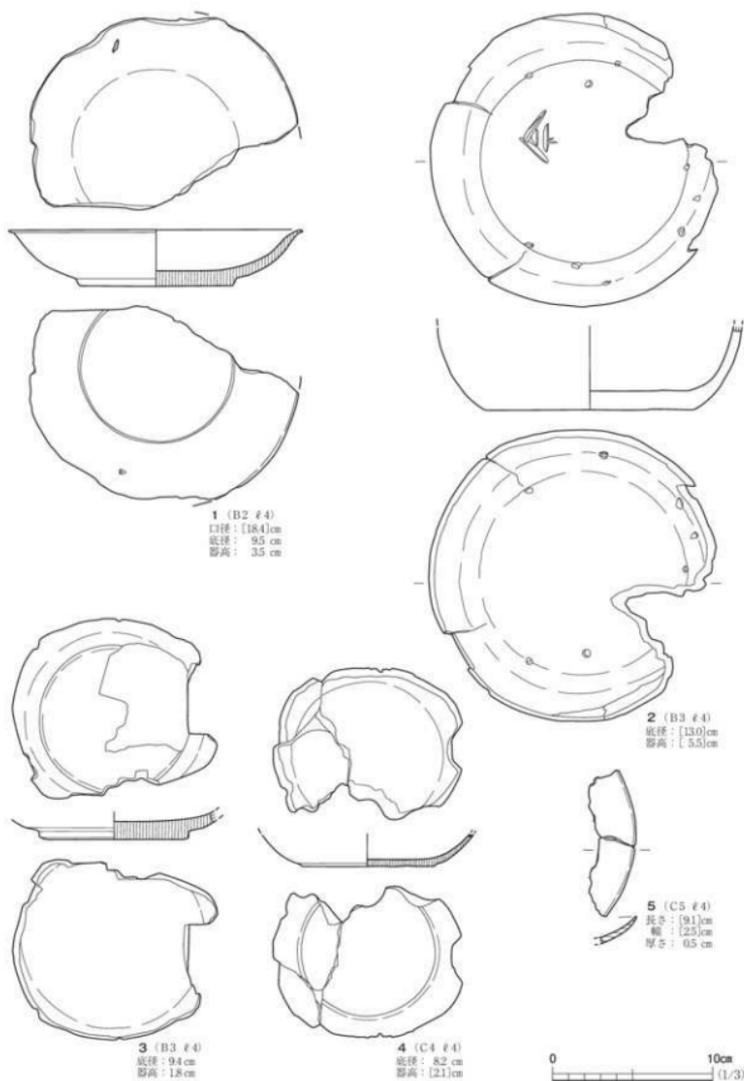


図83 2号流路跡出土遺物(9)木製品

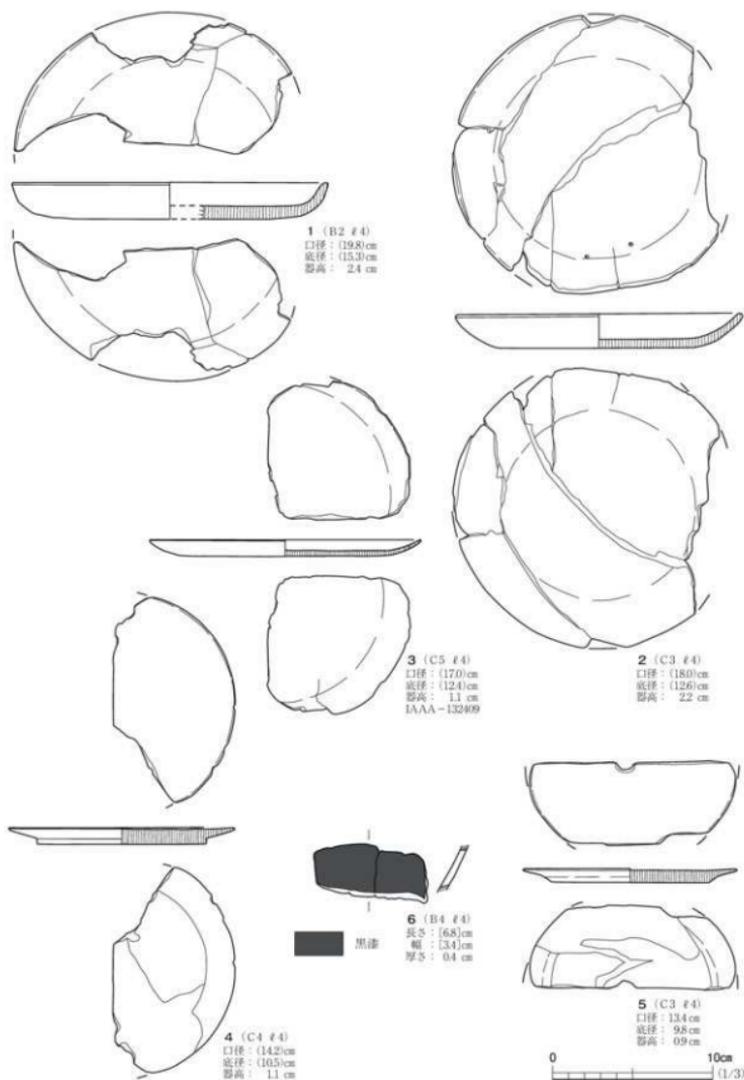


図84 2号流路跡出土遺物 (10) 木製品

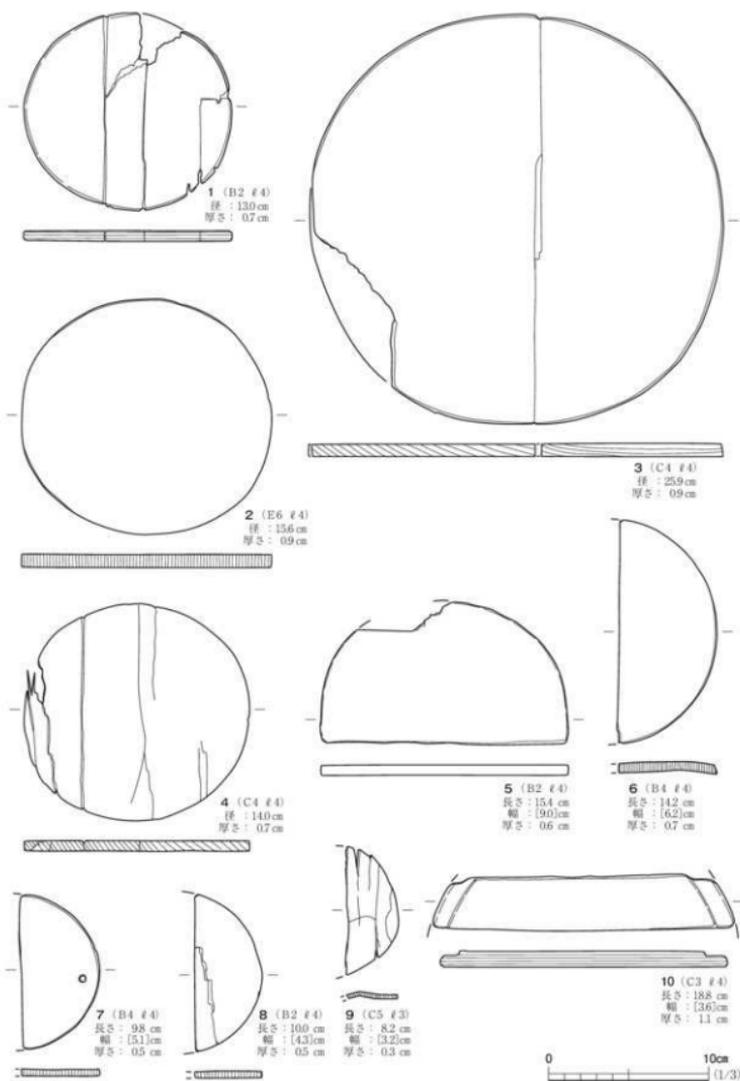


図85 2号流路跡出土遺物 (11) 木製品

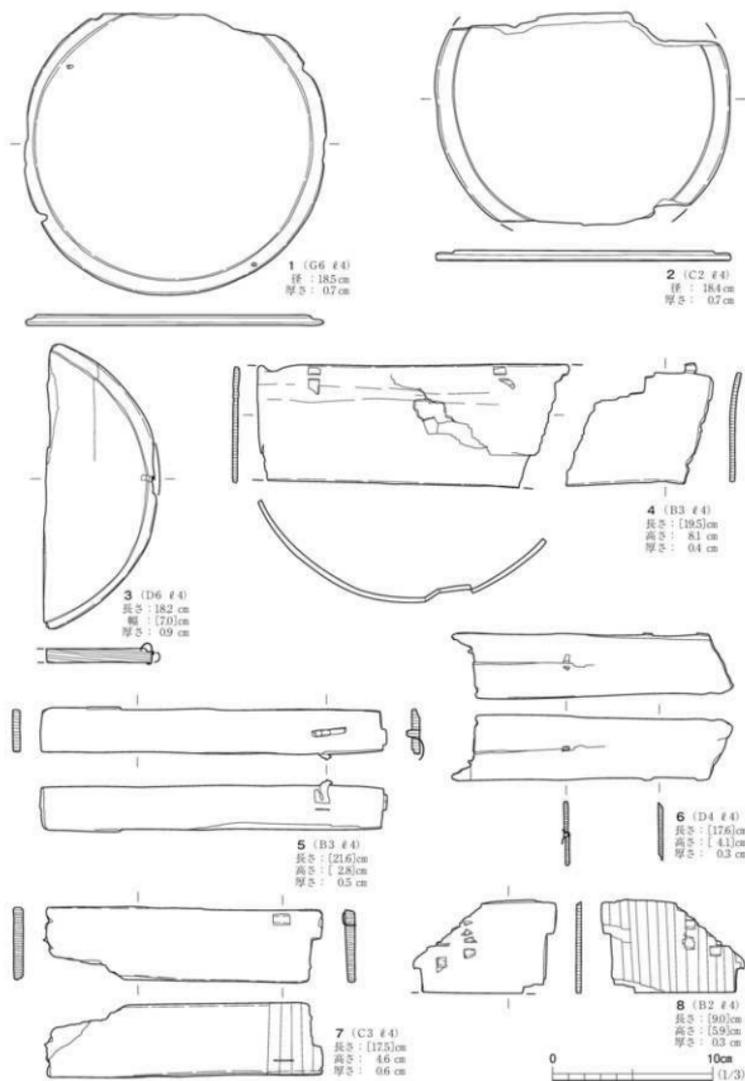


図86 2号流路跡出土遺物(12)木製品

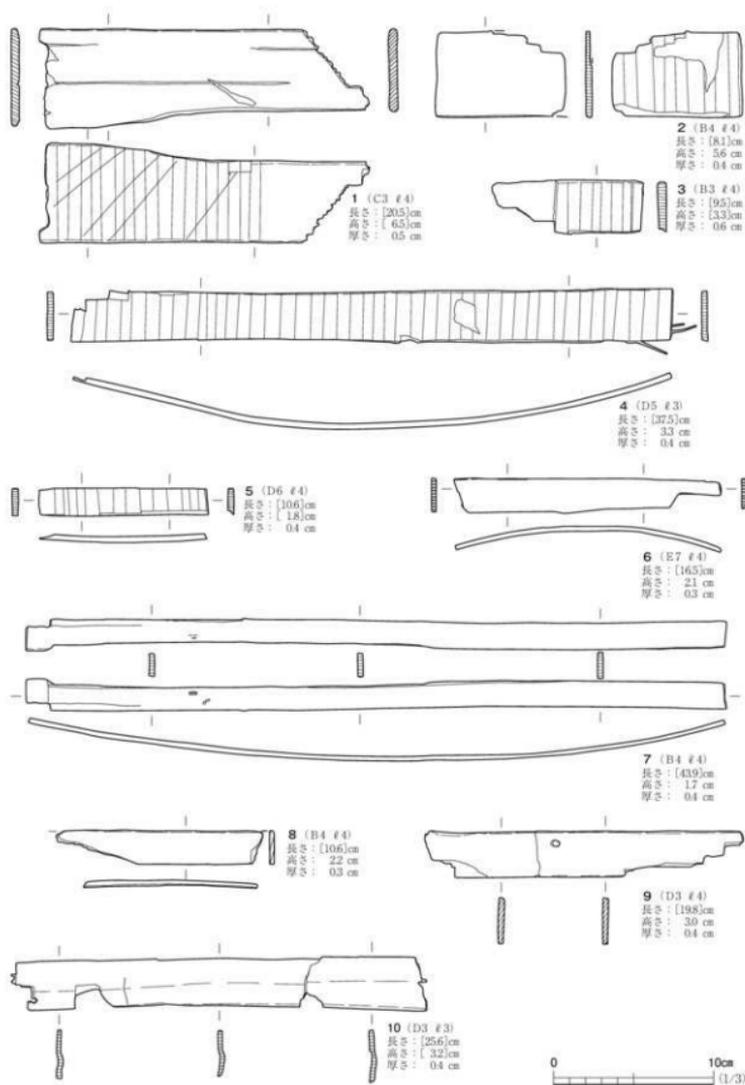


図87 2号流路跡出土遺物 (13) 木製品

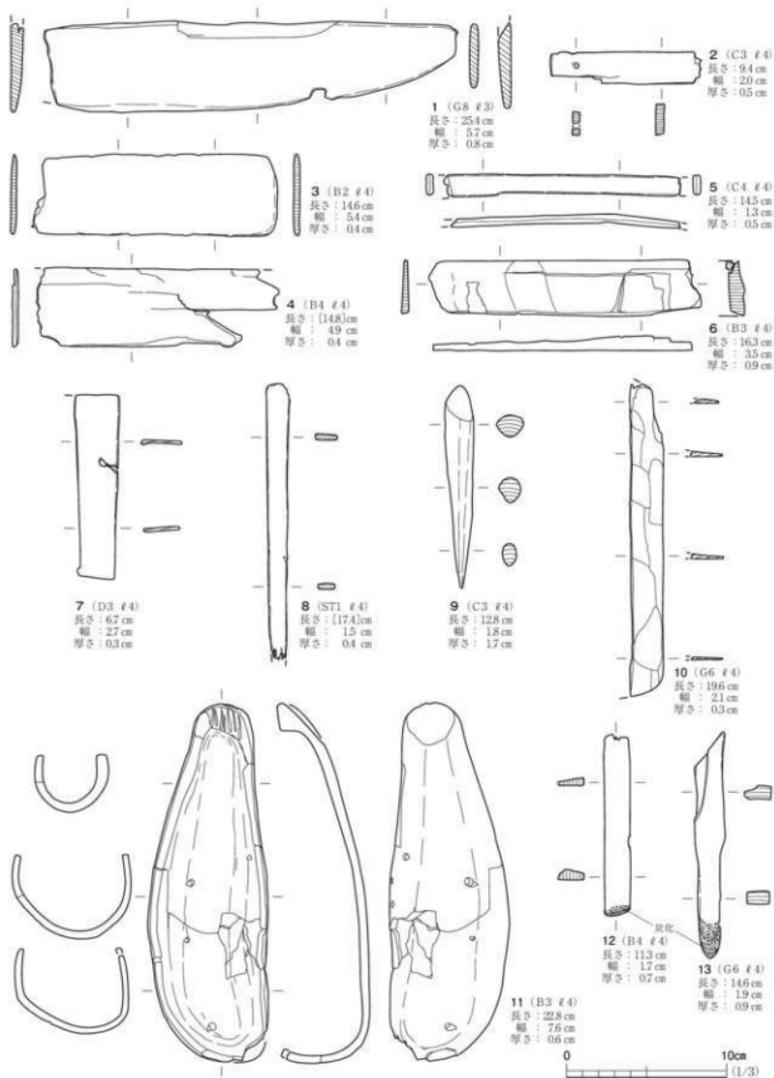


図88 2号流路跡出土遺物 (14) 木製品

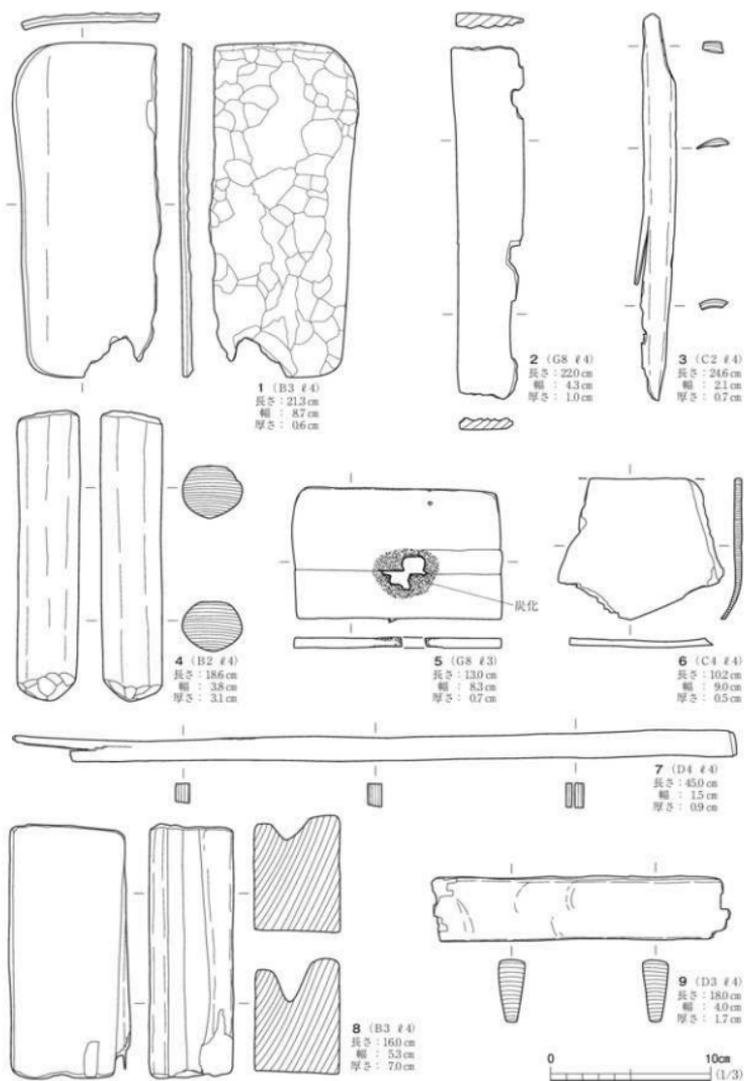


図89 2号流路跡出土遺物 (15) 木製品

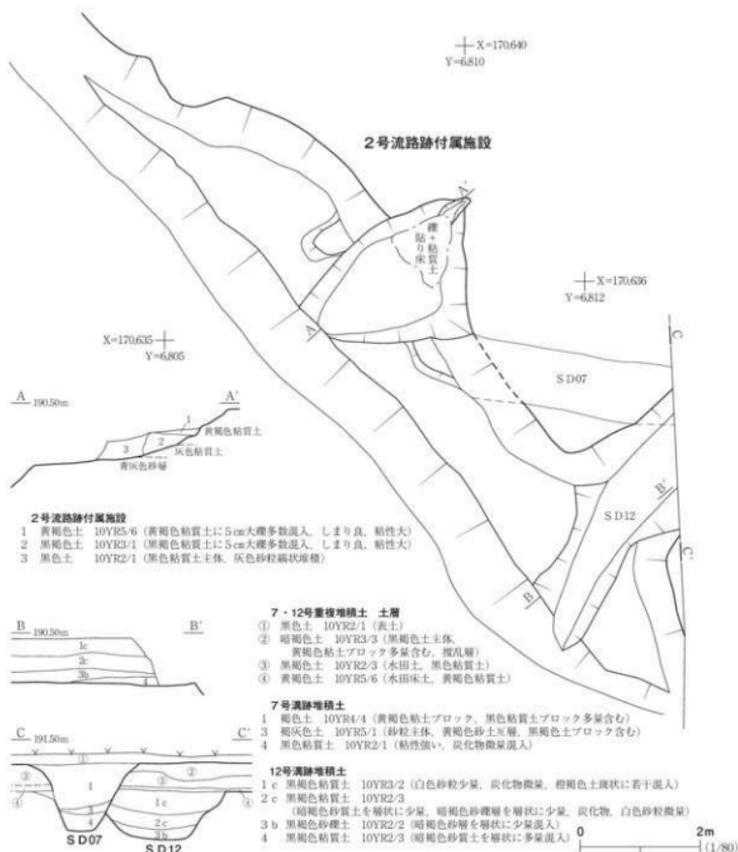


図90 2号流路跡付属施設・12号溝跡接続部

いは糞の体部破片で, 外面にタタキ痕, 内面に当て具痕が残るものである。

**木製品** 図83-1~5, 図84-6が挽物椀で, 図84-6は漆が塗られている。図84-1~3が挽物皿, 4・5が挽物盤である。図85, 図86-1~3が曲物底板である。外周部に段があるものもないものがある。図86-4~8, 図87が曲物側板である。内面にケビキ線の残っているもの図86-8, 図87-1~5や側板を止める木皮が残っているもの図86-5・7・8がある。図88-1は一部にキザミの入る使途不明のものである。図88-2~6は板状木製品である。図88-7・8・10は薄く平らに削られた板状の木製品で畜串になるかもしれない。図88-9は串状木製品である。

11はひょうたんを半裁して作った、なす状を呈する容器。12・13は火付木である。図89-1は樹皮側を使った刳り物の皿である。図89-6も刳り物の皿状木製品である。図89-2・3・7は板状木製品である。図89-4は下部が削られた棒状で、製品の脚部となる可能性がある。図89-5・8は建築に関連した部材で、5は中央部に炭化痕跡がある。8は溝が切つてある。

#### 付属施設 (図90, 写真29)

2号流路跡からも東壁から附属施設と思われる掘り込みが見つかっている。12号溝跡流れ込み部を東側に取り込み、長さ約14m、幅約2mに渡って平坦面が作り出されており、中央よりやや北側には長さ3.3mの一段低い部分が作られている。堆積土は2号流路跡と共通するもので、同時期(8世紀後半頃)に機能していたものと推定される。機能は12号溝跡と2号流路跡を利用するための足場のなものと考えている。

#### まとめ

2号流路跡は、出土遺物と連結する12号溝跡の年代から8世紀後半にはすでに機能していたと考えられる。また、その機能停止時期は、出土遺物に赤焼土器が含まれていないところから、9世紀前半には、その川筋が1号流路跡に変わったものと考えられる。(藤谷)

### 3号流路跡

#### 遺構 (図91, 写真30・31)

3号流路跡は、I区北西隅で検出された流路跡で、西壁から北壁にかけて南西-北東方向で検出された流路跡である。他の流路跡や溝跡と重複関係はなく、周辺には北西側に2号溝跡、東側に2号流路跡が位置している。

調査区内での長さは約16mで、幅は6.5~8.5mとなっている。検出面はLII上面で、検出面からの深さは1.3~1.5mとなっている。壁面の立ち上がりは緩やかで、大きく4層の土層が堆積していた。1・2が上面の自然埋没過程で堆積した層、3が流水作用によって堆積した層、4が底面上に堆積した礫層である。

#### 遺物 (図92~96, 写真43・48・52・53・58)

**縄文土器** 図92-1~3は縄文前期の深鉢と考えられる。

**土師器** 図92-4・5は内面黒色処理・ヘラミガキされたロクロ成形の杯である。8は高台杯である。9は、ロクロ成形の甕である。

**赤焼土器** 図92-6・7は底部に糸切り痕を残し、内外面に調整痕を持たないロクロ成形された杯である。

**須恵器** 図92-10~12は杯で12には底面に墨書がある。13~15が長頸瓶で、13が頸部、14・15が底部の破片である。図92-16・17, 図93は大甕で、外面にタケキ痕、内面に当て具痕がある。

**木製品** 図94-1~3は挽物椀である。4~8, 図95-1~8が曲物側板で、このうち図94-4以外は同一個体である。図95-9は削り出して作られた下駄で鼻緒の孔が3か所が残っている。

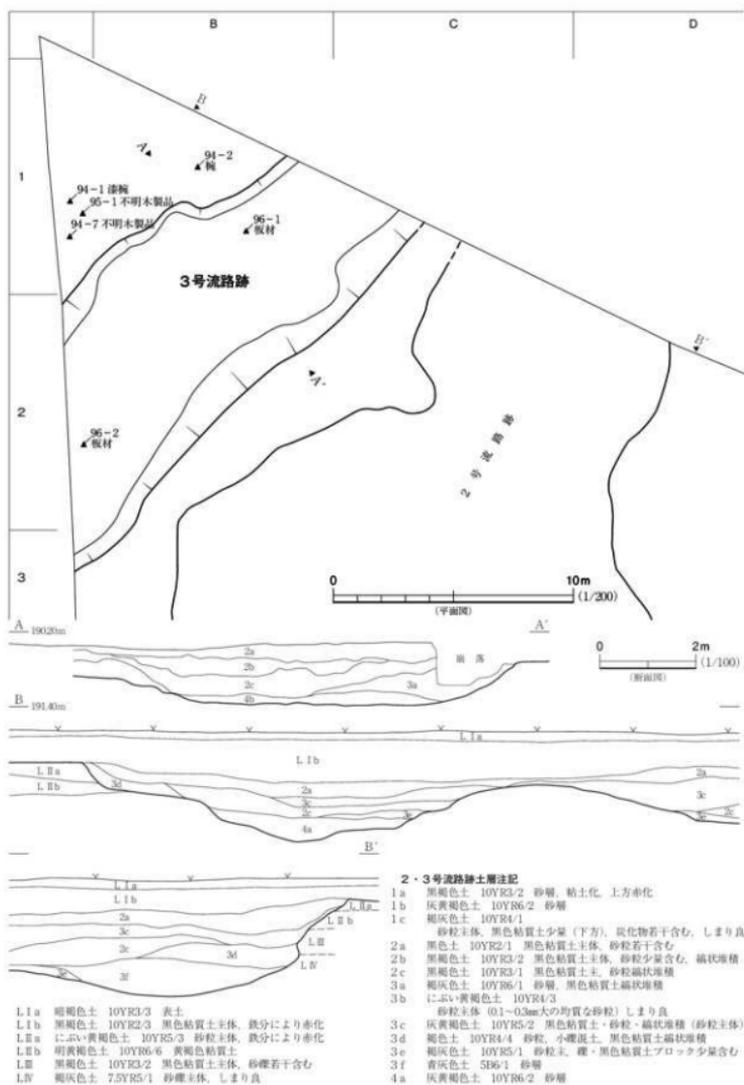


図91 3号流路跡

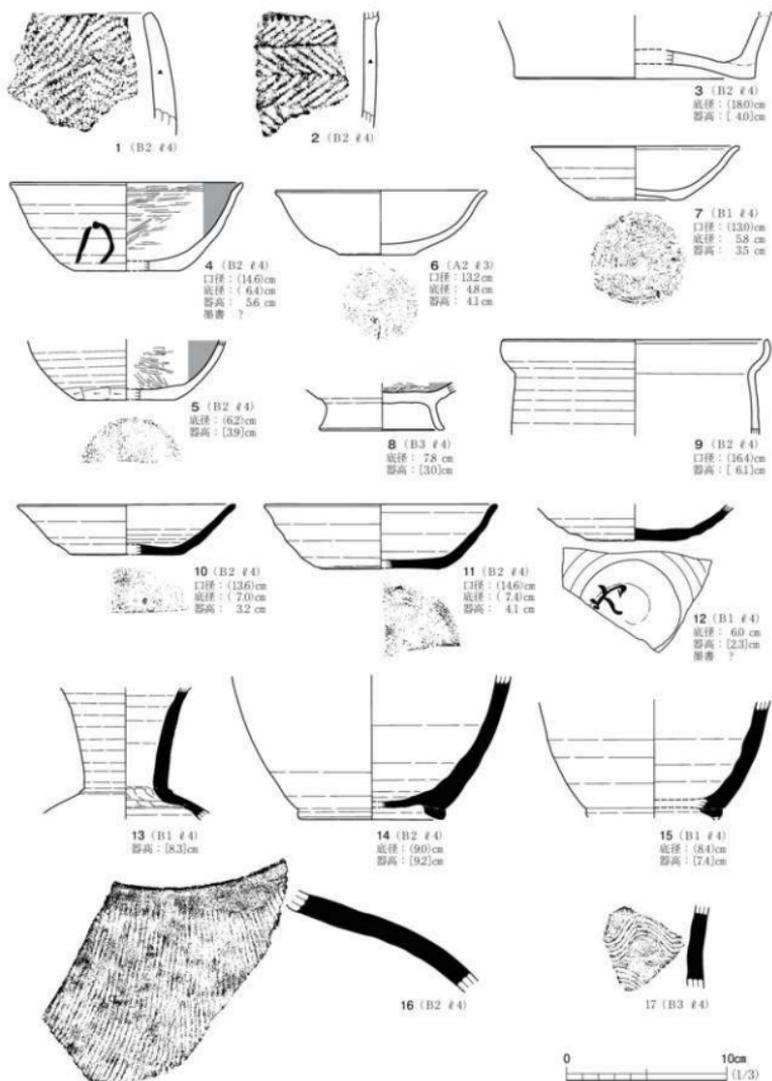


図92 3号流路跡出土遺物 (1) 縄文土器・土師器・須恵器

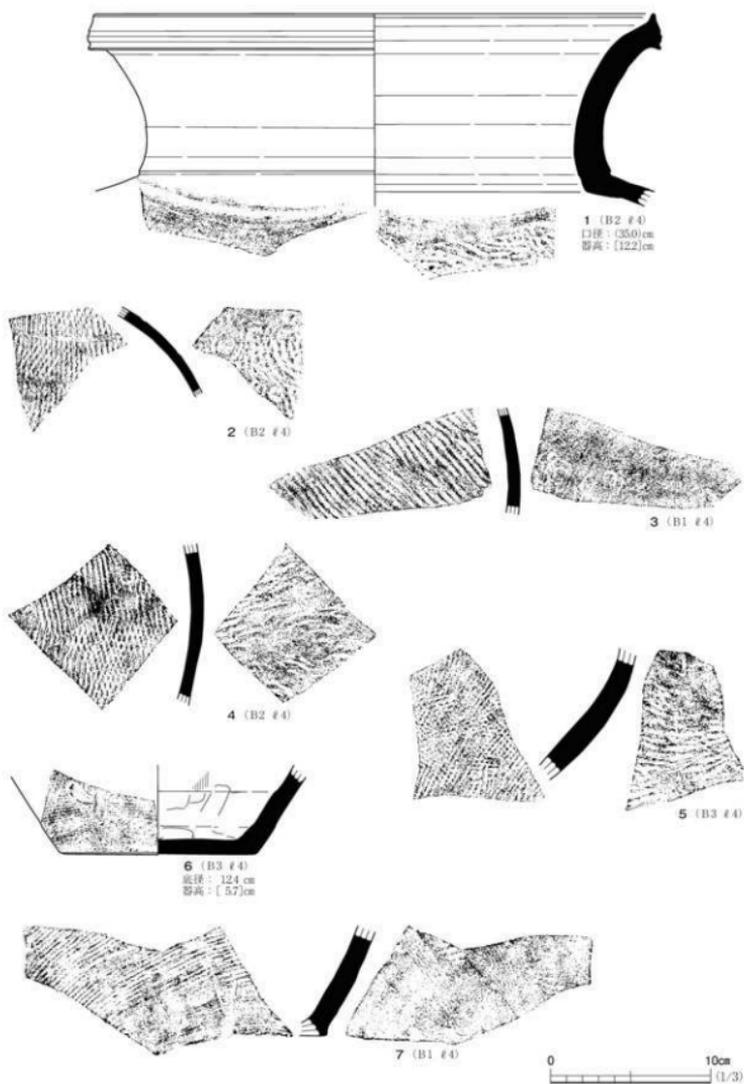


図93 3号流路跡出土遺物(2)須恵器

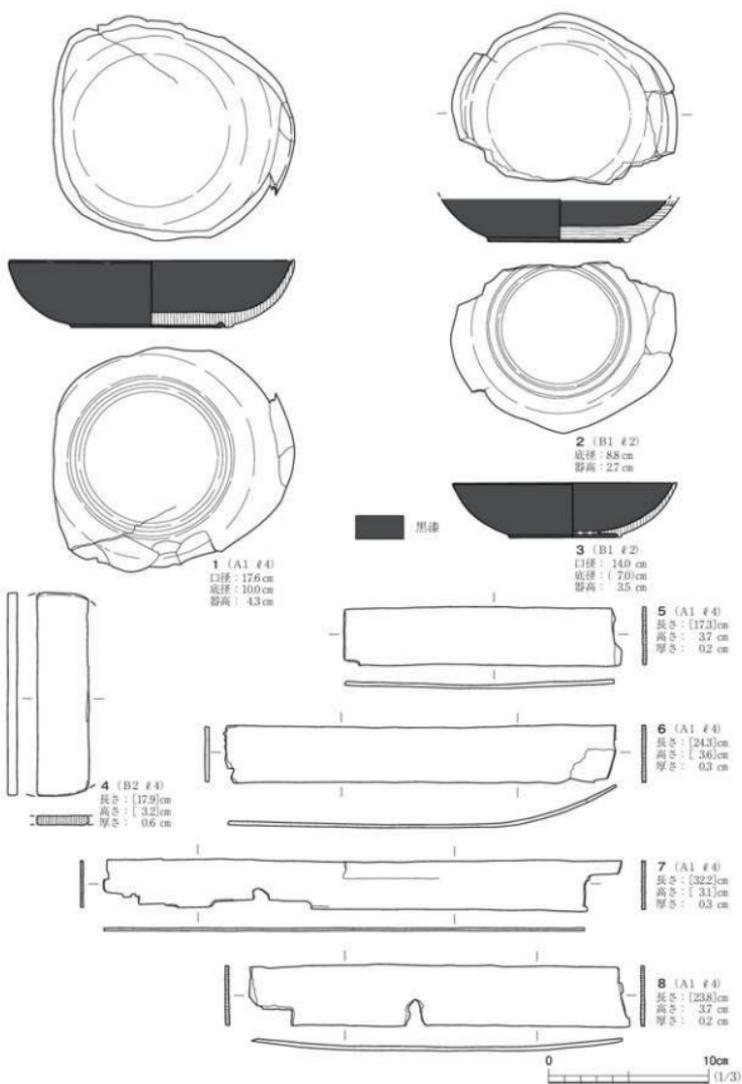


図94 3号流路跡出土遺物(3)木製品

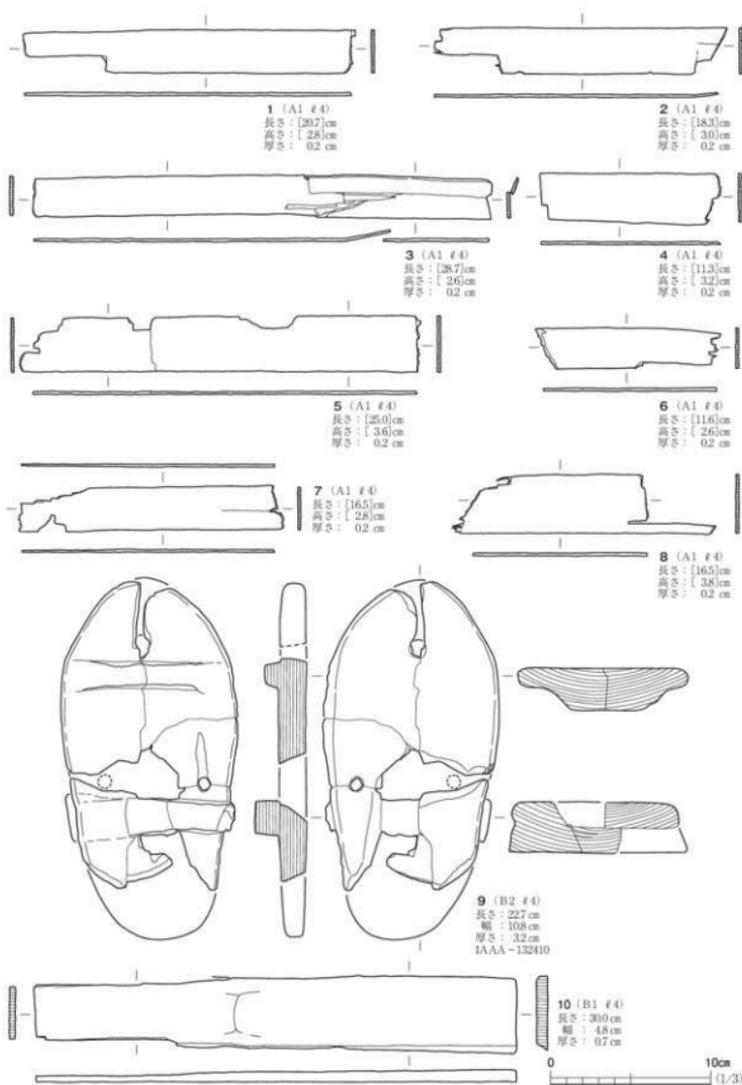


図95 3号流路跡出土遺物(4)木製品

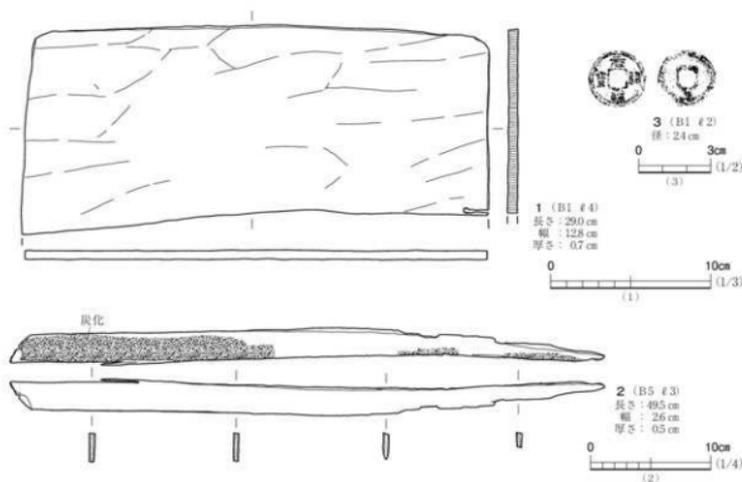


図96 3号流路跡出土遺物 (5) 木製品・古銭

図95-10、図96-1・2は板状の木製品で、1にはケズリの痕跡が残されている。

古 銭 図96-3は北宋銭の「元通寶」で、11世紀末に铸造されたものである。

#### まとめ

3号流路跡は、最下層の礫層から赤焼土器が出土しており、他の流路跡よりも新しい時期の流路である可能性がある。また、埋没過程の堆積土中から12世紀後半以降に流通した北宋銭が出土しているところから、埋まりきったのはそれ以降の年代と思われる。(藤 谷)

## 第8節 性格不明遺構

### 1号性格不明遺構 SX01 (図97・98、写真32)

Ⅲ区の北東端、O6・P6グリッドに位置する。検出面はLⅡ上面である。遺構は南側の一部を確認したのみで、大半は北東側調査区外に延びるものと考えられる。南側2.7mに29号土坑、南西1.5mに30号土坑が位置する。

形状や規模は調査区外に延びるため明確ではないが、東西方向にやや湾曲して延びる溝状の遺構の南東部に、ランダムに重複して掘られた土坑状の遺構が接続するような形状で、調査区内での規模は、東西12.6m、南北5.6mである。溝状の部分には括れがあり、西側で長さ5m、幅2m、深さは西側で25cm、東に向かって深くなり45cmとなる。東側は幅3.5mと広く、深さは40cm前後で、

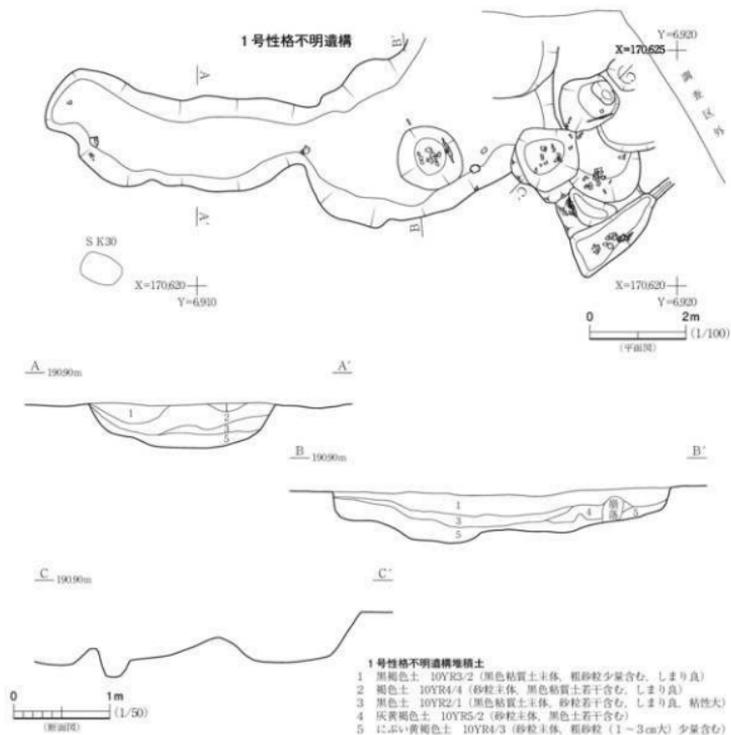


図97 1号性格不明遺構

北東方向に湾曲していく。南側底面には直径1.5m、深さ20cmほどの鍋底状の窪みが確認されている。南東部分は底面が多数の土坑が重複するような凹凸となるものの、南辺・西辺とも直線的である。検出面からの深さは20～70cmとさまざまで、北東ほど深くなる傾向が認められる。

堆積土については、溝状の部分の中央と西側の2本のセクションを図示し5層に分層した。西側で①と③の間に砂粒主体で黒色粘質土を若干含む②の堆積がみられるが、基本的には砂粒を主体とする④・⑤が堆積した後、粘性のある黒色土を主体とする①・③が堆積しており、自然堆積と考えられる。南東部分については、堆積土からは明確な先後関係は認められなかった。基本的には溝状部分の堆積と同じく⑤が堆積した後、①・③とはほぼ同じ黒色粘質土が堆積していた。

遺物は、破片資料であるが、壺・高杯・小型器台・甕などの土師器が多数出土している。遺構内から万遍なく出土しており、特に東側からの出土が多い。摩滅が著しく接合は難しいが、中央の土

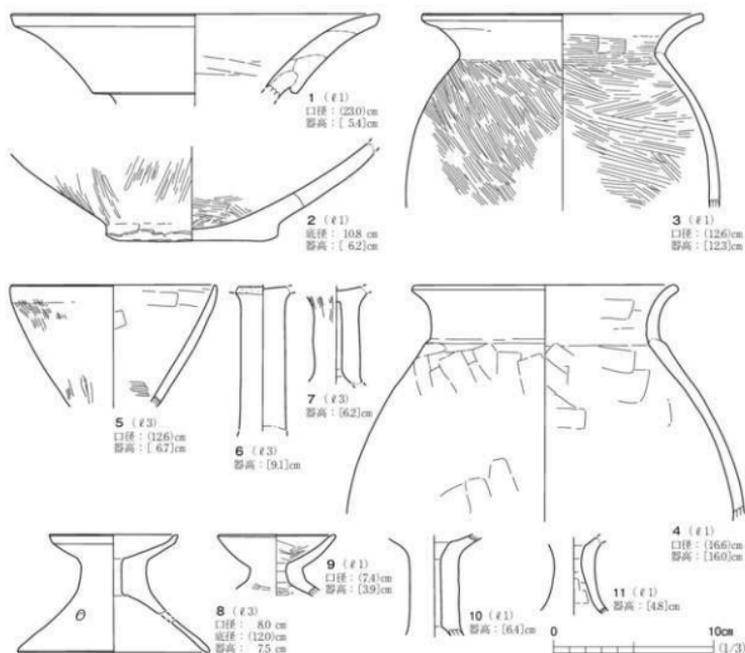


図98 1号性格不明遺構出土遺物 土師器・高杯

坑状の部分には壺，東側には5の小型壺や3の甕などの破片がまとめて出土した。

図98-1・2は壺の破片で，1は二重口縁部，2は外面にヘラミガキ，内面にハケメが施される底部の破片である。3・4は甕で，3は口唇部に面取りがみられ，胴部内外面にはハケメが施される。5は直口壺の口縁部で，直接接合しないが付近から胴部破片も出土している。6・7は高杯の柱状脚部で，6は柱状のものである。8～11は小型器台。8・9は器受部から裾が大きく広がるタイプ，8は唯一全形がうかがえるもので，裾部には円孔が穿たれている。10・11は柱状タイプの脚部である。

本遺構は，出土遺物から本調査区内唯一の古墳時代前期の遺構と考えられる。しかし，性格については，削平された周溝の一部とも考えられるものの，南東の凹凸部分からも同時期の遺物が出土していること，調査した部分が遺構全体の一部であることなどから，不明とする。（後藤）

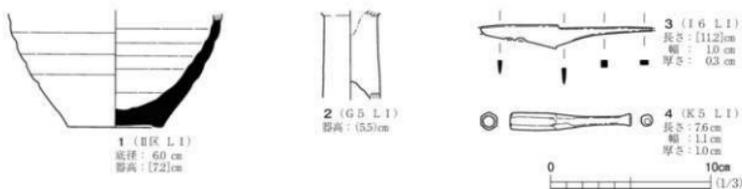


図99 遺構外出土遺物 土師器・須恵器・鉄製品

## 第9節 ピット群と遺構外出土遺物

第8節まで記載した遺構の他に、各調査区からはピットが検出されている。以下で調査区ごとに概観したい。

I区では、北半部に集中する傾向があり、C・D3グリッド付近で一帯濃密な分布が認められる。ピットの径は25cm前後、深さは20cm前後のものが多く、明確な柱痕を持つものはC3グリッドの1個のみで、他のものに柱痕跡は認められなかった。検出面は1・2号流路跡の堆積土上にあるものは、その堆積土上面、それ以外はLⅡとなっている。また、中世のものと思われる土坑群の分布とも重なりが認められた。これらピット群の作られた時期は、土坑同様中世と推定できる。その性格については、配列が認められず建物とする積極的な根拠に乏しい。しかし、建物群の一部となる可能性を完全に否定することはできないと考えられる。

Ⅱ区では、1・2号掘立柱建物跡周辺と3・4号掘立柱建物跡西側に分布がある。遺構検出面はLⅡ上面となっており、堆積土は他の平安時代の建物跡と近似するものであった。建物跡周辺のピットについては、建物跡に関連する性格が推定される。また、3・4号建物跡西側に分布するピットについては、完全な配列が認められず、堆積土にも若干の違いがあったところから平安時代の建物跡として報告しなかったが、その可能性については残るものと考えている。

Ⅲ区では、LⅡ上面で検出されており、7号掘立柱建物跡周辺と27号土坑周辺に分布している。建物跡周辺のピットについては、その柱穴と堆積土が共通しており、建物跡に関連する遺構と考えられる。27号土坑周辺のピットについては、時期、性格ともに不明である。

今回の調査では、遺構検出時に遺構外からも遺物が出土している。主要なものを図99に図示した。図99-1は、須恵器壺類の体部下半から底部にかけての資料で、内外面に明瞭なロクロナデの痕跡が残されている。2は古墳時代の土師器高杯の脚部である。3は刀子で刃部の遺存長が5cm、茎部の長さが5.3cmと茎部がやや長い形状を呈している。4はキセルの吸い口部分で、全長が7.6cm、最大径が1.1cmである。

(藤谷)

## 第3章 総括

### 第1節 遺物について

今回の調査では、特に流路跡や溝跡から大量の遺物が出土している。これらの遺物について、ある程度の年代を推定するとともに、大量に出土した墨書土器についても簡単にまとめた。

#### 12号溝跡出土遺物（図100上段）

1・9号掘立柱建物跡に切られている。調査区の中でも古い段階の遺構である。土師器杯では、非ロクロ成形のものが含まれていた。須恵器杯では底径が大きく、器高が低いタイプのものが中心となる。須恵器高台杯では、体部下端がやや膨らむ形態のものがある。蓋では、体部上半から摘み部にかけてやや丸みを帯びる形態のものがある。長頸瓶では頸が細く口縁の広がり弱いものがある。これらの遺物は、8世紀後半の南原33号窯に比定される時期のものであると考えられる。

#### 2号流路跡底面礫層出土遺物（図100中段）

断面の状況から1号流路跡より古いもので、土師器杯では、含まれているほとんどが底部から体部の1/3程度まで回転ヘラズリ調整されており、中には器高が高いものもある。土師器甕では、

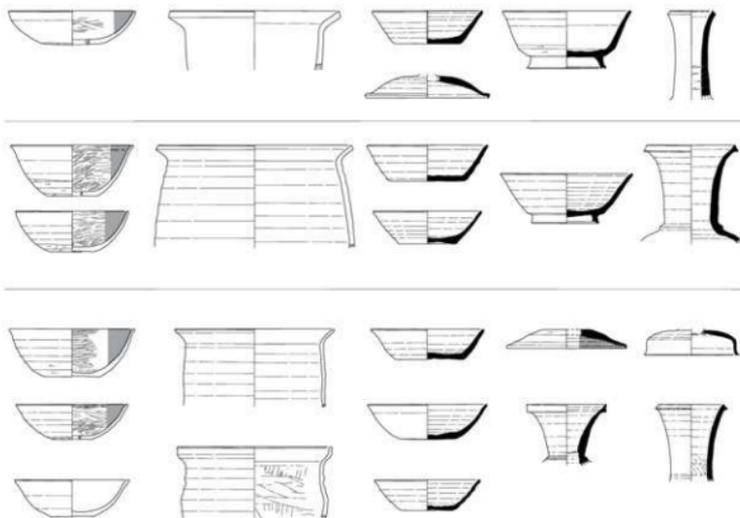


図100 12号溝跡、1・2号流路跡出土土器

口縁部が「く」の字状に括れ、口縁外面を面取りしているものである。須恵器杯では、12号溝跡同様に口径に対して底径が大きく、器高が低いタイプのものや、ほぼ同様の器高で口径に対して底径がやや小さめのものがある。また、須恵器高台杯では、高台部と体部との境界から直線的に開く形態である。須恵器長頸瓶では、頸部にリング状の凸帯が巡り、口縁部の上部がやや開く形態である。一部に8世紀後半と推定されるものがあるが、9世紀前半頃を中心とする年代のものも多く、機能停止する時期は9世紀中頃と推定される。

#### 1号流路跡底面礫層出土遺物（図100下段）

重複関係により2号流路跡を切っているものである。土師器杯では、2号溝跡にみられた器高が高く、体部下半に回転ヘラケズリ調整されるものがある。他に器高が高くなく、体部端に回転ヘラケズリが施されたもの、体部下端に手持ちヘラケズリが施されたものや無調整のものがある。また、内外面に再調整を施さない赤焼土器杯もある。土師器甕では、口縁部が「く」の字状に反外するものに加えて、口縁部をつまみ上げるタイプのものも出現する。須恵器杯では、12号溝跡出土の底径が大きく、器高が低いタイプのもの以外に、器形にかなりバラエティーが認められる。須恵器長頸瓶では、頸部が細く口縁部の反外が弱いものと頸部から口縁部に向けてやや広がる形態のものがある。概ね9世紀半ば～後半を中心とする年代のものが多くを占めるが、古くは8世紀後半のものがあり、新しいものでは10世紀以降と思われるものも含まれる。

#### 墨書土器について

今回の調査で墨書土器(線刻文字含む)は、合計186点出土しており、その中の82点を報告書に収録した。1～2文字の書かれているものの文字別の一覧を表1にまとめた。文字数で最も多いのが「今」で、墨書土器以外にも木製品の挽物椀に線刻されたものもあり、本遺跡の特徴ともなっている。本年度調査した隣接する西木流C遺跡からは「樟 今来」と線刻された須恵器も出土しており、共通する文字として興味深い。複数出土の文字には「中」「氏」「上」「勸長?」「吉集」「平」「富」「千」があり、吉祥句的なものが多い。

1点のみの出土品の中には、遺跡の性格の手がかりとなるものが含まれている。「北家」「田家」「館」は建物を示すもの、「倉人」「吏」は役職等を示すもの、「戸主」は律令制下での戸籍単位を示すものと考えられる。(藤谷)

表1 墨書土器一覧表

| 文字   | 点数 | 文字 | 点数 | 文字 | 点数 |
|------|----|----|----|----|----|
| 今    | 11 | 氏  | 3  | 内  | 1  |
| 中    | 3  | 子  | 1  | 本  | 1  |
| 上    | 2  | 得千 | 1  | 百  | 1  |
| 勸長?  | 1  | 福  | 1  | 入  | 1  |
| 吉集   | 3  | 号  | 1  | 花  | 1  |
| 平    | 2  | 炭  | 1  | 鏡  | 1  |
| 富    | 2  | 王足 | 1  | 奇  | 1  |
| 千    | 2  | 和天 | 1  | 寛  | 1  |
| 北家・足 | 1  | 沙  | 1  | 廣  | 1  |
| 田家   | 1  | 沙○ | 1  | 太  | 1  |
| 館    | 1  | 拾万 | 1  | 身  | 1  |
| 倉人   | 1  | 上万 | 1  |    |    |
| 吏    | 1  | 田万 | 1  |    |    |
| 戸主   | 1  | 大  | 1  |    |    |

## 第2節 井戸跡について

本節では、評論する紙幅はないので、本文中で記した構造の補足及び周辺遺跡の類例を示すとともに、使用された転用部材のうち特異なものを抽出して、若干の推定を述べていきたい。

本節で取り上げる鶴沼C遺跡1号井戸跡(SE01)は、本文でも記したとおり、素掘りの掘形に井戸側を持っている遺構である。

今年度の調査では、湯川村桜町遺跡から会津若松市西坂才遺跡まで、約2.5kmの路線長の中で6遺跡の調査を行ったが、井戸遺構は南東寄りの鶴沼C遺跡と西坂才遺跡から各1基を検出したのみである。このうち、西坂才遺跡SK03は素掘りの井戸で、井戸側等の構造物は検出していない。これに伴う可能性のある建物跡としてはSB04のみである。

### 構造について

井戸側及び掘形・埋め土・井戸底のろ過構造等については、本文中で触れたので、ここでは省略するが、側板については西面と東面の板が長く、隅柱からそれぞれ南北にはみ出しており、北面と南面の側板がその内側に収まることを補足する。

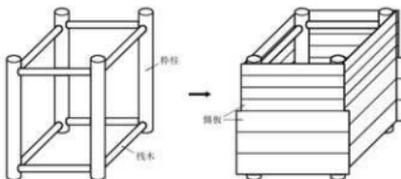


図101 井戸枠復元模式図

井戸側の復元想定図は、図101のとおりである。横木は2段だけになっているが、井戸側上半部が残っていないので、実際はもう何段かの横木があった可能性はある。さらに井戸側の上に乗る井桁についても、その有無や構造について同様の理由で明らかにすることはできなかった。

本遺構を確認した面が、すでに昭和30・31年のほ場整備事業等で大きく改変を受けているため、上屋構造物や排水用溝が存在した痕跡すら確認できなかった。

本遺構を確認した面が、すでに昭和

以上のように、構造全体については不明な点が多いが、残存していた井戸側下半部の構造、すなわち四隅に柱を立て、横木(横板)で固定した上で、側板(横板)を積み上げるというのは、平城京でも類似のものを一定数検出しており、宇野氏が“B V b 類横板組隅柱どめ”、篠原豊一氏が“E 類方形横板組隅柱横板どめ”という型式に分類しているものに該当する。側板については、本遺構と同じように特別な細工をしないまま積み上げるものと、上下の板の接着面に屨柄(太柄)を設けて連結するものがある。

周辺に目を転じると、井戸側を持つ遺構はあるが、構造的に同じものは見当たらない。9世紀代の本遺構の前後、多少時間的幅を持つと、桜町遺跡4次調査や屋敷遺跡・郡山遺跡で井籠組の“横板組”や“曲物”を、矢玉遺跡では“列り貫き”井戸を検出している。

この他、西坂才遺跡SK03のように、井戸側等の構造物を持たない素掘り井戸も多く検出しているが、それぞれ周辺にはおおむね3棟以上の掘立柱建物跡があり、それらに伴う井戸と判断できる。これらの中には2段掘りのものも多く、桜町遺跡4次調査163号土坑や屋敷遺跡3号井戸跡のように井戸底に水溜構造を持つものもある。

本遺跡の周辺を概観すると、“横板組”を主体とする遺跡(本遺構もこの型式のバリエーションのひとつである。)、”剃り貫き”を主体とする遺跡という構造の違いを認めることができる。これが時期差・時間差に起因するものか、各建物群を構成する集団の歴史的性格や郡衙レベルでの地域内における性格・格差などに起因するものなのかは、今後の検討課題としたい。

いずれにしても、会津地域における10世紀前葉までの時期は、数棟以上の掘立柱建物群に1基の井戸が伴うことで、それは官衙の存在をうかがわせるものと言えるかも知れない。

#### 転用材について

続日本紀には、「神火」や正倉を管轄している国司・郡司らが、税納入の虚偽であることをそらすために正倉を焼き払っているといった記事が見え(註7)、過失・放火を問わず、出火によって損害が出た場合は、彼らの給与に当たる「公廩」から補填させるようにという勅が出たりしている。

このような勅が出ること自体、そのような事故・事件が頻発していた証左であり、その結果として、建物廃材等が生じることが多かったと推定できる。

そのような建築部材や容器部材等のうち、再利用可能なものについては、大事に保管した上で、本遺構のような、とくに専用部材が必要でないものに、若干の加工を加えながら転用していたことが推定できる。

本遺構の井戸側を使用した部材は、ほぼ全てがこのような転用材と判断している。

このうち側板に使用したものは、建築部材のうちの壁板や床板といったものが中心であると想定しているが、その中で、両開きの扉板と扉枠板が2点ずつ出土しているので、その復元想像図を掲げておく。両種の板とも大小があり、1点ずつがセットになる。つまりどちらも、片方の扉板と上

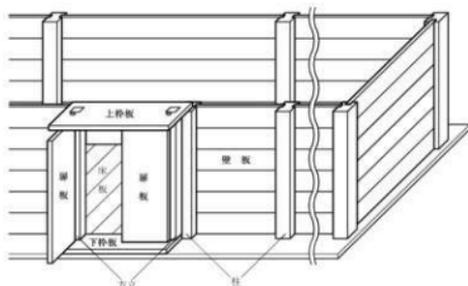


図102 扉板復元想像図

下どちらかの扉枠板が出土しているのみである。ただし、井戸側南面に使用している1枚図32-3も扉枠板になる可能性はある。しかし腐食が著しく、かろうじて板の両端に穿孔らしきものを認めうるのみで、現時点で断定はできない。

扉板は片方の端に断面円形の軸が上下にあり、扉枠板には、その軸を受ける円孔とその横に

“方立”という、扉板に荷重がかかって開閉が困難になることを防ぐ板を取り付けるための、長方形の柄穴を穿っている。図では方立柄穴が扉板軸受孔の後ろ側に来るようにしたが、方立は柱と扉板との隙間をなくすという役割も持つことから、このように配置した。これらのことから方立は柄穴よりも一回り大きい柱状のものが想定できる。

これらの部材を使った構造物については、扉板が4～4.5cmの厚みがあり、厨子のような精緻なものとは推定できず、大きさ・形状からみても、伝統的な高床式倉庫の扉板に近いものである。瓦塔などを納める祠などの祭祀的構造物の可能性も否定はできないが、現時点では実用的な建物の部材と判断している。

(作 田)

### 第3節 建物群と遺跡の性格について

今回の調査では、9棟の掘立柱建物跡が検出されており、建物跡の主軸方向から大きく2つのグループに分けることができた。すなわち、真北より8°程東寄りとなっている2～5号掘立柱建物跡(A群)と主軸がほぼ真北である1・6・7号掘立柱建物跡(B群)である。これらの建物群については、直接の新旧を示すような重複関係は認められず、そこから、直接変遷をたどることはできなかった。しかし、遺物でみると、A群に含まれる2号掘立柱建物跡から比較的古い時期と推定される円面硯図6-3が出土し、B群に含まれる1号掘立柱建物跡から口縁部が大きく開く比較的新しいタイプの長頸瓶図6-2が出土している。このことから、大きくはA群→B群の変遷を辿ったと推定される。遺構の特徴で見ると、柱穴掘形・柱痕が大きく規格が比較的明瞭な5号掘立柱建物跡を中心とした建物群から、規模は大きい柱穴掘形・柱痕が小さい1号掘立柱建物跡を中心とした建物群への変遷がたどれる。

建物跡の実年代については、12号溝跡出土遺物の一部図43-8・9が上雨屋12号窟(8世紀第4四半期～9世紀第1四半期)に比定されることから、上限は9世紀第2四半期頃と推定される。下限は、1号掘立柱建物跡から出土した長頸瓶が、10世紀第1四半期に比定される南原73号窟跡よりも古い要素を持っており、高台杯も出土しているところから、それ以前の9世紀第4四半期頃と推定される。したがって、建物跡群の時期は、9世紀第2四半期～第4四半期頃と考えている。

鶴沼C遺跡は、会津盆地の中でも会津郡衙推定地郡山遺跡に直線距離で約1.5kmと近い距離にある。遺跡周辺には、近年同じ時期の遺構が確認された屋敷遺跡、矢玉遺跡、上吉田遺跡、西木流C遺跡等がある。これらの遺跡からは、竪穴住居跡が検出されておらず、掘立柱建物群からなる遺構が中心となっている。性格自体も木簡が出土したり、区画溝内に整然と建物跡が配置されたり、郡衙建物との関連を示す墨書土器が出土するなど、郡衙との関連性が色濃く残る性格がうかがえる。また、本年度同じ事業で調査した本遺跡の東側に位置する西坂才遺跡についても、掘立柱建物群のみから構成される遺跡で、同様な性格であると推定される。

本遺跡についても、同じような歴史的・地理的文脈の上で捉えられる遺跡であると推定している。

その中でも掘立柱建物群と流路跡から出土した墨書土器について着目すると、建物跡群の柱穴と柱痕が比較的小さく、間尺も完全な統一性が取れていないこと、墨書土器では建物や役職、戸籍を示すものが出土していること等の特徴が認められる。これらを勘案すると、郡衙機能を補足するような役所的な建物空間を想定するよりも、官人層の居宅としての空間を想定した方が合理的と思われる。鶴沼C遺跡はそのような性格を持った遺跡であると推定される。また、これらの居宅が流路跡周辺に立地し、流路自体を利用していた痕跡が認められたことも興味深い。

また、建物跡群が建つ以前の時期では、東の西坂才遺跡から直線的に続く12号溝跡が検出されている。12号溝跡の時期は、流路跡の古い段階とも重なり、端部でそれに流れ込む形態となっている。それを意識した会津郡衙周辺の道路等交通に関連する場所であったと推定される。(藤谷)

### 註

- 註1・2・5 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻第5号 史学研究会 の中で使用している名称を引用した。  
 註3・4 上記文献中で、「横棧」・「井戸側」という用語を使用していることから、個々の部材の呼称として「横棧の木」・「井戸側の板」という意味で、「棧木」・「側板」とした。  
 註6 植村昌子 2009 『建茶部材万葉にみる古代の鑿の形状と工作技術』『竹中大工道具館研究紀要』20  
 註7 『続日本紀』卷第三十二 宝龜四年八月庚午条、卷第三十九 延暦五年六月己未朔条、同八月甲子条、卷第四十 延暦十年二月癸卯条他

### 参考文献

- (財)福島県文化センター 1991 「東北横断自動車道遺跡調査報告12 屋敷遺跡」『福島県文化財調査報告書』第262集 福島県教育委員会  
 (財)福島県文化センター 1991 「東北横断自動車道遺跡調査報告9 船ヶ森西遺跡 上吉田遺跡」『福島県文化財調査報告書』第241集 福島県教育委員会  
 (財)福島県文化振興事業団 2012 「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12 桜町遺跡(4次)」『福島県文化財調査報告書』第485集 福島県教育委員会  
 会津若松市教育委員会 1999 「若松北部地区県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅰ 矢玉遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第61号  
 会津若松市教育委員会 2000 「若松北部 県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ」『会津若松市文化財調査報告書』第66号  
 会津若松市教育委員会 2004 「屋敷遺跡-弥生時代中期から古墳時代前期、一町四方の平安時代の大集落-」『会津若松市文化財調査報告書』第94号  
 会津若松市教育委員会 2004 「会津 大戸原 南原73号竪跡」『会津若松市文化財調査報告書』第87号  
 会津若松市教育委員会 2005 「東高久遺跡-奈良・平安時代「多具郷」の有力な推定地-」『会津若松市文化財調査報告書』第104号  
 会津若松市教育委員会 2006 「金屋遺跡 郡山遺跡Ⅱ-河東西部地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査-」『会津若松市文化財調査報告書』第107号  
 藤原豊一 1990 「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会

## 付 章 自然科学分析

### 第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について

(株)加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

鶴沼C遺跡は、福島県会津若松市高野町大字中沼字鶴沼に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した木製品5点である(表3)。木製品は、AW-TRN・C-1が曲物の柄杓、AW-TRN・C-2が火付木、AW-TRN・C-3が木製皿、AW-TRN・C-4が下駄、AW-TRN・C-5が井戸の杵杭(杵杭1)とされる。AW-TRN・C-1は曲物縁の崩れた部分から残存最外年輪部3～5年輪分、AW-TRN・C-2は火付木先端付近の炭化した部分から残存最外年輪部2～3年輪分、AW-TRN・C-3は木製皿の残存最外年輪部約3年輪分、AW-TRN・C-4は下駄の残存最外年輪部約5年輪分、AW-TRN・C-5は杭の中段から残存最外年輪部約3年輪分を、各々測定用の木片試料として採取した。AW-TRN・C-3については、形状と年輪幅から採取試料より外側にさらに約50年輪程度あったと推定される。

#### 2 測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$ 濃度( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

#### 6 測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料の<sup>14</sup>C年代は、AW-TRN・C-1が600 ± 20yrBP、AW-TRN・C-2が1150 ± 20yrBP、AW-TRN・C-3が1250 ± 20yrBP、AW-TRN・C-4が1070 ± 20yrBP、AW-TRN・C-5が1230 ± 20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、AW-TRN・C-1が1309 ~ 1397cal ADの間に3つの範囲、AW-TRN・C-2が779 ~ 961cal ADの間に3つの範囲、AW-TRN・C-3が695 ~ 771cal ADの間に3つの範囲、AW-TRN・C-4が972 ~ 1015cal ADの範囲、AW-TRN・C-5が713 ~ 863cal ADの間に5つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文 献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887  
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

表2 放射性炭素年代測定結果(δ<sup>13</sup>C補正值)

| 測定番号         | 試料名        | 採取場所                 | 試料形態 | 処理方法 | δ <sup>13</sup> C (‰) (AMS) | δ <sup>13</sup> C補正あり |              |
|--------------|------------|----------------------|------|------|-----------------------------|-----------------------|--------------|
|              |            |                      |      |      |                             | Libby Age (yrBP)      | pMC (%)      |
| I AAA-132407 | AW-TRN・C-1 | SK17 ㊦5(最下層) 図23-1   | 木製品  | AAA  | -25.37 ± 0.22               | 600 ± 20              | 92.79 ± 0.26 |
| I AAA-132408 | AW-TRN・C-2 | 1号流路跡 ㊦4(最下層) 図69-14 | 木製品  | AAA  | -26.8 ± 0.25                | 1150 ± 20             | 86.63 ± 0.23 |
| I AAA-132409 | AW-TRN・C-3 | 2号流路跡 ㊦4(最下層) 図84-3  | 木製品  | AAA  | -29.02 ± 0.27               | 1250 ± 20             | 85.55 ± 0.23 |
| I AAA-132410 | AW-TRN・C-4 | 3号流路跡 ㊦4(最下層) 図95-9  | 木製品  | AAA  | -30.26 ± 0.28               | 1070 ± 20             | 87.55 ± 0.23 |
| I AAA-132411 | AW-TRN・C-5 | 1号井戸跡 ㊦2 図26-4       | 木製品  | AAA  | -28.69 ± 0.3                | 1230 ± 20             | 85.77 ± 0.22 |

表3 放射性炭素年代測定結果(δ<sup>13</sup>C未補正值, 暦年較正用<sup>14</sup>C年代, 較正年代)

| 測定番号         | δ <sup>13</sup> C補正なし |              | 暦年較正用 (yrBP) | 1σ 暦年代範囲  | 2σ 暦年代範囲   |
|--------------|-----------------------|--------------|--------------|---|--|
|              | Age (yrBP)            | pMC (%)      |              |   |  |
| I AAA-132407 | 610 ± 20              | 92.72 ± 0.25 | 601 ± 22     | 1309calAD-1330calAD (26.9%)<br>1339calAD-1361calAD (28.5%)<br>1387calAD-1397calAD (12.7%)   | 1299calAD-1370calAD (73.3%)<br>1380calAD-1406calAD (22.1%)   |
| I AAA-132408 | 1,180 ± 20            | 86.32 ± 0.22 | 1,152 ± 21   | 779calAD-789calAD ( 6.8%)<br>863calAD-902calAD (29.4%)<br>920calAD-961calAD (32.1%)   | 776calAD-793calAD ( 8.5%)<br>801calAD-907calAD (51.1%)<br>915calAD-968calAD (35.7%)                              |
| I AAA-132409 | 1,320 ± 20            | 84.85 ± 0.22 | 1,253 ± 21   | 695calAD-702calAD ( 7.6%)<br>709calAD-746calAD (51.5%)<br>764calAD-771calAD ( 9.2%)   | 676calAD-778calAD (90.8%)<br>792calAD-804calAD ( 1.7%)<br>815calAD-823calAD ( 0.7%)<br>841calAD-860calAD ( 2.2%) |
| I AAA-132410 | 1,150 ± 20            | 86.61 ± 0.22 | 1,067 ± 21   | 972calAD-1015calAD (68.2%)  | 900calAD-922calAD (125%)<br>948calAD-1020calAD (82.9%)   |
| I AAA-132411 | 1,290 ± 20            | 85.13 ± 0.22 | 1,232 ± 20   | 713calAD-744calAD (29.0%)<br>765calAD-778calAD (12.3%)<br>791calAD-805calAD ( 8.4%)<br>812calAD-826calAD ( 6.6%)<br>840calAD-863calAD (11.9%) | 691calAD-749calAD (38.6%)<br>761calAD-781calAD (14.7%)<br>787calAD-878calAD (42.1%)                              |

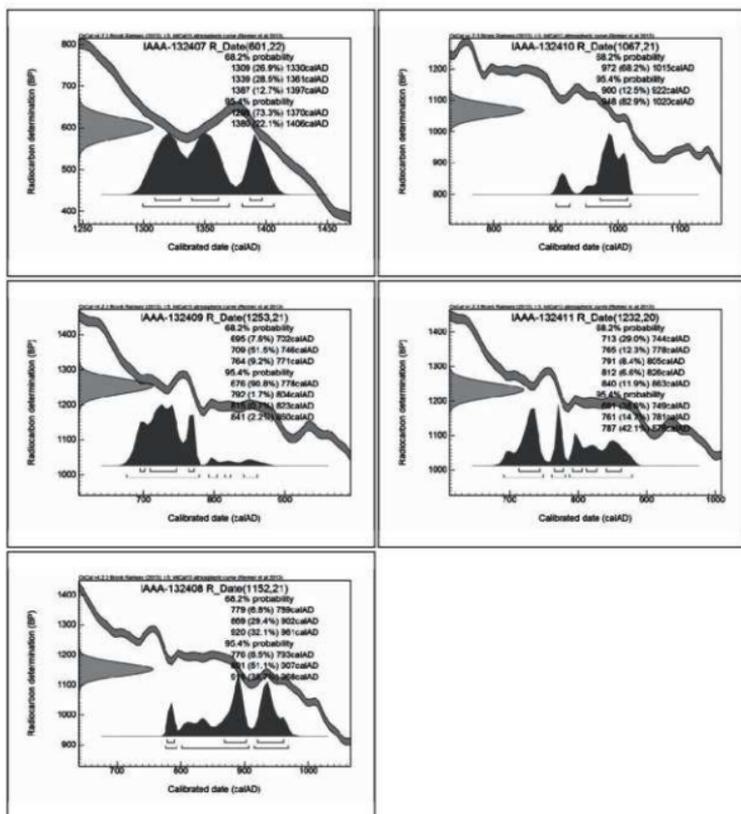


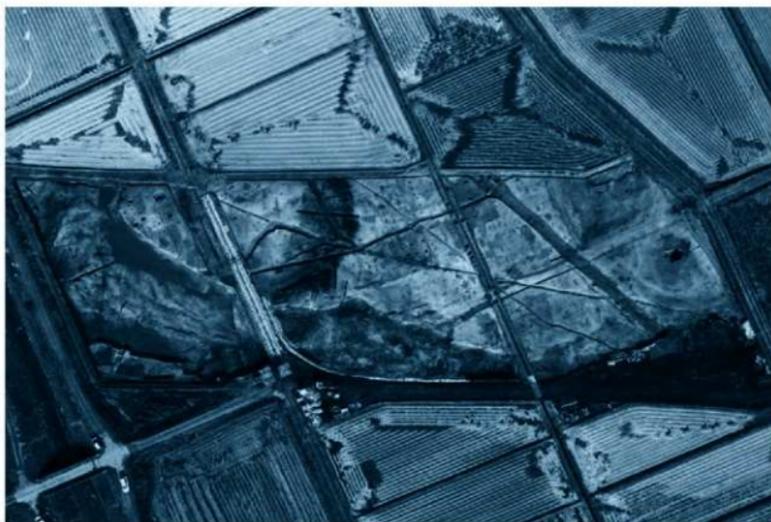
図103 暦年較正年代グラフ

# 写 真 図 版

第1編 鶴沼C遺跡



1 調査区遠景（南から）



2 調査区全景（真上から）



3 Ⅰ区2・3号流路跡掘込前全景（真上から）



4 Ⅱ・Ⅲ区 掘立柱建物跡群（真上から）



5 1号掘立柱建物跡

- |                |                 |            |
|----------------|-----------------|------------|
| 2 P 1断面 (北東から) | 3 P 2断面 (北から)   | 1 全景 (南から) |
| 4 P 8断面 (東から)  | 5 P 14断面 (南東から) |            |



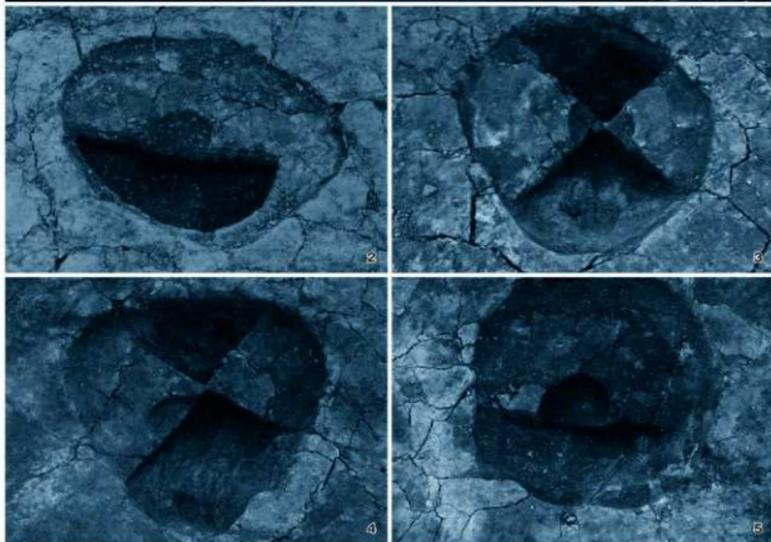
6 2号掘立柱建物跡

1 全景 (南から)  
2 P 4断面 (北から) 3 P 6断面 (南から)  
4 P 7断面 (南から) 5 P 10断面 (北から)



7 3号掘立柱建物跡

- 1 全景 (南から) 2 P 7断面 (南西から) 3 P 8断面 (南から)  
4 P 10断面 (南東から) 5 P 11断面 (西から)



8 4号掘立柱建物跡

- 1 全景 (南から)  
2 P 1断面 (西から)  
3 P 3断面 (北西から)  
4 P 5断面 (北東から)  
5 P 6断面 (東から)



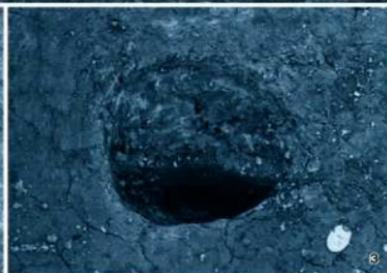
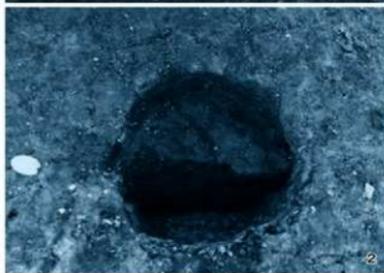
9 5号掘立柱建物跡

- 1 全景 (南から)  
 2 P 2断面 (南から) 3 P 4断面(東から)  
 4 P 5断面 (東から) 5 P 6断面(南から)



10 6号掘立柱建物跡

- 1 全景(南から)  
2 P 1断面(東から) 3 P 2-A・B断面(東から)  
4 P 5断面(東から) 5 P 6断面(東から)



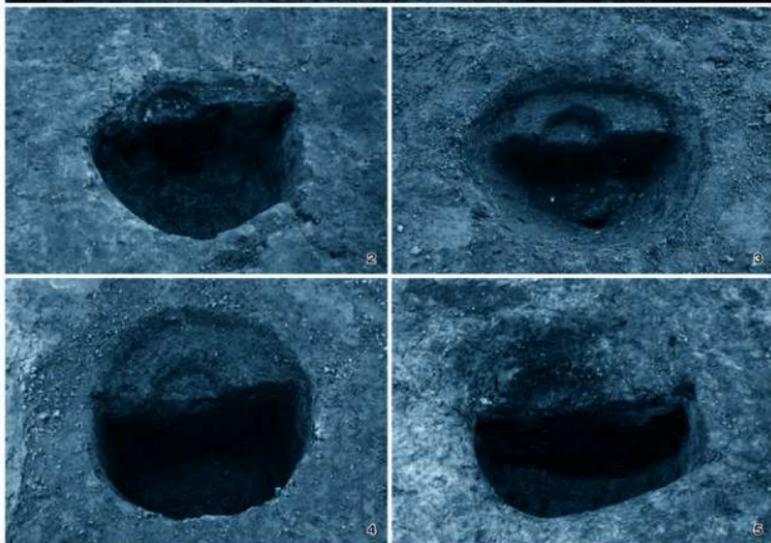
11 7号掘立柱建物跡

1 全景 (南から)  
 2 P3断面 (北から) 3 P5断面 (東から)  
 4 P6断面 (南から) 5 P9断面 (南から)



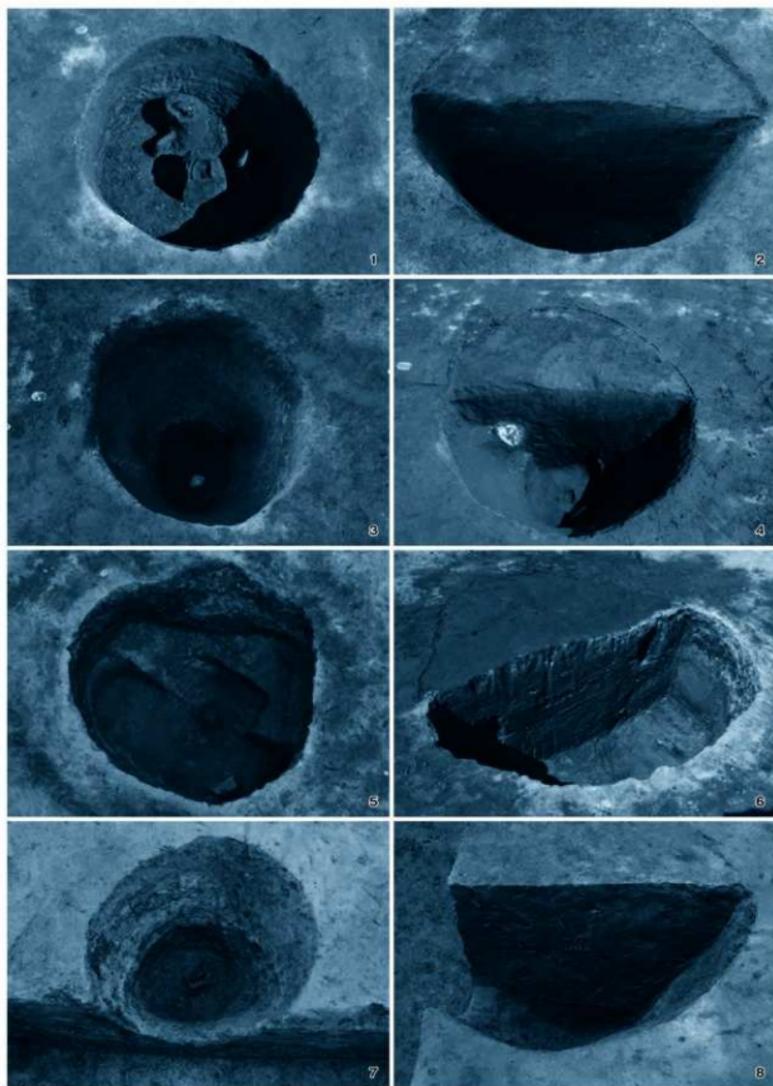
12 8号掘立柱建物跡

- |                               |                              |
|-------------------------------|------------------------------|
| 2 P 2断面 (南<small>4</small>-5) | 3 P 6断面(南<small>4</small>-5) |
| 4 P 7断面 (南<small>4</small>-5) | 5 P 8断面(南<small>4</small>-5) |



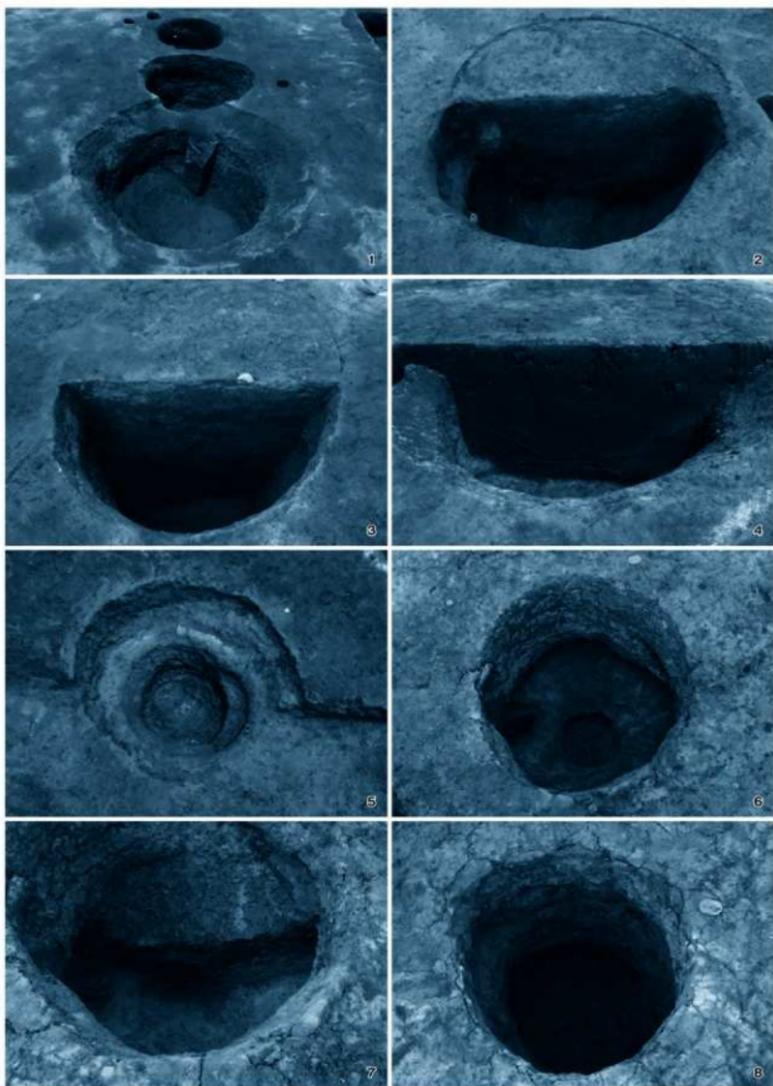
13 9号掘立柱建物跡

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 2 P 3断面 (西から) | 3 P 5断面(西から) |
| 4 P 7断面 (東から) | 5 P 9断面(東から) |
- 1 全景 (南から)



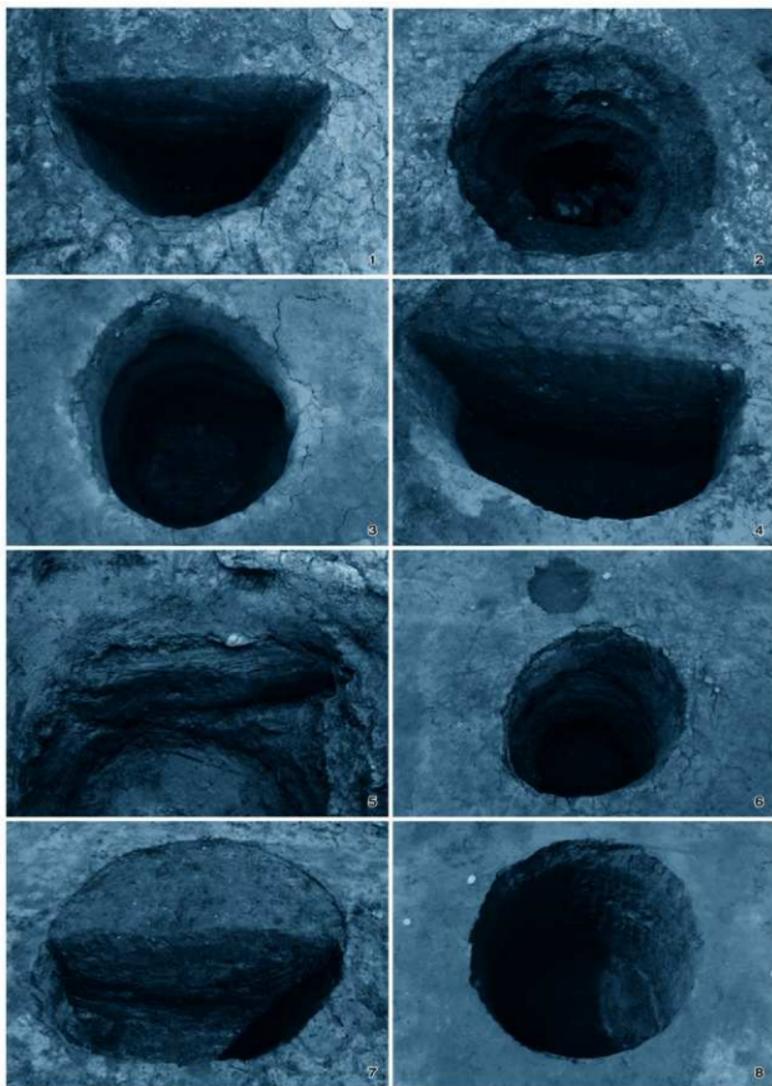
14 1・3～5号土坑

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 1号土坑全景 (南から) | 2 1号土坑断面 (南から) |
| 3 3号土坑全景 (南から) | 4 3号土坑断面 (南から) |
| 5 4号土坑全景 (南から) | 6 4号土坑断面 (南から) |
| 7 5号土坑全景 (南から) | 8 5号土坑断面 (東から) |



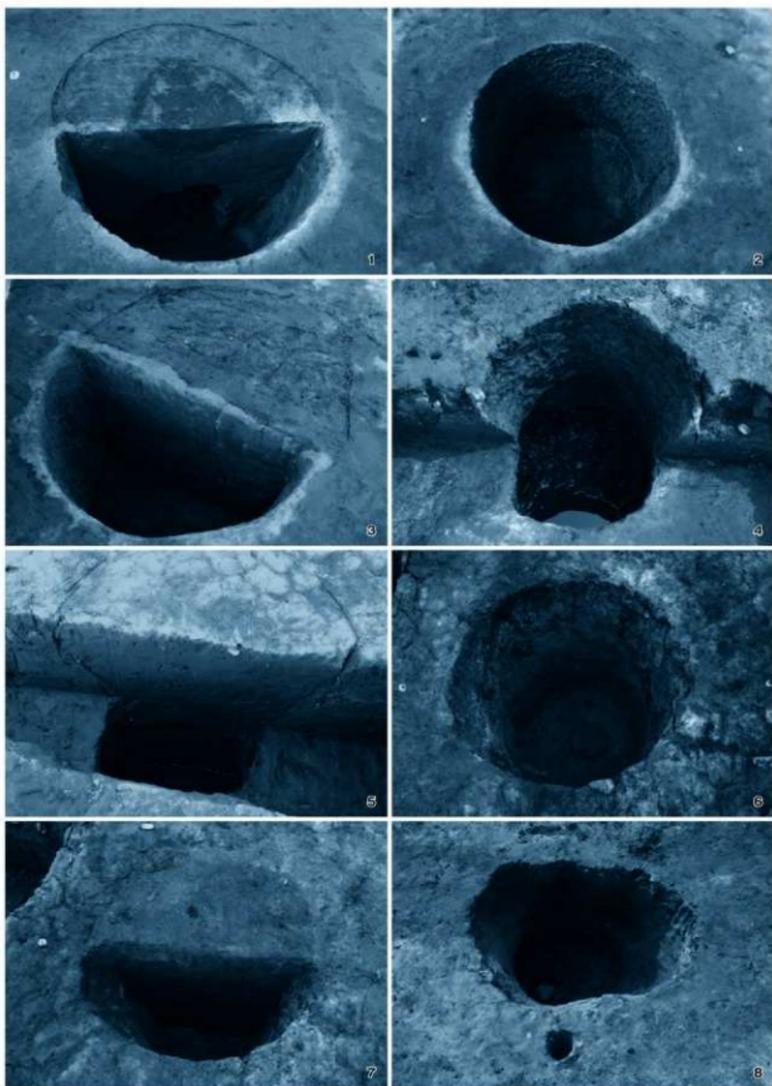
15 7~10·12·13号土坑

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 7~9号全景 (南东)  | 2 7号土坑断面 (南东)  |
| 3 8号土坑断面 (南东)  | 4 9号土坑断面 (南东)  |
| 5 10号土坑全景 (南东) | 6 12号土坑全景 (南东) |
| 7 12号土坑断面 (南东) | 8 13号土坑全景 (南东) |



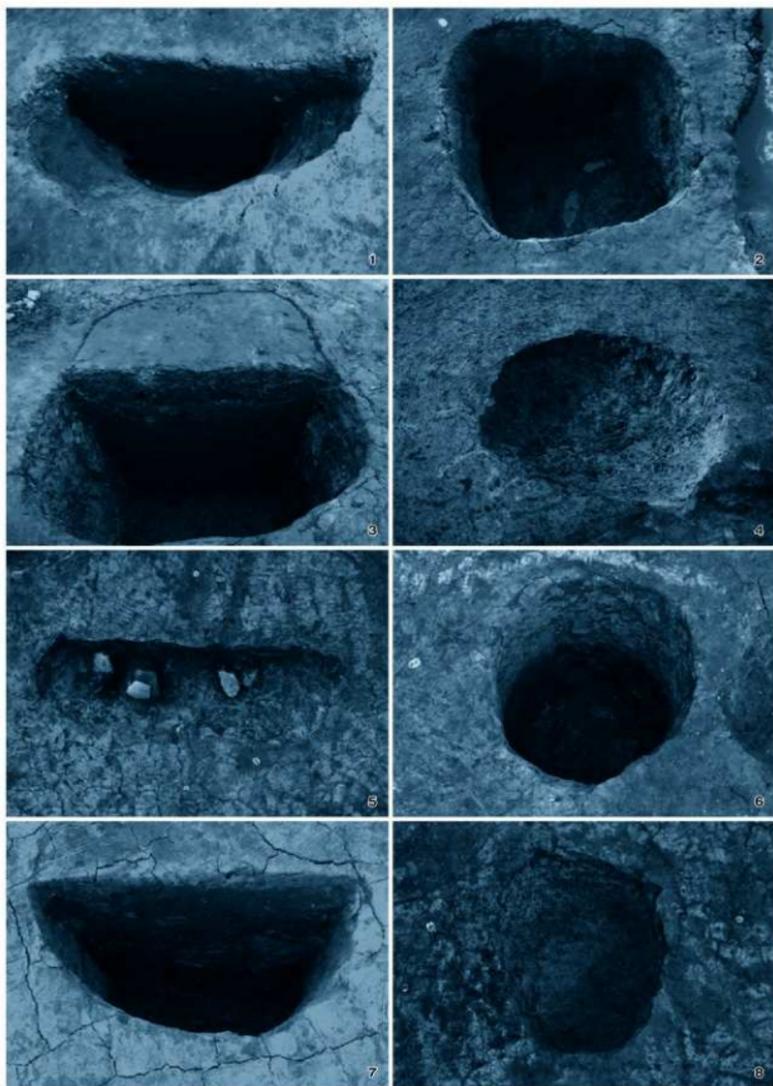
16 13～18号土坑

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 13号土坑断面 (南から)    | 2 14号土坑全景 (北から)    |
| 3 15号土坑全景 (南から)    | 4 15号土坑断面 (南から)    |
| 5 15号土坑北壁アツブ (南から) | 6 16・17号土坑全景 (南から) |
| 7 17号土坑断面 (南から)    | 8 18号土坑全景 (南から)    |



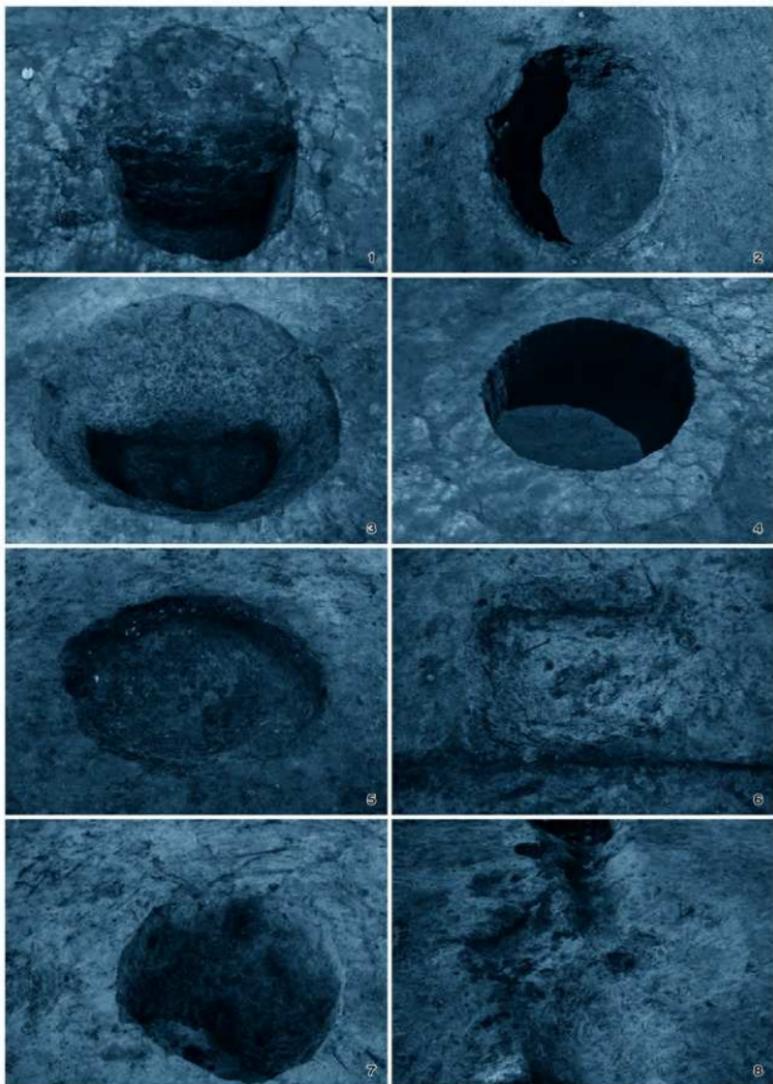
17 18～22号土坑

- |                        |                 |
|------------------------|-----------------|
| 1 18号土坑・55号ピット断面 (南から) | 2 19号土坑全景 (南から) |
| 3 19号土坑断面 (南から)        | 4 20号土坑完備 (南から) |
| 5 20号土坑断面 (南から)        | 6 21号土坑全景 (南から) |
| 7 21号土坑断面 (南から)        | 8 22号土坑全景 (東から) |



18 22～24・26～28号土坑

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 22号土坑断面 (南半) | 2 23号土坑全景 (東半) |
| 3 23号土坑断面 (南半) | 4 24号土坑完備 (東半) |
| 5 26号土坑全景 (東半) | 6 27号土坑全景 (東半) |
| 7 27号土坑断面 (南半) | 8 28号土坑全景 (南半) |



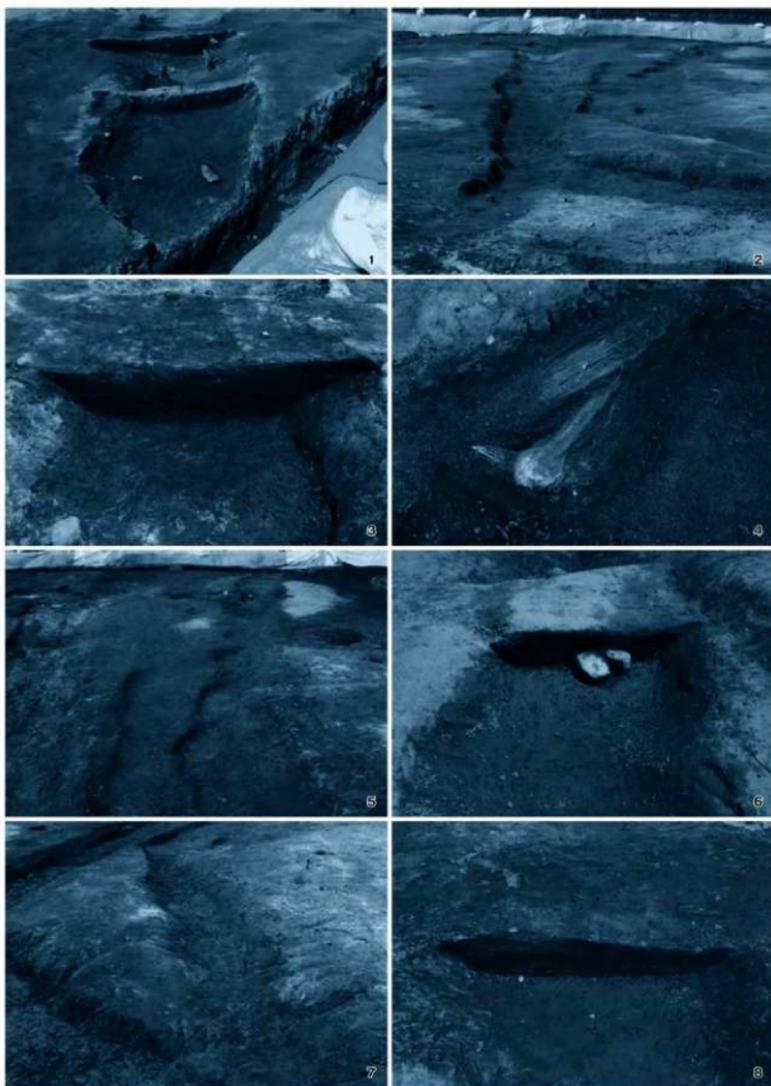
19 28·29·31~36号土坑

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| 1 28号土坑断面 (南から) | 2 29号土坑全景 (墓から)    |
| 3 31号土坑断面 (南から) | 4 32号土坑地検出状況 (西から) |
| 5 33号土坑全景 (南から) | 6 34号土坑全景 (南から)    |
| 7 35号土坑全景 (南から) | 8 36号土坑全景 (墓から)    |



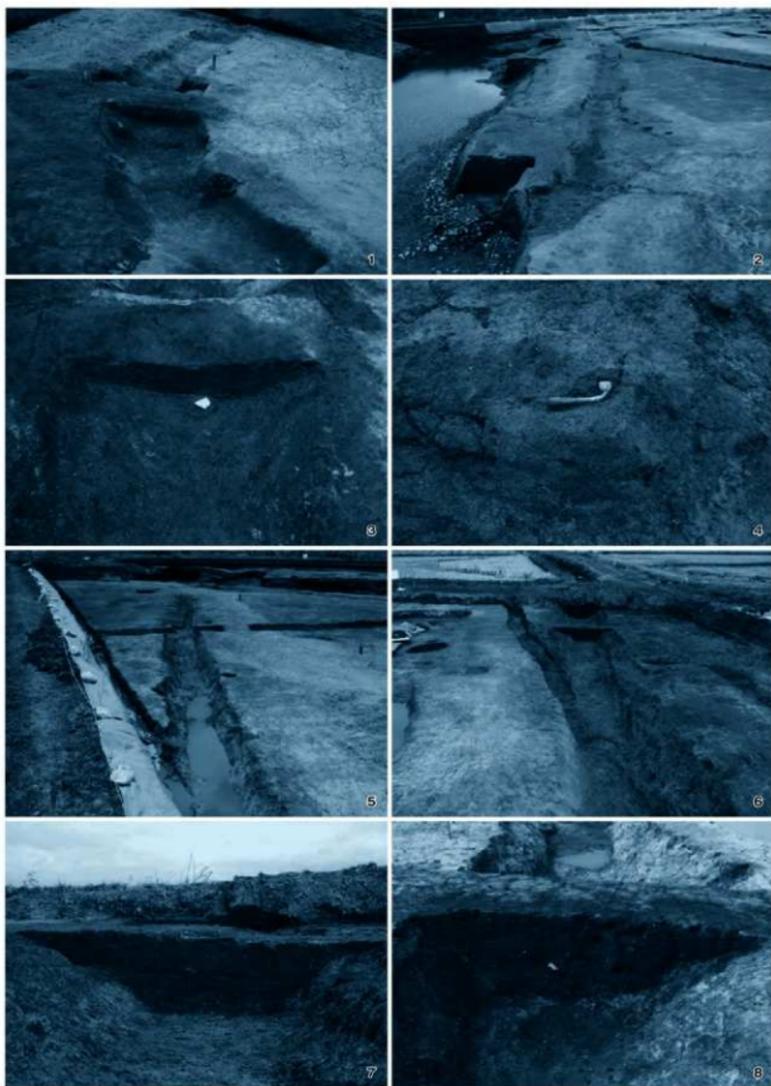
20 1号井戸跡

- 1 全景 (西から)      2 立面 (南から)  
3 立面 (西から)      4 断面立面 (西から)  
5 完整全景 (西から)



21 1～4号溝跡

- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 1 1号溝跡全景・断面 (南から)  | 2 2号溝跡全景 (南から)           |
| 3 2号溝跡断面C-C' (南から) | 4 2号溝跡木製品出土状況図37-7 (南から) |
| 5 3号溝跡全景 (南から)     | 6 3号溝跡断面B-B' (南から)       |
| 7 4号溝跡全景 (南から)     | 8 4号溝跡断面C-C' (南から)       |



22 5・6号溝跡

- |                  |                        |
|------------------|------------------------|
| 1 5号溝跡南側全景（北半）   | 2 5号溝跡北側全景（東半）         |
| 3 5号溝跡断面F-F'（西半） | 4 5号溝跡埋管出土状況図37-14（西半） |
| 5 6号溝跡南側全景（北半）   | 6 6号溝跡北側全景（南半）         |
| 7 6号溝跡断面A-A'（南半） | 8 6号溝跡断面B-B'（西半）       |



23 6・10～12号溝跡

1 6号溝跡津影響出土状況図37-5 (南から)

3 10号溝跡断面B-B' (南から)

5 11号溝跡断面A-A' (Ⅲ区南から)

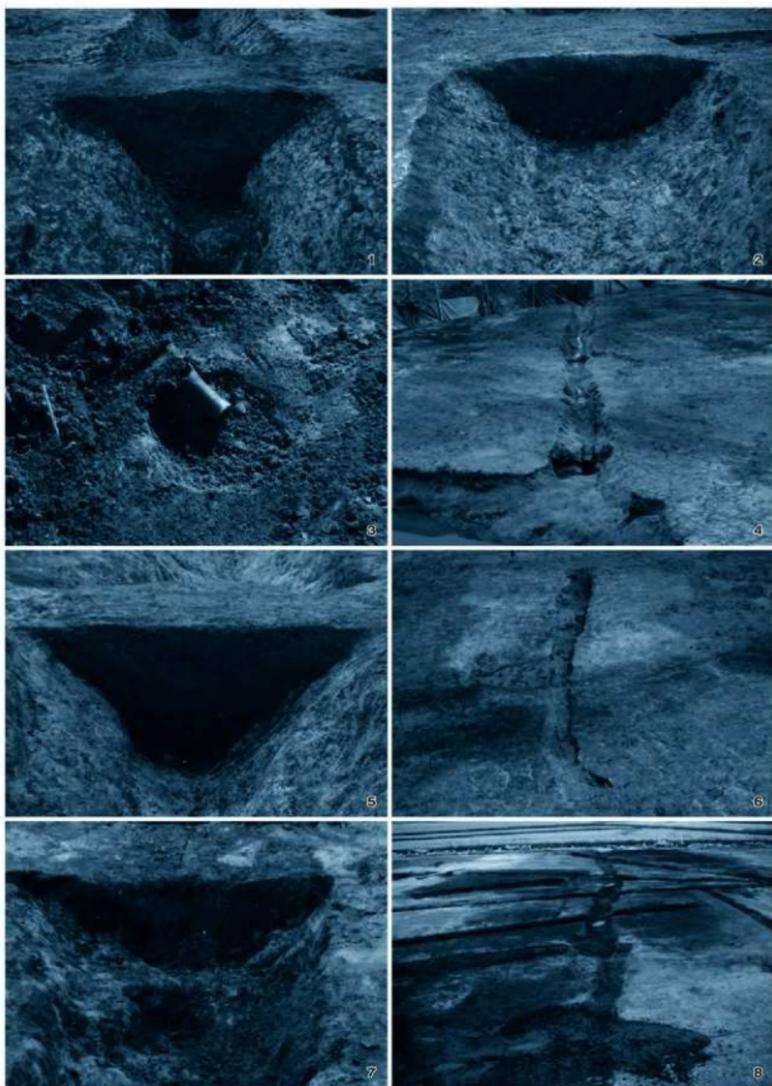
7 12号溝跡断面E-E' (南東から)

2 10号溝跡全景 (南から)

4 11号溝跡全景 (Ⅱ区南東から)

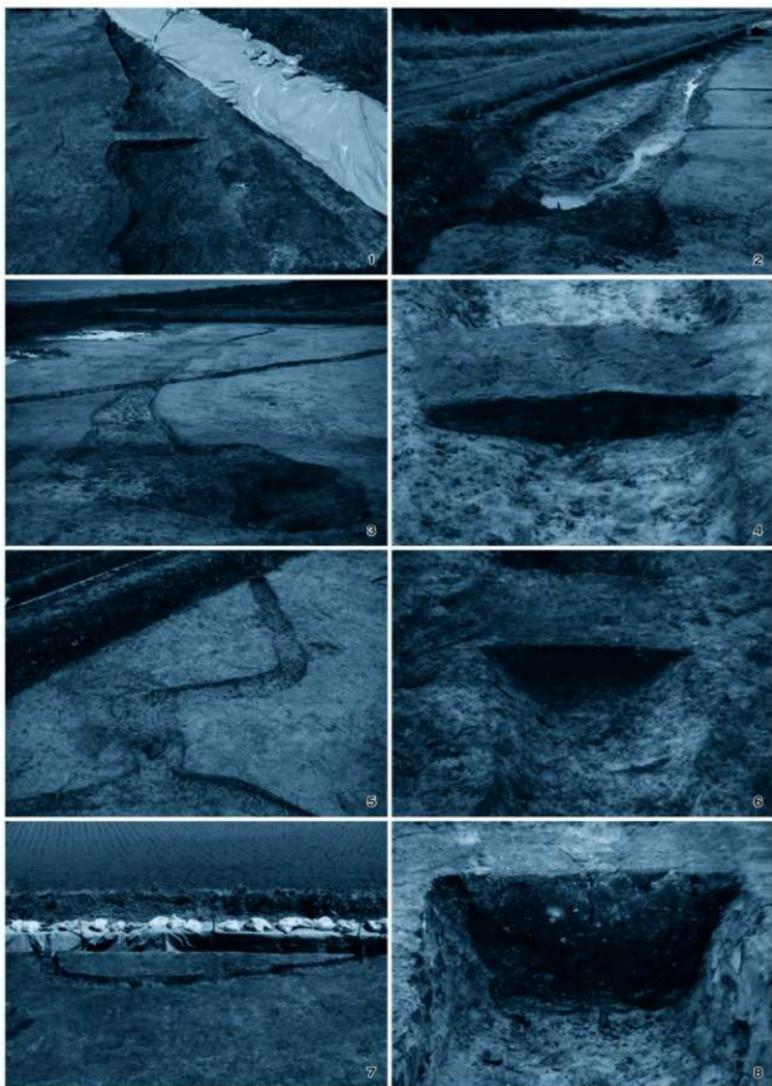
6 11号溝跡断面D-D' (Ⅲ区南から)

8 12号溝跡全景 (Ⅲ区西から)



24 12～14・16号溝跡

- |                            |                        |
|----------------------------|------------------------|
| 1 12号溝跡断面E-E' (南東小5)       | 2 12号溝跡断面H-H' (窪区南東小5) |
| 3 12号須磨器長瀬瓶出土状況図43-9 (北小5) | 4 13号溝跡全景 (東小5)        |
| 5 13号溝跡断面A-A' (東小5)        | 6 14号溝跡全景 (南小5)        |
| 7 14号溝跡断面 (南小5)            | 8 16号溝跡全景 (南小5)        |



25 19・23・24号溝跡，1号周溝状遺構

- |                  |                          |
|------------------|--------------------------|
| 1 19号溝跡北側全景（南から） | 2 19号溝跡南側全景・21号溝跡全景（北から） |
| 3 23号溝跡全景（東から）   | 4 23号溝跡断面C-C'（東から）       |
| 5 24号溝跡全景（南東から）  | 6 24号断面F-F'（南から）         |
| 7 1号周溝状遺構全景（南から） | 8 1号周溝状遺構断面D-B'（東から）     |



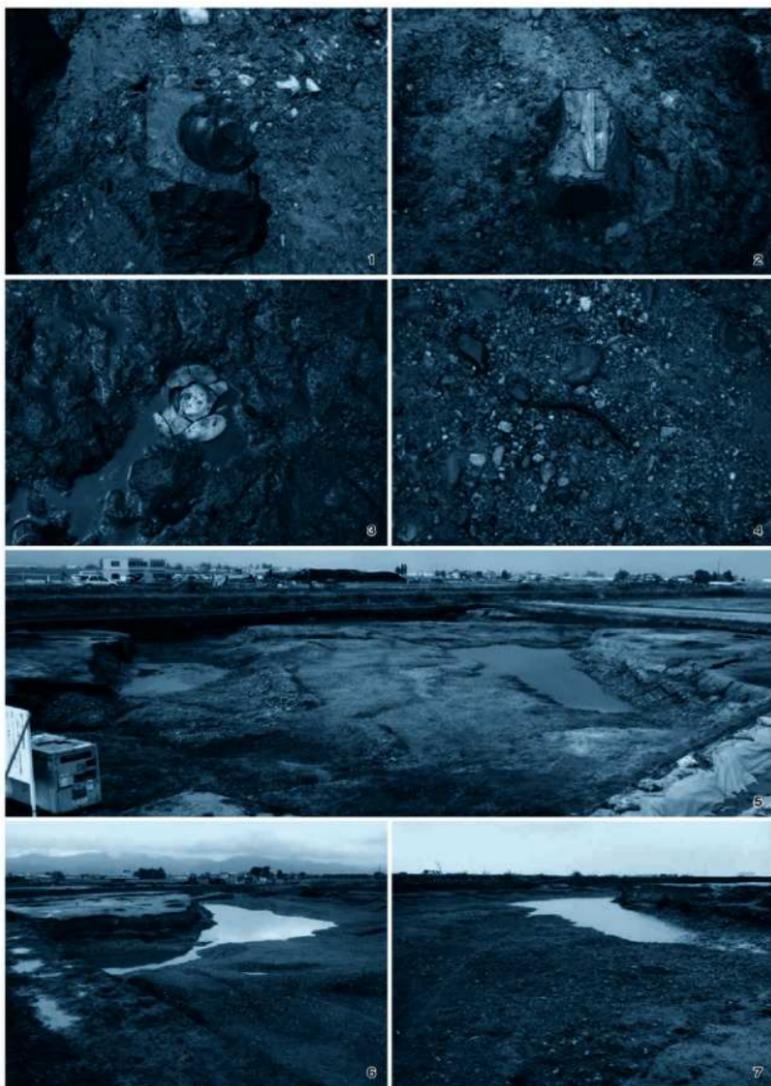
26 1号流路跡(1)

1 1区全景(西小5)  
2 Ⅱ区北壁立上り状況(北西小5)



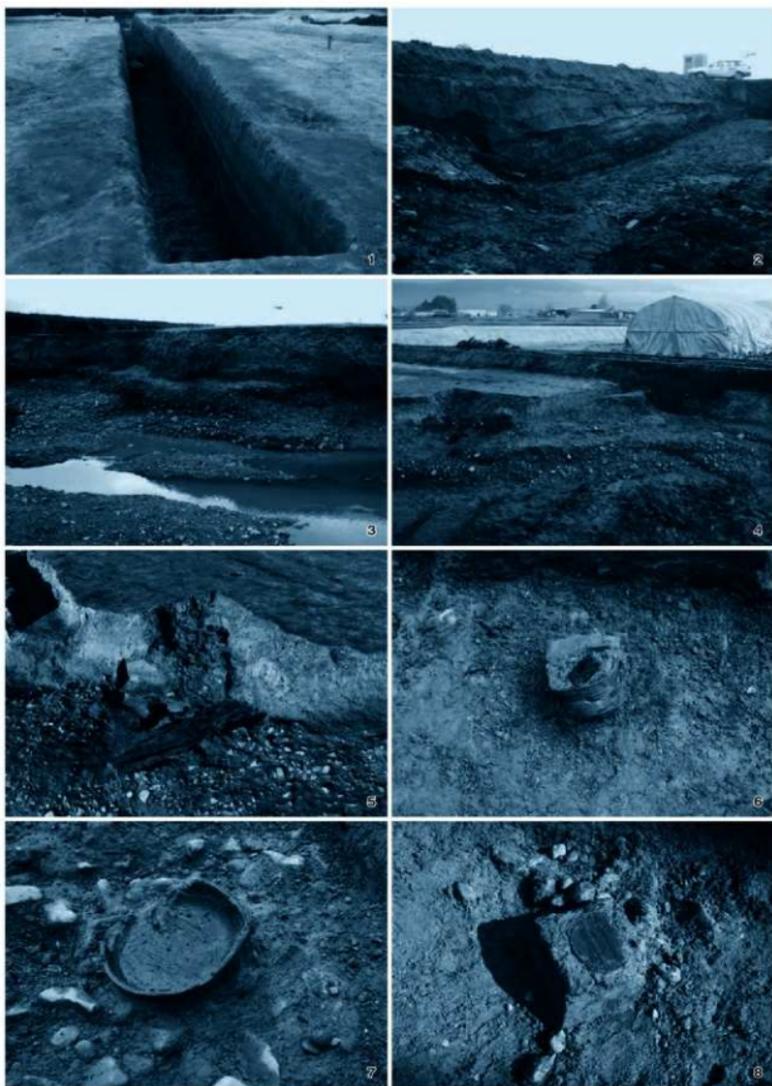
27 1号流路跡(2)

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 Ⅱ区南壁立上り状況(西から)      | 2 Ⅱ区全景(東から)              |
| 3 Ⅰ区断面A-A'(北西から)      | 4 Ⅱ区断面A-A'(東から)          |
| 5 Ⅱ区付属施設全景(南西から)      | 6 Ⅱ区南壁下木材出土状況(南西から)      |
| 7 Ⅱ区18グリッド遺物出土状況(北から) | 8 Ⅱ区頂壁部横断面出土状況図64-1(北から) |



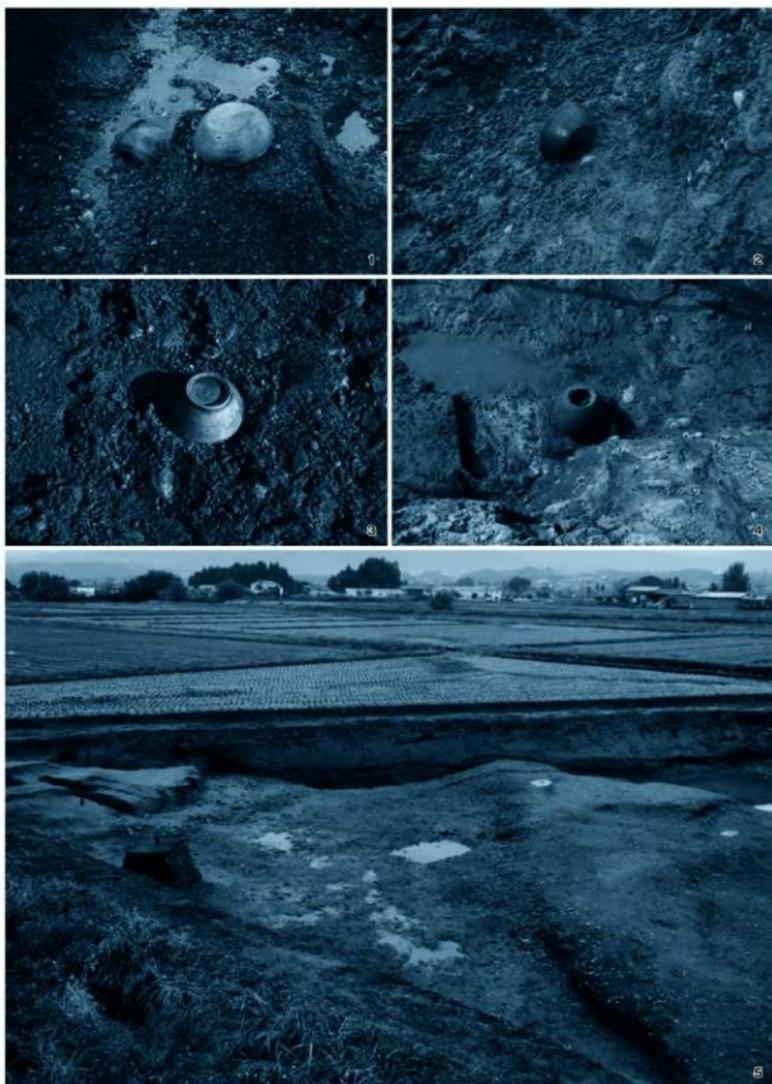
28 1号流路跡(3)・2号流路跡(1)

- 1 1区1号流路跡木器掘出土状況図69-1(東小5)
- 2 1区1号流路跡木製品出土状況図69-9(北小5)
- 3 1区1号流路跡土師器掘出土状況図58-2(西小5)
- 4 1区1号流路跡刀子出土状況図71-10(北小5)
- 5 1・2号流路跡全景(南東小5)
- 6 2号流路跡全景(北西小5)
- 7 2号流路跡全景(南東小5)



29 2号流路跡(2)

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1 断面A-A'(北東から)      | 2 断面C-C'(西から)        |
| 3 東壁立上り状況(南西から)     | 4 南東壁立上り状況(北西から)     |
| 5 付属施設全景(南西から)      | 6 柄杓出土状況図86-4(西から)   |
| 7 本器輪出土状況図83-2(東から) | 8 曲物炭板出土状況図86-2(西から) |



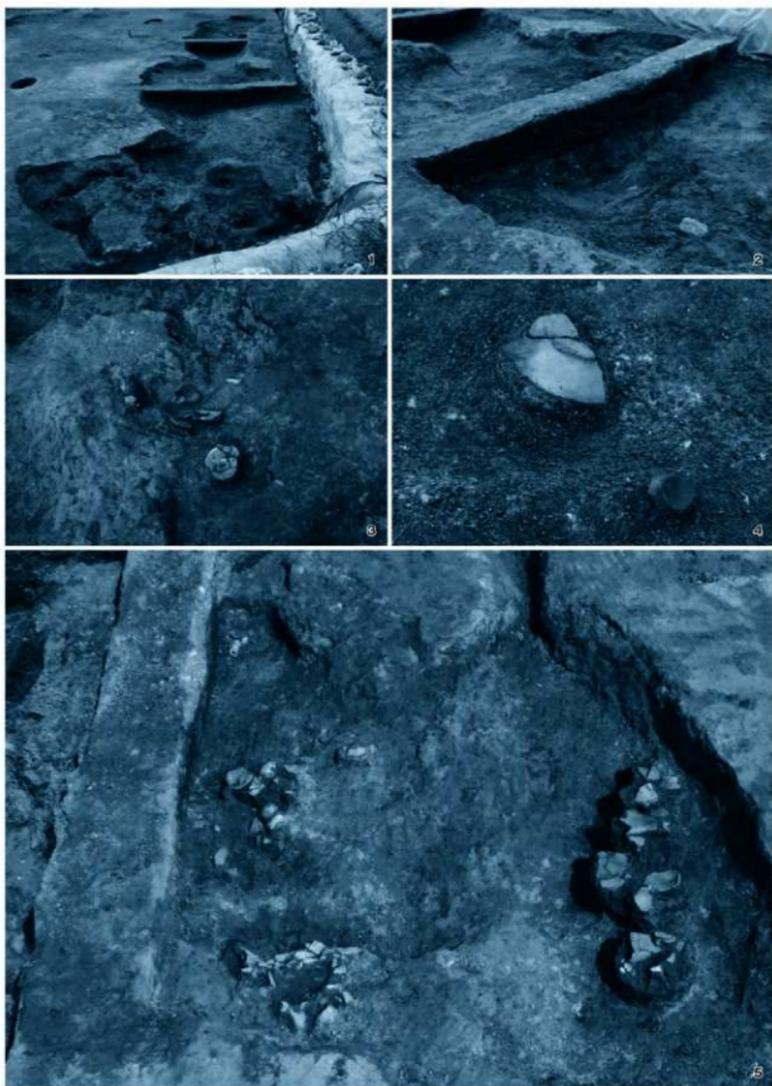
30 2号流路跡(3)・3号流路跡(1)

- 1 2号流路跡土師器杯出土状況図76-1(西かぶ)
- 2 2号流路跡土師器杯出土状況図76-12(南東かぶ)
- 3 2号流路跡須恵器高台杯出土状況図79-8(東かぶ)
- 4 2号流路跡須恵器高台杯出土状況図79-17(北かぶ)
- 5 3号流路跡全景(南西かぶ)



31 3号流路跡(2)

- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| 1 全景(南西小5)            | 2 全景(南西小5)             |
| 3 断面B-B'(南西小5)        | 4 下掘出土状況図95-9(南小5)     |
| 5 木器掘出土状況図94-1(南小5)   | 6 曲物甕掘出土状況図94-5-8(西小5) |
| 7 板状木製品出土状況図96-1(南小5) | 8 赤土器出土状況図92-6(東小5)    |



32 1号性格不明遺構

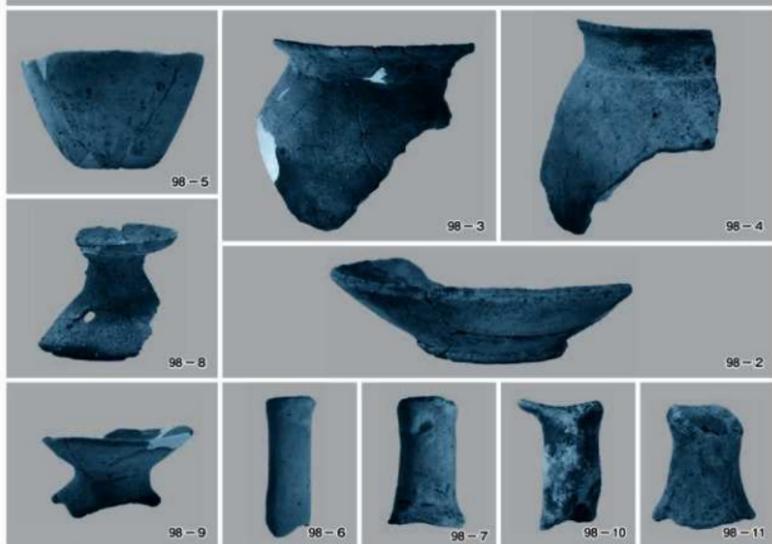
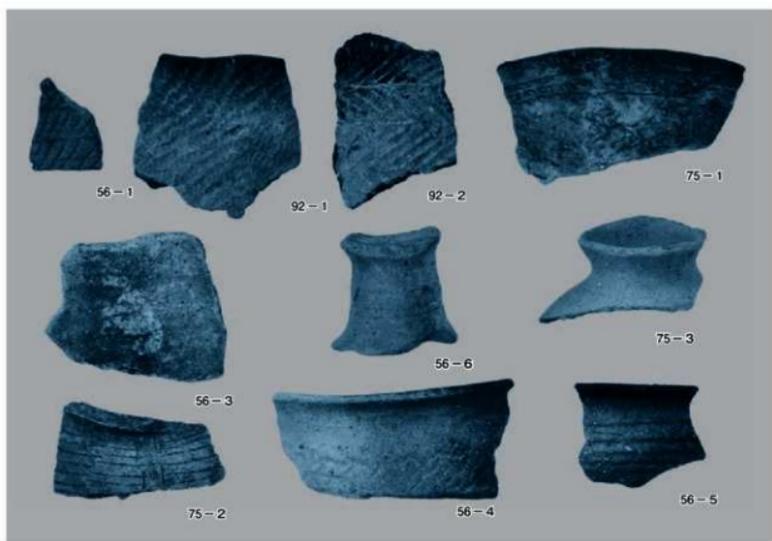
1 全景 (東小5)

3 土師器器台出土状況 (図98-8・西小5)

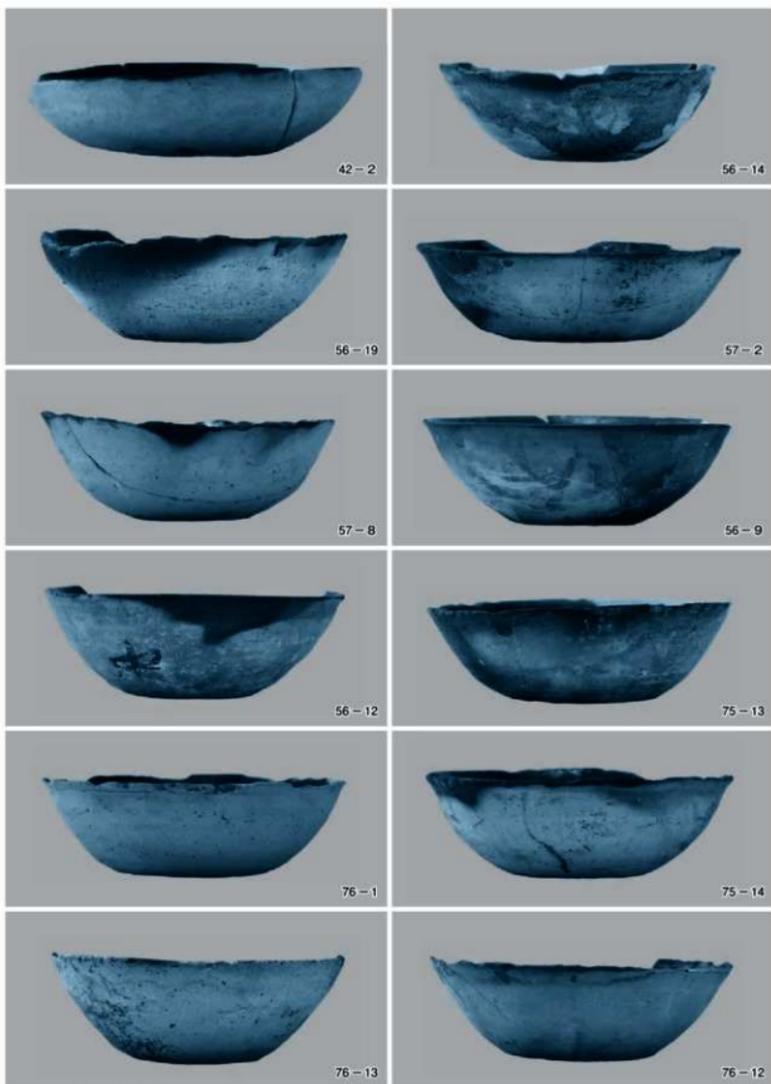
2 断面B-B' (東小5)

4 土師器器・器台出土状況図98-2・98-9 (北小5)

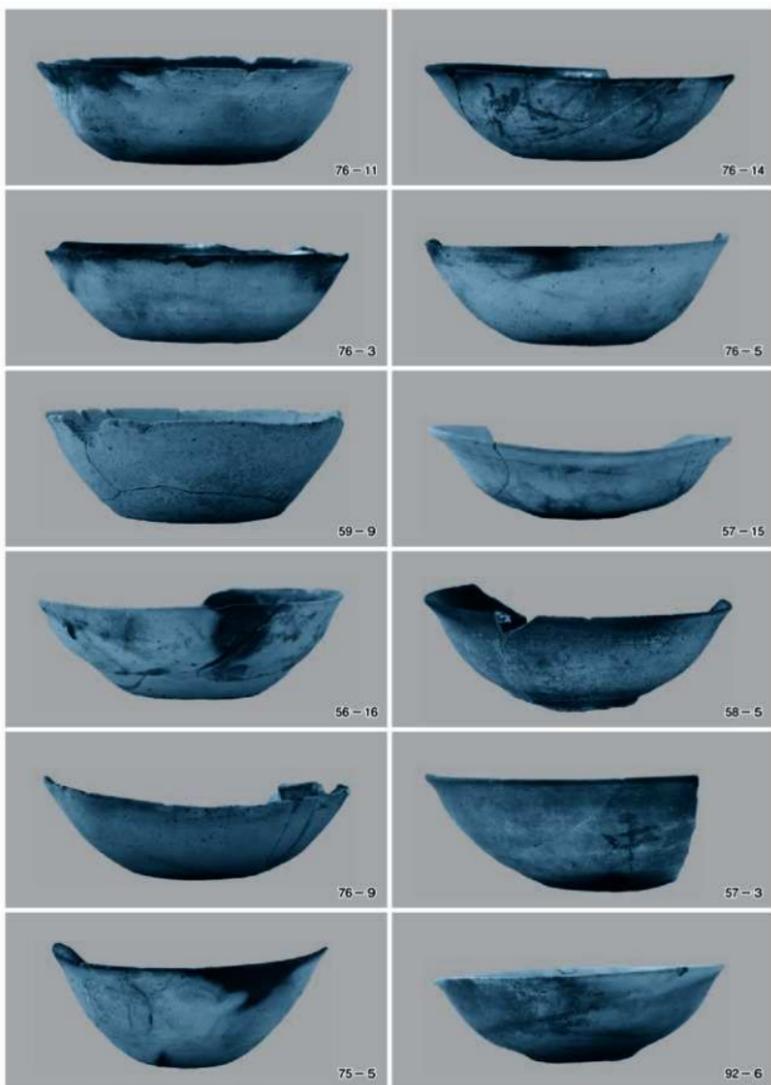
5 南東部遺物出土状況 (西小5)



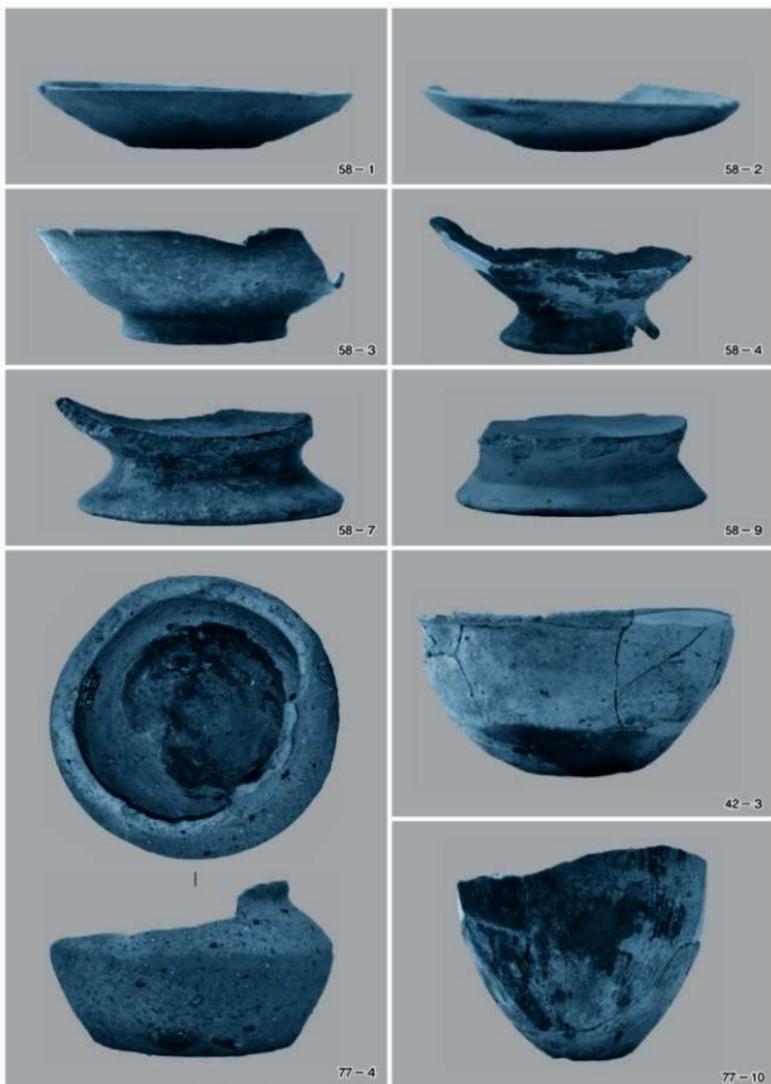
33 縄文土器, 弥生土器, 土師器



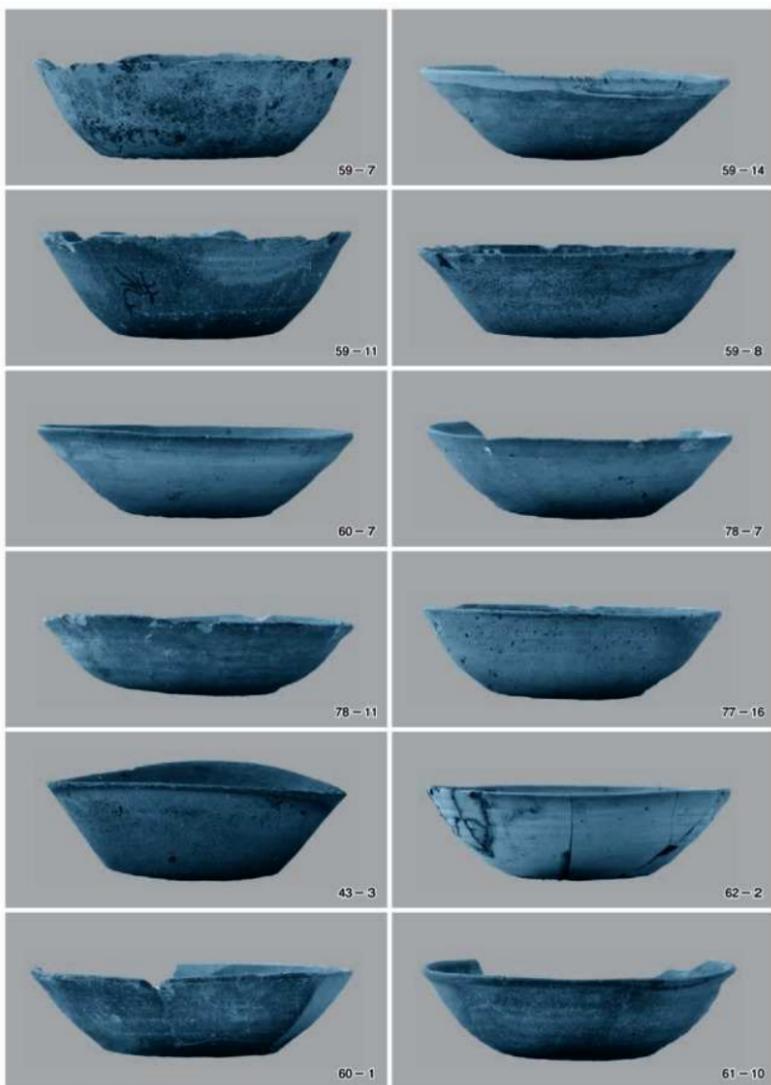
34 土師器(1)杯



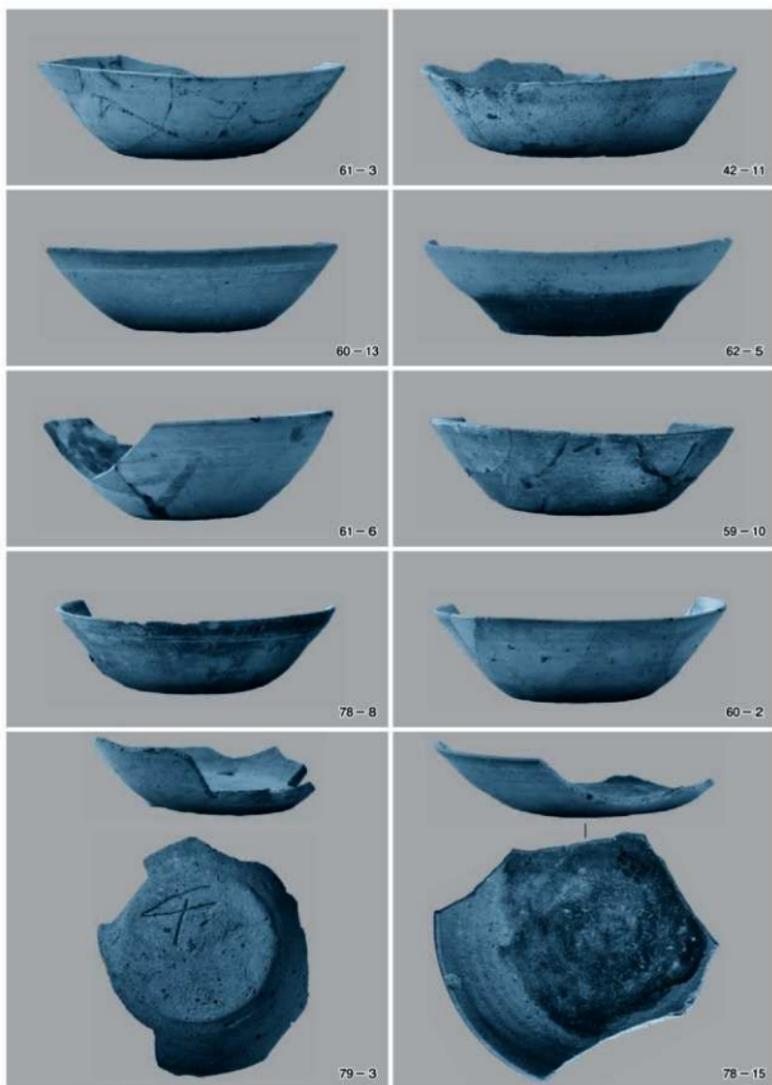
35 土師器(2) 杯・碗, 赤焼土器



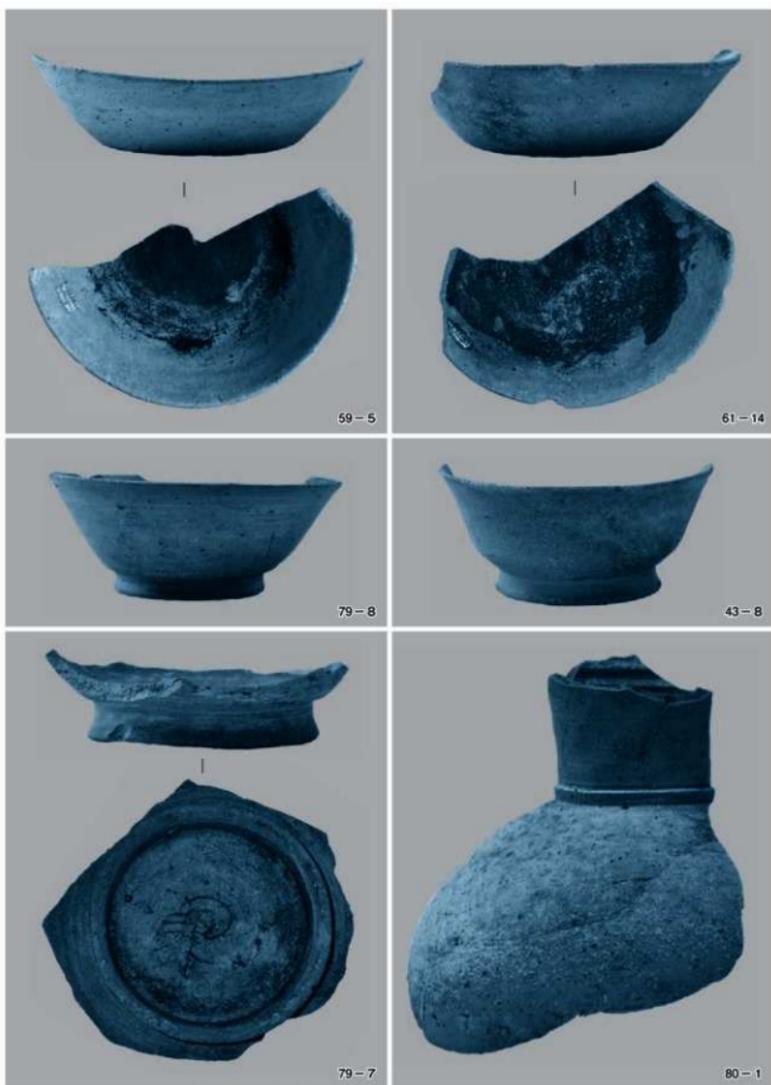
36 土師器(3) 皿・高台杯・壺・甕



37 須恵器(1)杯



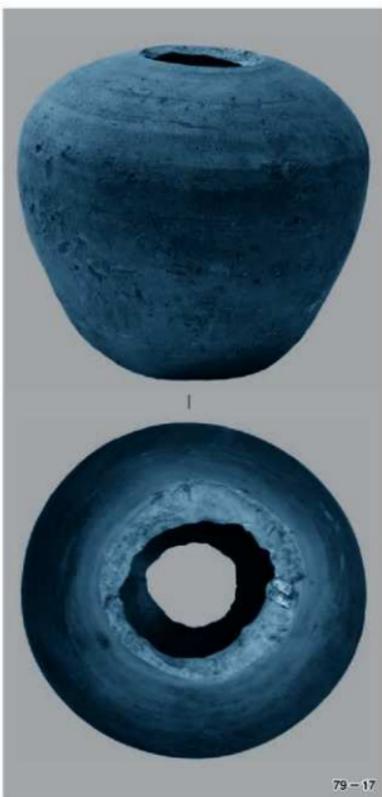
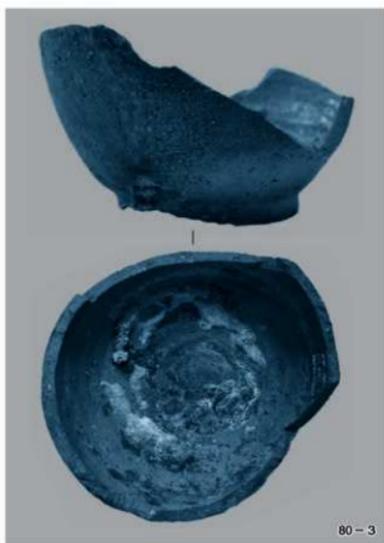
38 須恵器(2)杯



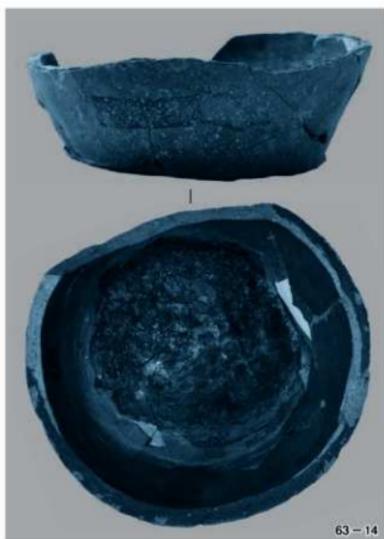
39 須恵器（3）杯・高台杯・長頸瓶



40 須恵器（4）長頸瓶・壺



41 須恵器(5) 壺・甕



63-14



63-13

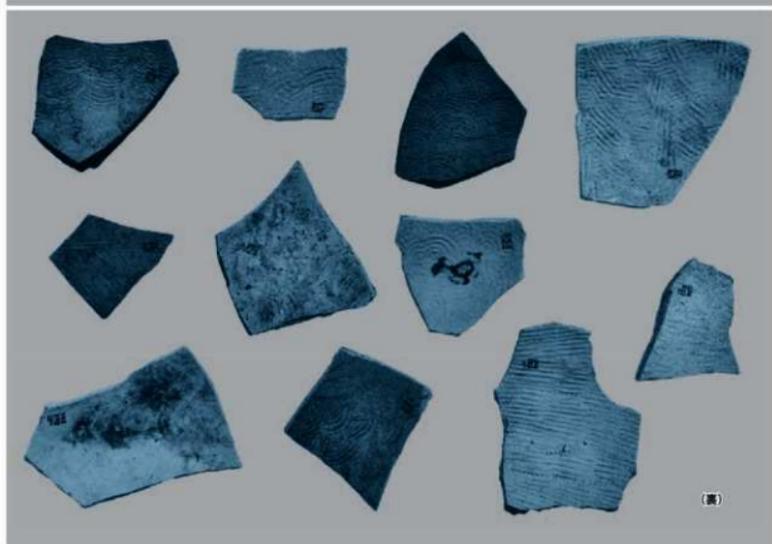
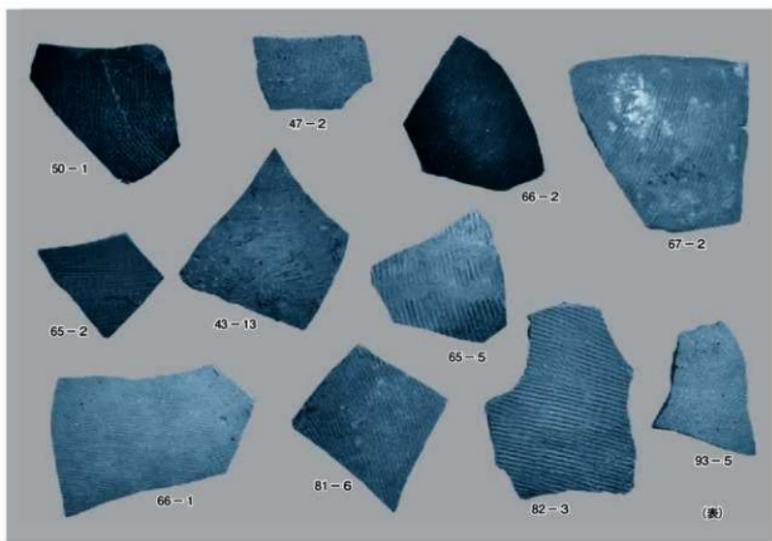


64-1

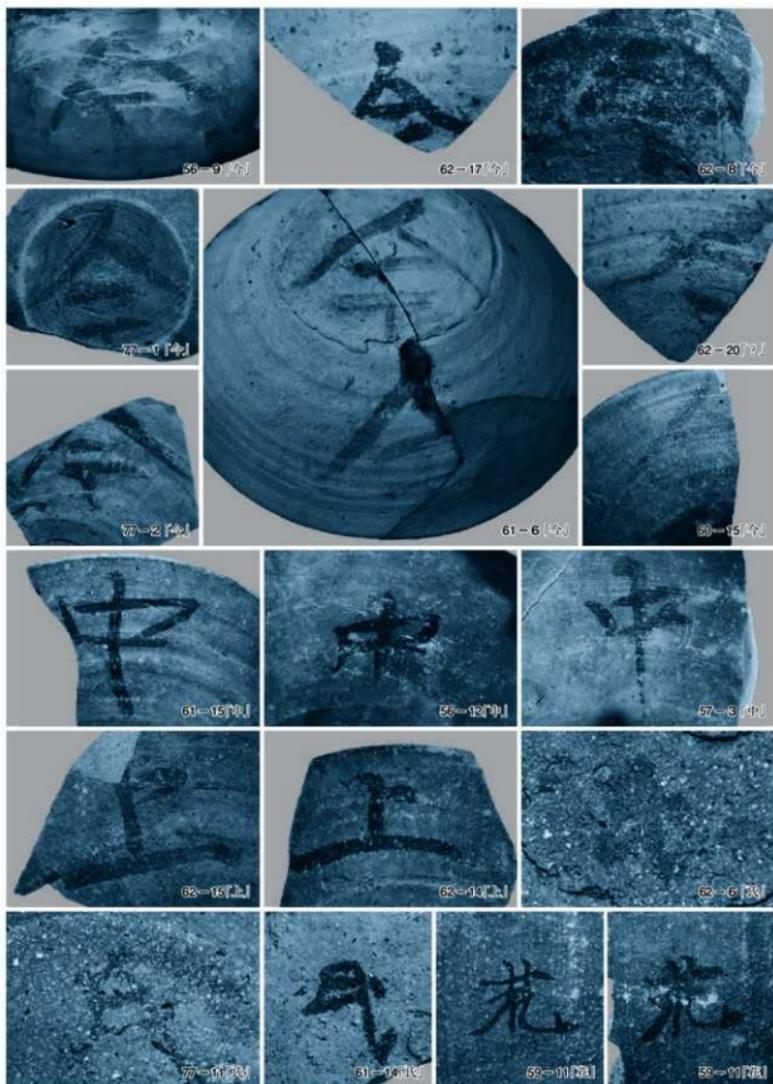


63-13

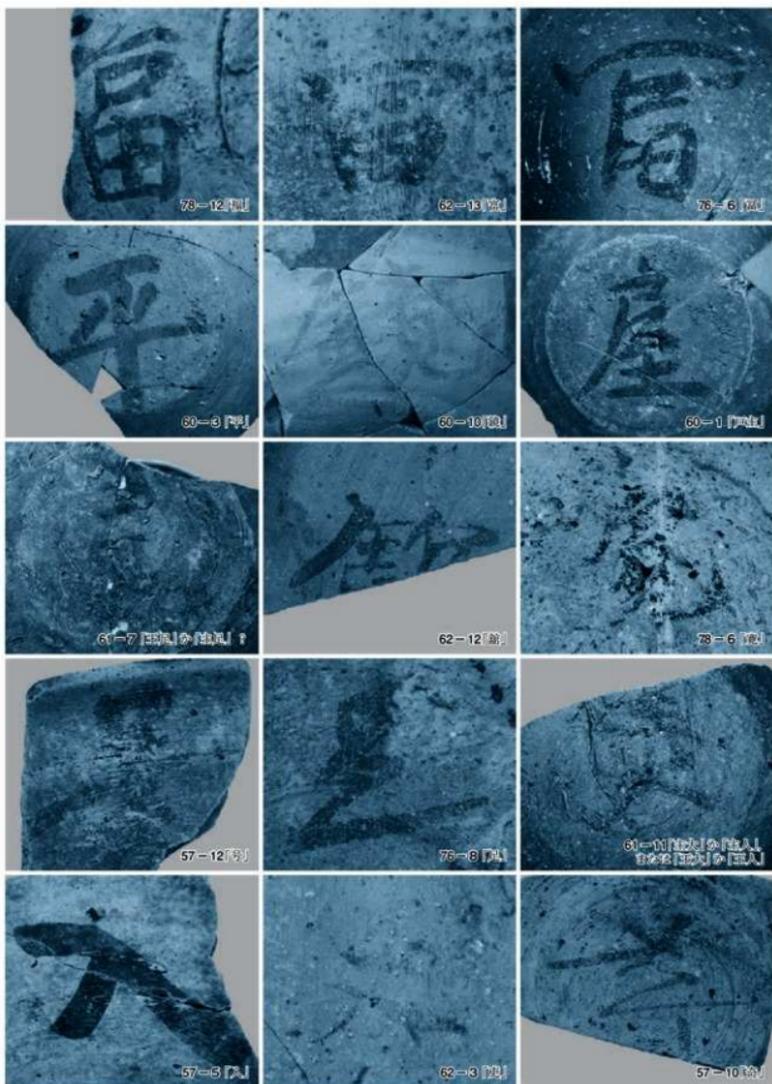
42 須恵器(6) 甕・横瓶・硯



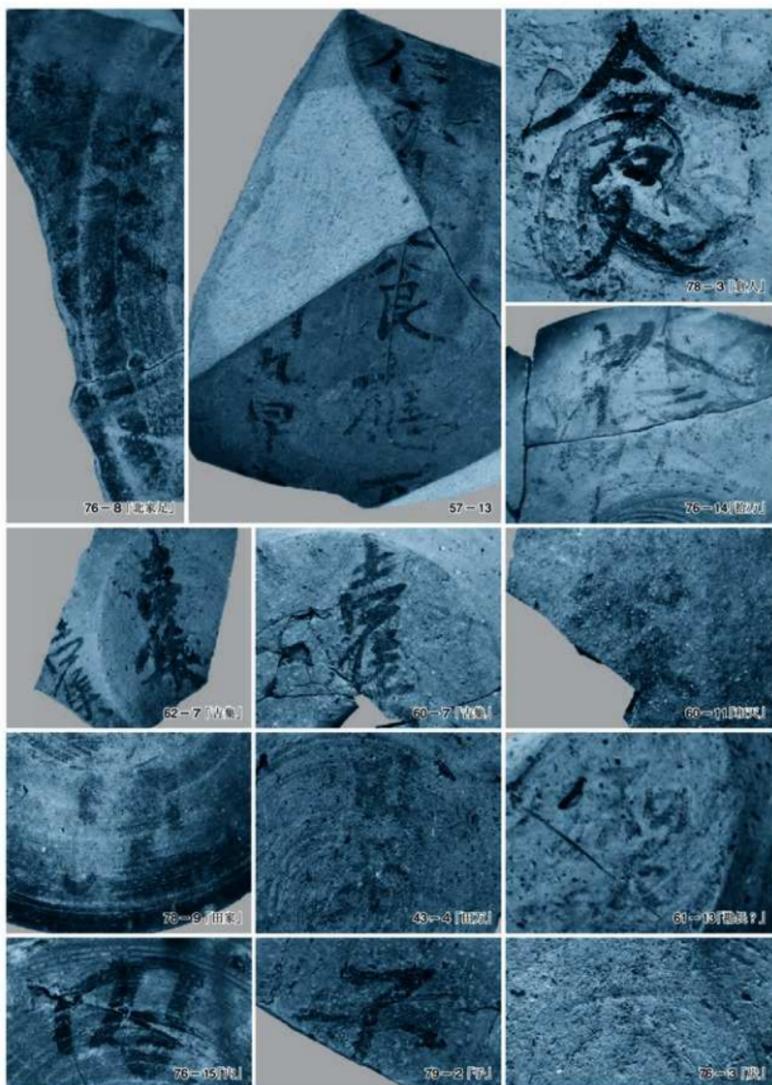
43 須恵器片



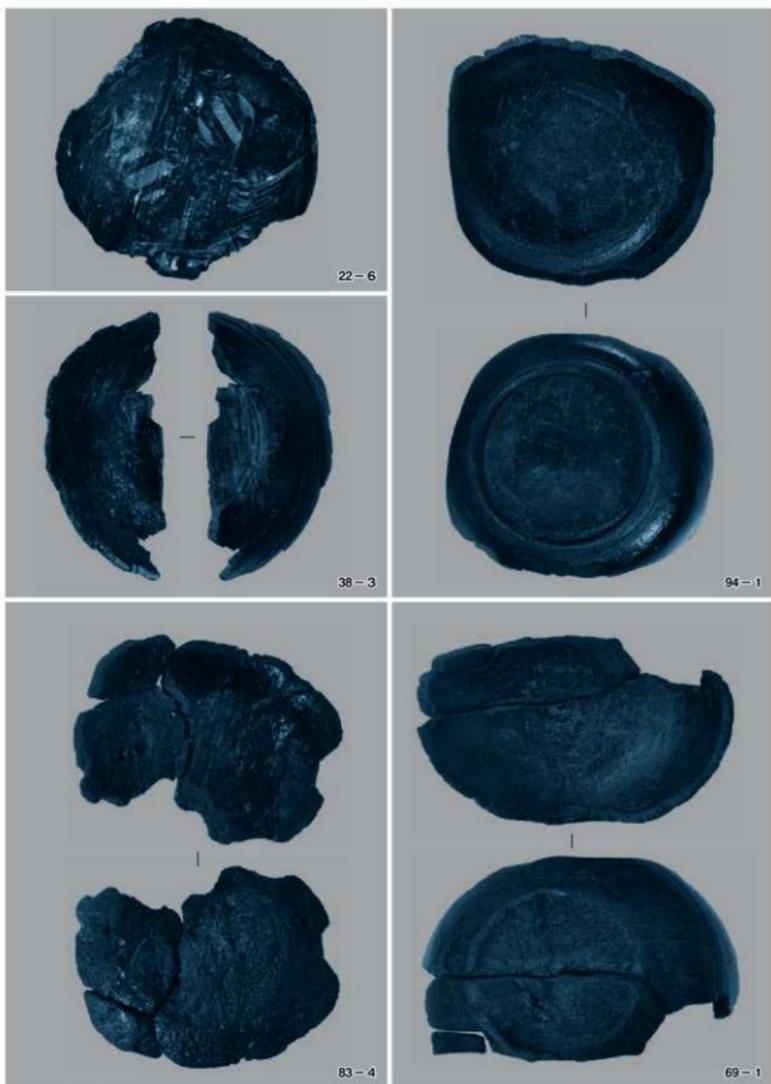
44 墨書土器 (1)



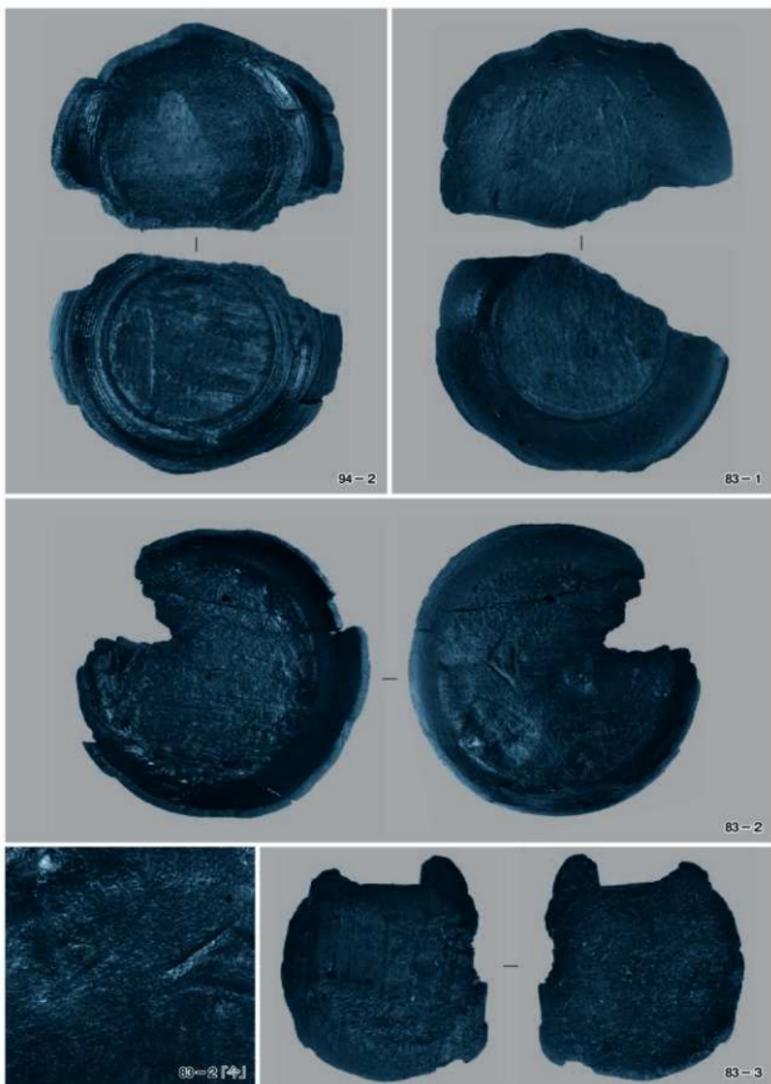
45 墨書土器 (2)



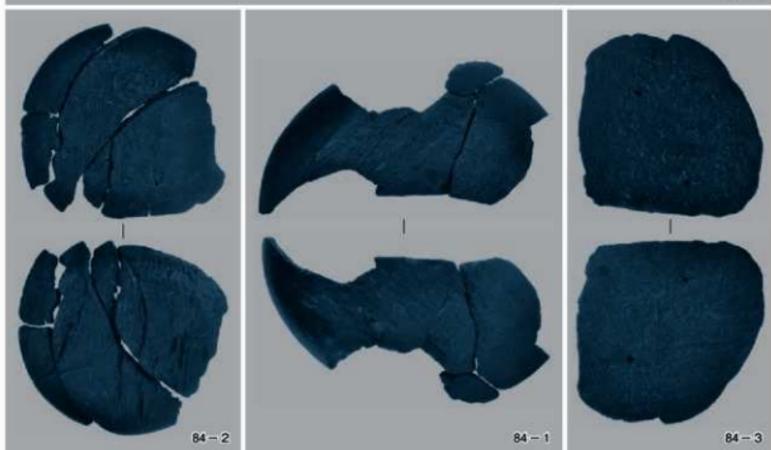
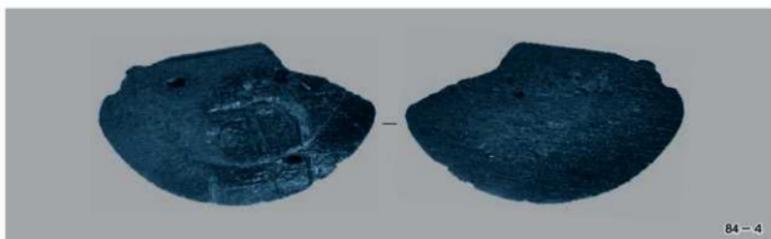
46 墨書土器 (3)



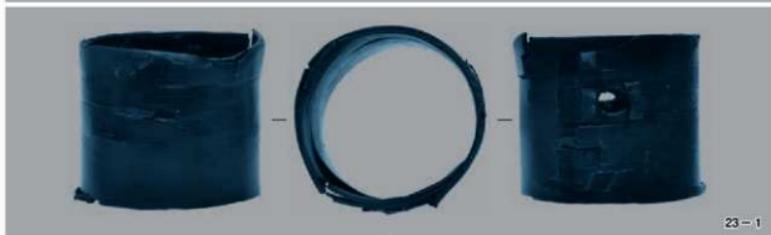
47 木製品(1) 椀



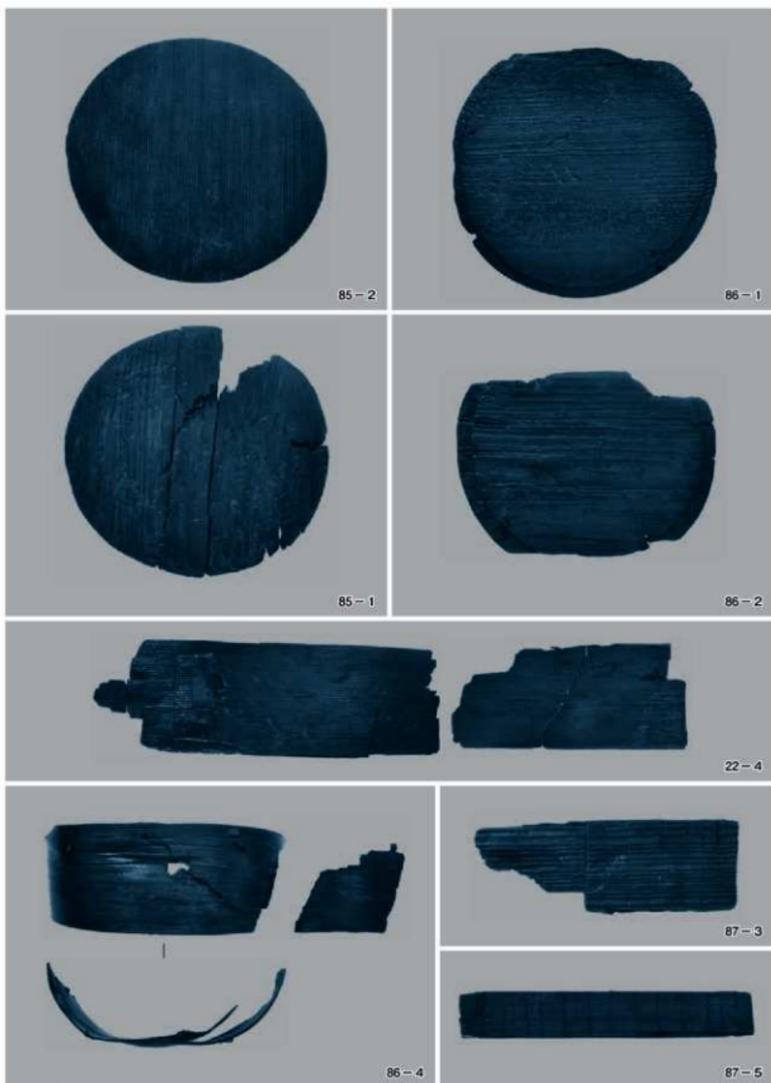
48 木製品（2）碗



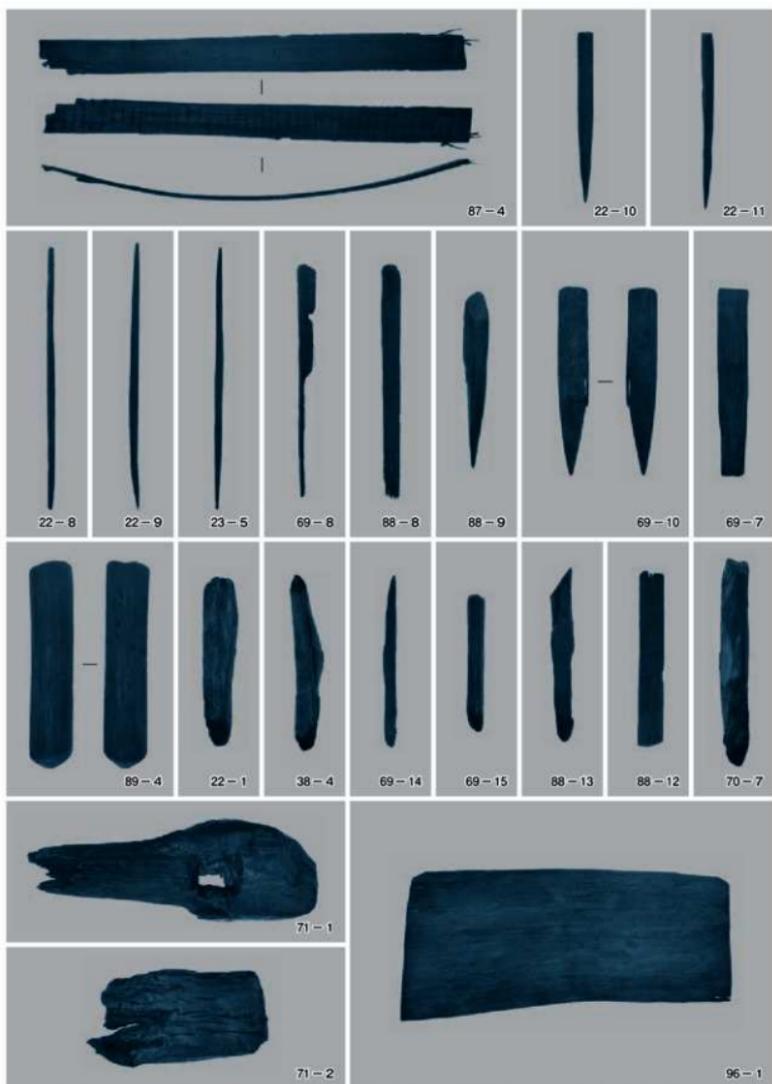
49 木製品(3) 椀・皿・盤



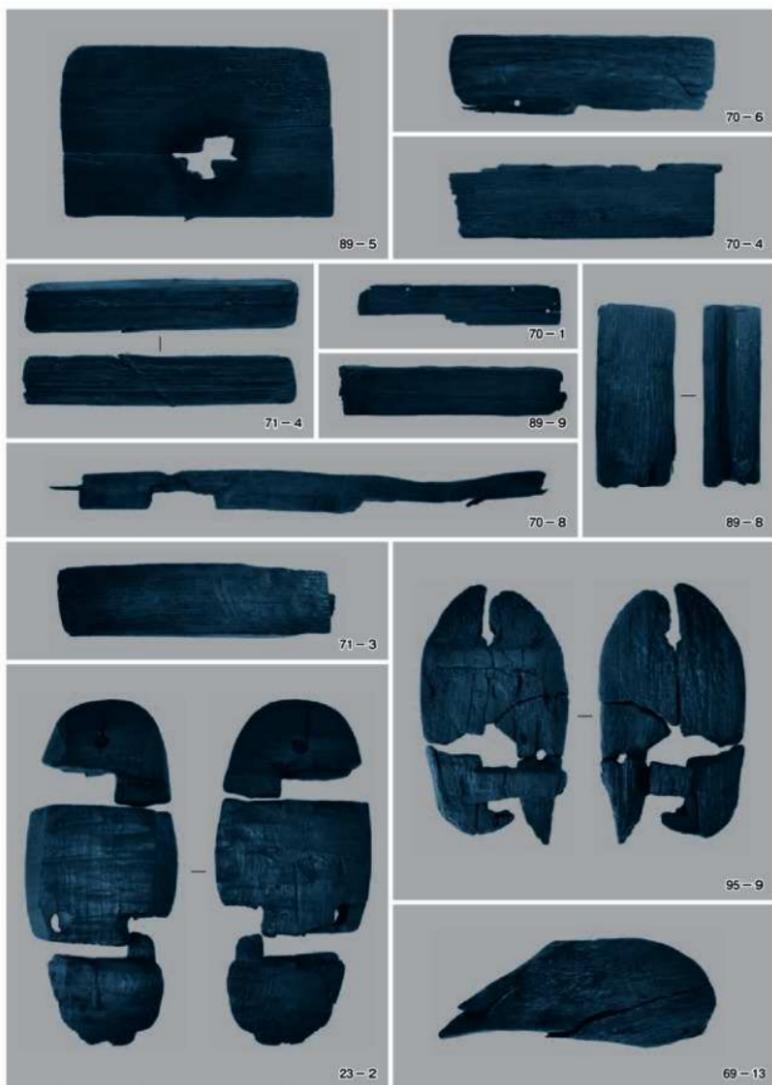
50 木製品(4) 曲物 柄杓・底板



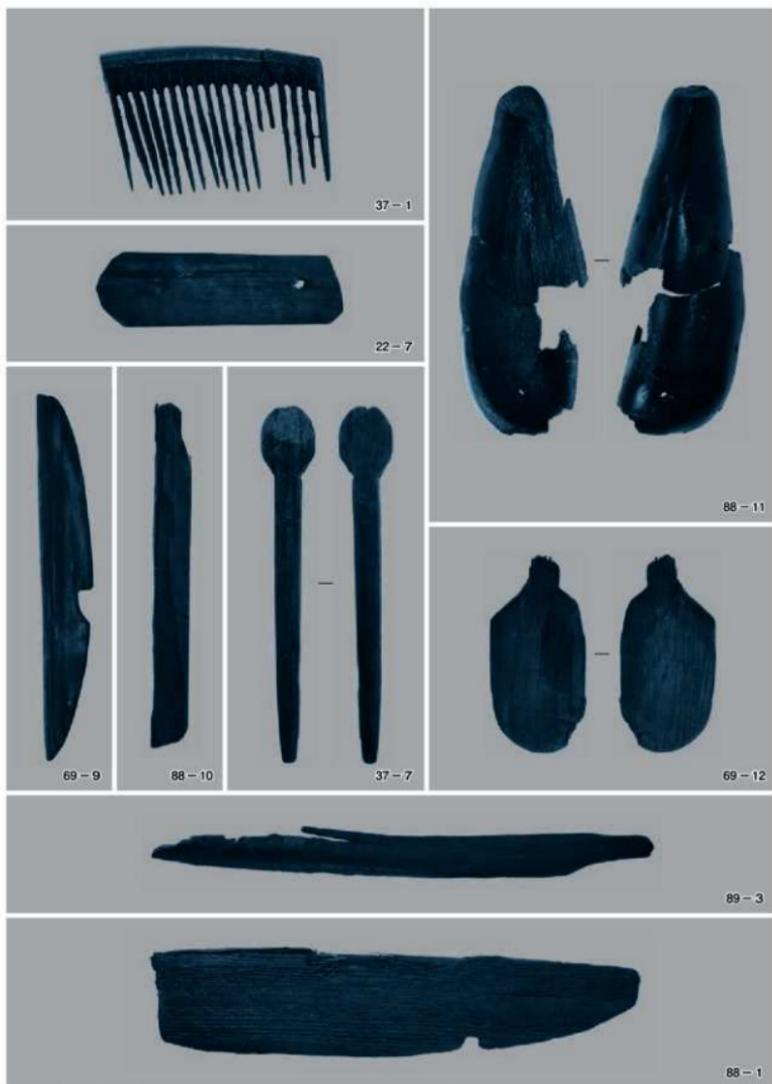
51 木製品(5) 曲物 底板・側板



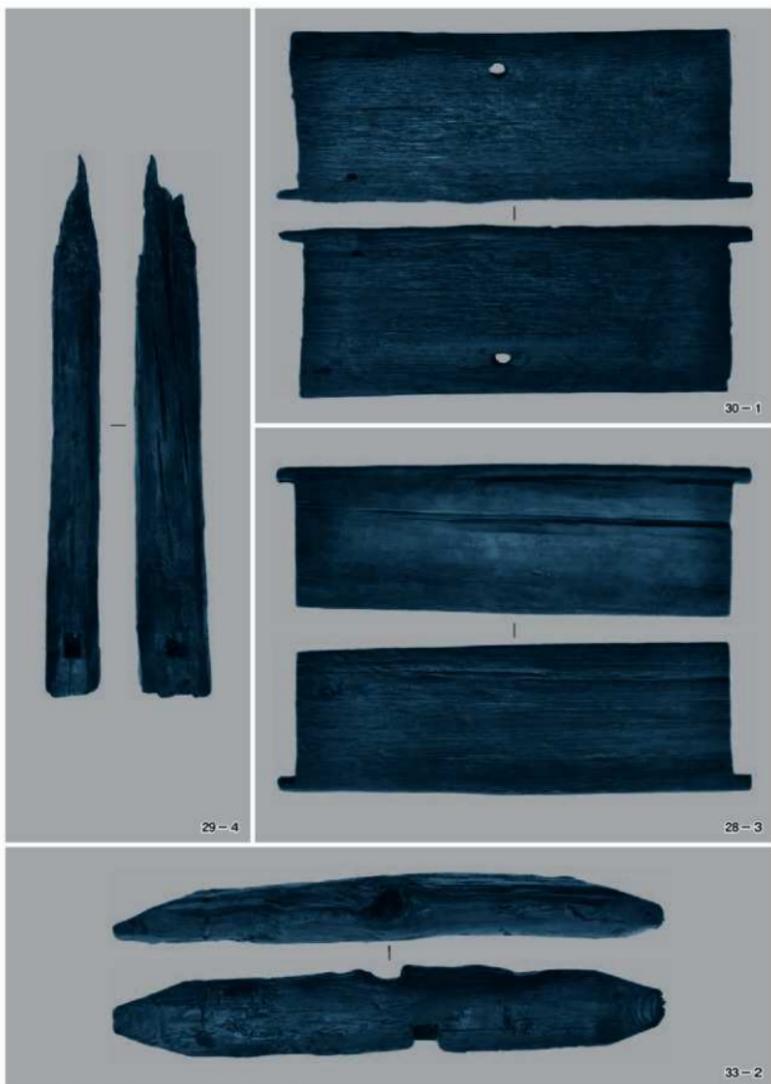
52 木製品(6) 曲物 匾板, 串・木筒・串状木製品・棒状木製品・火付木・板状木製品



53 木製品（7）板状木製品・建築部材・下駄



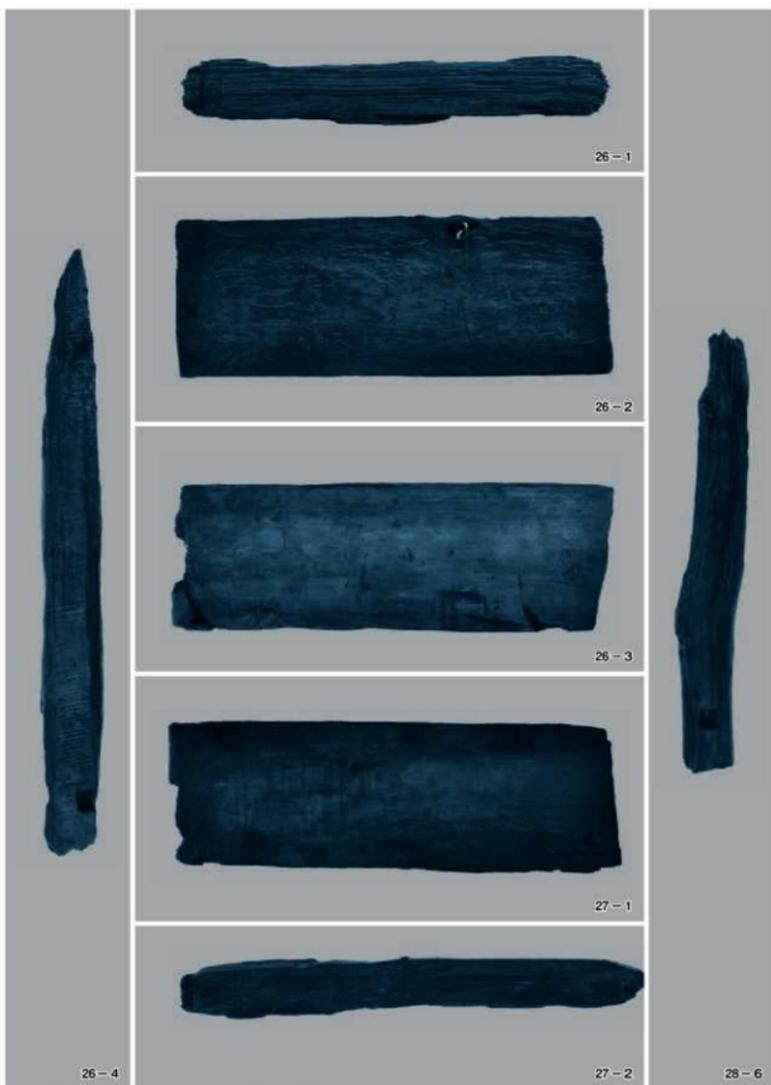
54 木製品(8) 櫛, 荷札, 瓢箪容器, 性格不明木製品



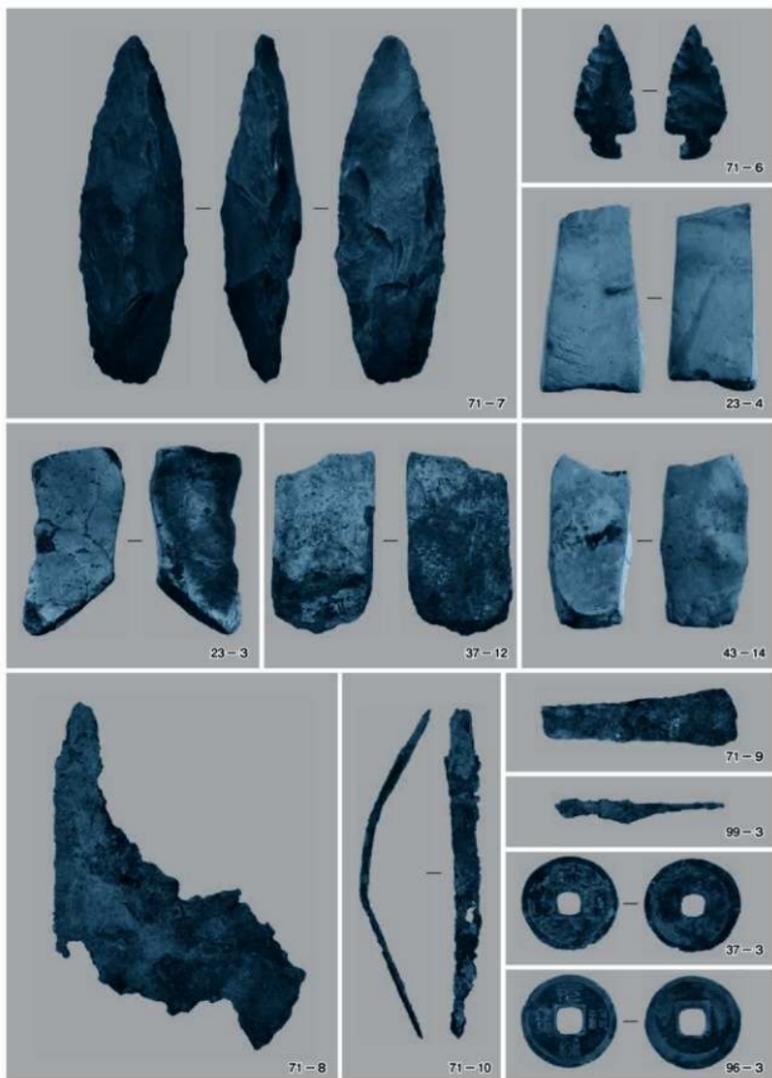
55 木製品(9) 1号井戸跡出土部材



56 木製品(10) 1号井戸跡出土部材



57 木製品 (11) 1号井戸跡出土部材



58 石製品, 金属製品, 古銭

## 第2編 西坂才遺跡（1次）

# 第1章 遺跡の位置と調査経過

## 第1節 遺跡の位置

西坂才遺跡は、会津若松市福島県会津若松市高野町大字中沼字西坂才甲に所在し、北緯37°30'6～12°、東経139°54'48～53°に位置する。本遺跡は、瀬(せせなぎ)川の西岸に面した低位段丘面とされる河岸段丘上に位置し、その標高は約192mである。本遺跡の北西側には、同じく平成25年(2013年)に調査した鶴沼B・C遺跡が、瀬川に沿って連続して続いている。本遺跡のすぐ東側には、国道121号が南北に延び、磐越自動車道路の会津若松インターチェンジまでは約1kmのところを位置している。

## 第2節 調査経過

西坂才遺跡は、平成24年度に実施した会津縦貫北道路の建設予定地を対象とした表面調査の結果確認され、その広がりには瀬川の西岸を中心に11,600㎡と提示された。平成24年11月には、財団法人福島県文化振興財団(現公益財団法人福島県文化振興財団 以下同様)が、建設用地内の一部5,800㎡を対象に試掘調査を実施した。その結果、試掘対象面積が、そのまま発掘調査の範囲となった(福島県教委2013)。その後、発掘調査が必要となった範囲に接した用地2,000㎡を追加買収し、要保存面積に加算され合計7,800㎡が平成25年度分の発掘調査(1次調査)対象面積となった。

調査範囲の現況は、国道121号に合流する市道幹Ⅱ-1号線(以下、市道)の北側(以下、便宜上「A区」と呼称する)に面した範囲は宅地と水田で、その南側の範囲(以下、便宜上「B区」と呼称する)は畑地であった。南側のB区内には、排水のために掘られた比較深い水路が東西・南北に数本延びており、調査範囲の西縁を北流する用水へと排水できるようになっていた。

平成25年度は、4月3日に関係機関による現地協議を実施し、調査対象範囲と調査計画を確認した。調査対象範囲は、東西に走る市道を挟んで南北のA・B両区に分かれている。発掘調査面積については、A区を3,800㎡、そしてB区を4,000㎡の合計7,800㎡を対象とした。A・B両区については、西端工事境界から10m幅の範囲を上半期中に引き渡し、工事用仮設道路を敷設したい旨、工事側より要請があった。そのため、財団法人福島県文化振興財団は職員3名を配置し、A・B区共に調査区西側から発掘調査に着手することとした。

4月1日から発掘調査にかかる諸手続きを進め、4月11日からB区西半分の表土除去と、調査区境の確認と縄張りなど現地作業を開始した。4月下旬までには、調査事務所の設置や駐車場の造成、発掘機材の搬入などの条件整備を行い、引き続きA区西および南側の表土除去を継続した。4月26日には、32名の作業員を雇用し、遺構確認作業を開始した。5月14～17日、B区南に隣接し

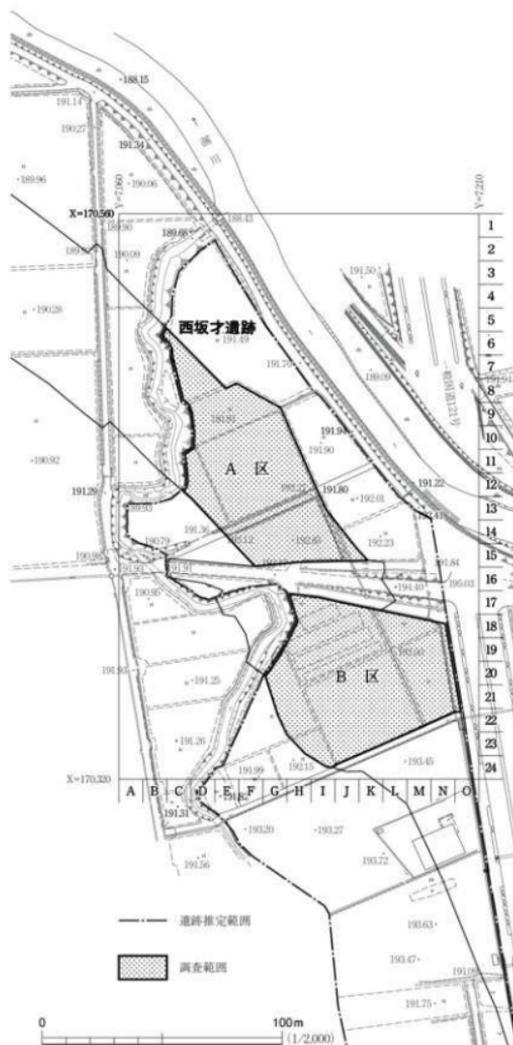


図1 遺跡調査範囲・グリッド配置図

た未試掘調査範囲2,700㎡について、予備調査としてトレンチ7本を設定し遺跡範囲の確認を実施した。その結果、遺構・遺物は確認できず発掘調査の必要はないが、工事にあたっては慎重に対応してもらったこととなった。6月12日からは10名の作業員を追加し、主にB区の遺構確認作業を進めた。B区は、畑地として利用されながらも、もともと水はけの悪い土地で、排水のことに配慮しつつ表土除去作業を継続した。5月中旬になり、遺構の確認作業が本格化し、A・B両区において平安時代の土坑や溝跡の他、時期不明の小穴群などが複雑に重複している状況が分かり始めた。しかし、B区では、遺跡の基盤をなす黄褐色粘質土(第2章で「Ⅲ層」と呼称)が、乾燥すると非常に硬く、雨水などで濡れると軟弱で粘り気を増す土質のため、遺構確認作業にかなり苦労した。A区では、黄褐色粘質土の上に堆積した黒褐色粘質土(第2章で「Ⅱ層」と呼称)上面で、遺構の確認を実施することになり、地面が乾燥すると土色の違いでの遺構の見極めが非常に難しかった。

6・7月に入ると、B区西側の先行引渡し部分について遺構確認および精査が進んだ。引き渡しに向けて、先んじて地形測量と、遺構図の作成、そして7月3日には1回目の空中撮影を実施した。7月10日、工用仮設道路取り付け工事に伴い、B区西側部分500mについて引き渡しを行った。

7月中旬～8月にかけて、A区の東・北側そしてB区東半分について表土除去を開始し、その間作業員は2つの調査区を移動しつつ遺構確認および精査を継続した。A区のうち北側三分の一ほどについては、ほ場整備の段階で深くまで地形の改変を受け、遺構は残っていないことが分かった。

8月下旬～9月にかけて、調査は順調に進み、9世紀代の建物跡群の並びなどが次第に明らかになってきた。建物に付属した雨落ち溝からは、脚部の装飾が目立つ円面硯が出土し、注目された。また、建物跡群が建てられる以前に掘られていた3条の溝跡なども確認され、そのうちの1条は西隣りの鶴沼C遺跡まで直線距離にして約450mも延伸していることなども分かってきた。

遺跡の全体像の分かりつつあった10月2日には、二度目の空中撮影を実施した。この頃になると、西坂才遺跡での遺構精査が概ね終了し、遺構の実測図の作成と地形測量が主になってきた。この間、作業員は隣接する鶴沼B・C遺跡での遺構確認および精査に合流させるなど調整し、別の遺跡での発掘調査の展開の準備を併行して実施した。

10月19日には、鶴沼C遺跡と西坂才遺跡の2現場を対象に、現地での説明会を実施した。当時の見学者は約70余名を数えた。説明会后、事務所・休憩用プレハブは10月21日に撤去した。10月22日には、関係機関3者で、調査成果を確認し、10月29日からはA・B両区の埋め戻しを開始した。埋め戻しの終了した11月8日には、西坂才遺跡での本年度の現地作業をすべて終了した。

平成26年度の西坂才遺跡の2次調査は、A・B区に挟まれた市道下が対象となる。

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布（図2～5）

西坂才遺跡（1次調査）の発掘調査は、国道121号に接続する市道が、調査範囲の真ん中を南北に分断している。今回の調査は、市道を挟んで南北に分かれた調査区面積7,800㎡を対象に実施した。

調査範囲の現況は、市道北側のA区は畑地・水田および宅地で、南側のB区は畑地・水田である。このうち、両調査区とも、近年の造成により部分的に地形の改変が著しかった。A区の最北端と西側の用水縁の10m幅部分については、近年の造成が深くまでおよんでいた。また、B区では畑地の排水用に東西に延びる深い水路が複数掘られていた。

市道北側のA区で確認した遺構は掘立柱建物跡7棟（SB01～03・05～08）、土坑5基、建物跡に付随したものも含めた溝跡6条（SD13～16・18・23）である。A区にある建物跡はすべて平安

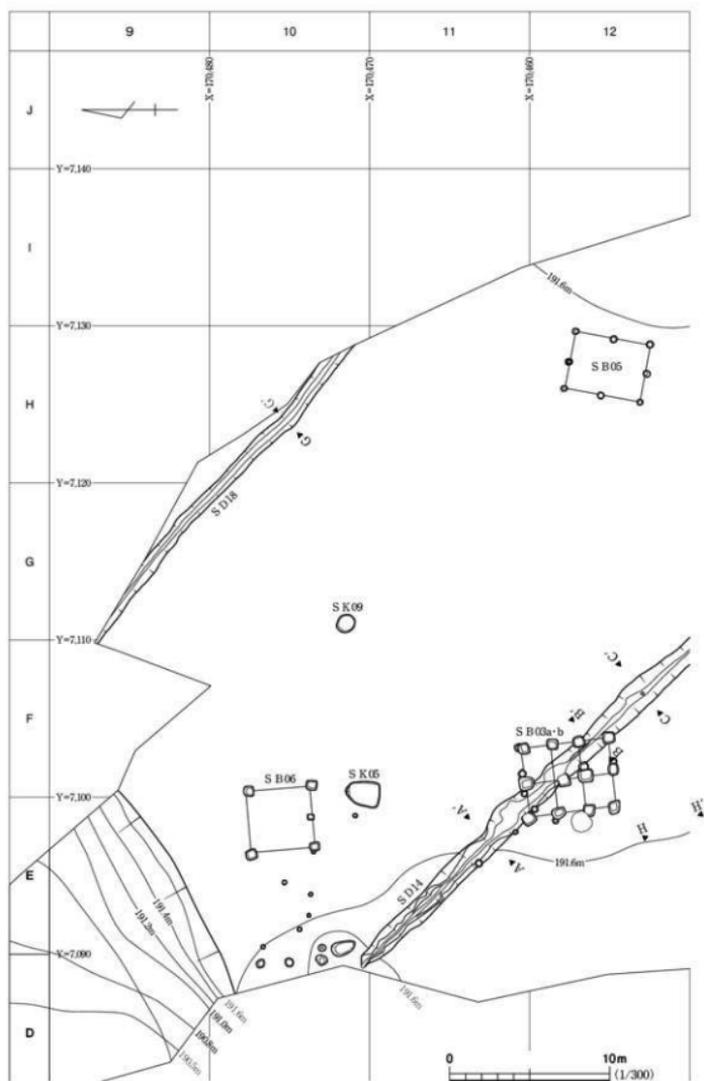


図2 A区遺構配置図（1）

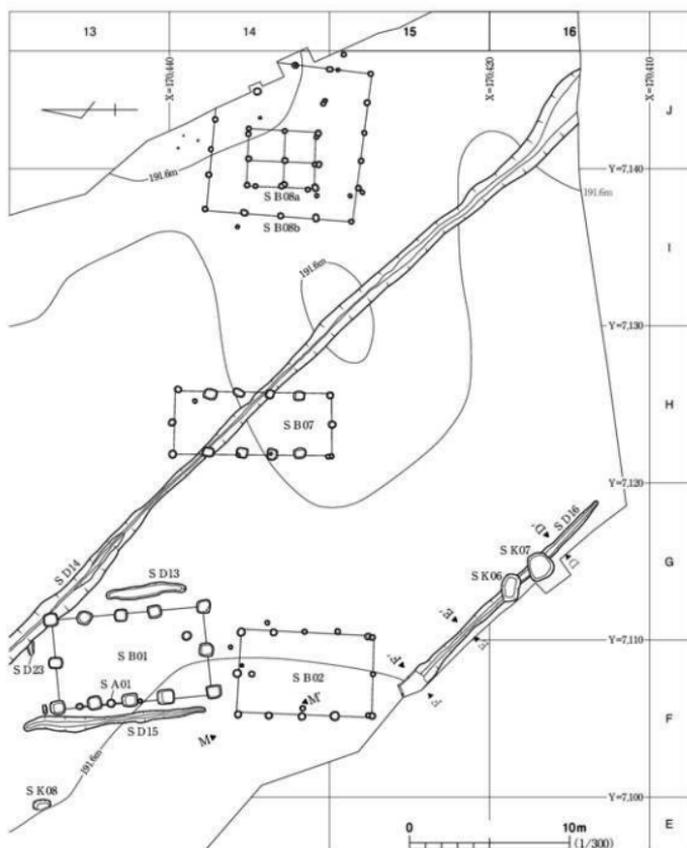


図3 A区遺構配置図(2)

時代の遺構と考えている。建物跡群は、どれも切り合うことなく配置されていた。建物群は、柱穴の平面形の違いや直径の違い、また配置方向の違いから概ね2グループに分かれると考えている。また、A区で確認できた溝跡のうち、14号溝跡は建物跡群よりも古くから機能していたことが分かり、北西側に隣接した鶴沼C遺跡まで総延長にして約450mあまり延伸していた。

南側のB区の遺構は、溝跡18条(S D01～12・14・17・19～22)、土坑5基(S K01～04・11)、掘立柱建物跡1棟(S B04)を確認した。溝跡のうち、14号溝跡はA区から引き続き南東方向へと続いている古代の遺構である。多くの溝跡は、北西から南東あるいは北東から南西方向へ向かって

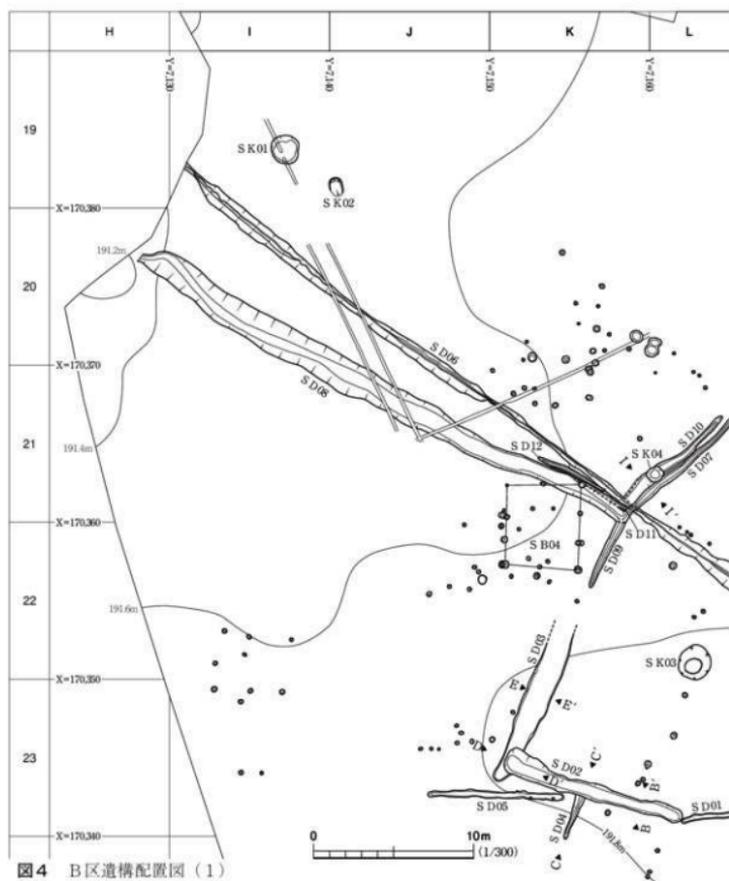


図4 B区遺構配置図(1)

掘られているものも多く、大半は近現代のものと考えている。調査区中央部には、4号掘立柱建物跡とした備柱建物跡と1基の井戸跡(S K 03)がある。4号掘立柱建物跡の年代は、その軸線方向が、真東・真北方向に向かって延びる1・5・17・21号溝跡の延伸方向と一致していることから、平安時代に属すると考えている。

A・B区からの出土遺物は、縄文時代の石器、平安時代の土師器・須恵器や硯などが出土している。しかしながら、縄文時代の遺物は極僅かに出土しているものの、縄文時代の遺構は確認できていない。

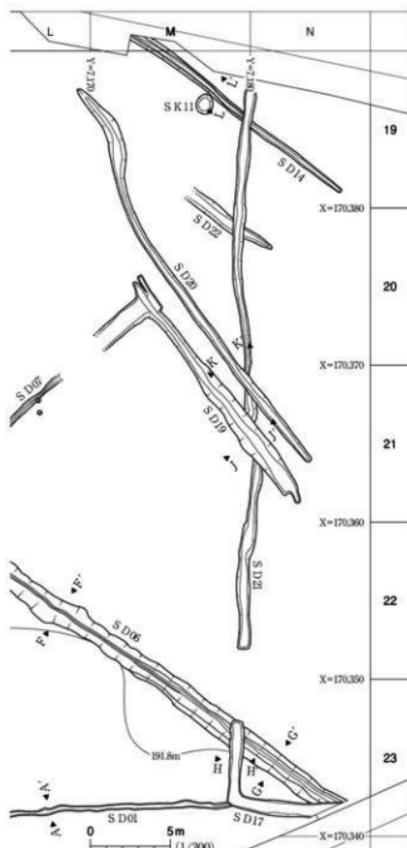


図5 B区遺構配置図(2)

### 基本土層 (図2・3・6)

西坂才遺跡の調査では、基本土層の表記に、アルファベットの大きな文字Lをつけて、これにローマ数字とアルファベットの小さな文字を組み合わせて「L II a」と表記した。しかし、この層位は、第1編の鶴沼C遺跡で使用されている基本土層の表記とは完全に一致していない。

**L I** この層は暗褐色粘質土で、A・B区での耕作土兼表土層である。土色・土質ともにA・B区において概ね共通している。特に、A区南端は宅地として利用され、比較的高く盛り土されていた。また、市道南側のB区で、主に畑地であった範囲については、現地表から比較的深めに掘削などがおよんでいたため、A区よりも表土除去時の掘削深度が深くなった場所もある。

L II a～cの3層は、A区西側のSB 01～03・05周辺に残存していた。この範囲について、L IIを試験的に2か所掘り下げたところ、筋状の落ち込みが、西から東、SB 01からSB 05の方向へと延びていることを確認した。試験掘りを実施した結果、落ち込みの深さは約50～60cm、断面形状は浅い皿状をなし、土中から遺物は出土し

ていない。土層観察確認した結果、落ち込み内に常時水が流れていたという状況は確認できなかった。堆積層は、L II a～c層が上から順に堆積し、図6に示した状況と概ね同じ堆積状況であった。

**L II a** この層は、黒色粘質土である。削平を免れたA区中央部のみで確認できた旧表土層に相当する土層である。層厚は薄く10～15cm程度である。L II aの分布状況は、建物跡群を確認した調査区中央に部分的に遺存していた。土中からは、平安時代の土師器細片の他、5mm前後の炭化物が僅かに含まれている。A区にある7棟の掘立柱建物跡のうち5棟(SB 01～03・05)は、この層上面で確認した。

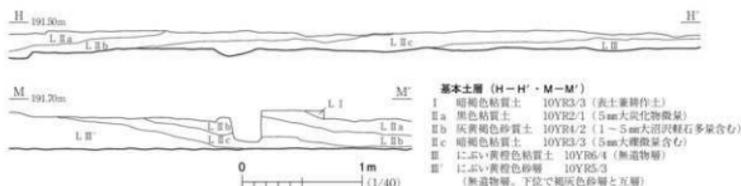


図6 A区基本土層

- L II b** この層は、灰黄褐色砂質土である。上位のL II a層同様、削平を免れたA区中央部でのみで確認できた土層である。1~5mm大の沼沢火山噴出物(NP)を比較的多く含んだ土層である。L II a層の周辺および下層から確認されることが多い。弥生時代より古い旧表土である。層厚は10~15cmと薄い。沼沢火山噴出物は、風化などで白色の細粒になった状態であるため、水成堆積による二次堆積と考えられる。この層中に遺物は含まれていない。
- L II c** この層は、暗褐色粘質土である。層厚は10cm前後と、上位のL II a・b層よりも薄く堆積している。この層の分布状況も部分的で、1号掘立建物跡を確認したA区中央にわずかに残っていた。この層中に遺物は含まれていない。
- L III** この層は、にぶい黄褐色粘質土で、深さによって多少白みがかったり、黄色が濃かったり色の違いが若干ある。層厚は70~80cm。遺跡内のほぼ全域で確認でき、大半の遺構はこの上面で確認した。この土については、火山ガラスおよび軽石の分析を行った結果(福島県教委2013)によると、土中には沼沢湖堆積物起源の火山泥流(ラハール)に由来する砕屑物がさらに再堆積して形成された可能性がある。そのため、上層のL II b層にはL III層に由来する粒子の細かい砕屑物が多量に含まれている。この層中に遺物は含まれていなかった。この下層には、L III'層としたにぶい黄褐色砂層が、30cm程の厚さで堆積していた。L III'層は、3号土坑を深く掘り土層観察を行った際、下層で確認した(図25右下)。この層中に遺物は全く含まれていなかった。
- L IV** この層は、灰褐色粘質土で水成堆積土層である。この層は、3号土坑を深く掘り土層観察を行った際に確認した(図25右下)。L III'層の下に堆積し、別層としたがL III'層の下部に含まれる可能性もある。雨の時期には、この層からの湧水が著しい。また、3号土坑の掘削の際、この層から長さ45cmほどの木材が1点出土した。この木材片の放射性炭素年代測定を行ったところ7,180±30yrBPという結果を得ている(付章自然科学分析参照)。このことから、紀元前4,000年頃には、瀬川西岸周辺の標高の低かった場所はL IV層で覆われていた可能性が高い。

沼沢火山の噴火は、紀元前3,400年頃(山元1995)とされる。この時の火山噴出物は、会津盆地中央部の低地において、水成堆積の粘土層中で確認されている。このことから、縄文時代前期末(大木6式期)には会津盆地の広い範囲が大きく湖沼化し、縄文人にとっては居住に適さない土地になっ

たと考えられている。しかし、第1編の鶴沼C遺跡の自然流路跡底より、旧石器時代末から縄文時代草創期の石器が流入していることなどを考え合わせると、瀬川周囲には点在した微高地状の高まりがあり、その地において縄文時代前期末以前から既に人々の生活が営まれ続けていたとも推測できる。(阿部)

## 第2節 掘立柱建物跡

西坂才遺跡の1次調査では、合計9棟の掘立柱建物跡を確認した。これらのうち、4号掘立柱建物跡についてはB区中央部に1棟だけ存在し、残りの8棟についてはすべてA区で確認されている。建物跡については、すべて平安時代のもと考えている。

また、1号掘立柱建物跡については、周囲に3条の雨落ち溝が巡っていた。調査時の都合上、溝跡には各々SD13・15・23と番号をつけているが、1号掘立柱建物跡に付属する施設として本節中でまとめて報告し、新旧関係が不明な1号柱列跡についても併記した。なお、報告する柱間距離は柱痕遺存の場合は芯々距離、その他は掘形中央間を計測値とした。

### 1号掘立柱建物跡

S B 01, S D 13・15・23, S A 01 (図7～9, 写真6・7・15・22)

#### 遺 構 (図7・8, 写真6・7・15)

本建物跡は、A区中央部のF13・14, G13・14グリッドにまたがって位置し、LII aおよびLIII上面で検出した。14号溝跡の一部と重複し、本建物跡が新しい。南1mに2号掘立柱建物跡、西4mに8号土坑が存在する。また、3個の柱穴からなる1号柱列跡とも重複するが、本建物跡との新旧関係については分からないものの、両者の柱穴は並ぶ方向を揃えて作られている。掘立柱建物跡の外周にあたる東・西・北側の3方向には、それぞれ1条ずつ溝跡(SD13・15・23)が巡っている。

本建物跡は、東西2間、南北4間、平面形は長方形となる。東西軸のP1-P3とP7-P9は約5.6～5.7m、南北軸のP1-P9とP3-P7は9.5～9.6mを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約54.1㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN6°Wとなる。柱穴の平面形は隅丸方形または長方形である。柱穴の規模は一辺0.8～1m、確認面からの深さは41～68cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LII a・b層の土を多く含んだ暗褐色土を基調とし、土に締まりがある。柱痕はすべての柱穴で確認でき、その直径は20～25cmであった。堆積土中から遺物は出土していない。

柱穴の東西北側の外周には、3条の溝跡(SD13・15・23)が掘り込まれている。これらの溝跡の残存規模は、長さは西側の15号溝跡が最も長く約11.5m、13号溝跡は約5m、北側の23号溝跡については断片的にしか確認できていない。3条の溝跡と柱穴との距離は、掘形縁から約6～50cmと近接しており、確認面から深さは6～10cmとかなり浅い。溝跡内堆積土は、柱穴同様にL

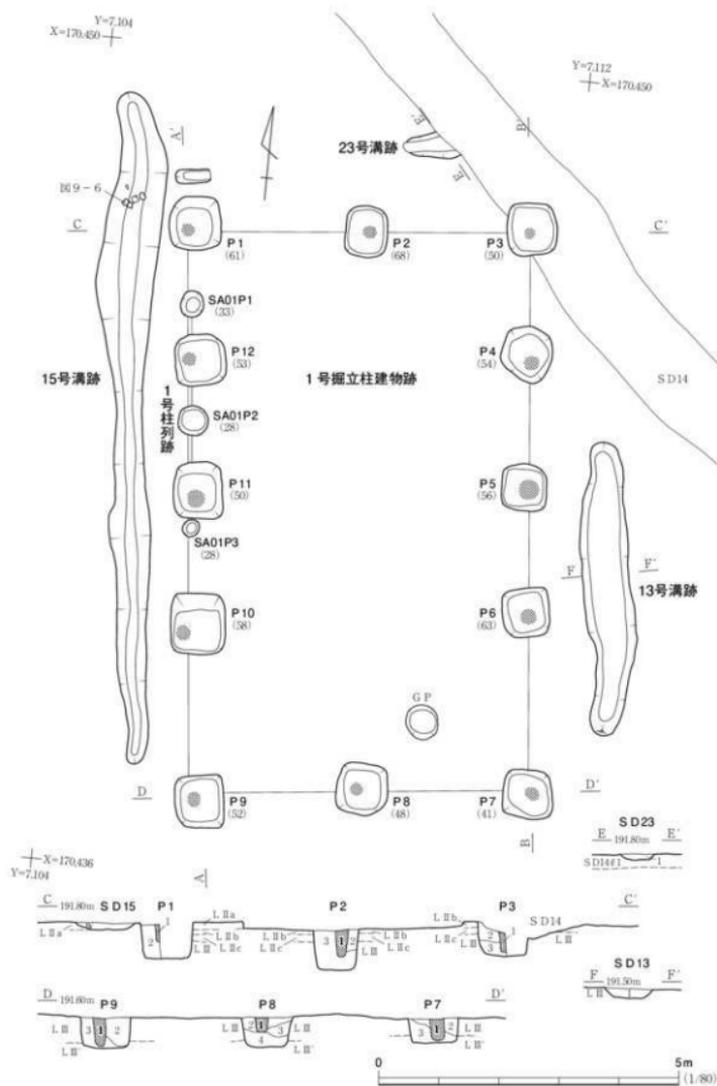


図7 1号掘立柱建物跡，13・15・23号溝跡，1号柱列跡（1）



図8 1号掘立柱建物跡、23号溝跡、1号柱列跡(2)

Ⅱa・b層の土を多く含み、暗褐色系の土のみとなっていた。堆積土中からは、平安時代の土師器・須恵器細片の他に、クルマ大から拳大ほどの大きさの焼土塊が多く含まれていた。3条の溝跡については、その配置と深さから、建物に付随する雨落ち溝と考えられる。

1号柱列跡については、規則的な配列が認められた3個の小穴(SA01P1~3)について柱列と考えた。小穴の確認面はLⅡa上面である。柱列は、南北軸P1~P9とその軸線方向を合わせているものの、確認面および土層の観察状況からは、その新旧関係を明らかにできなかった。3個の小穴の平面形状は円形であった。その規模は、P1~P3間の長さは約3.8m、小穴の直径は28~44cm、確認面から深さは28~33cmを測る。小穴内堆積土から遺物は全く出土していない。

遺物（図9・23、写真22）

遺物は、本建物跡の西側にある15号溝跡からのみ出土した。堆積土中からは、平安時代の土師器甕・杯細片26点、須恵器甕・瓶・硯片37片、そしてクルミ大から拳大ほどの大きさの焼土塊が合わせて約4.5kg出土した。15号溝跡の周辺からは、遺物包含層と勘違いするほど、土師器・須恵器の細片が多く出土した。本来は15号溝跡に伴っていた遺物が、調査時に回収されたものと考えられる。ちなみに、本建物跡の西側、主にF・G 13グリッドからは平安時代の土師器杯・甕の細片64点、須恵器甕・瓶・杯片24点、そして焼土塊200gが出土しており、すべて15号溝跡周辺から回収している。これらのうち、図化可能な7点について図9に示した。

図9-1は、ロクロ成形された土師器杯である。内外面共に摩滅が著しく調整が不明瞭である。内面にはヘラミガキ後黒色処理を施している。同図4は、ロクロ成形された土師器甕の口縁部～胴部上位にかけての破片である。同図2・3・5～7は、大戸地区にある大戸古窯跡群（以下、大戸窯跡）産の須恵器片である。2は、須恵器杯で、底面から口縁部に向かって直線的に開く器形である。3

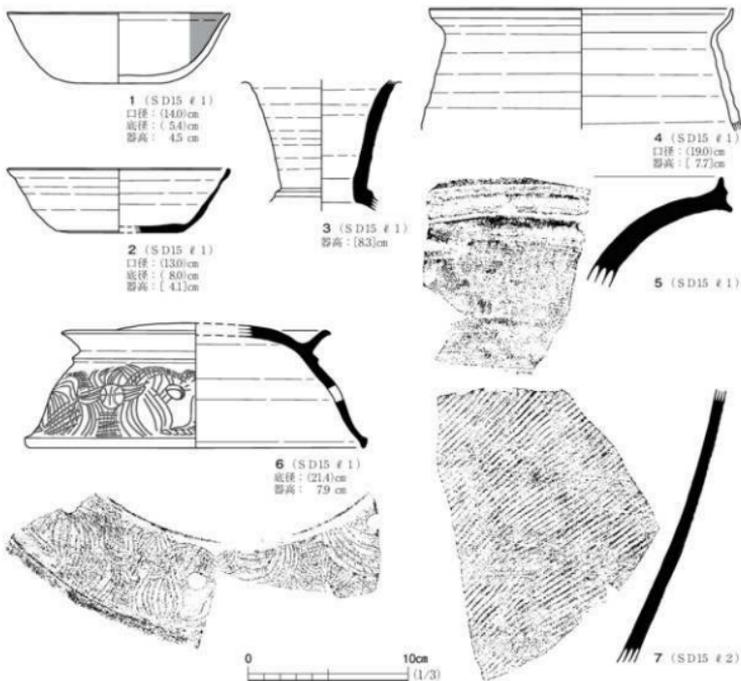


図9 1号掘立柱建物跡（15号溝跡）出土遺物

は、長頸瓶の頸部片で、頸部にリング状の凸帯を貼り付けている。5は大甕の口縁部片で、外面は平行タタキした後ナデ調整されている。7は大甕の胴部片で、外面に平行叩きをした後、横方向に筋状のナデ調整を施している。6は円面硯で、器形は高台碗を逆にした形状で、硯部外縁には凸帯を貼り付け、擦った墨液をためおく部位(海部)を成形する。脚部には円形の透孔を3~4個穿った後、脚部外面を埋め尽くすように曲線と直線で、花柄のような文様を描いている。細部を見ると、脚部端には使用によるこすれた痕跡は無く、上部の凸面(硯面)には墨を擦った黒ずみもなかった。

また図示していないが、大量に出土した焼土塊については、表面・断面を観察してもスサなどの混和材は見られなかった。色調は、表面は土師器などと同じ明黄褐色で、断面中央部には黒く焼けむらが残っている。

### まとめ

1号掘立柱建物跡は、東・西・北側に雨落ち溝を伴った2×4間の側柱建物跡である。本建物跡の軸線方向は、北側にある3・6号掘立柱建物跡とはほぼ同じである。年代は、15号溝跡から出土した土器の特徴と、本建物跡の柱穴・雨落ち溝が14号溝跡を壊していることなどを考え合わせると、9世紀前半頃と考えられる。

また、同じ雨落ち溝から出土した多量の焼土塊については、次の2つの可能性を考えている。①建物跡に用いられた土壁など建築材として使用されたものが火災などによって火を受け廃棄されたもの、あるいは②北側に隣接した土器焼成坑(SK05)で生じ、不要となった構築粘土などを、当時まで埋まり切らなかった雨落ち溝の窪地に捨てた可能性を考えている。いずれかが正しいかについては、明確にできなかった。(阿部)

### 2号掘立柱建物跡 SB02 (図10, 写真8)

本建物跡は、A区南西側のF14・15、G14・15の4グリッドにまたがって位置し、LII aおよびLII c上面で検出した。南2mに16号溝跡、北1mに1号掘立柱建物跡が存在する。

本建物跡は、東西2間、南北4間、平面形は長方形となる。本建物を構成する柱穴は14個確認し、うち南東隅と南西隅の柱穴は建て直しの重複がみられる。北東隅をP1とし、時計回りにP14まで呼称した。東側のP3とP4は、建物の南北軸線からやや東に逸脱するが、それ以外の柱穴はほぼ直線状に並ぶ。その規模は、東西軸のP1-P13とP5-P8は5.0m、南北軸のP1-P5とP8-P13は8.3~8.5mを測る。柱間寸法は、東西軸で平均2.1m、南北軸で平均2.6mと、後者の柱間寸法がやや長い。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約43.2㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN3°Eとなる。

柱穴の平面形は、ほぼ円形である。柱穴の規模は、直径32~56cm。確認面からの深さは20~58cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LII a・b層の土を多く含んでいるため暗褐色系の土色を基調とし、土に締まりがある。柱痕は、P1~3・9・14で確認でき、その直径は10~20cmほどであった。P1底面付近からは、礎石として用いた扁平な河原石が出土している。遺物は、P4の

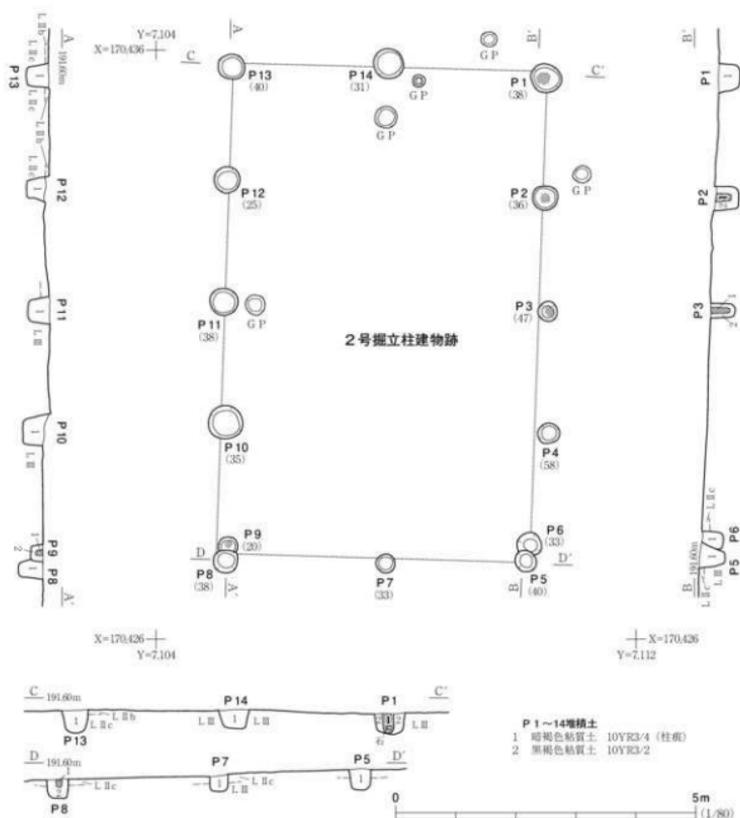


図10 2号掘立柱建物跡

2層から平安時代の土師器瓦片が8点出土しているが、細片のため図示できなかった。

本建物跡は、2×4間の側柱建物跡である。本建物跡の軸線方向は、1号掘立柱建物跡とは軸線が明確に異なり、柱穴の規模や構造から判断しても、周辺の1・3・6号掘立柱建物跡とは所属時期が異なると考えている。一方、東側にある7・8号掘立柱建物跡とはほぼ同じ軸線方向である。本建物跡の年代については、出土遺物が少なく明確ではないが、平安時代に属すると考えている。

(菊田)

## 3 a・b号掘立柱建物跡 SB03 a・b (図11, 写真9)

本建物跡は、A区中央部のE・F12の2グリッドにまたがって位置し、LⅡcおよびLⅢ上面で検出した。14号溝跡の一部と重複し、本建物跡が新しい。また、西側のP10が小穴に壊されていたが、本建物跡のほうが古い。南7mに1号掘立柱建物跡、北13mに6号掘立柱建物跡と5号土坑が存在する。また、本建物跡は、一度建て替えられており、P1～12の柱穴については、5個の柱穴(P a～e)を壊して作られている。ここでは便宜上、前者のP1～12を用い新しく建て替えられたものを3 a号掘立柱建物跡と呼称し、後者を3 b号掘立柱建物跡と呼ぶことにする。

## 3 a号掘立柱建物跡

新たに建て替えられた3 a号掘立柱建物跡は、東西2間、南北3間、平面形は長方形となる。規模は、東西軸のP1-P3、P4-P10、P5-P9、P6-P8は4.6m、南北軸のP1-P8、P2-P7、P3-P6は5.6～5.7mを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約26.2㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN6°Wとなる。柱穴の平面形はすべて型くずれした隅丸方形である。柱穴の規模は一辺42～89cm、確認面からの深さは20～62cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LⅡa・b層の土を多く含んでいるため暗褐色系の土色を基調とし、土に締まりがある。柱痕は、すべての柱穴で確認でき、その直径は12～23cmほどであった。ただし、気になる点は、中央にあるP11が確認面からの深さが浅く、しかも東西の軸線からずれている。

遺物は、南西側にあるP9の2層から図11-1に図示した平安時代の須恵器甕片が1点出土した。

## 3 b号掘立柱建物跡

先行して立てられていた3 b号掘立柱建物跡については、規則的な配列が認められたP a～eの5個の柱穴を建物跡と判断した。P3・7・12との重複を土層の観察から判断すると、3 b号掘立柱建物跡のほうが古い。柱穴の軸線方向、柱間距離そして平面形は、3 a号掘立柱建物跡とほぼ同一であったと思われる。確認できた柱間距離は、南北軸のP b-P dは5.6m、残存した東西軸のP a-P cは3.0mを測る。P aは南北軸線上で柱間距離がずれていることから、3 b号掘立柱建物跡に伴わない可能性も考えられる。掘形内堆積土中から遺物は出土していない。

本建物跡は、一度建て替えられた2×3間の総柱建物跡である。本建物跡の軸線方向は、南側にある1号掘立柱建物跡と、北にある6号掘立柱建物跡とほぼ同じであった。年代については、出土遺物が少なく明確ではないが、軸線方向が同一であった1・6号掘立柱建物跡と同一時期の9世紀前半頃と考えている。

(阿部)

## 4号掘立柱建物跡 SB04 (図12, 写真10)

本建物跡は、B区中央部のK21・22の2グリッドにまたがって位置し、LⅢ上面で確認した。8号溝跡の一部と重複し、本建物跡のほうが新しい。遺構周辺には柱痕を伴うグリッドピットが多

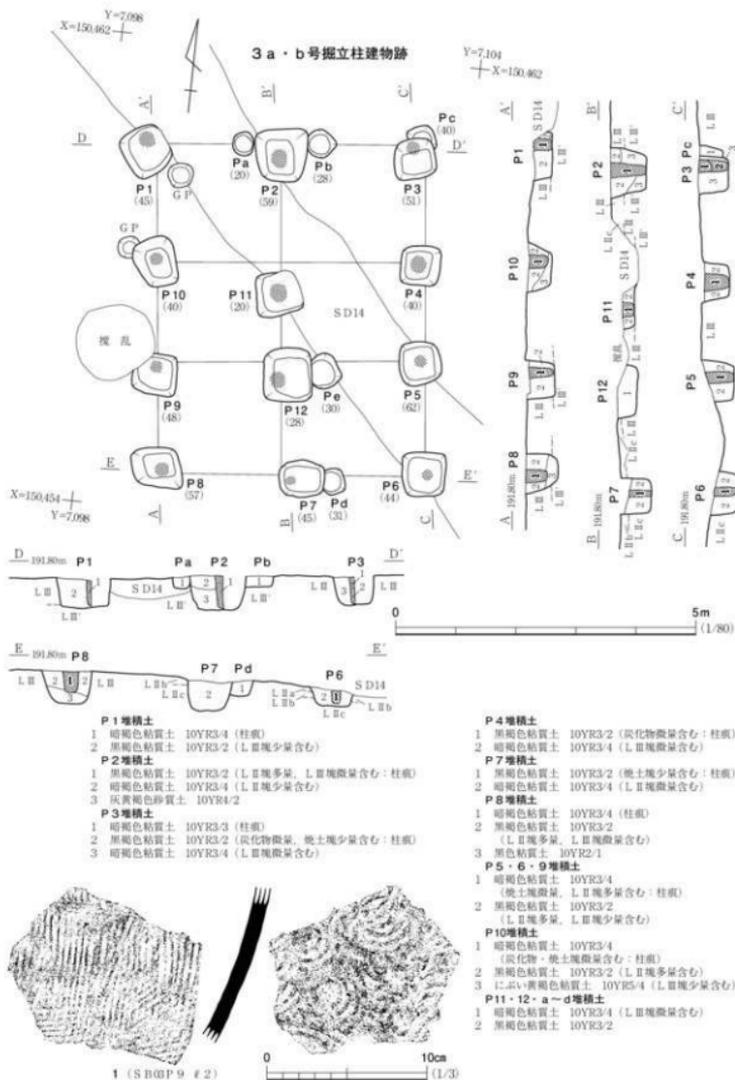


図11 3 a・b号掘立柱建物跡・出土遺物

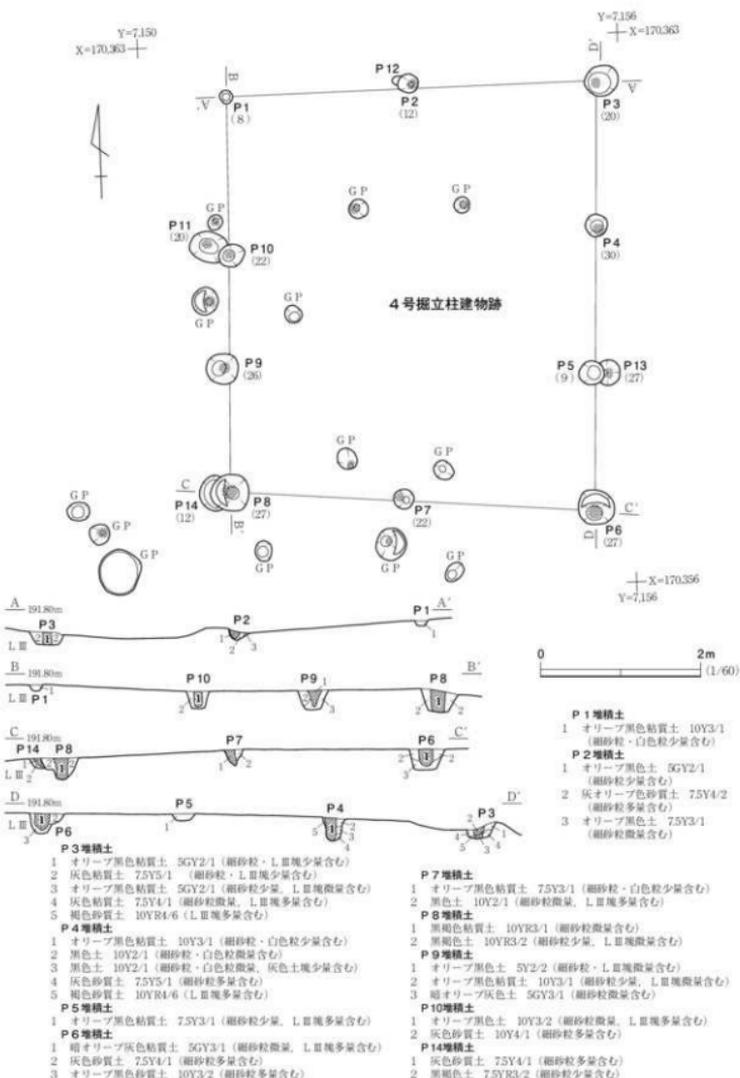


図12 4号掘立柱建物跡

数存在し、それらのうち規則的に配列した14個の柱穴を建物跡と考えた。北西隅をP1とし、時計回りにP10まで呼称し、さらに重複した柱穴にそれぞれP11～14と呼称した。本建物跡は、一度建て替えられたことを確認しており、南西隅のP8はP14を壊して作られている。

本建物跡は、東西2間、南北3間、平面形は長方形となる。柱穴で囲まれた範囲の面積は約241㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN2°Eとなる。その規模は、東西軸はP1-P3とP6-P8は4.5～4.6m、南北軸ではP1-P8で5.0m、P3-P6で5.6mと、その差が大きい。柱間寸法は、東西軸で2.1～2.5m、南北軸で1.4～2.0m、それらの間隔にもややばらつきがある。

柱穴の平面形はすべて円形である。南東・南西隅にあたるP6・P8はやや大型で直径45cmである。それ以外は、概ね直径30～40cm、北西隅のP1のみ15cmと小さい。確認面からの深さは、8～30cmを測る。柱痕は、P1・P5以外で確認し、その直径は10～15cmである。遺物は、掘形内堆積土から全く出土していない。

本建物跡は、2×3間の側柱建物跡である。年代については、出土遺物が無く明確にできないが、A区にある2号掘立柱建物跡と主軸方向が概ね同一であることと、東西・南北の軸線方向が同じの1・5・7・21号溝跡のことも考え合わせると、9世紀前半頃に属すと考えている。（阿 部）

#### 5号掘立柱建物跡 SB05（図13、写真11）

本建物跡は、A区中央部東側のH12グリッドに位置し、LII aおよびIII上面で検出した。他遺構との重複はなく、また周辺10m以内に小穴などの遺構も存在しない。北15mに18号溝跡、南15mに7号掘立柱建物跡がある。

本建物跡は、東西2間、南北2間、平面形は長方形となる。柱穴は8個確認し、北西隅をP1として、時計回りにP8まで呼称した。東西軸のP1-P3とP5-P7は3.6～3.7m、柱間間隔は平均1.8mを測る。南北軸のP1-P7とP3-P5は4.8m、柱間間隔は平均2.4mを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約178㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN11°Eとなる。

柱穴の平面形はすべて円形である。柱穴の規模は直径30～44cm、確認面からの深さは28～45cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LII a・b層の土を多く含んでいるためか暗褐色系の土色を基調としている。柱痕は、P4・6を除いた柱穴から確認され、その規模は直径10～25cmである。遺物は、掘形内堆積土から全く出土していない。

本建物跡は、平面形が長方形となる2×2間の側柱建物跡である。機能時期については、出土遺物がなく明確ではなく、さらに西・南・北側にある建物跡の軸線方向とも異なり周囲の建物跡との関連性に疑問が残るが、平安時代に属すと考えている。（菊 田）

#### 6号掘立柱建物跡 SB06（図14、写真12）

本建物跡は、A区北側のE・F10グリッドにまたがって位置し、LIII上面で検出した。南2mには5号土坑が隣接し、さらに南13mに3号掘立柱建物跡が位置している。

本建物跡は、東西2間、南北1間、平面形は正方形となる。東西・南北軸はいずれも4.0mを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は16㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN4°Wとなる。柱穴の平面形は、すべて型くずれした隅丸方形である。柱穴の規模は一辺55～65cm、確認面からの深さはP4が最も浅く20cm、その他は38～48cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LⅢ層の土を多く含んだ土と、LⅡa・b層の土を含んだ暗褐色系の土の互層となっていた。柱痕は、P4を除いた柱穴で確認でき、その直径は15～20cmほどであった。東西軸P3-P5だけ2間となっているが、削平によってその他の軸線上にあった中間の柱穴は壊されてしまったと考えられる。本来は、東西南北とも2×2間であったとも考えられる。遺物は、掘形内堆積土中から全く出土していない。

本建物跡は、2×2間の側柱建物跡であったと考えている。本建物跡の軸線方向は、南側にある1・3号掘立柱建物跡とはほぼ同じである。本建物跡の年代については、出土遺物が無く明確ではないが、1・3号掘立柱建物跡と同一時期の9世紀前半頃と考えている。(阿部)

#### 7号掘立柱建物跡 SB07 (図15, 写真13)

本建物跡は、A区南側のH14グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。14号溝跡と重複し、本建物跡が新しい。西側9mに1・2号掘立柱建物跡、東側11mには8a・b号掘立柱建物跡がある。

本建物跡は、東西2間、南北5間、平面形は長方形となり、母屋が1間×3間分、加えて南北両側には1間×2間分の間仕切りがそれぞれ付属する。本建物跡は一度建て替えられたことを確認しており、南西隅のP9はP8を壊して作られている。その規模は、東西軸のP4-P15、P7-P12、P1-P3、P8-P11は3.5～3.7m、南北軸のP1-P11、P3-P8は8.6～8.7mを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は35.7㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN4°Eとなる。柱穴の平面形は2種類ある。P1～3・8～11は円形、それ以外は型崩れした隅丸方形である。柱穴の規模は、前者は直径30～45cm、後者は一辺50～82cmを測る。確認面からの深さは、平面形が円形ものはP2が最も浅く4cm、その他は12～20cmを測る。平面形が隅丸方形の深さは、P14が最も浅く8cm、その他は24～46cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LⅡa・b層の土を含んだ暗褐色を基調としている。柱痕は確認できず、遺物も掘形内堆積土中から全く出土していない。

本建物跡は、2×5間の側柱建物跡で、その南北両側には1×2間分の間仕切りが付属する。本建物跡の軸線方向は、西側にある2号掘立柱建物跡、東側の8a・b号掘立柱建物跡と概ね同じである。本建物跡の年代については、出土遺物が無く明確ではないが、2・8号掘立柱建物跡と同一時期の平安時代に属すると考えている。(阿部)

#### 8a・b号掘立柱建物跡 SB08a・b (図16・17, 写真14)

本建物跡は、A区南東側のI14・15、J14・15グリッドにまたがって位置し、LⅢ上面で検出した。西側5mには14号溝跡、さらに11mに7号掘立柱建物跡がある。本建物跡の東側については、調査区の外側へと延びているため、想定された柱穴の続きを追い求め、周囲の田畑や水路に影響の

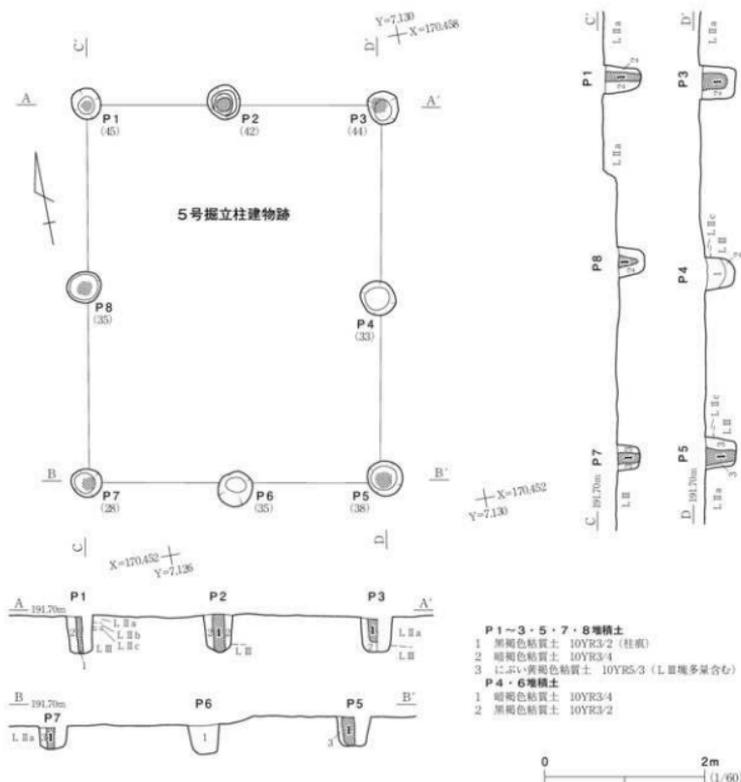


図13 5号掘立柱建物跡

出ない範囲で拡張し調査した。

本建物跡については、東西2間×南北2間の総柱建物跡の外側を、東西5間×南北4間の側柱建物跡が囲むような配置となっている。ここでは、便宜上、前者の総柱建物跡については8 a号掘立柱建物跡と呼称し、後者については8 b号掘立柱建物跡と呼ぶことにする。

しかし、南北軸を主軸として見た時の方向と、両者間の空間をよく見ると、軸線方向には僅かなズレがあり、さらに両者間の東西南北で距離がそれぞれ異なっていることが分かる。このことから、両者の新旧関係は分からないが、建て替えが行われた結果と考えている。

#### 8 a号掘立柱建物跡

8 a号掘立柱建物跡は、東西2間、南北2間、平面形は長方形となる。その規模は、東西軸のP

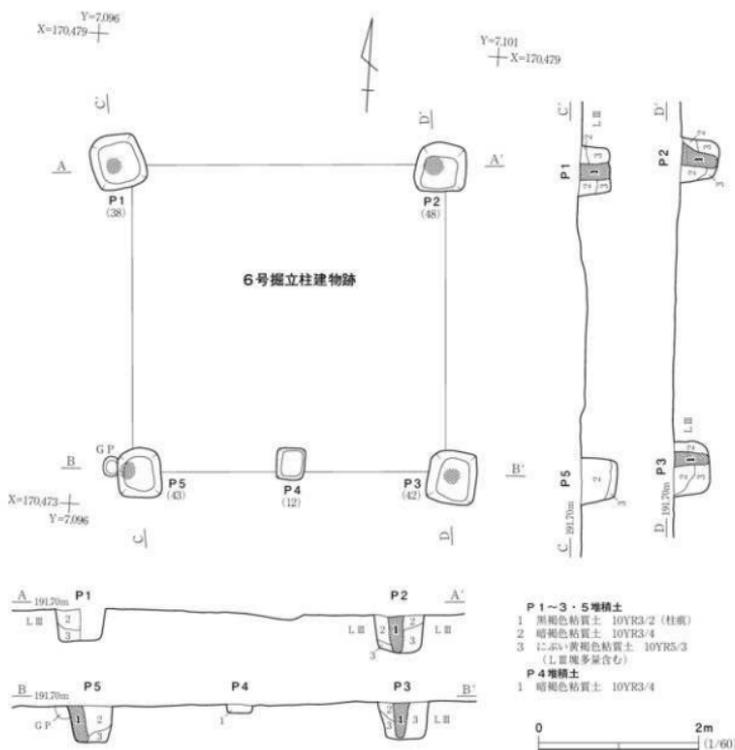


図14 6号掘立柱建物跡

3-P 14, P 8-P 12, P 6-P 13は3.5~3.7m, 南北軸のP 12-P 14, P 2-P 10, P 3-P 8はいずれも4.3mを測る。柱間寸法は、東西軸で1.7~2.0m, 南北軸で2.0~2.3mと、後者の間隔のほうが僅かに広い。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約15.9㎡, その南北軸を主軸とした時の方位はN 4°Wとなる。

本建物跡では、一度の建て替えを行ったものと考え、図16に示した8 a号掘立柱建物跡の平面形は、古い段階の柱穴を線引きしている。西側中央の柱穴P 5がP 6を、南側P 9がP 10を、南東隅のP 11がP 12を壊して掘っている。以上のことから、8 a号掘立柱建物跡の建て替え後の柱穴配置はP 1-P 2-P 3-P 5-P 7-P 9-P 11-P 13-P 1となる。建て替え後の平面形は、図16に線を引いた総柱建物跡より一回り小さい長方形(面積約12.9㎡)であったものと考えている。

8 a号掘立柱建物跡の柱穴の平面形は、楕円形のP 8・12以外は円形である。その規模は直径

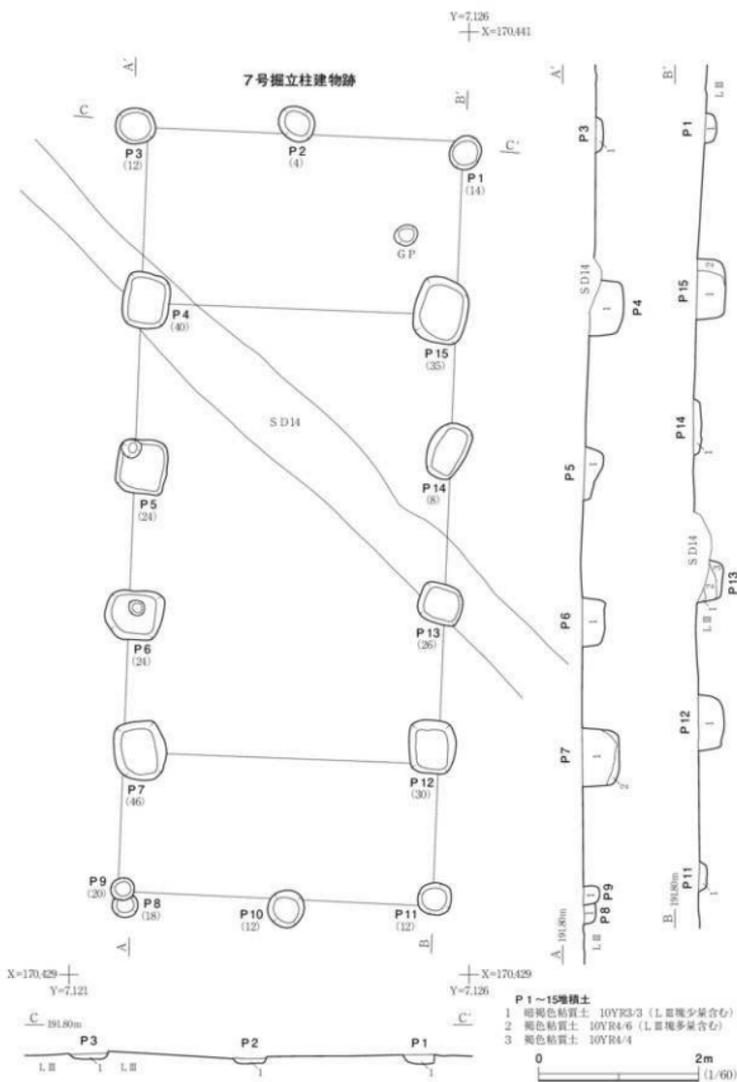


図15 7号掘立柱建物跡

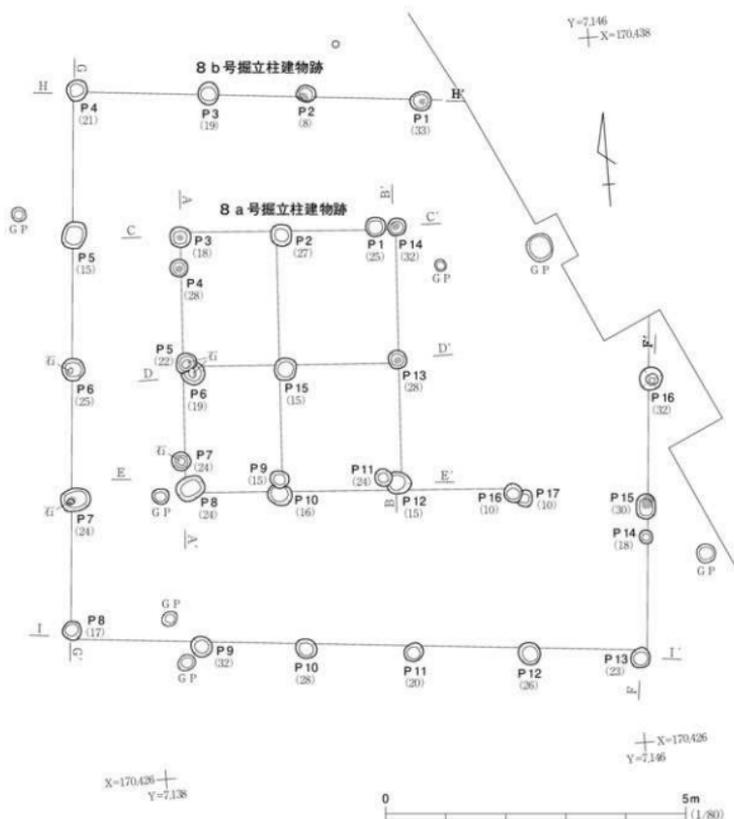


図16 8a・b号掘立柱建物跡(1)

32～40cm、確認面からの深さは15～32cmを測る。柱穴の掘形内堆積土は、LⅡa・b層の土を多く含む暗褐色系の土色を基調とし、締まりがある。柱痕は、P3・4・13・14で確認でき、その直径は12～15cmほどであった。また、西側のP5・6・7底面付近からは、礎石として用いた扁平な河原石がそれぞれ出土している。遺物は、柱穴の掘形内堆積土から礎石以外出土していない。

ちなみに、P12の西側にある重複したP16とP17については、P16のほうが新しく、東西の同一軸線上にあり、柱間寸法も2m前後と同じであった。

#### 8b号掘立柱建物跡

8a号掘立柱建物跡の外周を囲む8b号掘立柱建物跡については、東側が調査区の外へ延びて

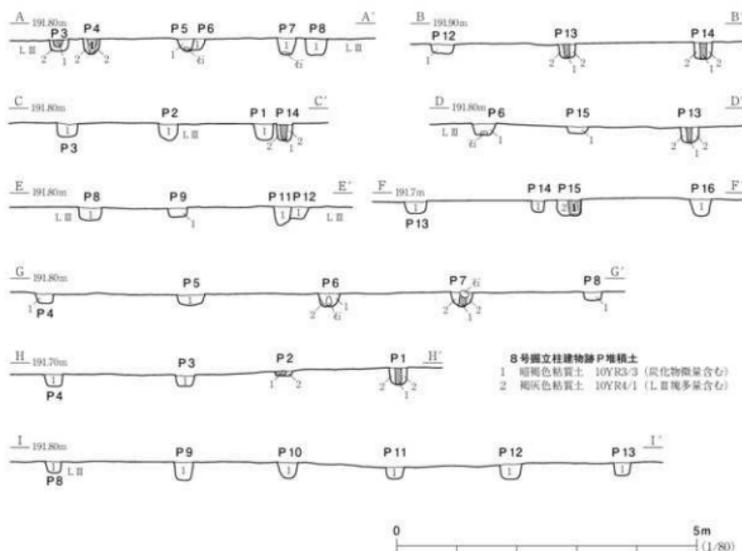


図17 8a・b号掘立柱建物跡（2）

いってしまうためその全体像は不明である。確認できた本建物跡は、東西5間、南北4間の竪柱建物跡で、平面形は長方形となる。その規模は、東西軸のP8・P13は9.7m、柱間寸法は1.8～2.2mを測る。一方、南北軸のP4・P8は7.1m、柱間寸法は2.2～2.5mを測る。柱間寸法をみると、8a号掘立柱建物跡と同様、南北軸のほうが僅かに広い特徴が共通している。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約68.9㎡、その南北軸を主軸とした時の方位はN5°Eとなる。すべての掘形内堆積土中から遺物は出土していない。

#### まとめ

8a号掘立柱建物跡については、2×2間の総柱建物跡である。少なくとも一度の建て替えを行っている。また、南東側にあったP16・P17の2個の柱穴の存在から以下の2つの解釈ができると考えている。①P16(P17)の柱穴は、2間×2間の総柱建物跡に付属した施設の一部として機能した。もう一つの考えとして、②北東側に削平で失われた2個の柱穴が存在し、東に1間×2間分広くなり本来は東西3間×南北2間の総柱建物跡であった可能性が指摘できる。しかしここでは、調査で確認できたものを優先し、8a号掘立柱建物跡については2×2間であったと考えたい。8b号掘立柱建物跡については、4×5間の竪柱建物跡と考えている。8a号掘立柱建物跡が前述したように2×2間であったとすると、外側の8b号掘立柱建物跡との間に空いた東西の空間が異なりすぎ、8a号掘立柱建物跡を囲む堀などの機能をしたと考えるには、無理がある。このことから、

8 a・b号掘立柱建物跡は、その新旧関係は不明だが、8 a号掘立柱建物跡から8 b号掘立柱建物跡へ、または8 b号掘立柱建物跡から8 a号掘立柱建物跡へと建て替えられた可能性が高い。

2棟の建物跡の軸線方向は、西側にある2・7号掘立柱建物跡と概ね同じである。本建物跡の年代については、出土遺物が少なく明確ではないが、2・7号掘立柱建物跡と同一時期の平安時代に属すと考えている。(阿 部)

### 第3節 溝 跡

西坂才遺跡の1次調査では、合計23条の溝跡を確認した。これらのうち、A区にある13・15・23号溝跡については、1号掘立柱建物跡に付属した雨落ち溝であることが分かり、第2節中で報告していることから、本節中での説明は割愛した。残りの20条については、年代によって2つに大別できる。①古代に属する8条の溝跡(SD01・05・06・14・16～18・21)、そして②近世以降の排水溝と考えている12条の溝跡(SD02～04・07～12・19・20・22)に分けられる。以下、類別に記述し、必要に応じて遺構番号別に説明を加える。

#### 古代の溝跡(図2～5・18～24, 写真1・4・5・16～18)

奈良・平安時代に属すると考えているのは、1・5・6・14・16～18・21号溝跡の8条である。これらのうち溝跡同士の新旧関係が分かっているものは、B区にある次の溝跡である。古:1号溝跡>新:17号溝跡, 古:14号溝跡>新:21号溝跡, 古:6号溝跡>新:17号溝跡の4条であった。

また、これらの溝跡の延伸方向を次に整理する。6・14・16・18号溝跡は、概ね平行関係にある。6号溝跡と16号溝跡はB区南東で交差する可能性がある。次に、真北方向に延びる溝跡と、それに直行する溝跡は、17・21号溝跡が真北方向に、これと直行する溝跡は1・5・17号溝跡である。

以下に、遺物の出土した溝跡について個別に説明した後、奈良・平安時代の溝跡について整理する。遺物については、5・6・14・16～18号溝跡から出土し、図示可能であった遺物について報告する。

#### 5号溝跡(図21・22, 写真16)

本溝跡は、B区南側のJ・K23の2グリッドにまたがり、LⅢ上面で確認した。その延伸方向はN約90°Eで、その東側には方向を概ね揃えた1・17号溝跡が位置する。その規模は、全長約8.5m、溝幅は約50cm、深さは9cmと非常に浅い。その底面は平坦で、周壁は底面から急な角度で立ち上がり、断面形状は箱形をなす。溝跡内堆積土は黒褐色のLⅡを基調とした粘質土である。堆積状況は、自然堆積で、溝内に水が流れたような堆積状況は認められない。本溝跡の東側から平安時代の須恵器片が散在し、どれも完全な形まで復元できるものはなかった。

本溝跡の出土遺物は、図22-1～8に図示した。本溝跡は、確認面から浅かったにも関わらず、須恵器長頸瓶、大・中型壘片が30点出土している。このうち、図22-3・7以外はすべて大戸窯

跡産である。同図1・4・5は長頸瓶の破片である。1は長頸瓶の口縁部から頸部の破片で、頸に低いリング状の突帯が巡る。4・5は長頸瓶の底部片で、台形状の高台を貼り付けている。同図2は内外面ナデ調整を施した甕口縁部片である。同図6は大型甕の胴部片で、外面に平行タタキ具を施した後、横方向に沈線状のナデを施し、内面には同心円文の当て具痕が観察できる。同図8は小型甕の胴部片で、外面に平行タタキ具痕を施した後、ナデ調整を施す。同図3・7の大型甕については、器面の色調が光沢を帯びた黒褐色で、会津美里町(旧新鶴村)大久保窯跡産(以下、大久保窯跡産)と考えている。3の推定口径36cm、口縁部外面には波状文と横線文の組合せを三段構成で施文している。7の胴部外面には平行タタキ具の痕跡が残る。

本溝跡の出土遺物を見ると8世紀後葉～9世紀前半頃までの土器が混在する。このことから、本溝跡の機能時期については、東側にある1・17号溝跡と延伸方向が同一であることを考え合わせると、9世紀前半頃まで開口していたと考えている。

#### 6号溝跡 (図4・5・20・22, 写真1・5・16)

本溝跡は、B区の北西から南東方向に延び、B区を南北に分断している。その延伸方向はN約55°Wであった。本溝跡はLⅢ上面で確認できた。その中央部では近現代の複数溝跡と、南東側で17号溝跡に壊され、本溝跡のほうが古い。その規模は、全長約68.5m、溝幅は最大約170cm、深さは60cmである。断面形状は幅の広い「V」字形で、周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝跡内堆積土は、5層に分かれ、黒褐色のLⅡaを基調とした粘質土で、特に上位の1・2層は非常に締まりがあり、底面近くには黒色の砂が堆積していた。堆積状況から自然堆積と考えており、底面付近に砂の堆積があったことから、溝内に水が流れていたようである。

6号溝跡の出土遺物は、図22-9・10・12に図示した。本溝跡堆積土の1および5層から、古墳時代または平安時代の土師器甕・高杯などの小破片14点が出土している。9は古墳時代の土師器甕の口縁部片である。10は杯部と脚部を欠損した古墳時代後期後半の土師器高杯片と思われ、杯部と思われる内面には密にヘラミガキを、脚部外面にはヘラケズリ調整を施す。12は器面の摩滅が著しい平安時代の土師器甕または鉢の底部片である。

6号溝跡は、出土遺物を見ると古墳時代後期後半から平安時代の土師器片が混在していた。堆積土の土質の特徴と断面形状が14号溝跡と似て、本溝跡と14・16・18号溝跡の延伸方向は概ね平行であった。機能時期については、本遺構がB区南東側で17号溝跡に壊されていたことも考え合わせると、8世紀後葉頃～9世紀初め頃まで開口し、その後機能を失い埋没したと考えている。

#### 14号溝跡 (図2・3・5・18・20・24, 写真1・3・5・17・22)

本溝跡は、A区中央部とB区北東端で確認され、北西から南東に向かって連続して延びていた1条の遺構と考えている。その延伸方向はN約44～52°Wで、南西に僅かに弧を描き延びる。本溝跡はLⅡaとLⅢ上面で確認でき、A区では建物跡(SB01・03・07, SD23)に壊され、B区においては21号溝跡に壊されていたことから、本溝跡のほうが古い。

その規模は、全長はA区で約80m、B区では約16.8m、溝幅はA区内で最大約1.7m、深さは最

大60cmである。断面形状は幅の広い「V」字形で、周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝内堆積土は、5層に分かれ、黒褐色のLⅡaを基調とした粘質土で、特に上位の1・2層は非常に締まりがあり、底面近くには黒色の砂が堆積していた。堆積状況から自然堆積と考えており、底面付近に砂の堆積があることから、溝内に水が流れていたようである。

本溝跡の1・2層から、奈良・平安時代の土師器甕片26点、平安時代の須恵器杯片2点、甕片6点、長頸瓶片1点が出土している。このうち、4点を図24-1～4に図示した。同図1は有段丸底の土師器杯で、ほぼ完全な形で出土した。底部外面は摩滅し、ヘラ削り調整が不明瞭になっている。内面には丁寧なヘラミガキ後に黒色処理を施す。2は丸底の土師器杯で、体部外面にヘラケズリ調整を、内面には丁寧なヘラミガキ後に黒色処理を施す。3・4は大戸窯跡産の須恵器である。3は杯で、底面は回転ヘラ切り後ナデ調整を施している。4は長頸瓶の胴部上半部片で、頸部にはリング状の凸帯を貼り付けている。

14号溝跡の出土遺物を見ると、同図1・2のように7世紀後半～8世紀前半の土師器杯と、9世紀前半ごろの須恵器が混在している。本遺構は、堆積土の土質の特徴、断面形状が6号溝跡と似ていることから、6号溝跡と同じ頃に機能していた可能性が高い。また、本溝跡の延伸方向は、6・16・18号溝跡と概ね平行でもある。機能時期については、延伸方向、遺構および堆積土の特徴、そして遺構の重複関係も考え合わせると、建物跡群の建造以前の8世紀後葉頃～9世紀初め頃まで開口し、その後機能を失い埋没したと考えている。

#### 16号溝跡 (図3・18・19・22, 写真1・4・17)

本溝跡は、A区南西側で確認され、北西から南東に向かって延びている。その延伸方向はN約46°Wに向かって、概ね直線的に延びる。本溝跡はLⅢ上面で確認でき、6・7号土坑に壊され、本溝跡のほうが古い。また南北側は、ほ場整備などによる地形の改変によって壊されていた。本溝跡の延伸方向は、6・14・18号溝跡と概ね平行する。

その規模は、全長は15.6m、溝幅は最大約50cm、深さは13cmである。断面形状は浅い皿状で、周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝跡内堆積土は単一層で、黒褐色のLⅡaを基調とした粘質土であった。溝内に水が流れていた痕跡は認められなかった。

本溝跡の1層から、平安時代の土師器甕片4点、須恵器小型甕片6点が出土している。このうち、外面に平行タタキ具痕が残った須恵器甕胴部片を図22-13に図示した。

16号溝跡の機能時期は、9世紀前半頃の6・7号土坑に壊されていることと、延伸方向が6・14・18号溝跡と概ね同一であることなども考え合わせると、建物跡群の建造以前の8世紀後葉頃～9世紀初め頃まで開口し、その後機能を失い埋没したと考えている。

#### 17号溝跡 (図5・20・22・23, 写真1・5・18)

本溝跡は、B区南東端で確認され、真西から真東へ延び、連続して真北方向へ直角に曲がる。本溝跡はLⅢ中位面で確認でき、6号土坑を壊し本溝跡が新しい。その規模は、全長は東西9.8m、南北7.0m、溝幅は70cm、深さは30cmである。断面形状は箱状で、底面は中央部がわずかに凹み、

周壁は底面から急な角度で立ち上がっている。溝跡内堆積土は6層に分かれる。いずれの層も黒褐色のLⅡを基調とした粘質土で、上位の1層は非常に硬く締まっていた。溝内に水が流れていた痕跡はなかった。また、遺物は溝が直角に曲がる付近からまとまって出土していた。

本溝跡の遺物は、溝内堆積土の1層からすべて出土し、古墳時代の土師器杯片1点、または平安時代の土師器杯片31点、甕片5点、須恵器甕片23点と瓶の破片2点を確認した。須恵器甕のうち、4点は器面色調が黒褐色に発色した大久保窯跡産の大甕片で、残りの19点についてはすべて大戸窯跡産であった。このうち、10点を図22-17・18、図23-2～9に図示した。図22-17は古墳時代の土師器杯の口縁部片である。同図18は内外面の摩滅が著しく、内面の黒色処理の有無も判別がつかない平安時代の土師器杯片である。図23-9は底部外面に平行タタキ具痕が残った土師器甕の破片である。図23-2～9は須恵器甕の破片である。2は外面色調が黒褐色に発色した大甕口縁部片で、外面に波状文が残る。3は器面を丁寧にナデ調整した大甕の口縁部片である。4は外面に平行タタキ具痕が残った甕の頭部片である。5・7・8は甕胴部片で、いずれも外面に平行タタキ具痕が観察できる。6は甕の底部片で、外面の平行タタキ具痕をナデ消している。

17号溝跡の出土遺物を見ると、古墳時代の土師器と8世紀後葉～9世紀前半頃の須恵器が混在する。機能時期については、本溝跡が6号溝跡を壊していたことや、本溝跡から真北に延びる21号溝跡が14号溝跡を壊していたことを考え合わせると、9世紀前半頃まで開口したと考えている。

#### 18号溝跡（図2・18・23、写真1・4・17・23）

本溝跡は、A区北東端で確認され、北西から南東へ向かって延び、その延伸方向はN49°Wである。本溝跡はLⅢ上面で確認できた。その規模は、全長は24.8m、溝幅は110cm、深さは14cmである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦で、周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝跡内堆積土は、黒褐色の単一層で、溝内に水が流れていた痕跡は認められなかった。

本溝跡の1層から、平安時代の土師器甕片2点、砥石1点そして13個のクルミが出土している。このうち、上部を欠損した細粒凝灰岩製の古代の砥石を図23-10に図示した。

18号溝跡の機能時期については、出土遺物は極僅かであったが延伸方向が6・14・16号溝跡と概ね同一であったこと、14号溝跡が21号溝跡に壊されていた事象などを考え合わせると、建物跡群の建造以前、8世紀後葉～9世紀初め頃まで開口し、その後機能を失い埋没したと考えている。

#### 21号溝跡（図5、写真1・5・18）

本溝跡は、B区東側で確認され、真北方向へ向かって延びている。本溝跡はLⅢ上面で確認できた。重複関係は、19・20号溝跡に壊され本溝跡が古い。14号溝跡を壊していることから本溝跡のほうが新しい。その規模は、全長は35.7m、溝幅は80cm、深さは14cmである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦で、周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がっている。溝跡内堆積土は単一層で、黒褐色のLⅡaを基調とした粘質土であった。溝内に水が流れていた痕跡は認められなかった。

21号溝跡の遺物は細片のため図示できていない。遺物は遺構内堆積土の1層からすべて出土し、平安時代土師器杯片5点、須恵器甕片7点、瓶片1点、近代陶器片2点を確認した。須恵器甕のうち、

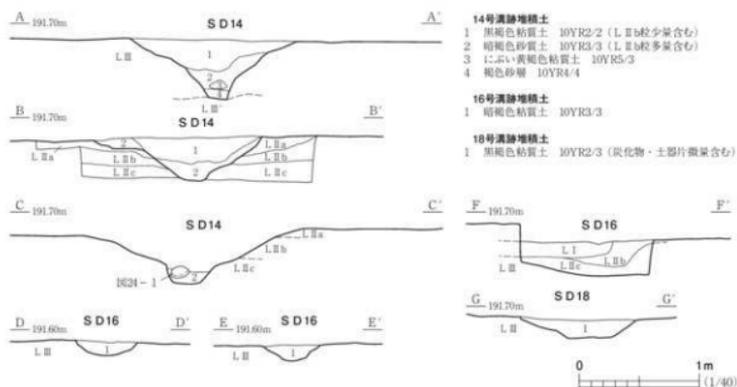


図18 A区溝跡

2点は器面色調が黒褐色に発色した大久保窯跡産の大甕片で、その他はすべて大戸窯跡産であった。

21号溝跡の機能時期については、本溝跡と同じ真北方向に延び、さらに直行した17号溝跡が6号溝跡を壊していたことや、本溝跡が14号溝跡を壊していたこと、そして本溝跡が17号溝跡の事象などを考え合わせると、9世紀前半頃まで開口していた溝跡と考えている。

#### まとめ

1・5・17・21号溝跡について、以下に整理する。

1号溝跡については、遺構内からの出土遺物は無いが、その延伸方向がN90°Eで、17号溝跡と東西延伸方向が一致している。このことから、1号溝跡と17号溝跡については、前後関係があるというよりも、近い時期に機能していた可能性が考えられる。さらに東に位置した5号溝跡についても、概ね延長方向上にある1号溝跡そして17号溝跡と同時期に機能したと考えている。また、21号溝跡についてみると、直角に折れ曲がった17号溝跡の延長線上にある。21号溝跡の方向は、17号溝跡から概ね真北へ延びている。

以上のことから、9世紀前半頃には、真北および真東を意識した長い溝跡として1・5・17・21号溝跡が掘り込まれ、瀬川の南岸が区画されていた可能性が高い。これら区画溝を意識して、A・B区にある7棟の建物跡(SB01～04・06～08)、素掘りの井戸跡(SK03)、廃棄坑(SK01・02・06～08)などが、あるまとまりをもって設けられたものと考えている。

次に、6・14号溝跡について、以下に整理する。

6・14号溝跡については、両溝跡の延伸方向は概ね同じで、2つの溝の断面形状も幅広い「V」字形である点、そして両者の堆積土最下面に黒色の砂層が堆積し排水機能を果たしていた点など共通点が複数認められた。また、6・14号溝跡に挟まれた空間幅は約31mであった。両溝跡の年代については、14号溝跡は、1・3・7号掘立柱建物跡と21号溝跡に壊され、本溝跡のほうが古い。

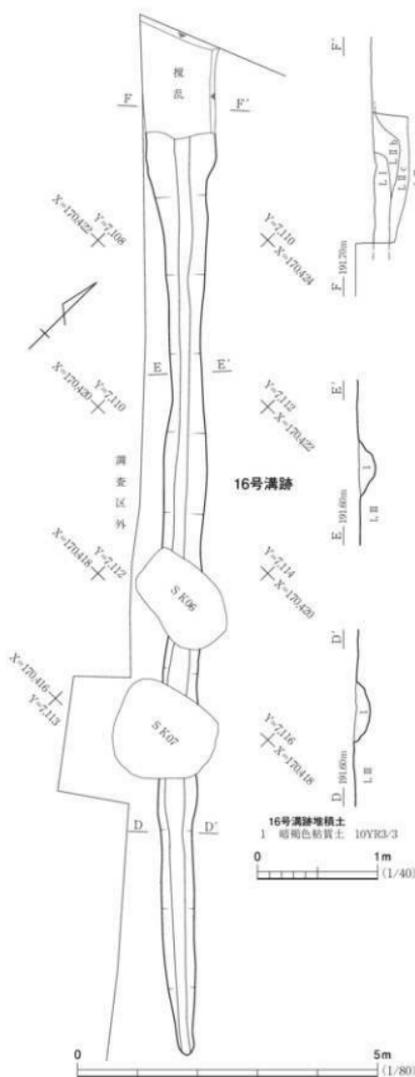


図19 16号溝跡

6号溝跡は、17号溝跡に壊され、本溝跡が古い。6・14号溝跡の年代については、出土遺物のほかに、断面形状や堆積土の共通点を考え合わせると、4条の区画溝(S D 01・05・17・21)と8棟の建物跡が設営される前、8世紀後半頃～9世紀初め頃まで開口し、その後機能を失い埋没したと考えている。

さらに、北西に向かって延びる4条の溝跡(S D 06・14・16・18)を追いかけてゆくと、14号溝跡だけは、鶴沼C遺跡の12号溝跡と延伸方向が概ね一致し、一部の断面形状と溝底に黒い砂層が堆積するという堆積土の状況についても共通することが分かった。延伸方向を復元すると、図31のように西坂才遺跡から鶴沼C遺跡まで1連の排水機能を伴った溝跡として延びていた可能性が高い。2つの遺跡間には溜川の氾濫で抉られた谷地形が入り溝跡が途切れたようになるが、総延長約450mの溝は僅かに北側に弧を描くような形で続いていたと考えられる。

以上のことから、6・14号溝跡は、2条が近い時期に存在した排水施設で、共に北西から南東の方向へ延伸するように作られていた可能性が考えられる。また、6・14号溝跡間の幅は約31mもの広い空間が空いている。

最後に、16・18号溝跡について整理する。

6・14号溝跡と平行し、北西から南東に向かう延伸方向、機能時期も同じと考えている溝跡は、A区内に16・18号

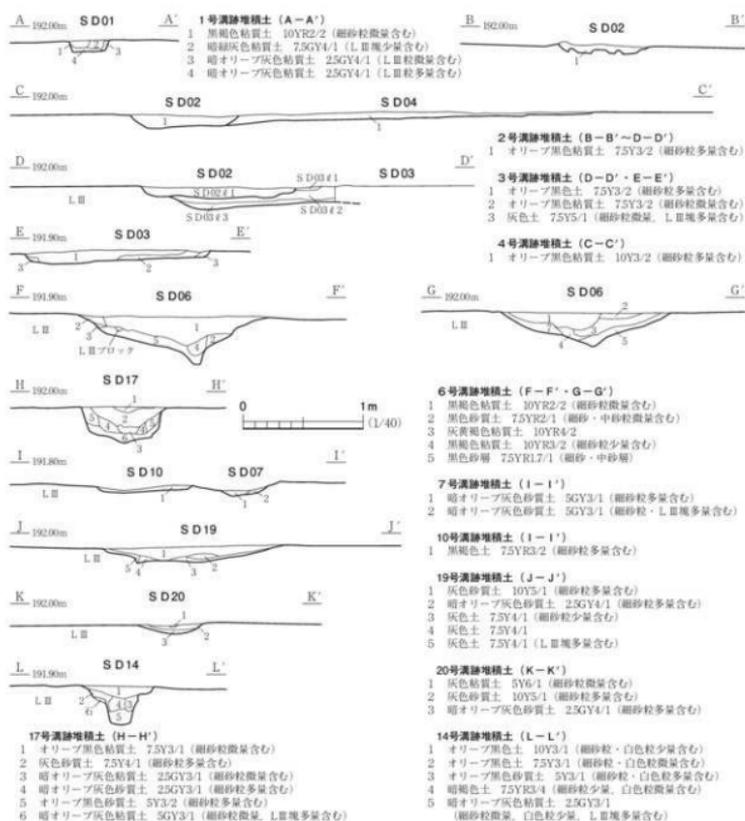


図20 B区溝跡

溝跡の2条がある。しかし、図18下段にあるD-D'・E-E'・G-G'断面を見ると、16・18号溝跡の断面形状、確認面からの深さ、そして溝底にある堆積土の土質などを見比べると、前述した6・14号溝跡との異なり、両者が排水機能を伴ったとは断言できない。さらに、16号溝跡については、その延伸方向がB区南東側において6号溝跡と交差してしまう。また、16・18号溝跡に挟まれた空間幅は、50mを超えている。

以上のことから16・18号溝跡については、6・14号溝跡と延伸方向は概ね同じであったというだけで、6・14号溝跡と近い時期に存在し、同じ機能を果たしたとは考えにくい。16・18号溝跡の年代については、6・14号溝跡と同じく、8世紀後葉～9世紀初め頃まで開口したと考えられる。

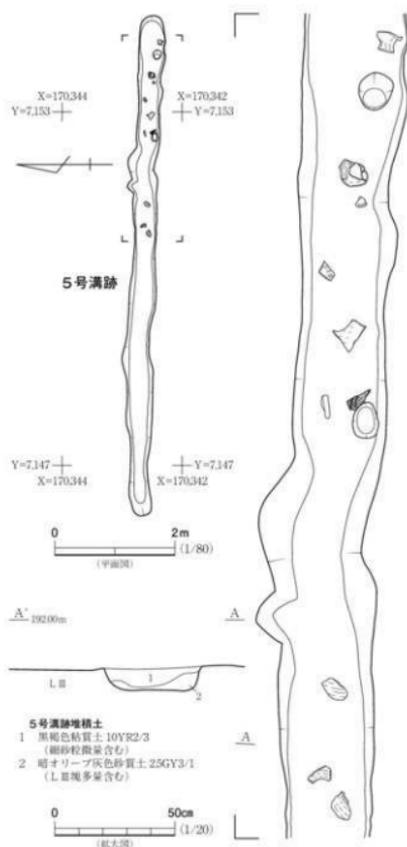


図21 5号溝跡

重複関係から12条のうち最も古い溝跡は10・12号溝跡で、最も新しいのは11号溝跡となることが分かった。

12条の溝跡は、それらの延伸方向から、次の2つに大別できる。①北西から南東方向へ向かう7条の溝跡(SD 02・08・11・12・19・20・22)と、②北東から南西に向かう5条の溝跡(SD 03・04・07・09・10)の2方向である。また、20・22号溝跡を除く10条の溝跡については、延伸方向で分けた2つのグループが、M20・K21・K23グリッド付近で、概ね直角に交差している。これについては、B区北西端を北流する水路へ排水できるよう、耕作地の地境などに沿って掘り込まれた

しかし、16・18号溝跡と6・14号溝跡との前後関係については、遺構の重複がなく、出土遺物からも明確にできなかった。16・18号溝跡の機能については、6・14号溝跡とは異なり、何らかの区画溝としての役目を果たしていたと考えている。

#### 近世以降の溝跡

(図4・5・20～22, 写真1・5)

近世以降の溝跡と考えているのは、B区で確認された2～4・7～12・19・20・22号溝跡の12条である。以下に、12条の溝跡についてまとめ書きし、遺物については7・8号溝跡から出土した図示できた遺物について報告する。

#### 遺構

12条の溝跡について新旧関係が分かっているものは、次のものである。古：3号溝跡>新：2号溝跡、古：12号溝跡>新：8号溝跡、古：(6号溝跡)>10号溝跡>8号溝跡>7号溝跡>新：11号溝跡、古：8号溝跡>9号溝跡>新：11号溝跡の8条については、新旧関係が確認できた。重複

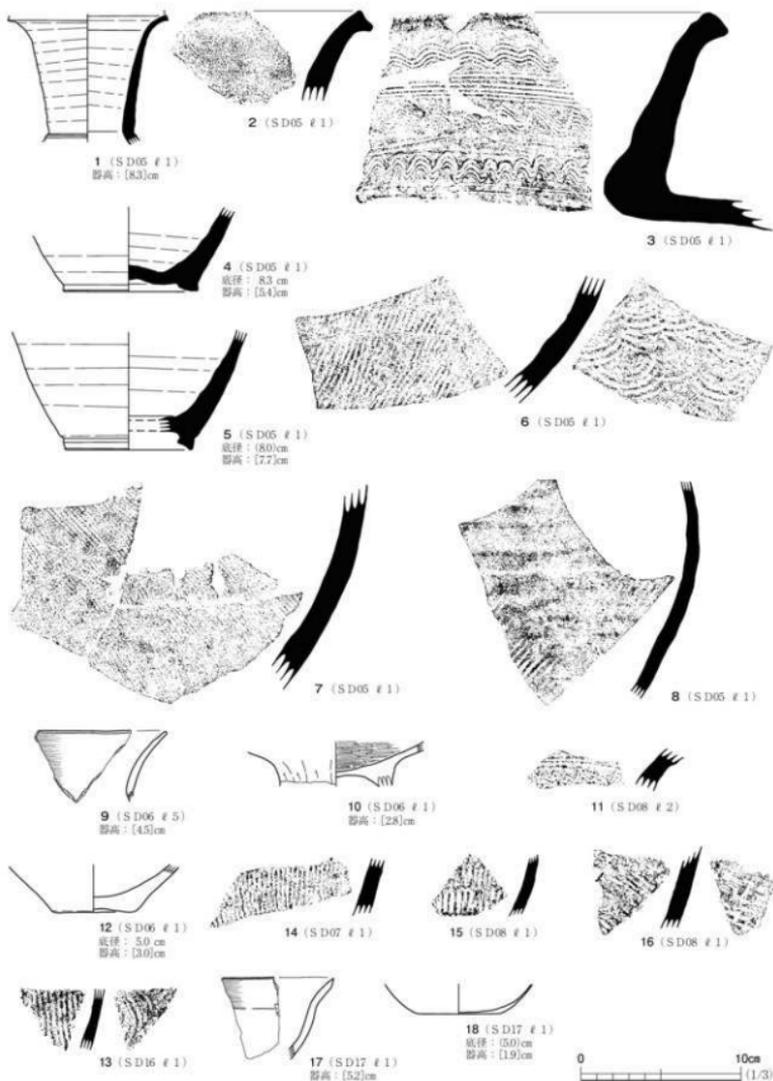


図22 溝跡出土遺物 (1)

結果と考えている。

遺物（図22）

近・現代に属すると考えている12条の溝跡から出土した遺物は、図22に図化したもの以外に、縄文時代の石鏃、平安時代の土師器甕の小片、須恵器甕・瓶の小片の他に、近現代の陶磁器片や砥石などが少なからず含まれていた。7号溝跡から出土した遺物は、図22-14に図示した須恵器甕胴部片1点のみである。14の外面には平行タタキ痕が観察できる。

8号溝跡の1・2層からは、平安時代の土師器細片2点、須恵器小型甕・瓶の小片14点、そして近代陶器片1点が出土している。このうち、3点の須恵器片を図22-11・15・16に示した。同図11は大久保窟跡産の甕口縁部片で、外面に波状文が観察できる。同図15・16は大戸窟跡産の小型甕の胴部片で、いずれも外面に平行タタキ具痕が残る。（阿部）

## 第4節 土 坑

西坂才遺跡の1次調査では、合計10基の土坑を確認した。これらの土坑は近年のは場整備や造

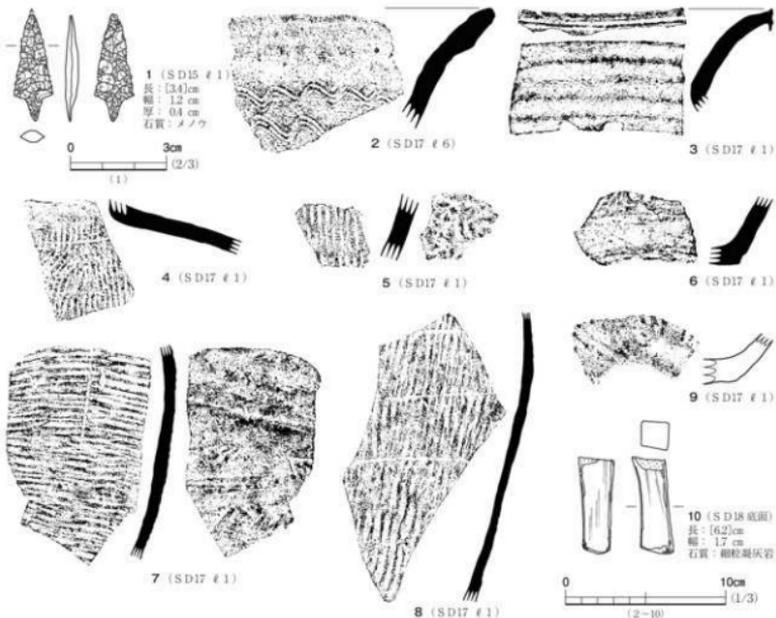


図23 溝跡出土遺物（2）

成による地形改変のため遺存状況が悪いものが多い。3号土坑については、素掘りの井戸跡と推定した。また、10番については欠番とした。

### 1号土坑 SK 01 (図25, 写真19)

本土坑は、B区北側のI 19グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。南東4mに2号土坑が存在する。平面形は不整形であり、北西から南にかけて近現代の農作業用道路の轍と思われる攪乱溝が横切る。規模は、長軸180cm、短軸160cm、確認面からの深さは19cmである。底面はほぼ平坦で、周壁は底面からなだらかに立ち上がる。堆積土は黒褐色土の単一層であった。

遺物は、平安時代の土師器細片2点、須恵器細片1点が出土した。本土坑は、遺存状況の悪い小型の土坑で、A区に分布する建物群に伴う廃棄坑と考えている。年代は、出土遺物の特徴から9世紀前半頃と考えている。(阿部)

### 2号土坑 SK 02 (図25・30, 写真19)

本土坑は、B区北側のJ 19グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。平面形は、南北に長い小判形である。規模は、長軸120cm、短軸84cm、確認面からの深さは最大8cmとかなり浅い。周壁は、底面から緩やかに立ち上がり、南側の壁は確認できなかった。堆積土は暗褐色土の単一層であった。

遺物は、平安時代の須恵器細片2点、土師器細片3点が出土した。そのうち須恵器杯1点を図30-1に示した。同図1の遺存度は全体の半分程度で、器高が比較的低く、口縁部が底部から直線的に開く器形となっている。本土坑は、遺存状況の極めて悪い小型の土坑で、A区に分布する建物群に伴う廃棄坑と考えている。年代は、出土遺物の特徴から9世紀前半頃と考えている。(阿部)

### 3号土坑 SK 03 (図25・30, 写真19・22)

本土坑は、B区中央部のL 22グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。北東6mほどに6号溝跡がある。平面形は不整形形で、規模は長軸2.2m、短軸2m、確認面からの深さは1.2mである。底面は概ね平坦に作られている。周壁は、底面から60~100cm程度までほぼ垂直に立ち上がり、その後は崩落により傾斜を緩やかにしつつ立ち上がっている。堆積土は12層に分けられ、堆積状況から1層は自然堆積、それ以下は人為堆積と判断した。底面は、LⅣ層を掘り込んでいることから、雨の時期にはこの層からの湧水が著しい。

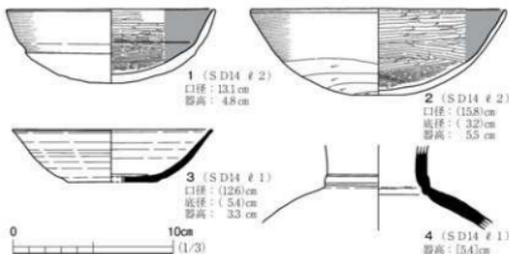


図24 14号溝跡出土遺物

遺物は、平安時代の土師器杯片46点、赤焼土器1点、須恵器杯片8点、須恵器甕または瓶胴部片8点の他に、欠損のない須恵器小型長頸瓶1点が出土している。遺物の多くは、特に中層の8層から出土している。このうち、11点を図30-2～12に図化した。

同図2はロクロ成形の土師器杯で、内面に黒色処理を施す。3もロクロ成形の土師器杯で、内外面とも摩滅が著しい。おそらく口縁部端に僅かに残った黒ずみから判断して、内面は黒色処理されていたと考えている。4はロクロ成形の赤焼土器杯である。成形は須恵器の作りで、焼成は酸化焼成のため色調が黄褐色に発色し、底面の調整は回転ヘラ切り後ナデている。7～12は須恵器片で、7・9は大戸窯跡産、それ以外は大久保窯跡産と考えられる。後者の須恵器の色調を観察すると、断面はいずれも赤紫色で、外面は暗褐色または濃い灰褐色に発色する。大戸窯跡産の7は小型の須恵器瓶で、欠損部が全くない。底部の調整は回転糸切り、胴部下位には回転ヘラ削りを施している。9は須恵器甕の胴部片で、外面に平行叩きを施している。大久保窯跡産の8・10～12は、すべて甕の口縁部または胴部の破片である。8は須恵器甕の口縁部片で、自然釉がかかり光沢のある暗褐色に発色する。10～12は須恵器甕の胴部片で、10は内外面ともに丁寧にナデ調整を施す。11・12は外面に平行叩き、内面に当て具痕が残る。11は平行叩きの後横方向のナデ調整を、10は内外面を丁寧にナデ調整している。

本土坑は、断面形状と湧水の状況などを考え合わせると、素掘りの井戸跡である。年代は、出土遺物から9世紀前半頃まで利用され、その後埋め戻されたと考えている。（阿部）

#### 4号土坑 SK04（図25、写真19）

本土坑は、B区中央部のL21グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。7号溝跡の一部、および10号溝跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は不整形で、規模は直径90～110cm、確認面からの深さは46cmである。底面はほぼ平坦で、周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は5層に分けられ、1層は自然堆積、その他の層は人為堆積と判断した。

遺物は、1層から近代磁器碗の細片が発見されたのみであった。遺構の重複状況や堆積土の状況から、本土坑は近代の農作業に伴う作業坑ないし堆肥坑と考えている。（菊田）

#### 5号土坑 SK05（図26～28、写真21・23）

本土坑は、A区のE10・F11グリッドにまたがって位置し、LⅢ上面で検出した。北3mに6号掘立柱建物跡がある。平面形は南北に長い釣鐘型で、規模は南北2m、東西1.5m、確認面からの深さは18cmである。底面は平坦で、周壁は底面から急な角度で立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、堆積状況からいずれも人為堆積と判断した。

遺物は1層中および底面から出土した。点数にすると、1,581点(10kg入り)の遺物収納箱にして約5箱分)もの大量の平安時代の土師器細片と、須恵器甕・瓶の破片9点、人頭大～拳大の扁平な石が4点出土した。これらのうち、17点を図27・28に示した。

遺物の出土状況は、本土坑の底面付近から10cm前後の高さまで破片が隙間無く重なり合っている。破片は土坑内にまんべんなく広がらつても、中央部と東側に比較的多く出土した。出土した土師器を接合してみると、すべては接合できなかったものの、高さ30cm前後の甕4個体分、杯4個体分、小型甕1個体分そして脚付き鉢1個体分の分量が含まれていたと考えている。接合の結果、ほぼ完全な形に復元できたのは、図27-8に示した土師器甕1個体のみであった。また、須恵器甕・瓶の破片は、口縁部や胴部など全体形状のごく一部分しか出土していない。

出土した土師器片の多くは、甕の破片で、それぞれしっかりと焼け締まっている。しかし、多くの破片は、厚さ5～10mmほどの破片が、厚さを二分するかのようになり、粘土の積み上げ痕付近から剥がれたような割れかた、あるいは土器の器面が破裂したような壊れかたをしているのが、特徴的である。以下に、図27・28に示した遺物について説明する。

図27-1・3は、ロクロ成形された赤焼土器杯である。両方とも器面の摩滅が著しく外面調整が不鮮明であった。内面には、いずれもコテ当て調整されており、見込み中央部に凸部が残っている。

同図2・4・5はロクロ成形された土師器である。2は杯で、器面が摩滅し底部の調整が不明瞭であった。4は高台部を欠損した高台杯である。2・4の内面には、ヘラミガキ後に黒色処理を施している。5は外傾した口縁部をもつ小型甕である。6～9は、ロクロ成形された土師器長胴甕で、いずれも別個体のものであった。完全な形まで復元できたものは8のみである。4個体の外面調整をみると、ほぼ同一であったと思われ、底部は平底で、口縁部から胴部中位までロクロナデ、胴部下位から底部付近にはロクロナデ後に平行タタキ具痕が観察できる。口縁部の形状から次の2種類に分けられる。①6・8では胴部上位から口縁部が大きく外反するタイプと、②7・9では前者のように胴部上位が外反した後、受け口状に端部がやや内傾するタイプの2つがある。

図28-1～3は、土師器脚付き鉢の3本の脚部片である。鉢部と接点があったのは1のみで、鉢部と思われた細片は大量に出土したものの接合できなかった。脚部は、3本1組で鉢部を支えたと考えている。鉢部下位の大きさと2本脚の間隔は、同図1右側と2を合わせた図の配置程度と考えている。鉢部外面には丁寧なナデを施され、ロクロ成形かどうかまでは分からなかった。1～3の脚部は、粘土紐を手で握りながら成形した痕が確認できる。脚部の付け根は、鉢部の曲面に直接貼り付けている。3以外の脚部は、先端に向かってすはまるよう整形している。3の先端だけは、前後に突起の付いたブーツのような形を意図的に作り出していることから、3の脚が見える向きを正面にすることを意識して作ったのではないかと考えさせる。

図28-4～8は、須恵器甕または瓶の破片である。7以外は、すべて大戸窯跡産と考えている。4は長頸瓶の口縁部片、5・6は大甕の口縁部片から胴部上位の破片である。5・6に接点はないが、特徴から同一個体の破片と考えている。5・6の胴部上位には平行タタキ具の痕跡が確認できる。8は大甕の胴部片で内外面に平行タタキ具の痕跡を残す。7は大久保窯跡産と考えられる大甕の胴部片である。7の器面色調は黒褐色で、断面色調は赤紫色に発色する。7の外面には平行タタキ具の痕跡が、内面のアテ具痕は同心円文が観察できる。

本土坑は、平面形状と土坑底面・壁面被熱変化状況などから土器焼成土坑と考えている。焼成土坑として機能しなくなった後、坑内に焼け損じなどを一括で廃棄したと考えている。年代は、出土遺物から9世紀末～10世紀初め頃と考えている。

会津若松市内で確認されている土師器焼成坑の事例は、本遺跡の他に、西木流C遺跡(石田他2000)では9世紀中葉頃の楕円形土坑1基(SK07)と、湊地区にある笹山原No.16遺跡(会田2006)からは9世紀代の不整形土坑3基(04土坑2, 05土坑1・2)、計4基が確認されている。このうち、西木流C遺跡と本遺跡の焼成坑については、底面の3分の1程度が被熱変色していたことから、長軸方向で幅の狭い側を焼成室としていたことが分かる。(阿部)

#### 6号土坑 SK06 (図29・30, 写真20・23)

本土坑は、A区南西側のG16グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。16号溝跡と重複し、本土坑のほうが新しい。南東2mには7号土坑が隣接する。平面形は、東西に長い不整形長方形で、規模は長辺170cm、短辺110cm、確認面からの深さは20cmである。底面は平坦で、周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色粘質土の単一層であった。

遺物は、底面付近から平安時代の土師器甕・杯片が8点、須恵器甕細片が2点出土した。このうち、2点を図30-13・14に示した。同図13はロクロ成形の土師器杯で、個体の半分は隣の7号土坑の底面から出土し、接合できたものである。内面はミガキ・黒色処理され、底面の調整は回転ヘラ切りされている。同図14は大戸窯跡産の須恵器甕の底部片で、外面にはヘラ削りを施す。

本土坑は、北側にある建物群に伴う廃棄坑と考えている。南隣の7号土坑の底から出土した破片と接合した土師器杯図30-13が出土している。このことから、本土坑と7号土坑の新旧関係はよく分らないが、概ね同時期に開口していた廃棄坑と考えている。年代は、出土遺物の特徴から、9世紀前半頃と考えている。(阿部)

#### 7号土坑 SK07 (図29・30, 写真20・23)

本土坑は、A区南西側のG16グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。16号溝跡と重複し、本土坑のほうが新しい。北隣に6号土坑がある。平面形は不整形長方形で、規模は長辺180cm、短辺160cm、確認面からの深さは16cmである。底面は平坦で、周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は、3層に分けられ、堆積状況から人為堆積と判断した。

遺物は、底面付近から平安時代の土師器杯・甕の破片が3点、須恵器杯・甕の破片が21点出土した。そのうち5点を図30-13・15～19に示した。13は土坑底面から出土したロクロ成形の土師器杯で、6号土坑から出土した破片と接合できた。15はロクロ成形された土師器小型甕で、内外面の摩滅が著しい。16～19は、大戸窯跡産の須恵器杯・甕そして長頸甕である。16・17は須恵器杯で、いずれの底面も回転ヘラキリで切り離されている。17の底面には直線一条のヘラ書きがある。18は大甕の口縁部から胴部上位の破片で、外面に平行タタキの痕跡が残る。19は長頸甕

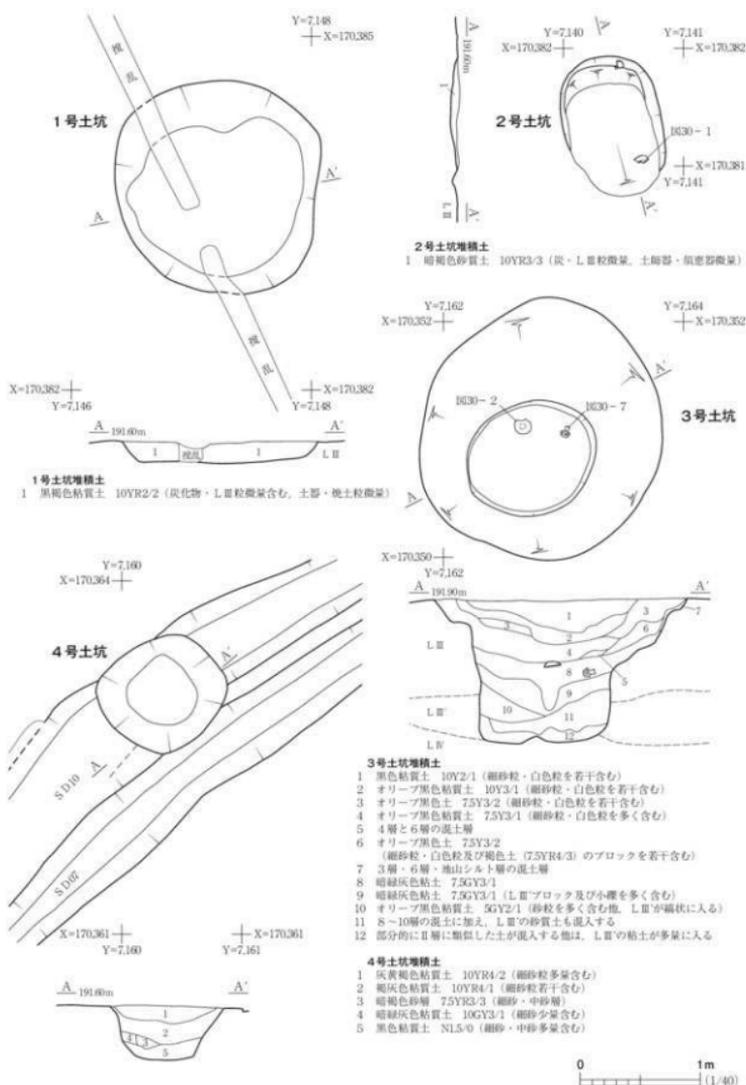


図25 1～4号土坑

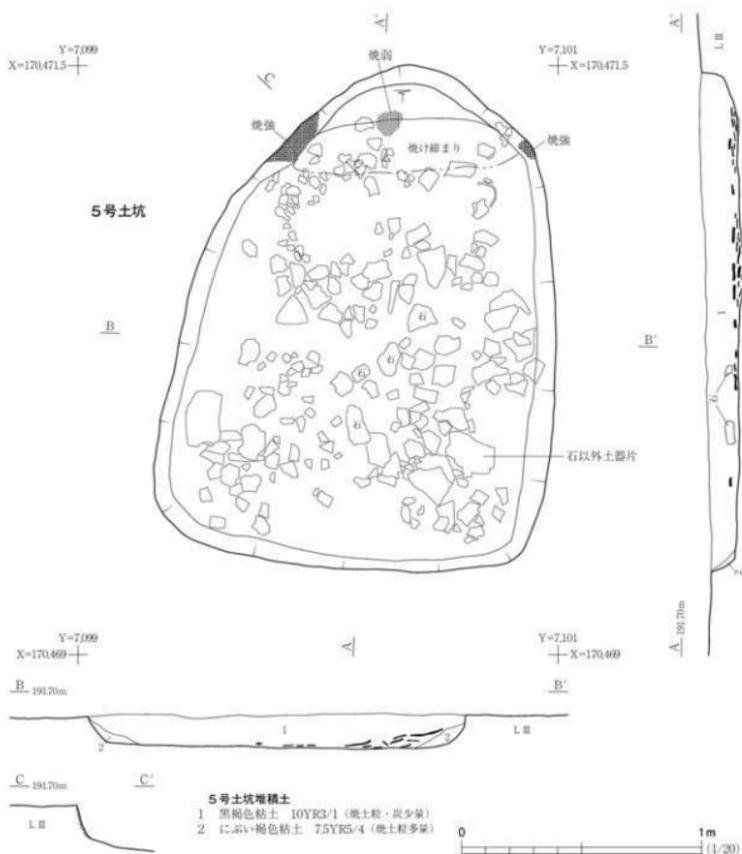


図26 5号土坑

の口縁部から胴部中位までの破片で、口縁端部を受け口状に形作っている。

本土坑は、6号土坑同様に建物跡群に伴う廃棄坑と考えている。また、北隣の6号土坑から出土した破片と接合した土師器杯図30-13が出土している。このことから、本土坑と6号土坑が機能した新旧関係はよく分からないが、概ね同時期に開口していた廃棄坑と考えている。年代は、出土遺物の特徴から、9世紀前半頃と考えている。(阿部)

## 8号土坑 SK08 (図29, 写真20)

本土坑は、A区西側のE13グリッドに位置し、LII a上面で確認した。東5mに1号掘立柱建物跡、北5mに3号掘立柱建物跡がある。平面形は南北に長い隅丸長方形で、西辺は削平により消失している。規模は長辺108cm、短辺は残存部最大で68cm、確認面からの深さは18cmである。底面はほぼ平坦な長方形で、周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は、3層に分けられ、堆積状況から自然堆積と判断した。遺物は、1層中位から平安時代の土師器杯の細片が10点と、クル

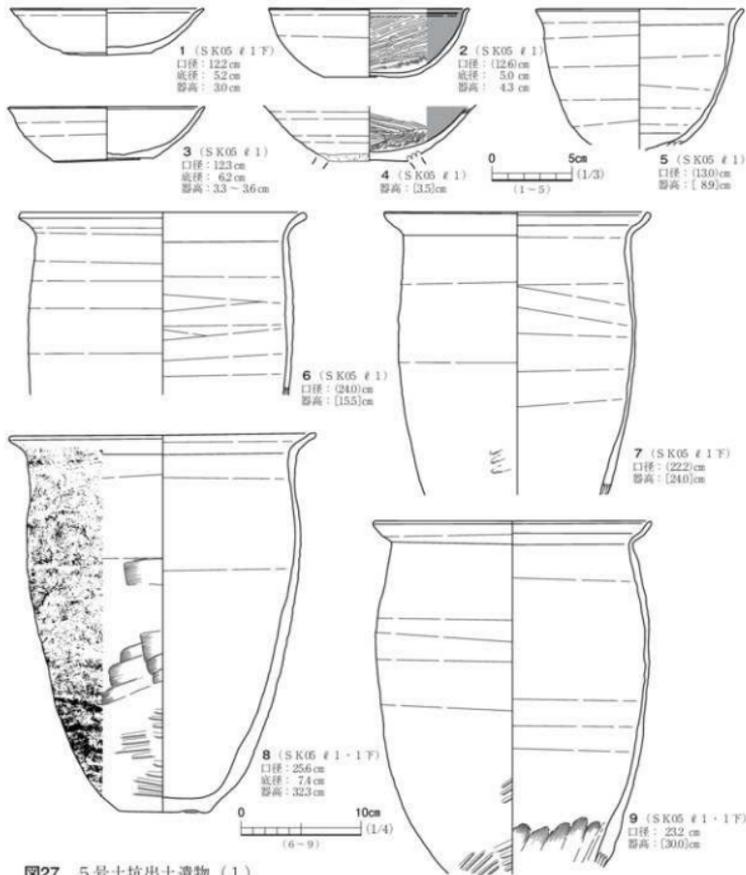


図27 5号土坑出土遺物 (1)

ミ大の焼土塊が計200gほど出土した。本土坑周辺部のLⅡa上面で、同様の土師器細片が少なからず出土している。本土坑は、隣接する建物跡群に伴う廃棄坑と考えている。年代は、出土遺物が少なく明確ではないが、周辺の建物群と同時期の9世紀前半頃と考えている。

9号土坑 SK09（図29、写真20）

本土坑は、A区北側のG10グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。北東12mに18号溝跡、西11mに5号土坑・6号掘立柱建物跡がある。平面形はほぼ円形で、直径は110～120cm、確認面からの深さは26cmである。底面は平坦で、周壁は底面からやや急角度に立ち上がる。堆積土はLⅢ土塊を多く含んだ2層に分けられ、人為堆積と判断した。土中から遺物は出土していない。

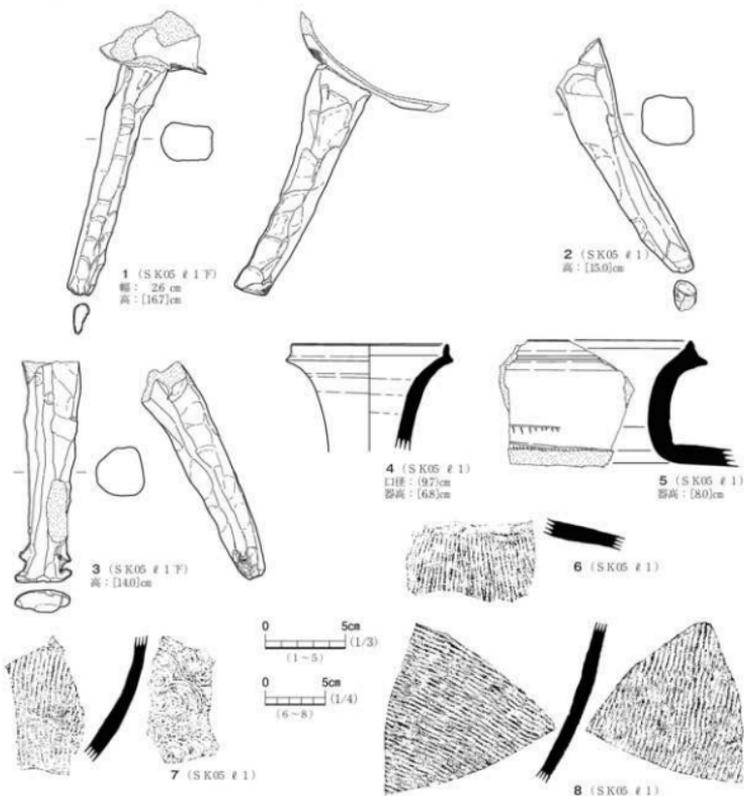


図28 5号土坑出土遺物（2）

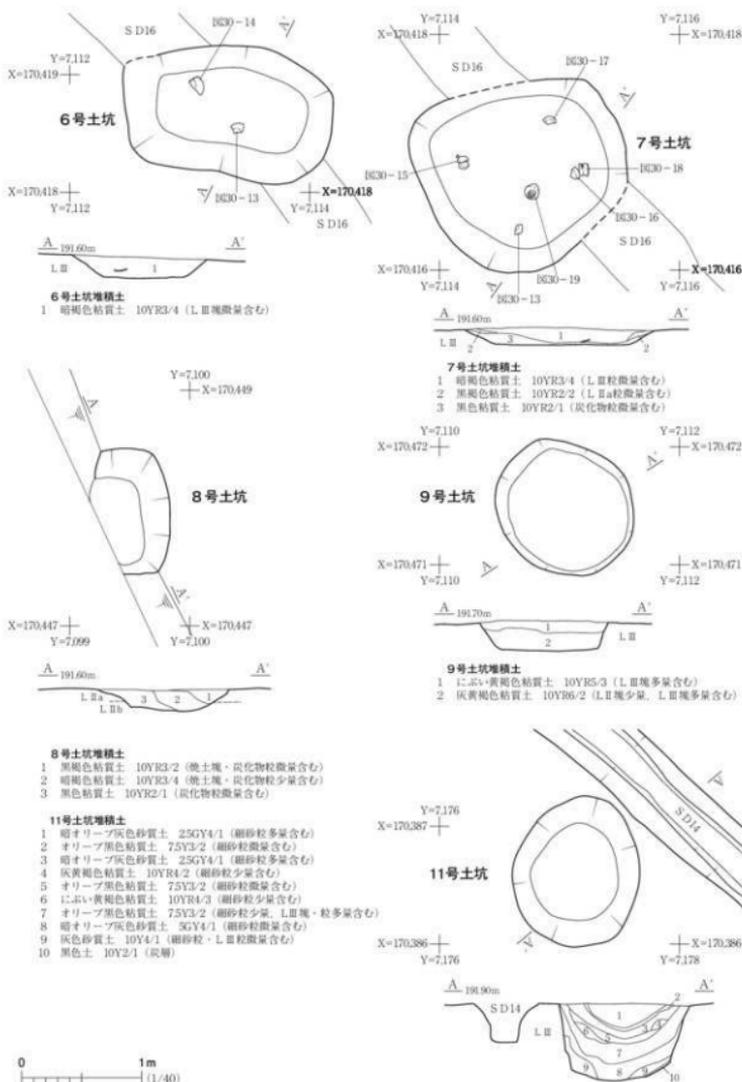


図29 6～9・11号土坑

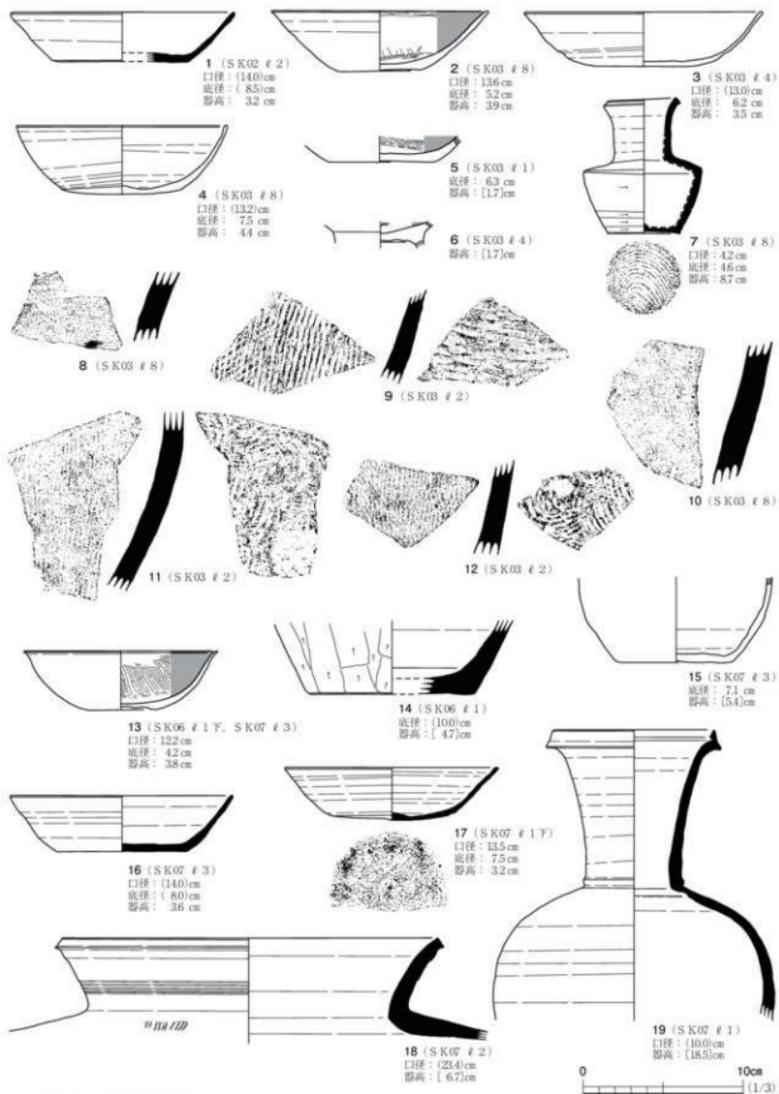


図30 土坑出土遺物

本土坑は、小型の円形土坑であるが、出土遺物がなく、周辺の遺構からも離れた位置にあるため、年代や性格を明確にすることはできなかった。

#### 11号土坑 SK11 (図29, 写真20)

本土坑は、B区北東側のM19グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。直ぐ北に14号溝跡、東2.5mに21号溝跡がある。平面形は南北に長い楕円形である。規模は長軸1.2m、短軸1.05m、確認面からの深さは64cmである。底面は中央部がやや窪み、周壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は10層に分けられ、状況から自然堆積と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本土坑は小型の円形土坑であるが出土遺物がなく、他遺構との重複もないため年代や性格を明確にすることはできなかった。

(菊田)

## 第3章 総括

西坂才遺跡1次調査で確認した遺構は、建物跡8棟、溝跡20条(建物跡の雨落ち溝と考えたSD13・15・23の3条は除外)、土器焼成坑1基、井戸跡1基そして土坑8基を確認した。ここでは、以下の4項目について若干の検討と事実報告の整理を加えて総括とする。

### 1. 平安時代の遺構

ここでは、西坂才遺跡1次調査で確認した平安時代の遺構は、建物跡8棟(SB01～08)、溝跡11条(SD01・05・06・14・16～18。SD13・15・23の3条はSB01の雨落ち溝)、土器焼成土坑1基(SK05)、井戸跡1基(SK03)が該当している。平安時代の遺構の変遷を以下に整理する。

- |               |  |
|---------------|--|
| ①8世紀後半～9世紀初め頃 | a：6・14号溝跡(SD14は鶴沼Cまで延伸。排水用溝)<br>b：16・18号溝跡   |
| ②9世紀前半頃       | a：1・5・17・21号溝跡(真北方向を意識した区画溝)<br>b：1・3・6号掘立柱建物跡+3号土坑(井戸跡)<br>c：2・4・7・8号掘立柱建物跡+3号土坑(井戸跡) |
| ③9世紀末～10世紀初め頃 | a：5号土坑(土器焼成坑)  |

①の段階について整理する。南東から北西へと延びる4条の溝跡は、第3節で説明した通り、延伸方向が概ね一致しているものの、溝跡の断面形状と堆積土の違いから①aと①bに分けることができた。しかし、①aと①bの新旧関係と、本来的に2条1組であったのか、いずれも2条1組であったとしてどのような機能をはたしていたのか、排水用として機能した痕跡のない①bの機能は何かなど、複数の疑問が残る。

排水用として機能した①aの6・14号溝跡に挟まれた空間幅を測ると、B区に南東において約31mであった。6・14号溝跡の2条が、道跡の両側の側溝として機能したとしても、官道でもない道幅が30mを超えるのはあまりに広すぎる。しかし、道として機能しないのであれば、排水用として機能した溝跡(SD14)が、北西に向かって鶴沼C遺跡12号溝跡まで延伸するものだろうか。

そこで、6・14号溝跡については、2本の道跡に伴った、どちらか一方の側溝と考えることはできないだろうか。それらの道跡の新旧関係は不明だが、一度作り替えがあり、同時に2本の道が機能したとは想定はしない。後世の削平によって、6号溝跡と対になる側溝と、14号溝跡と対になる側溝は、既に失われてしまっている状況が、西坂才遺跡で確認できた2条の溝跡と理解できないだろうか。想定される2本の道跡は、他の古道の類例から推定幅10m未満と考えておきたい。

②の段階、9世紀前半代について整理する。①の段階で南東から北西に向かって延びる溝跡が埋没した後、真北(真東)方向を意識した区画溝跡(SD01・05・17・21)を掘り込んだ②a段階へと



図31 古代溝跡位置図

から墨汁をためる凹みへ緩やかに下降する「圈足円面硯b」にあてはまる。本遺跡以外から出土した硯も、その多くが本遺跡と同じ「圈足円面硯b」か、硯面が平坦な「圈足円面硯c」のいずれかにあてはまる。

これらの出土地点に注目すると、郡山遺跡を中心とした半径3km圏内の12遺跡(表1 No.1~28)から、陶硯が28点出土している。また、近辺の12遺跡のうち唯一、湯川村殿田遺跡のように堅穴住居跡と建物跡が併存して遺跡から出土する点も、陶硯の出土率と共に注視する必要があるようだ。

移行する。この区画溝を意識して、②b段階に南北方向に3棟、②c段階に東西方向に4棟の建物跡を建てる。②b・②c段階の新旧関係については、遺構の重複がなく不明確である。また、ここで漏れている5号掘立柱建物跡については、軸線方向が異なり、②b・②cのいずれにも属していない。おそらくもう一つの建物跡のまともりがA区東側にあると考えられる。建物跡群の廃絶した後、③段階に5号土坑(土器焼成坑)が機能するという変遷案を考えている。

## 2. 円面硯について(表1)

西坂才遺跡では、1号掘立柱建物跡に伴う雨落ち溝(SD15)から、円面硯片図9-6が1点出土している。この土器の細かい特徴は第2章第2節のとおりであるが、端的に高台付碗を上下逆さにし、高台端部内側を硯面に見立てて製作している。

西坂才遺跡の位置する周辺の遺跡からは、円面硯などの他に土器を転用した硯なども少なからず出土している。しかし、硯が出土したからといって、出土遺跡が郡衙に関連したとは容易には言い難い状況である。しかしながら、これらの硯をもてる者と、そうでない者が存在していた状況があったという背景は整理しておく必要がある。そこで、表1に本遺跡周辺から出土した円面硯と風字硯を集成した。その結果、計14遺跡から計34片出土している。また、大半の硯は大戸窓跡産で、これらの時期は8世紀末~9世紀代とやや幅がある。

すべての円面硯は、平城京出土陶硯分類(奈文研2007)によると、円面硯の中でも輪状の脚部がついた圈足円面硯に分類される。本遺跡から出土した円面硯は、細分類によると硯面

### 3. 脚付き鉢について（表2）

5号土坑とした土師器焼成坑から出土した土師器脚付き鉢については、会津若松市内での出土例は少ない。脚付き鉢の機能としては、調理具でなく祭祀的な香炉などとして用いられていた可能性が高い。本遺跡も含め5遺跡において合計6例が出土している（表2）。この土器の器形は、郡山遺跡から出土している破片資料（五十嵐2006）が参考になる。郡山遺跡の資料は、推定口径は約26cm、ロクロ成形の内湾した体部から口縁部が大きく外反し、脚部は体部下位に付く。脚の本数は、この器種が金属器の模倣であることから、基本3本1組で構成されていたと考えている。

脚部の形状、脚部・鉢部との接続方法を整理すると表2のようになる。脚部の形状は、①脚先に向かって幅を減じてゆく先細脚と、②脚の付け根から脚先まで幅に変化のない寸胴脚の2つがある。鉢部と脚の接合の仕方を見ると、a：本遺跡のように鉢部に脚をなでつけるタイプと、b：殿田遺跡のように鉢部に孔を明け、脚部を差し込むタイプの2つがある。出土した遺構の年代からすると、脚の接合形状が寸胴脚（②）で、鉢に穿孔し脚を差し込んだ「b」タイプの脚付き鉢が、9世紀前半代の殿田遺跡から出土しており、本遺跡近辺の中では古いタイプと考えられる。しかし、脚の接合方法「b」については、山形県鶴岡市万治ヶ沢遺跡（鈴木2009）での確認例をみると、10世紀前葉頃まで続いていることが分かり、脚を差し込んだ脚装着方法が古いとは簡単には言い難いようである。

この土器の分布は、前述した円面硯の分布と重なり、郡山遺跡を中心とした半径3km圏内で4遺跡見つまっている点も興味深い。

### 4. 結 語

平安時代の西坂才遺跡の周辺、涸川西岸の平安時代の遺跡について整理し結語とする。

涸川に流れ込む小河川が複雑に入り組んだ西岸の河岸段丘および自然堤防上には、西坂才遺跡を含めて複数の遺跡が、概ね同時期に集って立地している。また、本遺跡の他、鶴沼C・鶴沼B（木流）・西木流C遺跡の建物構成を見ると、中・小規模な圓柱・総柱建物跡だけで構成されている。さらに、一般集落にない特殊な遺物（陶硯など）が、涸川西岸の9遺跡（表1 Na 1～16、表2）から出土する。

以上のことから、涸川西岸に集中した平安時代の遺跡について類推すると、個々の遺跡でなんらかの職務を所管し、このあたり一帯（郡山遺跡を中心とした半径3km圏内）で一つの役所的な機能を果たしていたと仮定することはできないのだろうか。また、これらの所轄間の移動には、小船の利用も必要だが、やはり陸路（橋）の構築も必須であろうと考えている。

（阿 部）

表1 会津若松市高野地区内 円面硯出土遺跡一覧

| No. | 出土遺跡     | 出土遺構          | 脚部外面種類 |     |     |    |     | 透孔形状 | 断面形状 | 備考 | 時期         | 序章図3中番号    |       |
|-----|----------|---------------|--------|-----|-----|----|-----|------|------|----|------------|------------|-------|
|     |          |               | 楕円文?   | 斜+縦 | 斜格子 | 縦線 | 三隅文 |      |      |    |            |            | 十字    |
| 1   | 西取才遺跡    | 1号掘立柱建物跡      | ○      |     |     |    |     |      | 丸    | b  |            | 9世紀前半      | 2     |
| 2   | 鶴沼C遺跡    | 1号流路跡         |        |     |     |    |     |      |      |    | 風字硯        | 9世紀        | 1     |
| 3   | 鶴沼B遺跡    | 北区1号流路跡       |        |     | ○   |    |     |      | 丸    | -  |            | 9世紀        | 6     |
| 4   | 西木流C遺跡   | 1・Ⅱ区遺構外       |        |     |     |    |     |      |      |    | 風字硯        | 9世紀後半      | 4     |
| 5   | 下高野A遺跡   | 1号住居跡         | ○      |     |     |    |     |      | 丸    | -  |            | 9世紀前半      | 91    |
| 6   | 上吉田遺跡    | 河川流路跡         |        |     | ○   |    |     |      | 丸    | b  |            | 9世紀        | 92    |
| 7   |          | 河川流路跡         |        |     |     |    |     |      |      |    | 風字硯        | 9世紀        |       |
| 8   | 上吉田C遺跡   | b区遺構外         |        |     |     | ○  |     |      | 丸    | -  |            | 9世紀前半      | 93    |
| 9   |          | c区35号土坑       |        |     |     |    | ○   | -    | c    |    | 8世紀末～9世紀前半 |            |       |
| 10  |          | トレンチ(34T)     |        |     | ○   |    |     |      | -    | -  |            | 9世紀中葉      |       |
| 11  | 矢玉遺跡     | トレンチ(53T)     |        |     |     |    | ○   | -    | c    |    | 9世紀中葉      | 83         |       |
| 12  |          | 3号溝跡          |        |     |     |    | ○   | -    | b    |    | 9世紀中葉      |            |       |
| 13  |          | 4号溝跡          |        |     | ○   |    |     |      | -    | a  |            |            | 9世紀前半 |
| 14  | 殿田遺跡     | 16号性格不明遺構     |        |     | ○   |    |     | 丸    | b    |    | 8世紀末～9世紀前半 | 90         |       |
| 15  |          | C区遺構外         |        |     | ○   |    |     |      | -    | -  |            |            | 9世紀中葉 |
| 16  | 郡山遺跡     | 1号溝跡          |        |     |     |    |     | ○    | -    | c  |            | 9世紀        | 69    |
| 17  |          | 205号土坑        |        |     |     | ○  |     | 丸    | b    |    |            |            |       |
| 18  |          | 301号溝跡        | ○      |     |     |    |     |      | -    | -  |            |            |       |
| 19  |          | 2号河川跡(S区)     |        |     |     |    |     | ○    | 長方形  | c  |            | 9世紀        |       |
| 20  |          | 遺構外(F区)       |        |     |     | ○  |     |      | 長方形  | a  |            |            |       |
| 21  |          | 遺構外(L区 Y16-9) |        |     |     |    |     |      | -    | b  |            |            |       |
| 22  | 遺構外(W16) |               |        | ○   |     |    |     |      | -    | -  |            |            |       |
| 23  | 金原遺跡     | 遺構外           |        |     |     | ○  |     | 丸    | -    |    | 風字硯        | 9世紀        | 89    |
| 24  |          | 遺構外           |        |     |     | ○  |     |      | -    | -  |            | 9世紀        |       |
| 25  |          |               |        |     |     | ○  |     |      |      | -  | -          |            |       |
| 26  | 原敏遺跡     | 遺構外           |        |     |     |    |     |      |      |    | 平頭風字硯      | 9世紀        | 91    |
| 27  |          | 12号特殊遺構       |        |     |     |    |     |      |      |    | 風字硯        | 9世紀後半      |       |
| 28  | 大戸古堂群    | 22号掘立柱建物跡     |        |     | ○   |    |     | 丸    | c    |    | 若松市2004    | 9世紀中葉      | -     |
| 29  |          | 上南屋12号遺跡      |        |     | ○   |    |     |      | ○    | -  | c          | 8世紀末～9世紀前半 |       |
| 30  |          |               |        |     |     | ○  |     |      |      | -  | b          | 8世紀末～9世紀前半 |       |
| 31  |          |               |        |     |     |    |     |      |      | -  | -          |            |       |
| 32  | 南原67号遺跡  |               |        |     |     |    |     |      | -    | -  |            | 9世紀中葉      | -     |
| 33  |          |               |        |     | ○   |    |     |      | -    | -  |            | 9世紀中葉      |       |
| 34  | 船ヶ森西遺跡   | 4号井戸跡         |        |     |     | ○  |     | 長方形  | c    |    | 8世紀        | -          |       |

表2 会津若松市高野地区周辺 脚付鍋出土遺跡一覧

| No. | 遺跡名    | 出土遺構      | 先履跡 | 寸割跡 | 脚ナゲ付 | 脚差込 | 時期         | 備考     | 序章図3中番号 |
|-----|--------|-----------|-----|-----|------|-----|------------|--------|---------|
| 1   | 西取才遺跡  | 5号土坑      | ○   |     | ○    |     | 9世紀末～10世紀初 |        | 2       |
| 2   | 西木流C遺跡 | 6号溝跡      | -   | -   | ○    |     | 9世紀中葉      |        | 4       |
| 3   | 下高野A遺跡 | トレンチ(10T) | ○   |     |      |     | 9世紀前半      | 91     |         |
| 4   |        | トレンチ(41T) |     |     | ○    |     | 9世紀中葉      |        |         |
| 5   | 殿田遺跡   | 2号住居跡     |     | ○   |      | ○   | 9世紀前半      | 90     |         |
| 6   |        | 2号河川跡(Q区) |     | ○   |      |     | 9世紀        |        |         |
| 7   | 郡山遺跡   | 2号河川跡(S区) |     | ○   |      |     | 9世紀        | 脚のみ計6本 | 69      |

## 参考文献

- 菅川隆男 1985 「大久保須恵器窯跡(試掘)」「新鶴村道跡発掘調査報告書Ⅲ」 新鶴村教育委員会
- 藤谷 誠ほか 1990 「上吉田道跡」「東北横断自動車道道跡調査報告9」 福島県教育委員会
- 小畑博治ほか 1990 「船ヶ森西道跡」「東北横断自動車道道跡調査報告9」 福島県教育委員会
- 藤谷 誠ほか 1991 「屋敷道跡」「東北横断自動車道道跡調査報告12」 福島県教育委員会
- 古川利意 1998 「新鶴村道跡試掘調査報告書」 新鶴村教育委員会
- 石田明夫ほか 1999 「矢玉道跡」「若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅰ」 会津若松市教育委員会
- 荒木 隆・  
石田明夫ほか 2000 「若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ」 会津若松市教育委員会
- 五十嵐純一 2004 「郡山道跡Ⅰ」 河東町教育委員会
- 五十嵐純一 2006 「金屋道跡・郡山道跡Ⅱ」 会津若松市教育委員会
- 諸星良一ほか 2006 「殿田道跡」「湯川中学校屋内運動場建設事業に伴う発掘調査報告書」 湯川村教育委員会
- 川越俊一ほか 2007 「平城京出土陶硯集成Ⅱ 平城京・寺院」 奈良文化財研究所
- 鈴木良仁 2009 「万治ヶ沢道跡発掘調査報告書」 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 福田秀生ほか 2011 「桜町道跡(3次)」「会津縦貫北道路道跡調査報告11」 福島県教育委員会
- 福島県教育委員会 2012 「福島県内道跡分布調査報告18」、2012「福島県内道跡分布調査報告19」、  
2013 「福島県内道跡分布調査報告20」
- 五十嵐純一 2013 「郡山道跡Ⅲ(第10・11次調査)」 会津若松市教育委員会
- 矢木秀典 2013 「長谷地A道跡」 会津若松市教育委員会

# 付 章 自然科学分析

## 第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について

(株)加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

西坂才遺跡は、福島県会津若松市高野町中沼字西坂才(北緯37° 32' 12", 東経139° 59' 48")に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した木炭等の合計5点である(表1)。

### 2 測定の意義

建物跡等遺構の継続期間を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)δ<sup>13</sup>Cは、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに、参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために、「cal BC/AD」(または、「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、AW-NZS-1が $1590 \pm 20\text{yrBP}$ 、AW-NZS-2が $1430 \pm 20\text{yrBP}$ 、AW-NZS-3が $1170 \pm 20\text{yrBP}$ 、AW-NZS-4が $7180 \pm 30\text{yrBP}$ 、AW-NZS-5が $1310 \pm 20\text{yrBP}$ である。SB01 P 3から出土した2点の間には若干年代差がある。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、古い方から順にAW-NZS-4が縄文時代早期後葉頃、AW-NZS-1が古墳時代中期から後期頃、AW-NZS-2が古墳時代終末期頃、AW-NZS-5が古墳時代終末期から古代頃、AW-NZS-3が古代頃に相当する(小林編2008, 佐原2005)。

試料の炭素含有率を確認すると、AW-NZS-3～5はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。AW-NZS-1は、土塊から木炭を採取する際に、土を完全に除去できなかったことが観察され、炭素含有率は41%と若干低い値であった。AW-NZS-2は、土塊の表面より炭

化物と見られる黒色の物質を集めたが、炭素含有率は35%とやや低い値を示した。AW-NZS-1, 2については、測定された炭素の由来に注意を要する。

## 文 献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原眞, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

表3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

| 測定番号        | 試料名      | 採取場所             | 試料形態 | 処理方法 | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS) | $\delta^{13}\text{C}$ 補正あり |             |
|-------------|----------|------------------|------|------|---------------------------------|----------------------------|-------------|
|             |          |                  |      |      |                                 | Libby Age (yrBP)           | pMC (%)     |
| IAAA-132412 | AW-NZS-1 | SB01 P3 1層 (ℓ 1) | 木炭   | AaA  | -24.69 ± 0.28                   | 1,590 ± 20                 | 8202 ± 0.22 |
| IAAA-132413 | AW-NZS-2 | SB01 P3 1層 (ℓ 1) | 炭化物  | AaA  | -22.21 ± 0.29                   | 1,430 ± 20                 | 8374 ± 0.21 |
| IAAA-132414 | AW-NZS-3 | SK05 1層 (ℓ 1)    | 木炭   | AAA  | -19.18 ± 0.27                   | 1,170 ± 20                 | 8648 ± 0.23 |
| IAAA-132415 | AW-NZS-4 | SK03 4層 (ℓ 4)    | 木片   | AAA  | -28.62 ± 0.26                   | 7,180 ± 30                 | 4092 ± 0.14 |
| IAAA-132416 | AW-NZS-5 | SD15 1層 (ℓ 1)    | 木炭   | AAA  | -25.45 ± 0.25                   | 1,310 ± 20                 | 8500 ± 0.22 |

表4 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

| 測定番号        | $\delta^{13}\text{C}$ 補正なし |              | 暦年較正用 (yrBP) | 1 $\sigma$ 暦年代範囲            | 2 $\sigma$ 暦年代範囲                                       |
|-------------|----------------------------|--------------|--------------|-----------------------------|--|
|             | Age (yrBP)                 | pMC (%)      |              |                             |  |
| IAAA-132412 | 1,590 ± 20                 | 82.08 ± 0.22 | 1,592 ± 21   | 420calAD-434calAD (12.7%)   | 415calAD-537calAD (95.4%)                              |
|             |                            |              |              | 455calAD-469calAD (10.2%)   |  |
|             |                            |              |              | 488calAD-534calAD (45.3%)   |  |
| IAAA-132413 | 1,380 ± 20                 | 84.22 ± 0.2  | 1,425 ± 19   | 617calAD-647calAD (68.2%)   | 599calAD-654calAD (95.4%)                              |
| IAAA-132414 | 1,070 ± 20                 | 87.51 ± 0.23 | 1,167 ± 21   | 778calAD-791calAD (12.0%)   | 773calAD-899calAD (84.9%)<br>923calAD-948calAD (10.5%) |
|             |                            |              |              | 805calAD-842calAD (24.7%)   |  |
|             |                            |              |              | 860calAD-894calAD (29.3%)   |  |
|             |                            |              |              | 933calAD-936calAD (2.2%)    |  |
| IAAA-132415 | 7,240 ± 30                 | 40.62 ± 0.14 | 7,177 ± 27   | 6058calBC-6019calBC (68.2%) | 6077calBC-6001calBC (95.4%)                            |
| IAAA-132416 | 1,310 ± 20                 | 84.93 ± 0.22 | 1,305 ± 20   | 666calAD-695calAD (41.7%)   | 661calAD-721calAD (67.2%)<br>741calAD-768calAD (28.2%) |
|             |                            |              |              | 702calAD-709calAD (5.6%)    |  |
|             |                            |              |              | 746calAD-764calAD (20.8%)   |  |

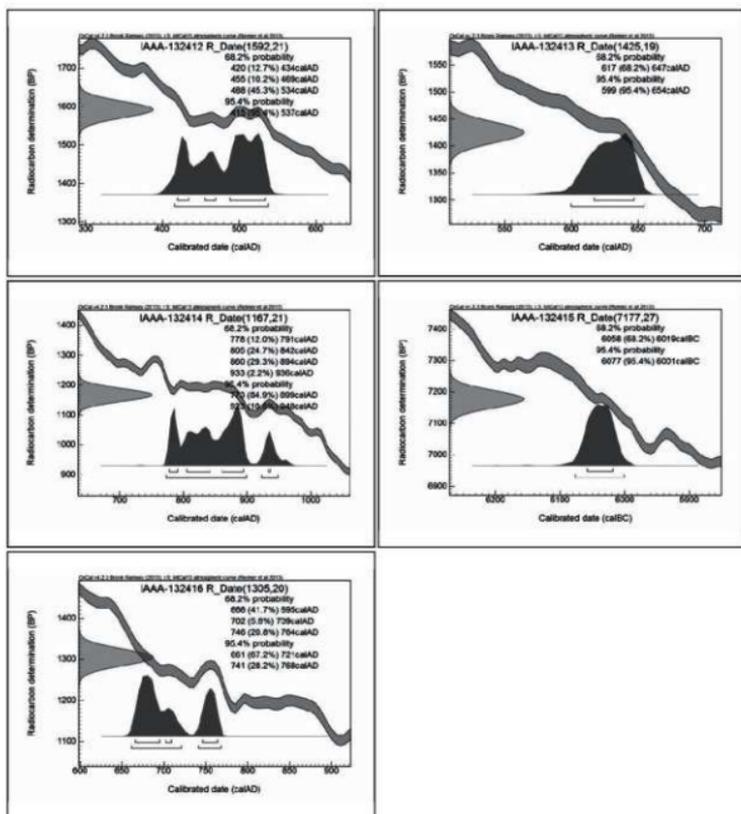


図32 暦年較正年代グラフ

# 写 真 図 版

第2編 西坂才遺跡（1次）



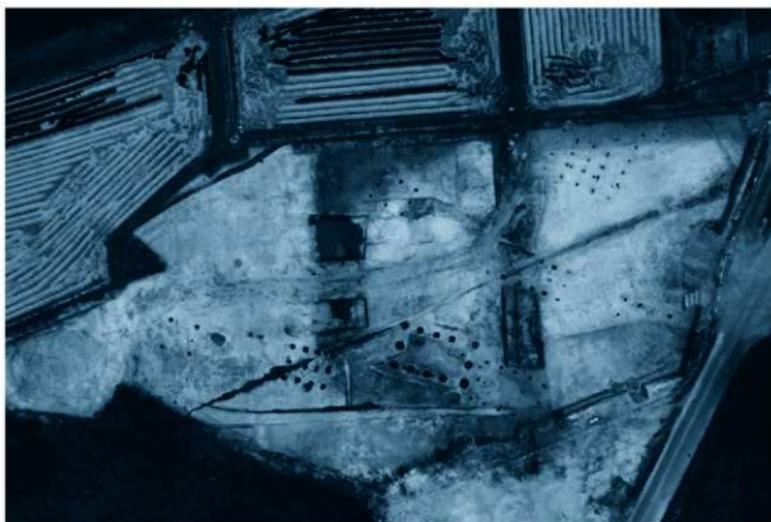
1 調査区全景（真上から）



2 調査区A区調査前全景（南東から）



3 調査区全景（北西から）



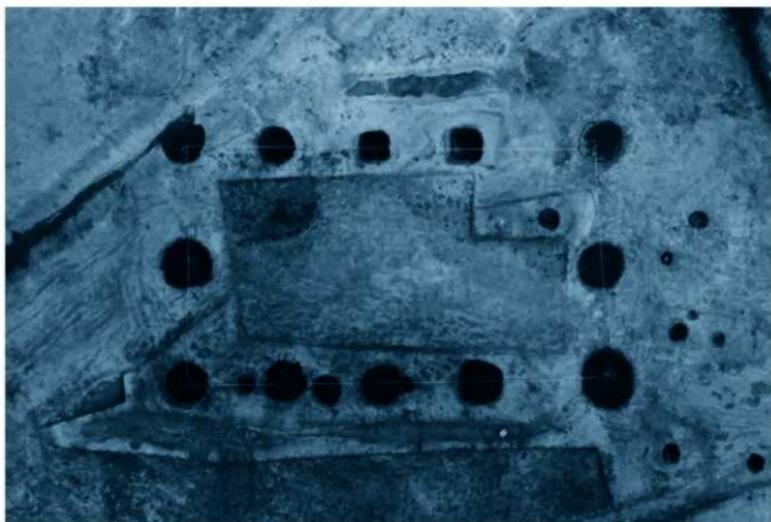
4 調査区A区全景 (真上から)



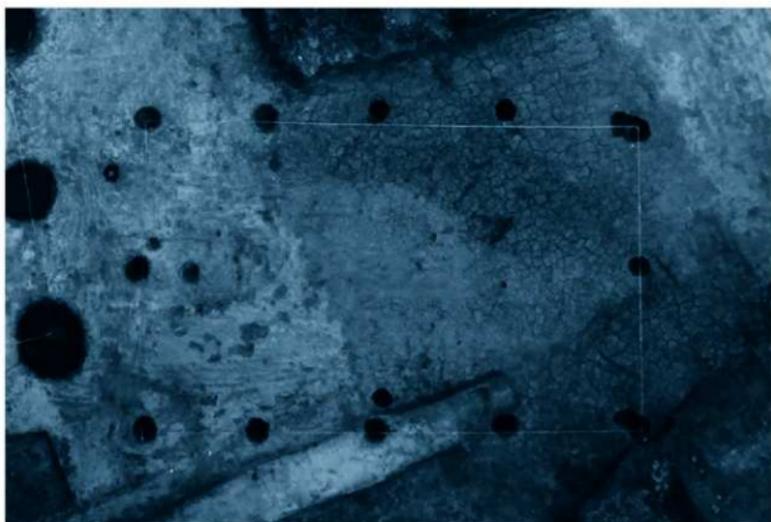
5 調査区B区全景 (真上から)



6 1・3号掘立柱建物跡（北から）



7 1号掘立柱建物跡（真上から）



8 2号掘立柱建物跡 (真上から)



9 3号掘立柱建物跡 (真上から)



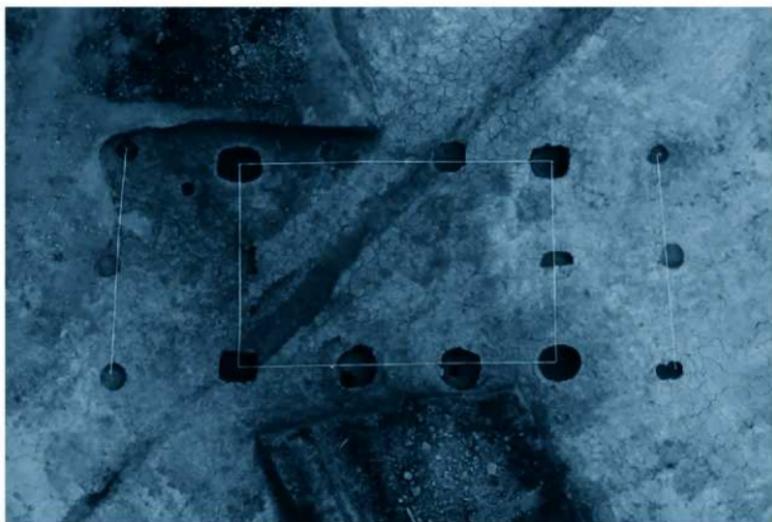
10 4号掘立柱建物跡（東から）



11 5号掘立柱建物跡（南から）



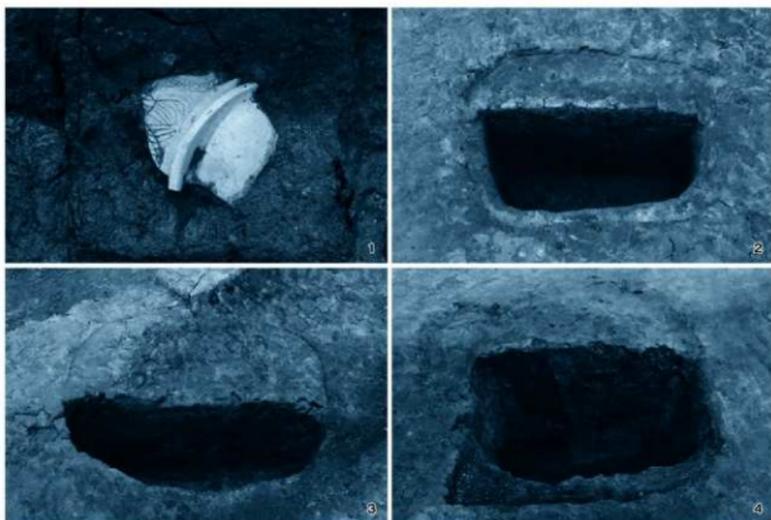
12 6号掘立柱建物跡 (南から)



13 7号掘立柱建物跡 (真上から)



14 8a・b号掘立柱建物跡（真上から）



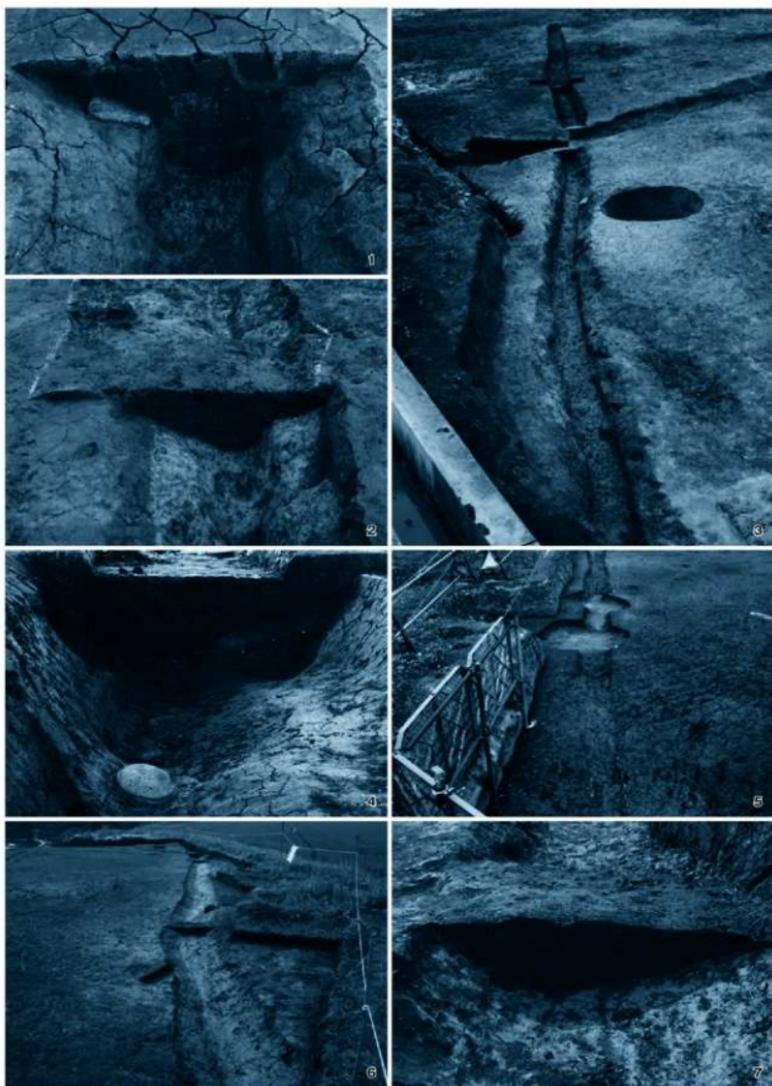
15 1・3・6号掘立柱建物跡

1 1号建物（SD15）遺物出土状況（東から）  
2 3号建物P7土層断面（南から）  
3 1号建物P3土層断面（東から）  
4 6号建物P4（南から）



16 溝 跡 (1)

- 1 2号溝跡土層断面 (東から)  
 2 5号溝跡遺物出土状況 (北東から)  
 3 5号溝跡全景 (東から)  
 4 5号溝跡遺物出土状況 (東から)  
 5 6号溝跡土層断面 (南から)  
 6 13号溝跡断面 (南から)



17 溝 跡（2）

- |                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| 1 14号溝跡土層断面（東から）        | 3 B区14号溝跡全景（北西から） |
| 2 14号溝跡土層断面（南から）        | 5 16号溝跡全景（南から）    |
| 4 14号溝跡土層断面・遺物出土状況（南から） | 7 18号溝跡土層断面（南から）  |
| 6 18号溝跡全景（南から）          |                   |



18 溝 跡 (3)

1 19号溝跡土層断面 (北から)

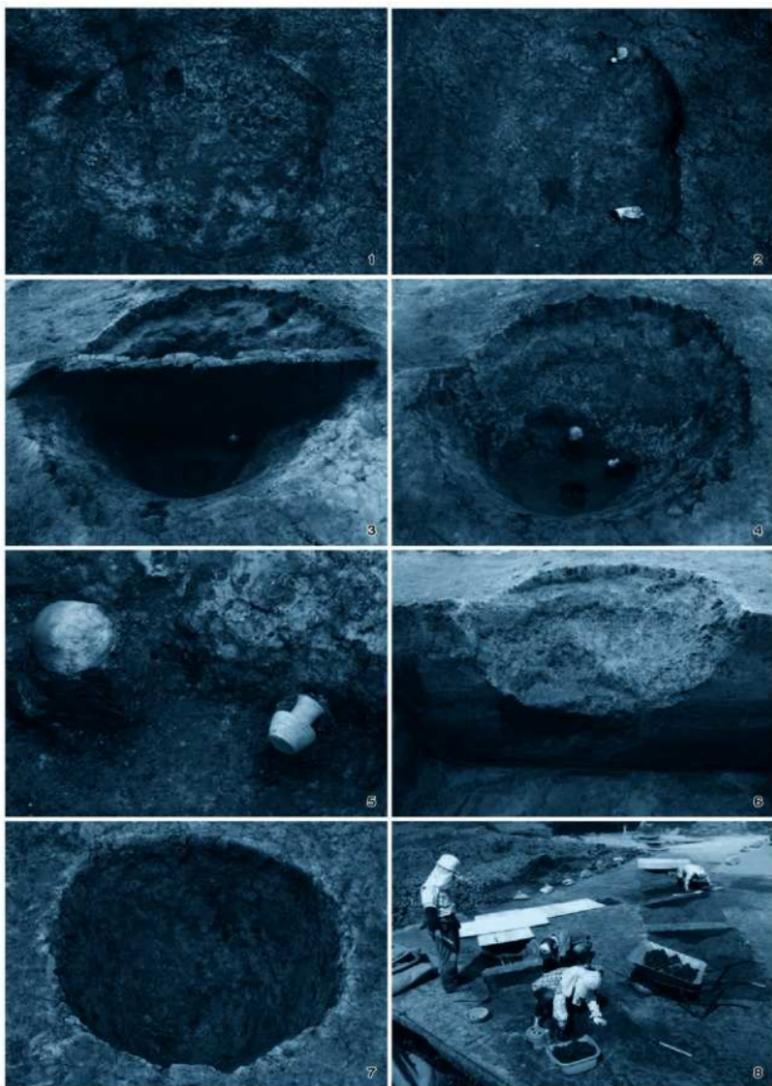
2 20号溝跡土層断面 (北から)

3 7・10・19・20号溝跡全景 (北西から)

4 17号溝跡遺物出土状況 (南から)

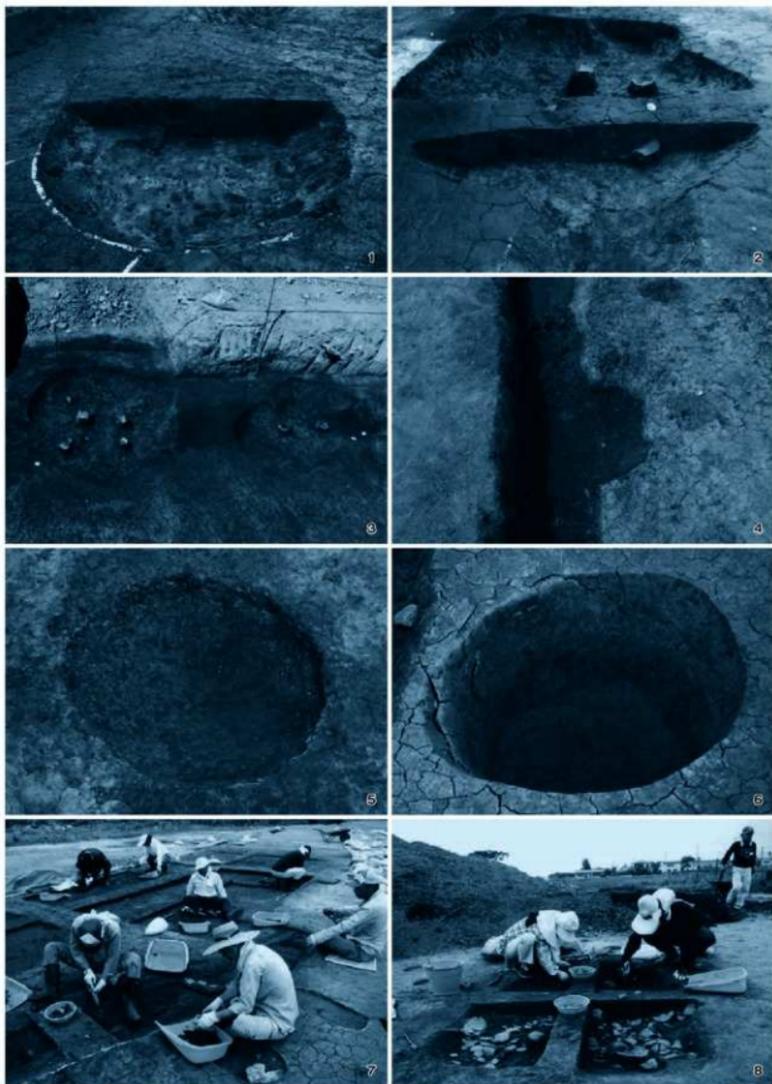
5 21・22号溝跡全景 (北から)

6 1・6・17号溝跡全景 (南から)



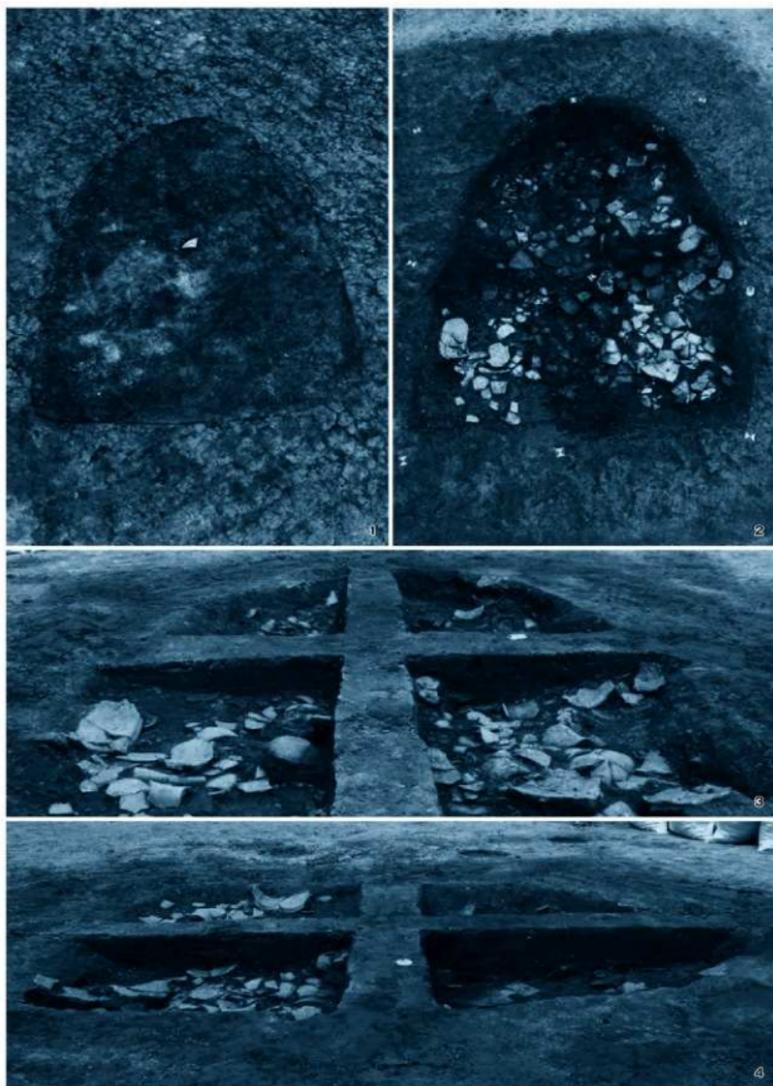
19 土 坑 (1)

- |   |                 |   |               |
|---|-----------------|---|---------------|
| 1 | 1号土坑全景 (南へ)     | 2 | 2号土坑全景 (南へ)   |
| 3 | 3号土坑土層断面 (南へ)   | 4 | 3号土坑全景 (南へ)   |
| 5 | 3号土坑遺物出土状況 (南へ) | 6 | 3号土坑土層断面 (南へ) |
| 7 | 4号土坑全景 (南へ)     | 8 | 作業風景 (南へ)     |



20 土 坑 (2)

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 6号土坑土層断面 (南から) | 2 7号土坑土層断面 (南から) |
| 3 6・7号土坑全景 (東から) | 4 8号土坑全景 (南から)   |
| 5 9号土坑全景 (南から)   | 6 11号土坑全景 (西から)  |
| 7 作業風景 (南から)     | 8 作業風景 (南から)     |

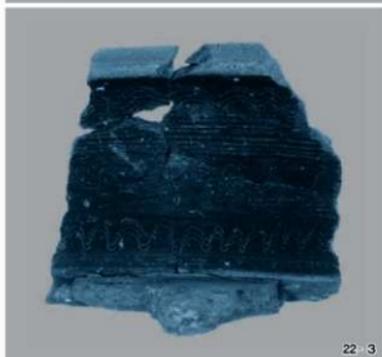


21 5号土坑

1 概出状況（南中-5） 2 遺物出土状況（南中-5）  
3 土層断面（南中-5） 4 土層断面（東中-5）



9-6



22-3



30-4



30-2



24-1

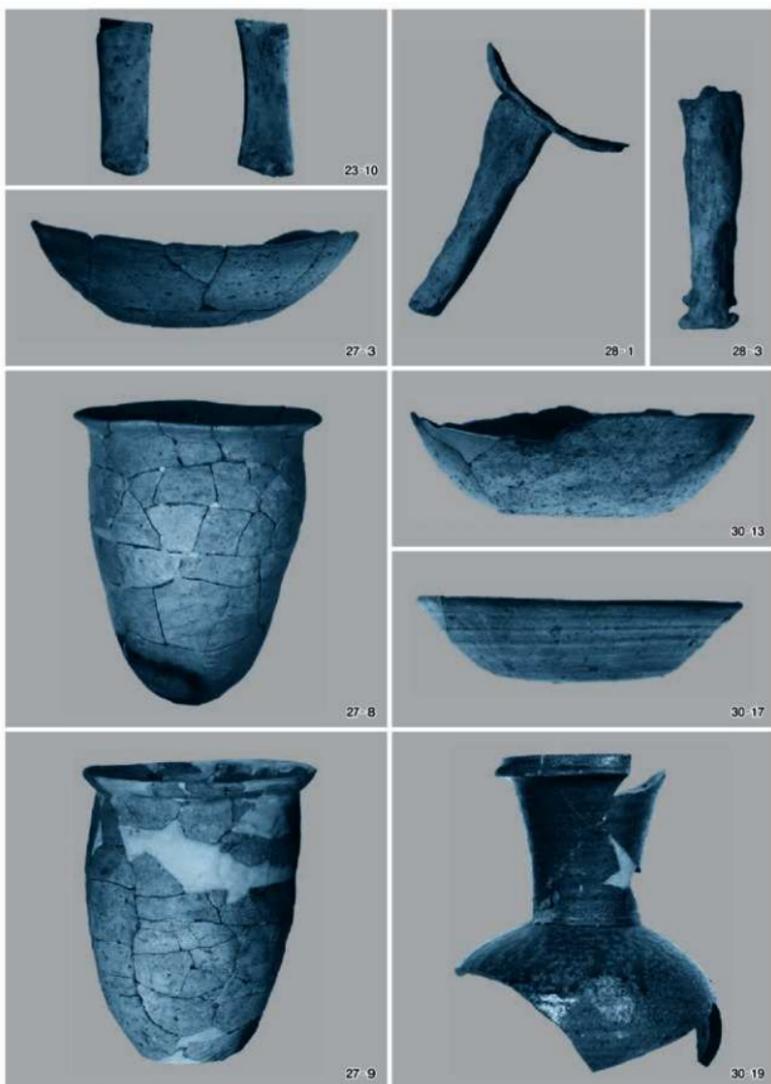


24-2



30-7

22 出土遺物 (1)



23 出土遺物（2）

# 報告書抄録

| ふりがな    | あいびじゅうかんきたどうろいせきはっくつちようきほうこく15  |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
|---------|---|----------------------|-------------------------------------|-------------------------------|----------------------------|--|---------|-------------------|
| 書名      | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| シリーズ名   | 福島県文化財調査報告書   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| シリーズ番号  | 第496集   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| 編著者名    | 藤谷 誠、後藤信佑、佐藤悦夫、菊田順幸、日下部正和、作田一耕、阿部知己   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| 編集機関    | 公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 調査課<br>〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL.024-534-2733   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| 発行機関    | 福島県教育委員会<br>〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL.024-521-1111  |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| 発行年月日   | 2014年12月19日   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| 所収遺跡名   | 所在地   | コード                  |                                     | 北緯                            | 東経                         | 調査期間   | 調査面積    | 調査原因              |
|         |   | 市町村                  | 遺跡番号                                |                               |                            |  |         |                   |
| 鶴沼C     | 福島県<br>会津若松市<br>高野町中沼<br>字鶴沼  | 2028                 | 00498                               | 37°32'15"                     | 139°54'40"                 | 2013年4月22日   | 11,000㎡ | 会津縦貫北道路の建設に伴う事前調査 |
|         |   |                      |                                     | 37°32'20"                     | 139°54'46"                 | 2013年11月29日  |         |                   |
| 西坂才(1次) | 福島県<br>会津若松市<br>高野町中沼<br>字西坂才甲  | 2028                 | 00499                               | 37°32'6"                      | 139°54'48"                 | 2013年4月10日   | 7,800㎡  | 会津縦貫北道路の建設に伴う事前調査 |
|         |   |                      |                                     | 37°32'12"                     | 139°54'53"                 | 2013年10月4日   |         |                   |
| 所収遺跡名   | 種類  | 主な時代                 | 主な遺構                                |                               |                            | 主な遺物   | 特記事項    |                   |
| 鶴沼C     | 集落跡   | 古墳時代<br>平安時代<br>中世以降 | 河川流路跡 3か所<br>掘立柱建物跡 9棟<br>土ピット 130個 | 流路跡付施設 2か所<br>溝 25条<br>井戸跡 1基 | 土師器<br>須恵器<br>陶磁器<br>木製品など | 今回の調査では、平安時代の建物跡群と、それに隣接した流路跡などを調査した。流路跡からは、土器と木製品などが多数出土している。 |         |                   |
| 要約      | 鶴沼C遺跡では、流路跡から大量の平安時代の土器などとともに、木製品も見つかっている。出土土器には墨書土器が多く含まれており、中には複数の文字が書かれたものや、「倉人」等の郡衙関連の性格を持つ遺跡であることを示すものも出土した。また、井戸跡は、木枠を井桁に組んだ平安時代のもので、木枠材として建物の扉などを再利用していた。流路跡・井戸跡は、いずれも建物群に付随する平安時代施設と思われる。 |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |
| 西坂才(1次) | 集落跡   | 平安時代                 | 掘立柱建物跡 9棟<br>土坑 8基<br>井戸跡 1基        | 溝 22条<br>土器焼成坑 1基<br>小穴 131個  | 土師器<br>須恵器<br>陶磁器<br>石器など  | 今回の調査では、平安時代の建物跡群と、建物群より古い溝跡などを調査した。                           |         |                   |
| 要約      | 西坂才遺跡では、平安時代の掘立柱建物群と、それよりも古い溝跡などを確認した。建物群よりも古い14号溝跡は、そのまま西側の鶴沼C遺跡まで直線的に延伸している。平面形が釣鐘形をした土器焼成坑からは、主に土師器製の破片が出土し、中には三本脚付鉢なども破片となって出土している。   |                      |                                     |                               |                            |  |         |                   |

※経緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第496集

## 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15

### 鶴沼C遺跡

### 西坂才遺跡(1次)

平成26年12月19日発行

|    |                       |             |                   |
|----|-----------------------|-------------|-------------------|
| 編集 | 公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 | (〒960-8115) | 福島県福島市山下町1-25     |
| 発行 | 福島県教育委員会              | (〒960-8688) | 福島市杉妻町2-16        |
|    | 公益財団法人福島県文化振興財団       | (〒960-8116) | 福島市春日町5-54        |
|    | 国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所   | (〒963-0111) | 郡山市安積町荒井字大内部内28-1 |
| 印刷 | 北斗印刷株式会社              | (〒965-0052) | 会津若松市北町大字始字深町67-2 |